ISBN 978-4-902325-73-7

地球研言語記述論集 4
大西正幸博士還暦記念号

稲垣和也（編）

言語記述研究会

総合地球環境学研究所
インダスプロジェクト

2012 年 3 月

地球研言語記述論集 4
大西正幸博士還暦記念号

目 次

巻頭言 ..... 長田 俊樹 i

序文 ..... 稲垣 和也 v

キナウル語（パンギ方言）の時制接辞について ..... 髙橋 慶治 1

ダグール語の音韻 —共時的記述と通時的記述— ..... 大竹 昌巳 13

ムラブリ語の音声的バリエーションについての予備的調査 ..... 伊藤 雄馬 45

ジンポー語文法概要および民話資料 —兄弟が湖を動かした話— ... 倉部 慶太 61

ディアスポラの南部スーダン・アラビア語
—オーストラリアにおける現状と言語政策— ..... 仲尾 周一郎 101

カムチベット語燕門・斯嘎 [Sakar] 方言の文法スケッチ ..... 鈴木 博之 123

徳欽県雲嶺郷のカムチベット語における消滅の危機に瀕しているかもしれない
歯茎破擦音について —方言差と年代差と個人差のあいだで— 鈴木 博之・
丹珍曲措 159

条件節・理由節・時点節の連続性について
—チノ語悠楽方言を例として— ..... 林 範彦 165

巻頭言

長田 俊樹

この『地球研言語記述論集』は２００７年４月にインダス・プロジェクトが正式に発足し、大西正幸さんを上級プロジェクト研究員として地球研にお迎えしたのを機に、言語記述研究会を立ち上げ、その研究会の成果として出版されたものである。現在、３号を数え、今回が第４号となる。地球研のインダス・プロジェクトは２０１２年３月をもって終了するため、本号が最終号となる。ただし、言語記述研究会に参加してくださる方々は多く、今後も別の形で続けていきたいと考えている。

この最終号を、プロジェクトのリーダーである長田の判断で、『大西正幸博士還暦記念号』としたい。大西さんは２０１１年８月に還暦を迎えられた。６年間、沖縄の名桜大学で教鞭を執られた以外は、日本ではアカデミズムの外にあり、大西さんのお名前は残念ながらほとんど知られていない。しかし、教育への情熱や学問への真摯な態度は特筆すべきものであり、還暦を真に祝されるべき人である。大西さんの師であるボブ・ディクソンは何事にも順番をつけたがる癖があるが、ディクソンの元で博士論文を書いた人の順番として、一番はニック・エヴァンズ、二番はマサ・オオニシと公言して憚らない。世界的言語学者が賞賛してやまない大西さんの言語学に対する情熱やその実力は研究会に参加された皆様がよくご存じのことである。ここでは、大西さんの知られざる一面を長田の独断と偏見に満ちた眼で紹介しておこう。

大西さんは東大闘争（闘争側でない人は紛争とよぶ）が激しく入試がなかった１９６９年の翌年、武蔵高校からストレートに東京大学文科三類に入り、のち文学部英文科に進学。東大闘争の余波が学内を覆っていて、しらけた世代に属す。そうおっしゃっていたが、ご本人は覚えていらっしゃるか。有名私立高校から東大に進学と聞くと、恵まれた家庭環境を想像するが、お父さんは大西さんが中学生のときに他界され、お母さんは大変苦労されたと聞く。

１９７５年、英文科出身の大西さんがベンガル語に出会う。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（略称：ＡＡ研）主催の夏期言語研修でベンガル語を受講したのだ。夏期言語研修は５週間みっちりと教えてくれるコースで、ベンガル語の先生はＡＡ研の奈良毅さんだった。奈良さんはお母さんが新興宗教の教祖様だったとかで、宗教本業、ベンガル語副業といった感じの一風変わった先生だ。大西さんとの共通点はお二人とも宗教的なことと、見た目がいつまでも若いことだ。このベンガル語の言語研修の後、１９７６年にはカルカッタ（現コルカタ）に留学。日本領事館で日本語教師をしながら、ベンガル世界に浸る。１９７８年には、シャンティニケタンにあるタゴール国際大学に移り、タゴール三昧の日々を送る。そして、１９８０年に帰国し、ちょうど刊行の始まった『タゴール全集』のなかのいくつかをベンガル語から翻訳し、翻訳家としてデビューを果たす。

ちょうどそのころである。私は大西さんと出会う。きっかけは私がムンダ人やサンタル人に興味を持っていることをいろんな人に話したところ、当時カルカッタに留学中だった河合明宣さん（当時京大農学部院生、現在放送大学教授）からサンタル語を習ったことのある日本人として大西さんを紹介された。そのころ、大西さんは鎌倉に住んでおられ、ＡＡ研で行われていた「コッラニ」というベンガル文学の翻訳雑誌を出すグループの研究会に参加されるというので、ＡＡ研でお会いした。それがいつだったのか。もう一つはっきりとしない。ただ、１９８３年８月に北海道の気球合宿に大西さんが息子さんを連れて参加してくださったので、１９８２年ごろのことだろう。

私は１９８４年７月から１９９０年１０月までインドに留学をする。留学期間にも、カルカッタで何度か会った。とくに、大西さんたち何人かが出資して（私には出資できる金がないので姉に出資してもらった）カルカッタに部屋を借りていた時期があり、そこにはよくお邪魔した。私の留学中にはいろんなことがあった。ときには、大西さんのグルだった、吟遊詩人として知られるバウルに、大西さんの代理で送金したこともあった。ときには、ムンダ人の妻と結婚する前に一度日本に連れて行く際、病気だった私に変わって、妻のためにインドからの出国許可をもらいに行ってくださったこともあった（ただし、許可はもらえず、最後は賄賂を払って出国した）。また、大西さんは一時期ロンドン郊外の日本人向けの高校で教えていたことがあったが、あまりのひどさに耐えかねて三ヶ月で辞めてしまったこともあった。一時はアメリカへの移住を考え、アメリカを放浪されていたが、アメリカは肌に合わなかったようだ。紆余曲折の末、１９８９年にオーストラリアに渡る。

オーストラリアでは最初、英語教師養成のためのコースに入ったが、これにはピンと来るものがなかったようだ。そこで、オーストラリア国立大学の言語学科に入り、前述のボブ・ディクソンらに出会う。驚く事なかれ。大西さんと言語学との出会いは４０歳近くのことだったのである。ボブの強烈な個性とアナ・ヴィエルビツカやビル・フォーリーといった一癖も二癖もある、まるで新興宗教の教祖様のようなスタッフ揃いの学科で、大西さんもようやく落ち着く場所を見つける。大西さんがあまりにも優秀だったので、修士課程の途中で、１９９１年に博士課程へと進む。博士論文のテーマはパプア・ニューギニアのブーゲンビル島で話されているモトゥナ語の文法で、１９９５年には博士号を取得している。なお、つい最近、このモトゥナ語文法はドイツから出版された。

１９９６年、私は文部省の在外研究員として、約１０ヶ月、メルボルン大学に滞在した。ちょうどその年の７月に、オーストラリア言語学講習会がオーストラリア国立大学で行われた。そのときには、２週間、一家で大西家にお世話になった（そう大西さんご夫婦にはお世話になりっぱなしである）。そのとき、われわれ研究会のメンバーである野島さんにもはじめてお会いした。なお、その講習会については『第３回オーストラリア言語学講習会とオーストラリア言語学界管見』としてＡＡ研の通信 90 号 24–33 頁に報告したので、興味のある方はご覧ください。そのころ、大西さんはディクソンの下でポスドクをやっていて、世界のいろんな言語の類型論的特徴を抜き出す仕事をやっておられた。その仕事はかなりハードなもので、夜も寝ずにやっていたので、奥様のあゆ子さんが大西さんの身体を心配しておられたのが記憶に残る。その大

西さんのお仕事が現在もラトローブ大学の類型論研究センターに閲覧できる形で置いてある。ラトローブ大学に行く機会があれば、ぜひ見てほしい。

私の在外研究の期間がおわって帰国したころ、大西さんの沖縄名桜大学への就職が決まり、１９９７年５月にオーストラリアから沖縄に拠点を移す。この名桜大学時代には宮岡さんが主導して行った特定領域研究『環太平洋の＜消滅に瀕した言語＞にかんする緊急調査研究』（１９９９年秋からスタート）に大西さんも参加されたので、大西さんのことをその時期知った方もいらっしゃるのではなかろうか。なお、私はこの特定領域研究の公募に応じたが、環太平洋ではないということで公募からは落とされた。もっとも奈良さんはインドのトダ語の調査で申請して通ったので、地域だけではないのかもしれない。

沖縄名桜大学での大西さんも、ハードワークの連続だった。夜は２時３時過ぎまで、朝は早く大学に出て、研究ばかりではなく、外国語教育主任として学務にも忙しくされていたようだ。それで２００３年３月には名桜大学を辞めてしまった。古巣のオーストラリアに戻られ、今度はシドニー大学にしばらく在籍後、ドイツのマックス＝プランク研究所に移り、二年間はライプチッヒに住んでおられた。そして、私のプロジェクトの上級プロジェクト研究員となって今日に至る。

大学を辞める、辞めると口癖のようにいう人は結構いるが、実際に辞めてしまった人というと、世界に冠たる東南アジア研究のコーネル大学をスパッと辞めてしまったディフロースさんぐらいしか知らない。もっとも言語学そのものを辞めてしまった人は何人かいる。ニックをメルボルン大学に呼んだマーク・ドゥーリーはアチェ語の文法を書き、言語学のすばらしい業績を残していながら、英国国教会の牧師（これを英語では Minister と呼ぶが、マークが Minster になるとニックに教えられたときには大臣になるのかと驚いた）になってしまった。現在、彼のセント・マーク教会は反イスラムで名をはせているが、彼の言動の矛先が宗教に向かってしまったのはとても残念である。もう一人あげると、ミリアム・クレイマンがいる。ベンガル語などの業績があるクレイマンは、記憶にまちがいなければメルボルンのラトローブ大学にいたこともある。聞いた話によると、何でもインド人の夫を亡くしてから言語学が嫌になってしまったのだそうだ。言語学を辞めた後、医者となり、さらに弁護士となって、現在は弁護士として活躍中だ。

少し話がずれた。大西さんの話に戻ろう。大西さんの言語学における業績として、私が印象に残っているのはアナ・ヴィエルビツカとクリフ・ゴダードが編集した *Semantic and Lexical Universal* という論文集に “Semantic Primitives in Japanese” という論文を掲載したことである。言語学論文としてはたぶん処女作だったと思う。刊行は１９９４年であるが、論文執筆は１９９１年頃だったように記憶している。なぜよく覚えているかというと、私はその当時女子高校で非常勤講師をしていて、日本語での人称代名詞の使用例を女子高校生から聞いたことを大西さんに伝えたら、そのこと（たしか女子高生がオレを使うことが珍しくないということだったように記憶する）を論文に書いてくれたからだ。今３０年にわたる交友を振り返ってみると、大西さんのお役に立てたのはそれぐらいではなかったか。

もう一つ、記憶に残っているのがサーシャ・アイケンヴァルトとボブ・ディクソンとの三名共

同編集で *Non-canonical Marking of Subjects and Objects* を出版したときのことだ。その論文集に入っている日本語に関する論文（誰が書いたかはここではあえて伏せておく）について、大西さんはその日本語の分析がおかしいと指摘したのだが、ボブは政治的な判断（？）で取り合わなかったのだそうだ。この論文集では、大西さんが５０頁にもおよぶ Introduction を任され、ボブとサーシャの期待を一身に背負っての仕事で、気苦労が耐えなかったにちがいないと勝手に推測している。その他、ブーゲンビル島のモトゥナ語のテキストを出版したり、ドン・レイコックが残したブイン語辞書を編纂したり、パプアン言語学でも大活躍だが、その辺は２１世紀に入ってからの出来事で皆さんもご存じだと思う。

ベンガル語の翻訳に関しては、タゴールの『家と世界』（上）（下）がレグルス文庫として１９８６年に、また現代ベンガル作家のモハッシェタ・デビ『ジャグモハーンの死』（めこん）が１９９２年に、それぞれ出版されている。このモハッシェタ・デビには大西さんと一緒に会いに行ったこともあり、そのことを翻訳本と一緒に配られるパンフレットに書いてもらったことも記憶に残っている。バリガンジ駅の近くのモハッシェタ・デビの家のことやそのとき一緒にいた大西さんの姿が目に焼き付いていて、時々夢に出てくる。なぜなのか。まったくその理由がわからない。

大西さんとの日々で思いだされるのは、カルカッタの路上でチャイを飲みながら聞かされたヒジュラの話である。その話を聞いたのはたしか１９８０年代半ばのことだ。ヒジュラとは半陰陽の女装した芸能集団である。その独特の歌と標準ベンガル語とはちがったベンガル語の歌詞をなんとか録音したいと意気込む大西さんの目はキラキラしていた。ヒジュラは裏の世界の人々なので、なかなか録音させてくれない。そう付け加えてくれたが、残念ながら、私はその歌を一度も聞かせてもらったことはない。ちゃんと録音できたのかどうかも聞かずじまいだ。

大西さんが書いたもので記憶に残っているのは、「絶対の降る場所」だ。たしか、インド関係の本を出版する春秋社の情報誌『春秋』に掲載された。大西さんのバウル体験が書かれたもので、大西さんがいかに感性の人であるかがよくわかる。「絶対」なんてことは絶対ない。そうか、もし絶対なかったら、そのときには絶対が使える。このパラドックスに気がついて喜んでいる私などとは、大いなる相違を見いだす。絶対なるものを求めてやまない大西さん。一方で、なぜ自分が絶対者にならないのか、そんなことばかりを夢想する私。私とは性格も指向性もまったく正反対の大西さんだが、三十年もの間、交友関係を保ってこられたのはふしぎでたまらない。これまでのご厚情に感謝してやまない。

あるときはタゴールの翻訳家、またあるときはベンガル映画の解説者、そしてまたあるときはインド楽器の演奏者、はたまた日本語教師や英語教師と、多様性を自ら具現してみせる大西さんは、３０年前と少しも変わらぬ容姿で、ブーゲンビル島で危機言語を記録する。還暦を迎え、今度は何をやってくださるのか。今から楽しみだ。

大西さんとの思い出を語り出すと、いろんなことが走馬燈のようによみがえる。ぐたぐたと書いていてはせっかくの還暦記念論文集が台無しになる。感謝を述べたところで、ペンをおくことにする。

序文

稲垣 和也

2009 年 3 月,『地球研言語記述論集』が発刊し，8 本の言語記述にかんする論文が掲載された。その後，今号の第 4 号にいたるまで毎年刊行をかさね，第 2 号は 10 本の論文，第 3 号は 9 本の論文，そして今号は 8 本の論文を掲載した。各号，およそ 200 ページの厚みをもつ。長田俊樹，大西正幸を中心とする言語記述研究会をベースとして,「言語記述に役立つことは何でもやろう」(第 1 号序文より),「そのときどきの研究段階での里程標を残しておく」(第 3 号序文より) という方針にそって，研究会の運営および論集の刊行が続けられた。そのため，各号に掲載されたすべての論文は，それぞれの言語の記述に役立つ最新の考察をふくんでいる。それらは，主に言語記述研究会 (URL: `http://www.chikyu.ac.jp/indus/kijutsuken/index.html`) における意見交換や草稿のレビューをとおして研磨されたものである。第 1〜3 号と同様，今号においても，それぞれの草稿に約 2 名のメンバーが論評をくわえ，ていねいに改稿し，その最終稿を掲載する，という手続きをとった。

今号には，京都大学文学部 4 回生の大竹昌巳さんの論文が寄せられた。彼は月例の研究会においても，今年度から研究発表をおこなっている。さらに，インダスプロジェクトの言語班のメンバーである，愛知県立大学の髙橋慶治さんの寄稿もある。以下では，今号に掲載した論文や資料等を概観する。各論文のタイトルについては，目次を参照されたい。

髙橋慶治さんは，キナウル語研究の第一人者であり，髙橋論文の参考文献にはその研究成果の一部が見られる。キナウル語の述部には「時制接辞スロット」があり，そこにテンスやムードの標識が生起する (pp. 1–2)。髙橋論文は，これらの機能を，形式を軸にして明快に整理し，主に形態統語論的な記述をおこなったものである。先行研究では，テンスの標識と，テンスをあらわし得る形式が区別されていなかったが (p. 2)，髙橋論文は，これらを必要かつ十分に区別しており，今後，テンス体系を議論するための土台になると考えられる。

大竹昌巳さんの論文は，フフホト市出身のダグール語話者から得たデータの共時的な音韻記述と，先行研究をもとにした通時的な音韻記述を展開している。 特に，pp. 14–28 の共時的記述において，自身の調査した話者に，ダグール語のブトハとハイラルの方言，さらにモンゴル語の影響が見られることを明らかにした。複数の近隣言語・方言に言及しており，視野の広い論文である。稿末の pp. 35–41 には，調査で得たデータの一部である 307 語と，ダグール語各方言形式・モンゴル語形式との対照表が付されている。

伊藤雄馬さんの論文は，ムラブリ語の音声的変異を体系的に記述することを目的に，予備的な考察をおこなったものである。先行研究の形式をもとに，自身による現地調査で得られたデータを慎重に整理している。話者の発話スタイル，年代差，個人差を考慮した上で，ムラブリ語

の子音，母音，音節タイプの変異を明らかにした (pp. 54–57)。様々な変異を見せる音声を注意深く分析し，ムラブリ語の変異にかんする特徴と，ムラブリ語の記述に必要な項目を示唆した論文である。伊藤論文のデータは 4 人の調査協力者から得られたもので，これは，変異についてさらに深く追究するには数が少ないが，今後の研究に期待する。

倉部慶太さんの論文は，ジンポー語の概要と民話資料から成る。これまで，ジンポー語の現地調査をもとに，第 2 号で動詞連続，第 3 号で対句表現の論文を執筆し，詳細な記述をおこなってきた。そのような詳細な記述をもとに，今号では，コンパクトかつ効果的にジンポー語を通覧している。ジンポー語の系統，類型，地域的特徴をまとめ (pp. 61–66)，その音韻，形態，統語の概要を記述し (pp. 66–91)，その実例として民話テキストを提示した (pp. 92–98)。

仲尾周一郎さんは，南部スーダンのジュバ・アラビア語の現地調査をもとに，第 2 号で簡易文法とテキスト，第 3 号でその若年層話者の特徴について論文を執筆した。今号の仲尾論文は，豪州に渡った移民についての社会言語学的な論考である。南部スーダンの諸言語の状況と，それら諸言語の豪州における言語状況がよくわかる。特に，pp. 106–114 では，アラビア語変種の中層話体を形態統語論，語彙の面から特徴づけ，この変種があらわれた経緯についても綿密に考察している。

鈴木博之さんの論文は，カムチベット語燕門・斯嘎方言の，音声・音韻，形態統語法の概要を記述したものである。特に，pp. 124–133 に見られる音声・音韻の記述には，チベット語の音声・音韻にたいする筆者の深い見識がよくあらわれている。さらに，現地調査で得られた実例から，名詞 (pp. 134–140) と動詞 (pp. 145–156) の形態統語法の詳述し，人称代名詞，指示詞，疑問詞，数詞，助数詞，形容詞，複文についても概観している。鈴木論文は，カムチベット語の全体像を凝縮したものであり，読者がこの言語の特徴をとらえるのに役立つ。

鈴木博之さんと丹珍曲措さんの論文は，広域にわたる現地調査に基づいたものである。カムチベット語の歯茎の摩擦音と破擦音の変異があらわれるための，方言，年代，個人差といった言語外的要因について議論している。さらに，共時的な現象としての摩擦音化に言及するとともに，歯茎摩擦・破擦音の変異を歴史的に考察している。鈴木・丹珍曲措論文は定性的な記述をおこなったものだが，データ収集がすすむとともに，今後は定量的アプローチによる論考が期待されるだろう。

林範彦さんの論文は，条件，理由，時点をあらわす節に見られる意味的な連続性や機能的な重複をあつかっており，一般言語学的にも興味深い。チノ語では，理由，言い換え，条件，継起，時点をあらわす 5 つの形式があり，これらは，個々に範囲の違いはあるものの，時に条件，理由，時点 (および継起) をもカバーする。自身の長年の現地調査から得られたデータをもとに，pp. 167–174 では，形式から機能に向けて各形式の基礎的な記述をおこない，pp. 174–182 では，逆に，機能から形式に向けて各形式の緻密な生起条件と意味的連続性を明らかにしている。

今号の論集は，大西正幸博士還暦記念号のため，第 1–3 号のように大西・稲垣による共同編集という形をとらなかった。大西博士には休んでいただき，不肖ながら稲垣が編集および序文を担当した。大西博士のますますのご活躍をお祈りしたい。 (2012 年 2 月 6 日)

キナウル語（パンギ方言）の時制接辞について*

髙橋　慶治
ytashi@for.acihi-pu.ac.jp

1　はじめに

本稿の目的はキナウル語の時制接辞について記述することである。筆者はこれまでキナウル語を記述、分析してきたが、その多くの時間は動詞形態論の研究に費された。本来は、動詞形態論全体についての記述を試みるべきであるが、いまだ分析が不十分な点もあり、本稿では時制接辞のみを扱う。なお、これまでキナウル語動詞形態論の全体を示していないため、ここでの議論に必要な概念については、本節に説明し、それ以外にも適宜脚注で示す。

キナウル語の動詞句構造を定形と非定形に分ける。動詞句構造のうち、定形を以下のように示す:

(1) (NEG-)V_{stem} (-O)-TNS-S(-QM)

動詞語幹は、母音語幹動詞、子音語幹動詞、D-語幹動詞、擬似中動態語幹に分かれる。母音語幹動詞は動詞語幹が母音で終わる。子音語幹動詞は、動詞語幹が *-d* 以外の子音で終わるものであり、*-d* で終わるものを D-語幹動詞という。また、中動態接辞と同じ形式の語幹末を持った動詞を擬似中動態語幹と呼んでおく。この語幹は、意味的にも中動態に類似しているが、中動態接辞と同形式の部分を取り除いたとき、まったく異なる意味の動詞になったり、またはその形式自体がなかったりする。否定辞は、動詞語幹に前接し、目的語人称接辞[1]、時制接辞、主語人称接辞、疑問標識の順で動詞語幹に後接する。この構造において、括弧内の項目は現れなくて

* 本稿は、これまで受けたさまざまな科学研究費補助金の成果の一部である。とくに、動詞形態論を中心とする研究テーマで受けた科学研究費補助金基盤研究 (C)（#12610556、2000–2003 年度、「キナウル語の記述および形態統語論的研究」、研究代表者; #16520250、2004–2007 年度、「キナウル語の現地調査による記述および形態統語論的研究」、研究代表者）、基盤研究 (S)（#16102001、2004–2008 年度、「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読」、研究代表者: 長野泰彦 国立民族学博物館教授）、基盤研究 (B)（#21320085、2009–20012 年度、「南アジア諸言語の類型論的研究—南アジア言語領域論の再検討」、研究代表者: 長田 俊樹 総合地球環境学研究所教授）など、および、所属大学から受けた研究費によって行われた調査での資料を中心とする。調査は、1997 年以降、ほぼ毎年 1 回ないし 2 回、それぞれ数週間程度行ってきた。この間、筆者の執拗な質問に根気よく答えてくれたインフォーマントの Ravinder Singh Negi 氏に感謝の意を表する。また、氏とともにつねに変わらぬ好意で筆者を受け入れてくれる、氏の家族に感謝の意を表したい。

[1] 目的語人称接辞の位置には、中動態の接辞なども現れる。

もよい。したがって、動詞の定形は、動詞語幹に時制接辞と主語人称接辞を伴うものである[2]。

非定形は時制接辞と主語人称接辞を伴わない。非定形には、不定詞[3]、O-状態形[4]、ts-状態形[5]、重複形[6]の 4 つの形式がある。非定形のうち、不定詞を除く 3 種の形式は繋辞とともに使われて、相と時制を表す複合的な形式を作る。これは、完了や継続の意味を持つ事態を時間軸上のどこか（つまり、過去、現在、未来）におく用法である[7]。非定形や相と時制を表す複合的な形式の詳細については別稿を準備したい。

(1) で見たように、時制接辞は、目的語人称接辞に後続し、目的語接辞がなければ動詞に直接付加される。このスロットに入る接辞は次の通りである。

(2) 現在: *-udu, -odu, -tu*
過去: *-a, -e*
未来: *-to, -o*
不確実: *-gyo*
反実仮想: *-tsa*
要請: *-ri*

一般的には、「未来」「現在」「過去」が時制に属するものであり、「不確実」uncertainty、「反実仮想」subjunctive、「要請」request は時制ではなく法と考えられる。しかし、キナウル語では、本稿で示すように、「不確実」「反実仮想」「要請」を表す接尾辞が、「未来」「現在」「過去」を表す接尾辞と同じ分布を示すことから、これらの 6 つを形式的に一つの接尾辞グループとして扱うことにする。

なお、Sharma (1988) は時制と相を pp. 136–48 で扱っているが、その記述はかなり複雑であり、分析は不十分であると言わざるをえない。その原因は、時制を形式ではなく意味的にとらえ、時制と相を同時に扱っているからであると言える。とくに時制と相を表す複合的な形式を無批判に列挙することは混乱を招くことになる。本稿では、複合的な形式は扱わず、キナウル語の動詞の形態変化をできるだけ単純に扱えるように、形式的に時制接辞スロットと考えられるスロットに現れる接辞のみを扱うことにする[8]。

---

[2] 人称接辞については、髙橋 (1999)、 Takahashi (2004, 2008) などを参照されたい。

[3] 動詞語幹に *-(i)m* を付加する。英語の to-不定詞と同様の用法があり、動詞の補語として用いられる。

[4] 動詞語幹に接尾辞 *-ō* を付加し、継続相を表す。

[5] 動詞語幹に接尾辞 *-ts* を付加して形成される。筆者の以前の論文では、中立時制 neutral tense としたが、現在は適切ではないと考えている。意味や用法についてはいまだ十分に明らかではない。

[6] 完了相を表す。動詞語幹の全部または一部を繰り返すことによって形成される。動詞語幹が 1 音節であれば全体を繰り返すが、2 音節の場合は、第 2 音節のみを繰り返す。3 音節以上をもつ動詞語幹は今のところ見付かっていない。

[7] その一部については、髙橋 (forthcoming) を参照されたい。

[8] Sharma (1988) の記述は混乱しているものの、きわめて多くの情報をもたらしている。この貴重な情報を利用しにくくしているのはまことに遺憾なことである。本稿の記述が、Sharma のものと一致しない場合があるのは、調査対象の方言が異なる場合があるからということも考えられ、Sharma が間違っていると言うつもりはない。

2　いわゆる時制を表す接辞

本節では、一般的に「時制」と呼ばれる意味を表す接辞を扱う。ここでの時制は相対的ではなく、発話時点を基点とする絶対的な時制である。

2.1　現在時制

現在時制は、動詞が発話の時点で行われつつあることを示す。いわゆる「現在進行形」である。したがって、厳密には相の意味をもっている。

現在時制を表す接辞には、*-udu, -odu, -tu* などの異形態がある。*-udu* を基底の形式と考える[9]。 *-odu* は先行する動詞語幹の末尾が非高母音のときに現れる。また、*-tu* は D-語幹動詞に現れる[10]。

(3) a. *bārī*　*mī-gā*　*santaṅ-ō*　*gitaṅ-ā*　*lan-**udū***
many　person-PL　shrine-LOC　song-PL　do-PR
'Many people are singing on *santaṅ*.'

b. *bārī*　*zigits*　*hoṅ-ā*　*almari-ō-č*　*bāraṅ*　*dwad-**tū***
many　small　insect-PL　shelf-LOC-ABL　outside　come_out-PR
'Many small insects are coming out of the shelf.'

上の例で示されているとおり、この形式が表す時制は現在のみである。過去や未来の進行、継続は、したがって、複合的な方法によって示される。次例に見られるように、この形式は、過去や未来を表す語とは共起しない。

(4) *gɨ*　*hunā/*mē/*nasom*　*huš-udu-k*
1PRN　now/yesterday/tomorrow　study-PR-1S
'I am studying now.'

この形式は、歴史的には *-u+du* と分析できるのではないかと思われる。*-u* は属格の接尾辞と、*-du* は繋辞の一つと同じ形式を持っている。しかし、共時的には、このように分析する根拠はない。とくに、後半部の *-du* は、繋辞の一つと同形式であるが、現在を表すこの形式では過去形にならない。すなわち、繋辞の *-dū* が過去形として *-duē* を持っているのに対し、*-udu* は *-udue* のような形式にならない。したがって、繋辞とは異なる分布を示していると考えるべき

---

[9] キナウル語では、開音節で語末母音が音声的に長く具現する。実際には、開音節で終わる単語の語末母音が音韻論的に長いか短いかを確定することは難しいが、基本的には、接尾辞が後接して短母音になる場合は、基底形で母音が短いと考えることができる。

[10] D-語幹動詞の形態変化は、他の子音で終わる語幹とは異なっている。(3b) では、動詞語幹末の *-d* は接尾辞 *-tū* の初頭子音と同化して *dwattū* のように発音される。D-語幹でのこのような形態変化の詳細はかならずしも明らかではない。*dwad-udu-* という基底形から現在時制接辞の初頭 *-u* が脱落する音韻論的および形態論的プロセスの条件が明らかではないからである。ここでは、D-語幹動詞の直後の形態素境界で高母音 *i, u* が脱落する可能性があることを指摘するにとどめる。

である[11]。

2.2　過去時制

過去時制は、過去における行為や状態を表す。

過去時制接辞には、*-a* と *-e* の 2 種類の異形態がある。また、母音語幹動詞には、これらの接尾辞なしで、主語人称接辞が直接動詞語幹に付加され、D-語幹動詞では、語幹末の *-d* が脱落することがある。*-a* が基本的な形態と考えられるので、基底の形式は *-a* とする。

(5a) では、*-a* が用いられている。「与える」という意味の動詞 *kē-* は、不定詞で語幹は母音で終わっているが、過去形では子音が現れる。(5b) では、*-e* が過去を表しているが、中動態の接尾辞 *-ši* などの後ろでこの形が現れる。*-e* の分布については、Takahashi (2008: 51–54) を参照されたい。

(5) a. *boā-s* *aṅ* *raṅ* *hinā-pɨṅ* *ṭʰepaṅ* *ker-**a**-š*
father-INS my and PSN-DAT cap give-PT-3S(HON)
'The father gave a cap to me and Heena.'

b. *gɨ* *kim-u* *bāraṅ* *sū-š-**e**-k*
I house-GEN outside wash-MDL-PT-1S
'I bathed outside the house.'

c. *gɨ* *sukul-ō* *be-**o**-k*
I school-LOC go-PT-1S
'I went to school.'

(5c) の *beok* は不規則な形式である。この形式は *pʰī-*「持っていく」でも現れるが、*bī-*「行く」と *pʰī-* は自他対応していると考えられるので、この過去形の不規則性を説明するには資料が不足していると言わざるをえない[12]。

次の例は、母音語幹動詞が 3 人称の主語を取っている場合である。

(6) *aṅ* *čimē-s* *aṅ* *gasā* *čīd/*čī*
1PRN:GEN daughter-INS 1PRN:GEN clothes wash:VS+*d*/wash:VS
'My daughter washed my clothes.'

上の例では、動詞が末尾に *-d* を取らなければ不可となる。敬意を表す場合は、*čīš, čīaš* などのようになり、*čī-*「洗う」は母音語幹動詞である。母音語幹動詞では、このような *-d* が現れる場合があるが、その由来については不明である。

---

[11] なお、Sharma (1988) は *-udu* という形式をあげていない。Sharma (1988: 137–138) の 'Present continuous' で示されている形式 V-*ō to-/du-* がそれを含んでいると思われる。本稿の *-udu* とこの形式はきわめて類似しているが、分布が異なっている。Sharma は、*-udu* の後半部分を独立した繋辞とみなしていると考えられるが、本文で述べたように、この部分は繋辞とは異なる分布を示している。したがって、この形式は、本稿では扱わない複合的な時制/相と考えるべきものである。

[12] *bī-* の過去形については、Takahashi (2008: 57) で論じたが、じゅうぶんな解決を得たとは言えない。

D-語幹動詞では、規則的に過去形が作られるが、同時に語幹末の *-d* と過去の接辞 *-a* が脱落し、語幹母音が代償延長を起こすことがある[13]。次の例では、*sadak* と *bɨdak* が規則的な過去形であるのに対し、*sāk* と *bɨ̄k* は語幹末子音および過去を表す接辞の脱落とその代償延長による形式である。

(7) a. *gɨ-s* *sorgaṅ-ō* *yab-tseyā* *pyā-ga-nō-č* *id* *pyā* *sā-k/sad-a-k*
1PRN-INS sky-LOC fly-ATTR bird-PL-LOC-ABL one bird kill-1S/kill-PT-1S
'I shot one of the birds flying in the sky.'

b. *gɨ* *paṅē* *noliṅ* *bɨ̄-k/bɨd-a-k*
1PRN PLN last_year come-1S/come-PT-1S
'I came to Pangi last year.'

次の例は、過去形が *mē*「昨日」と共起するが、*nasom*「明日」や *deyarō*「いつも」と共起できないことを示す。

(8) a. *mē/*nasom/*deyarō* *huš-**e**-k*
yesterday/tomorrow/everyday study-PT-1S
'I learned yesterday/tomorrow/everyday.'

Sharma (1988: 140) は、キナウル語の過去形に直接観察（observed）と伝聞（reported）の 2 つの範疇があるとしている。Sharma の例を見ても、これらの区別がキナウル語で重要な役割を果たしているようには思われないが、Sharma (1988: 142) に *-gya* ～ *-gyo* という接尾辞が遠過去または伝聞過去を表すとされており、そのような区別がまったくないとは言えない。たしかに、3.1 節で見るように、*-gyo* が表す不確実な情報は、基本的に過去の事態であるという点で過去時制に含まれるとも言える。しかし、*-gyo* は時制スロットに入るものの、意味的には時制そのものとは言えないため、本節では扱わない[14]。

2.3 未来時制

未来時制は、未来においてなされる行為、達成される状態を表す。また、話者の想定、想像などある種のモダリティを表す。

未来時制接辞は、*-to*[15] と *-o* という異形態をもつ。*-o* は、目的語人称接辞または中動態接辞

---

[13] ここでは代償延長と述べておく。しかし、過去の接辞が、語幹末の*-d* とともに脱落して代償延長に寄与するのか、語幹末の *-d* が脱落したため隣接することになった語幹母音と融合して語幹母音が長音化するのかを決める根拠は、今のところない。しかし、次節で見るように、未来形でも動詞語幹末の *-d* が脱落して代償延長が起こるので、過去の接辞自体はこの母音の延長に直接関係していると考える必要はないと思われる。

[14] 4 節で見るように、時制は否定文で中和するが、モーダルな意味を表す接辞は現れるので、これらは異なる分布を示していると言える。

[15] Sharma (1988: 134) は *-t* を 3 人称目的語の接辞としている。実際には他動詞だけではなく自動詞にもこの形式が現れるので、3 人称目的語を表しているとは言いにくい。ただし、1/2 人称の目的語接辞や中動態接辞の後ろで、*-tō* ではなく *-ō* が用いられる事実は、*-t* が未来時制接辞に含まれないと

などを持つ動詞語幹（擬似中動態語幹を含む）に付加される[16]。たとえば、*sūši-*「（自分の体を）洗う」 の 1 人称単数未来形は *sūšok*「私は（自分の体を）洗う」 となる。*-to* はそれ以外の動詞語幹に付加される。たとえば、*čē-*「書く」の 1 人称単数未来形は *čētok*「私は書く」である。なお、D-語幹動詞では、語幹末の *-d* が脱落し、語幹母音が代償延長する。たとえば、*sad-*「殺す」の 1 人称単数未来形は、*sātok*「私は（彼を）殺す」である。

(9) は未来においてなされる行為を表している。

(9) a. *gɨ jɨṅ-č nasom bi-**to**-k*
I here-ABL tomorrow go-FUT-1S
'I will leave here tomorrow.'

b. *gɨ gasā lanč-**o**-k*
I clothes put_on-FUT-1S
'I will put the clothes on.'

(9) のように、意志的な動作を表すこともあるし、次例のように、未来についての予測、想像であることもある。

(10) *gɨ šī-to-k*
1PRN die-FUT-1S
'I may die.'

ただし、(10) は意志的であってもよい。したがって、「自殺する」という意味にもなりうる。

(11) は、話し手が 3 人称についての予測を行っている。

(11) a. *gɨ byaṅ-udu-k ādarš mɨntʰaṅ-u den-č yuā dā-tō*
1PRN be_afraid-PR-1S PSN roof-GEN top-ABL below fall-FUT
'I am afraid that Adarsh may fall down from the roof.'

b. *do-s bodī kamaṅ lanlan, do-pɨṅ on de-ō*[17] *nī-tō*
3PRN-INS very_much work do:RDP 3PRN-DAT hunger come-STT exist-FUT
'As he worked so hard, he must be hungry.'

以上見てきたように、現在および過去時制では、実際に実現しつつあるまたは実現した動作や状態を表すが、未来時制の場合には、まだ実現されていない動作や状態を表すので、話者の意志や想像、予測をも表す点で法的な意味を持っていると言える。

いう分析を可能とするようにも思われ、さらに考察が必要である。

[16] キナウル語の中動態接辞については、Takahashi (forthcoming) を参照されたい。

[17] 動詞 *dē-* は「～になる」という意味で使われるが、構文としては、「～が... に来る」という形になっている。「来る」という意味の動詞は *bɨd-* があるが、その違いは、*bɨd-* が直示中心への動きであるのに対し、*dē-* は直示中心の外での、到達点へ向けての動きであると言える。なお、*bī-*「行く」 は直示中心から外への動きである。

3　いわゆるモダリティを表す接辞

本節では、いわゆる「モダリティ」を表すが、時制接辞と同じスロットに入る接辞を記述する。意味的にはモーダルな接辞であると言えるが、形式的に時制と同じ分布を示すことは興味深い。

3.1　不確実

接辞 *-gyo* は、付加されている動詞が表す動作や状態が話し手にとって確実ではないことを表す。Sharma (1988) が遠過去や伝聞を表すとしていることは 2.2 節の末に述べたとおりである。

(12) *gɨ*　*tʰɨd*　*nē-**gyo**-k*　*ādarš*　*piō*　*bī-ts-a*　*ma-bī-ts*
I　what　know-UNC-1S　PSN　PLN　go-NT-QM　NEG-go-NT
'I do not know whether Adarsh will go to Peo or not.'

上の文では、*tʰɨd* がなければ、不適格になる。話者が「自分は何か知っていたか」と自問するニュアンスがあると思われる。たんに知らないと言っているのではなく、知らなかったことに気がついたような意味合いがあるようである。したがって、次に見るように過去と関連しているように思われる。

-gyo は、通常、過去を表すと意識されているようである。

(13) *dogō*　*piō*　*bī-**gyo**-š*　*tsaltsal*
they　PLN　go-UNC-3S(HON)　think:RDP
'I thought that they had gone to Peo.'

次例は、過去の事実について不確実である場合は *-gyo* が使えるが、未来に起こりうることでは *-gyo* が使えないことを示す。

(14) a. *gɨ*　*ǰu*　*līk*　*zōlā*　*raṅ*　*yun-im*　*han-**gyo**-k*
I　this　heavy　bag　with　walk-INF　can-UNC-1S
'I wondered whether I was able to walk with this heavy bag.'

b. *aṅ*　*goenē-s*　*ǰu*　*kuy-ū*　*taṅ-m-ā*　*byaṅ-to-š-a/*byaṅ-**gyo**-š-a*
my　wife-INS　this　dog-DAT　see-INF-COND　be_afraid-FUT-3S:HON-QM/be_afraid-UNC-3S:HON-QM
ma-byaṅ-i-š[18]
NEG-be_afraid-LV-3S:HON
'I wonder my wife would be afraid of the dog if she sees it?'

[18] *byaṅtoša mabyaṅiš* は選択疑問の形である。選択疑問は、疑問接辞の付いた動詞と否定辞の付いた動詞を並べることによって表される。(14b) では、前半の *byaṅtoša* が、未来時制の接尾辞、3 人称主語の接尾辞（敬語）に疑問を表す接尾辞が付いて終わっている。後半の *mabyaṅiš* は動詞語幹に否定の接頭辞が付き、時制を表す接辞無しで語幹に直接（つなぎ母音をはさんでいるが）人称接辞が続いている。否定形で時制が中和することは、第 4 節で見る。

(14b) は、妻が犬を怖がるという、まだ起こっていない事態についての陳述なので、*-gyo* は使えない。

3.2　反実仮想

反実仮想は接尾辞 *-tsa* によって表される。条件節の動詞にも、帰結節の動詞にも使われ、現実に反する仮定を表す。条件節で用いられる場合は、条件を表す接辞は *-tā* である (15)。反実仮想でなければ、(16) のように不定詞に *-ā* を付けて表す[19]。

(15) *gɨ*　*bārī*　*rupyā*　*ǰor-**tsa**-k-tā*　*gɨ*　*tībī*　*zog-**tsa**-k/*zog-to-k*
I　many　money　earn-SBJ-1S-COND　I　television　buy-SBJ-1S/buy-FUT-1S

‘If I got enough money, I would buy a TV set.’

(16) *ībraṅšoṅ*　*hunā*　*boā*　*kim-ō*　*nī-m-ā*　*aṅū*　*galyā*
if　now　father　house-LOC　exist-INF-COND　me(DAT)　anger

*ke-to-š/kēt-**tsa**-š*
give(1;2O)-FUT-3S(HON)/give(1;2O)-SBJ-3S(HON)

‘If Father were at home now, he would get angry with me.’

単純な仮定を表す *-ā* が不定詞に付いている (16) では、条件節での主語人称は動詞には表されていないのに対し、(15) では、条件節であることを表す標識 *-tā* が定形動詞に付加されている。このため、後者では、条件節自体が主語の人称を表すことができる[20]。

3.3　命令および要請

キナウル語動詞の命令形は、動詞語幹に直接 2 人称の主語接辞を付加することによって表される。すなわち、時制接辞のスロットには何も入らない。上記のように母音語幹動詞では、動詞語幹に直接人称接辞が付加される。過去時制の場合も、母音語幹動詞で人称接辞が直接語幹に付加されるため、2 人称では命令か過去かが、形式的には区別できないことがある。

(17) は、動詞語幹が直接文末に現れている。これは目下などに対する命令であって、丁寧な言い方ではない。

(17) *nu-pɨṅ*　*sad*
that:PROX-DAT　kill

‘Kill him.’

(18) は、動詞語幹に挿入母音をはさんで直接 2 人称主語接辞が付いている。この接辞は、単

---

[19] なお、反実仮想の条件節を表す *-tā* は *-ā* を含んでいるが、*-t+ā* のように分析する根拠は、今のところない。形式的には、強調を表す *-ta* という接辞に似ているが、関係は不明である。

[20] 通常、キナウル語では、定形に何らかの接辞が後続することは少ない。ただし、この接辞 *-tā* と疑問の接尾辞は例外的に人称接辞に後続する。他にもこのような接辞があるかどうかは今後の課題である。とくに、モーダルな意味を持つと思われる接尾辞が見られるが、今のところ明らかではない。

数の主語を表すので、1 人の聞き手に対する命令であり、(17) より丁寧な表現になっている。

(18) *labraṅ-u* *škwarā* *lan-i-ň*
temple-GEN going_round_clocwise do-LV-2S
'Go round the Buddhist temple in the clockwise direction.'

なお、(18) では、動詞語幹と主語人称接辞の間に母音が挿入されている。これを命令を表す接辞と取ることはできない。なぜなら、次節で見るように、動詞に否定辞が付加されて時制が中和する場合も、子音語幹では、母音 *-i* が挿入されるからである。

時制接辞のスロットに *-ri* が挿入されて、丁寧な命令または要請を表すことができる。

(19) *kišī* *ǰu* *tōpʰā* *kin* *boa-pɨṅ* *ran-**ri**-č*
you_two this present your father-DAT give(1;2O)-POLIMP-2S
'Please give this present to your father.'

動詞語幹に直接 1 人称主語接辞が付加され、さらに疑問標識が後続した場合、許可を求める表現になる。

(20) *ki* *ṭʰanḍī-s* *nī-m-ā* *kinū* *gɨ* *ǰu* *šel* *kē-k-a*
2PRN cold-INS exist-INF-COND 2PRN:DAT 1PRN this medicine give(1;2O)-1S-QM
'Will I give you this medicine, if you have a cold?'

これも、語幹に人称接辞を付加するという点では命令形と共通した形式であり、相手の指示（つまり命令）を求めるという点で意味的共通性があると言える。

4　否定文での時制の中和

キナウル語では、否定文で時制が中和する。すなわち、動詞に否定辞が付加されると、時制接辞が現れなくてもよい。

次の文では、文末の *marɨṅ* が否定辞を伴った動詞であるが、時制を表す接辞を伴っていない[21]。

(21) *riṅkū-s* *mē* *čʰukšit-tseyā* *mi-u* *nāmaṅ* *aṅū* *ma-rɨṅ*
PSN-INS yesterday meet-ATTR person-GEN name 1PRN:DAT NEG-say(1;2O)
'Rinku does not tell me the name of the person whom he met yesterday.'

Rinku が昨日彼の会った人の名前を教えてくれないと言っているが、時制接辞がないので過去の意味「教えてくれなかった」という解釈も可能である。

[21] この動詞には人称接辞も付いていない。3 人称主語の人称接辞は、敬意を表さないゼロか、敬意を表す *-š* のいずれかであって、この動詞に人称接辞がないのは、Rinku という人物に敬意が込められていないことを示す。なお、人称接辞を伴う場合、子音語幹動詞では、語幹と人称接辞の間に母音が挿入され、*marɨṅiš* という形式になる。

次の (22) は、主語が 1 人称であるため、動詞語幹に直接主語人称接辞が付いている例である。ただし、動詞が子音で終わっているため、語幹と人称接辞の間に母音 *-i* が挿入されている。

(22) *gɨ-s* *do-pɨṅ* *ma-taṅ-i-k,* *ṭ^{h}ūlonnā* *do* *bɨzar-ō-č* *omsī* *bībī*
1PRN-INS 3PRN NEG-see-LV-1S because 3PRN bazaar-LOC-ABL before go:RDP
ma-du-ē
NEG-COP-PT
'I couldn't see him, because he had left the bazar already.'

未来時制の接辞以外は、否定辞が付いていても現れることができる。すなわち、未来時制の否定形だけは時制接辞を伴わないのだが[22]、その他の接辞は否定辞と共起してその意味を明らかにすることができる。(23) は、*čē-*「書く」という動詞が否定形で未来時制接辞をとっていない例である。(24) は選択疑問文であって、「勉強するかしないか」という部分の後半で否定形が現れている。前半は未来時制となっているが、後半の否定形では未来時制を表す接辞を付加することはできない[23]。

(23) *gɨ-s* *kinū* *tsiṭ^{h}ī* *ma-čē-k/*ma-čē-to-k*
1PRN-INS 2PRN:DAT letter NEG-write-1S/NEG-write-FUT-1S
'I will not write you a letter.'

(24) *gɨ* *nasom* *guilae* *huš-o-k-a* *ma-huši-k/*ma-huš-o-k,* *zani*
1PRN tomorrow whole_day study-FUT-1S-QM NEG-study-1S/NEG-study-FUT-1S I_do_not_know
'I am not sure I will study the whole day tomorrow.'

(25) は、過去と現在の否定文で時制が中和していない例である。むろん、(25a) では、時制が中和した *masačik* でもよい。

(25) a. *gɨ-s* *mē* *kinū* *ma-sa-č-e-k*
1PRN-INS yesterday 2PRN:DAT NEG-kill-1;2O-PT-1S
'I did not kill you yesterday.'

b. *torōmyā* *ramēš-ɨs* *kamaṅ* *ma-lan-udū,* *t^{h}ūlonna* *do* *ṭoṭō* *du*
these_days PSN-INS yob NEG-do-PR because that be_ill:RDP COP
'These days Ramesh does not work, because he has been ill.'

時制接辞が現れないという点では、前節の命令形の場合と同じであるが、モーダルな意味を持つ接辞は否定形でも中和せず現れるので、時制を表す接辞との間に分布の違いがあることを示している。

---

[22] なお、未来時制接辞が決して否定形にならないわけではない。未来時制接辞と否定接辞の共起については今後の課題である。

[23] むろん、文全体がたとえば過去であれば、ここで過去形を使うことができるので、文脈によってわかるから未来形が使われないということではない。

5　おわりに

本稿では、キナウル語の時制接辞スロットに現れる接尾辞を記述した。いわゆる時制である現在、過去、未来を表す接辞の他に、モーダルな意味である不確実（基本的には過去の意味を持っていると考えられる）、反実仮想（時制としては中立）、要請という意味を持つ接辞がある。命令では、時制接辞スロットに入る接辞はない。また、否定形では、時制を明示する必要がなく、中和する。

キナウル語の時制を考える際、時制接辞として考えられる形式と、時制の意味を持っている形式とは区別されるべきである。基礎的な区別がなされた上で、時制体系について議論できると考えるものである。

略号表

1	1 人称	INF	不定詞	PROX	近接
1;2	1 人称または 2 人称	INS	具格	PSN	人名
2	2 人称	LOC	位置格	PT	過去
3	3 人称	LV	つなぎ母音	QM	疑問標識
ABL	奪格	MDL	中動態	RDP	重複
ATTR	連体形	NEG	否定	S	主語
COND	条件	NT	中立時制	SBJ	仮定法
COP	繋辞動詞	O	目的語	STT	状態
DAT	与格	PL	複数	TNS	時制標識
FUT	未来	PLN	地名	UNC	不確実性
GEN	属格	PR	現在	VS	動詞語幹
HON	敬語	PRN	代名詞		

参考文献

Sharma, D. D. (1988) *A Descriptive Grammar of Kinnauri*. Studies in Tibeto-Himalayan Languages 1. Delhi: Mittal Publications.

髙橋慶治 (1999) 「キナウル語の記述的研究」『チベット分化域におけるポン教文化の研究』文部省科学研究費補助金研究成果報告書（代表者: 国立民族学博物館教授　長野泰彦）、pp. 199–213. 大阪: 国立民族学博物館.

Takahashi, Y. (2001) ‘A descriptive study of Kinnauri (Pangi dialect): a preliminary report’ In Nagano, Y. and LaPolla, R. J. eds., *New Research on Zhangzhung and Related Himalayan Languages: Bon Sudies 3*, Vol. 19 of *Senri Ethnological Reports*, pp. 97–119. Osaka: National Museum of Ethnology.

Takahashi, Y. (2004) *A Descriptive and Morphosyntactic Study on Kinnauri*. A report of Research Project, Grant-in-Aid for Scientific Research (C), #12610556, 2000–2003.

Takahashi, Y. (2008) *A Descriptive and Morphosyntactic Study on Kinnauri (2)*. A report of Research Project, Grant-in-Aid for Scientific Research (C), #16520250, 2004–2007.

Takahashi, Y. (forthcoming) 'On a suffix of middle voice in Kinnauri (Pangi dialect)' In Nakamura, W. and Kikusawa, R. eds., *Objectivization and Subjectivization: A Typology of Voice Systems*. Osaka: National Museum of Ethnology.

髙橋慶治(forthcoming). 「キナウル語の述部構造について」澤田英夫（編）（書名未定）. 20 ページ. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

ダグール語の音韻
——共時的記述と通時的記述——

大竹 昌巳

1　はじめに

ダグール語は，中華人民共和国の内蒙古自治区フルンボイル市（旧フルンボイル盟）や黒竜江省，新疆ウイグル自治区等に居住するダグール族によって使用されるモンゴル系の言語である。日本では「ダグール」「ダフール」「ダウール」などの呼称があるが，本稿では言語学者の慣例である「ダグール」を用いる[1]。

2000 年センサスによればダグール族の人口は 132,394 人とされるが，ダグール語の話者数については詳らかではない。話者の多くは，漢語やモンゴル語など在地の優勢言語との多言語併用者である。固有の文字はもたない[2]。

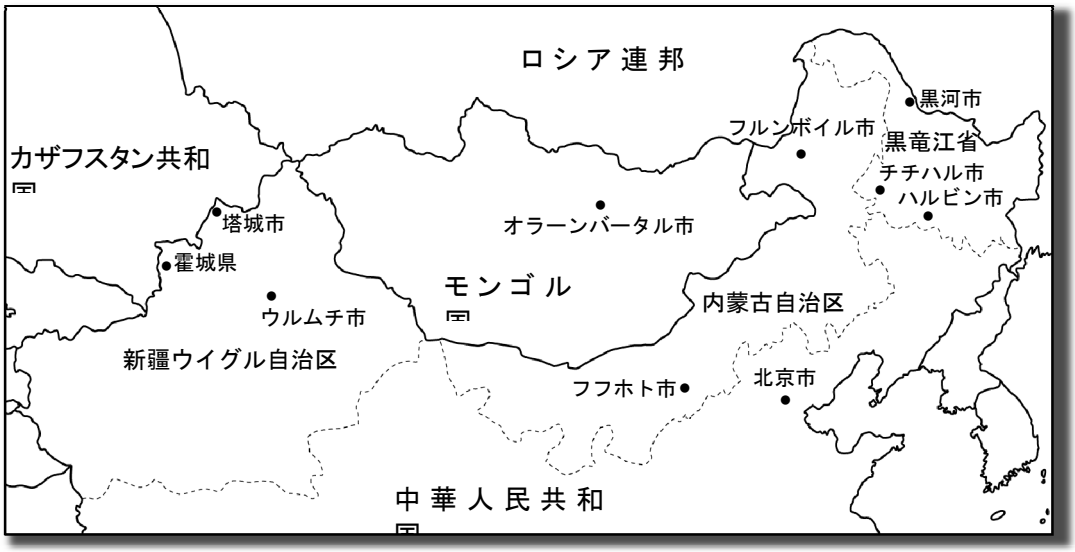


図 1　ダグール語関連地図

ダグール語はモンゴル語族の中で伝統的に「孤立的諸言語 (isolated/peripheral languages)」の一つに数えられており，他のモンゴル系言語では失われた古い特徴を保存する一方で，独自の改変も多く見られる。また，モンゴル語族の中で最東端に位置するという地理的な

---

[1] この他にも「ダウル」「ダオル」「ダオール」「ダグル」「ダゴル」「ダゴール」「ダフル」「ダホル」「ダホール」といった表記が確認される。

[2] 清朝期には一部のダグール人が満洲文字を用いて文学作品等を書き残した（恩和巴図 1996 等）。また，過去には正書法制定の試みも幾度か見られたが，実現には至らなかった。

要因から，過去にトゥングース系言語との接触もあり，歴史的な経緯から満洲語の語彙も多く借用されている。

本稿では，ダグール語の音韻に関して共時的および通時的な記述を行う。共時的記述の対象は，都市部のダグール語変種である（2.2 節）。具体的には，ダグール族の非集住地域であるフフホト市出身のダグール族男性のダグール語を扱う。2.3 節では，ダグール語諸方言との比較に基づいて，X 方言を共時的に位置づける。都市部のダグール語変種にはモンゴル語の影響が看取されたため，第 3 節の通時的記述ではダグール語とモンゴル語との相違について述べ，第 2 節の内容を補う。

2　フフホトのダグール語

2.1　調査協力者について

調査協力者である暁敏（ショウミン）氏は 1977 年 3 月 25 日，現在の内蒙古自治区フルンボイル市エウェンキー族自治旗の生まれ。両親ともにダグール族で，父はエウェンキー族自治旗の，母は同市モリンダワー＝ダグール族自治旗の出身。2 歳からは同自治区フフホト市で育ち，高校までモンゴル語による教育を受ける。高卒後来日し，現在は愛知大学にポストドクターとして在籍しておられる。日常的には日本語・漢語・モンゴル語・ダグール語を使用するが，ダグール語の使用は主に家族との会話に限られる。

氏は過去に，モンゴル族の寮制の小学校に通い，全くダグール語を使用しない時期があったため，その当時主として使用したモンゴル語が，のちに再習得したダグール語に影響を及ぼしていると考えられ，自身にもそのような認識がある。

本稿で扱うデータの大半は語彙調査で得られたものである[3]。ダグール語の音韻を詳細にわたって分析するにはさらなる調査が必要である。

暁敏氏のダグール語は，上記のような経緯から，今までに報告されているダグール語とは異なる特徴が認められたため，本稿では，暁敏氏の個人語を X 方言[4]と仮称する。以下では，ダグール語 X 方言の音韻について現状のデータに基づき概観した後，ダグール語諸方言との関係についても述べる。

2.2　ダグール語 X 方言の音韻特徴

2.2.1　母音

■第一音節の短母音

第一音節に立ちうる短母音は次の 7 種類である。本稿で用いる X 方言表記と，その標準的な音価，語例を次に示す。

---

[3] 調査は 2011 年 3 月 5 日・6 日に，協力者の在籍する愛知大学豊橋キャンパスで行った。調査協力を快諾し，忙しい中時間を割いて下さった暁敏氏および調査協力者を紹介して下さった大阪大学の角道正佳教授に，感謝申し上げる。

[4] 氏の名前（Xiǎomǐn）の頭文字および出身地フフホト [xɵx χɔt] の頭文字をとったもの。

(1)　a [ɑ̟]　gal　「火」
　　ə [ə]　gəl-　「言う」
　　o [ɔ̟]　gol　「川」
　　u [u̟]　kul　「足」
　　i [i]　čik　「耳」
　　ȧ [ɛ]　tȧb　「50」
　　ȯ [œ̟]　mȯr　「馬」

表 1　X 方言の第一音節の短母音

	前舌		中舌	後舌	
	非円唇	円唇	非円唇	非円	円唇
狭	i				u
半狭			ə		
半広	ȧ	ȯ			o
広				a	

o の円唇性は概して弱く，[ʌ] に近い音声が聞かれることが往々にしてある（後述）。

以下では，音声表記を用いる場合でも簡略化して a [ɑ], ə [ə], o [ɔ], u [u], i [i], ȧ [ɛ], ȯ [œ] と表記する。

■長母音・二重母音

調査範囲では ȯ 以外のすべての母音が対応する長母音をもつ。本稿では，対応する短母音を 2 つ重ねることによって長母音を表す。二重母音としては 6 つの下降二重母音 ai, əi, oi, ui, au, əu [äe̯ e̱i̯ ɔ̟e̯ u̟i̯ ɑo̯ ɤ̟u̯]（以下では [ɑe̯ ei̯ ɔe̯ ui̯ ɑo̯ ɤu̯] と略記）がある。

■母音の弱化

第二音節以降では全ての母音が弱化しており，長母音も特に閉音節で短く発音される。ただし，長母音の音色は弱化しない（baraaN [b̥ɑraːŋ]「多い」：barooN [b̥ɑroːŋ]「右，西」）。

一方，短母音では曖昧な音色の母音（第一音節の母音の音色に依存する）が聞かれ，šad̲ə̲l「能力」～ šadl-aar「能力によって」のように音配列によってゼロとも交替する。このような母音は，特定の子音連続を制限するために挿入されるプロソディックな性格をもつものと考えられ，音素と言えるかは疑問である。

本稿では，第二音節以降の短母音に対して，母音が聞かれたところに ə を記す表記法を採った。ただし，硬口蓋子音 č, ǰ, š, ň, y や口蓋化子音の後ろでは，顕著に i の音色を帯びた弱化母音が聞かれるので，その場合は i で表記した。

■円唇母音の音価

ダグール語（以下 Da.と略記）では，円唇母音は o [ɔ] と u [u] しか存在せず，原則として，モンゴル語の o [ɔ] と u [o] には Da. o [ɔ] が，モンゴル語の ö [ɵ] と ü [u] には Da. u [u] が対応する（第 3 節 (21) 参照）。従って，次に示すモンゴル語（内蒙古の標準的方言とされるチャハル方言（Ca.）で代表させる）[5] のミニマルペアは，ダグール語では同音異義語となるが，X 方言においても同様であることを話者の内省と筆者の聴覚印象により確認した。

---

[5] 調査協力者が標準的なチャハル方言を用いているとは断定できない。なぜなら，調査協力者が幼少期を過ごしたフフホトは，方言地図上ではチャハル方言が話されている地域にはあるものの，チャハル方言と他の方言が混在する都市だからである。

(2)	X	Da.	Ca.	gloss	X	Da.	Ca.	gloss
a.	[tʰɔs]	tos	dos	「油」	[tʰɔs]	tos-	dus-	「当たる」
b.	[b̥ɔd-]	bod-	bod-	「思う，考える」	[b̥ɔd-]	bod-	bud-	「染める」
c.	[ur]	ur	ör	「借金」	[ur]	ur	ür	「種」

ところが，X 方言の音声実現には，モンゴル語とのコード・ミキシングが観察される場合がある。例えば，X. [tɕʰos]（Ca. ǰus）「血」や X. [olɑˑŋ]（Ca. ulaaŋ）「赤い」，X. [b̥ɑroˑŋ]（Ca. baruuŋ）「右，西」のようにモンゴル語の u [o] に対して X 方言で [ɔ] ではなく [o] が聞かれ，X. [mɵŋg]（Ca. möŋg）「銀」のようにモンゴル語の ö [ɵ] に対して X 方言で [u] ではなく [ɵ] が聞かれる。

前述したように広めの o [ɔ] はしばしば [ʌ] に近い円唇性の微弱な発音が聞かれるこれは [ʌd̥]（Ca. od）「星」，[xʌl]（Ca. xol）「遠い」，[tʰʌr̥tɕʰ]（Ca. dobč）「ボタン」のようにモンゴル語の o [ɔ] に対して聞かれることが多い。恩和巴图 [编著]（1988: 33）によると，この円唇性の弱い o はモンゴル語の特徴であって，標準的なダグール語の o はそれよりも円唇の程度が強いという[6]。

しかしながら，X 方言では，次のようにモンゴル語の u [o] に対してもこの発音が聞かれる（ただし調査範囲では絶対語頭に限られる）。

(3)	Da.	Ca.	gloss
	[ʌs]	us	「水」
	[ʌr̥tʰ]	urt	「長い」
	[ʌlɘ̆r]	uls「国家」	「人々」

基本的には，(2) でみたようにモンゴル語における [ɔ] と [o] との差異や [ɵ] と [u] との差異は，ダグール語においては余剰な区別であり，それらはそれぞれ /o/, /u/ の自由異音なので，本稿では両者を表記し分けていない。ただし，この点については再度調査する必要がある。

2.2.2　子音

X 方言は，単純子音，口蓋化子音，円唇化子音の 3 系列の子音を有する。

■単純子音

単純子音は，表 2 に示す 18 種類である。

---

[6] ただし，モンゴル語の影響が強いハイラル方言（後述）では，モンゴル語のような非円唇母音の [ʌ] に近い発音が聞かれることがあるという（ibid.）。

表 2　X 方言の単純子音

	両唇音	歯茎音	歯茎硬口蓋音 ・硬口蓋音	軟口蓋音
破裂音・破擦音	p / b	t / d	č / ǰ	k / g
摩擦音		s	š	x
鼻音	m	n	ň	
顫動音		r		
側面音		l		
接近音	w		y	

破裂音・破擦音の p, t, č, k（以下「硬音」と呼ぶ）は，b, d, ǰ, g（以下「軟音」と呼ぶ）に比べて，呼気が強く，閉鎖も強い（閉鎖の持続時間が長い）。そのため，硬音は基本的に無声有気音で実現するのに対し，軟音は通常無声無気音だが，非語頭（特に語中）では有声音として実現することが多く，b や g の場合は摩擦音化を起こすことも多い。

摩擦音 s, š, x は，音節構造等に関して硬音の破裂音と似た特徴をもつので，以下ではそれらを含めて硬音と呼ぶ。

顫動音 r はふるえ音 [r] 或いは単顫動音 [ɾ] である。側面音 l は通常接近音 [l] だが，音節末では摩擦を伴う [ɮ] も聞かれる。

歯茎硬口蓋音 š [ɕ], ň [ȵ] がそれぞれ歯茎音 s, n と別々の音素をなすかどうかは調査できておらず[7]，特に後者は ny と解釈される余地がある。

■口蓋化子音・唇音化子音

口蓋化子音や唇音化子音は，対応する単純子音にそれぞれ y, w を附して表す。調査した限りでは，口蓋化子音は両唇音，歯茎音，軟口蓋音に見られ，唇音化子音は歯茎音と軟口蓋音に見られる。

（歯茎）硬口蓋音には単純子音と口蓋化子音との対立がなく，両唇音には単純子音と唇音化子音との対立がないと考えられる[8]。また，i の前の子音は口蓋化を伴い，u の前の子音は唇音化を伴うので，これらの音環境において単純子音と口蓋化・唇音化子音は対立しない。これらの場合には表記上，y や w を記さない。

X 方言では，口蓋化子音はどの位置にも立ちうる（ただし語末ではまれ）が，唇音化子

---

[7] 通時的にはダグール語の *i の前の s は š に変化したため，同一形態素中において si という音連続は存在しないが，共時的には，形態素境界を挟んで i の前に s が立ちうる（os-ii [osiː]「水の／水を」*[oɕiː]（Tsumagari 2003: 132））。

[8] 恩和巴图 [编著]（1988: 136）では m^{w}əːr「車輪の外縁部」：məːr「喰う（pejorative）」というミニマルペアがあり，両唇音にも対立があるとするが，Тодаева (1986) は前者の語について *мэ̄р* と記している。X 方言ではこれに対応する語が得られなかったため不明。

音は非音節頭に認める根拠は音声的にも形態論的にも見出せなかった[9]。

以下に口蓋化子音・唇音化子音の各位置における語例を示す。

(4)	語頭：	myag	[mʲɑǧ]	「肉」	xwar	[xʷɑr]	「雨」
	語中：	əriN	[ərʲĭŋ]	「季節」	nugwaa	[nugʷɑˑ]	「野菜」
	語末：	tauly	[tʰɑo̯lʲ]	「兎」	——		

■原音素 N

上記の子音の他に，形態音韻論的交替を考慮して原音素 N を立てる。これは調音位置の素性が未指定で，音環境により調音位置が決定される鼻音である。ポーズの前では，日本語の撥音のように鼻母音ないし軟口蓋鼻音で発音される（ərgəN [ərgə̆ŋ]「男，夫」～ərgəN=min [ərgə̆mmin]「私の夫」～ərgəN=tan [ərgə̆ntʰɑn]「あなたの夫」）。これに対して，歯茎鼻音 n は後続子音の調音位置に同化することはない（wan-bəi [wɑn(ə̆)beˑ]「落ちる」）。

2.2.3　音節構造

■音節構造

音節は $(C_1)V(V)(C_2)(C_3)$ という構造をもつ（(　) は任意要素）。

C は単純子音だけでなく口蓋化子音・唇音化子音も含み，V は短母音，VV は重母音（長母音・二重母音）を表す。

■子音連続

音節末の子音連続が許される場合，C_2 には調査範囲で軟音破裂音 g，共鳴音 m, r, l および N が立ちえ，C_3 には硬音阻害音 p, t, k, č, s, š および軟音破裂音 d, g が立ちうる。ただし，C_3 に d, g が立つのは C_2 が N の場合のみである。

子音連続に関する制約については，資料不足により詳細には触れられない。ただ，注目されるのは軟音の破裂音のふるまいで，g が共鳴音と同様，硬音との同一音節内における子音連続を許すのに対して（5a），d はそれを許容しない（5b）。他の軟音阻害音の b と ǰ の分布については今後の課題としたい。

(5)	a.	/bugs/	[b̥uǧs]	(*[b̥u.ɣə̆s])	「尻」
		/ars/	[ar̥s]	(*[ɑ.rə̆s])	「皮膚」
	b.	/uds/	[u.də̆s]	(*[ud̥s])	「羽」

■最小語条件

短母音を 1 モーラ，重母音を 2 モーラ，末子音を 1 モーラとすると，音韻語は必ず 2 モーラ以上からなる。従って，最小の語の音節構造は (C)VV または (C)VC である。

---

[9] 例えば，恩和巴图 [编著]（1988: 183）によれば唇音化子音終わりの名詞語幹に属格・対格接辞 -i: が接尾する場合に異形態 -ui が現れるという（noɣui「犬の／犬を」< noɣʷ + -i:）が，X 方言では nog [nɔǧ] / nog-ii [nɔɣiː] であり，形態音韻論的にも語幹末に唇音化子音が認められない。

2.2.4　韻律

ダグール語のアクセントは，示差的な働きをもたないが，母語話者に共通するパターンとして一定の形式を有している。ダグール語の先行研究ではアクセントに関して簡単な記述にとどまっているため，ここでは特に記述の少ないピッチについて述べることにする[10]。

以下では，ピッチの卓立する部分を鋭アクセント記号 ´ で示し，観察された範囲で記述する。

■単音節語

音節構造	語例
(C)VV	gyáa「街」　móo「悪い」　dəu「弟」
(C)VC	gól「川」　mód「木」　kəN「誰」
(C)VCC	ált「金」　lárč「葉」　órt「長い」 kímč ~ kíḿč「爪」　óNč ~ óŃč「ナイフ」 dáŃg「煙」　dóŃd「中央」　myáŃg「肉」
(C)VVC	tááb「5」　dááN「戦争」　áil「村」 áúl ~ aúl「山」　máís ~ məís「氷」　xóír ~ xoír「2」
(C)VVCC	mááŃd「私たちに」

■2 音節語

音節構造	語例
(C)VCVV	anáà ~ anáá「春節」　dolóo ~ dolóó「7」　ilgáa ~ ilgáá「花」
(C)VCVC	durəb「4」　ugíN「娘」　bayíN[11]「裕福な」
(C)VCVVC	dawóór「ダグール」　gočóór「長靴」 oláaN「赤い」　xalóoN「熱い，暑い」
(C)VVCVV	məəməə「お母さん」　dəuyíi「弟の」
(C)VVCVC	dəuyín「（彼の）弟の」　kuitəN「寒い」
(C)VVCVVC	bəiyəəs「体から」
(C)VCCVV	ǰorgáa ~ ǰorgáá「6」　kakráa ~ kakráá「鶏」
(C)VCCVC	barkəN「神」　moNgəl「モンゴル」
(C)VCCVCC	učkərt「子供に」
(C)VCCVVC	tərgúúl「道」

[10] ダグール語のピッチについては，津曲（1985: 237f），恩和巴图 [编著]（1988: 149f），Tsumagari (2003: 135) に記述がある。なお，それらによれば，ピッチとストレスは独立で，ストレスは第一音節に置かれる。

[11] ba と i の間に子音 y を認めるのは，baíN となって絶対に báiN とはならない，すなわち(C)VCVC 型と同じ振る舞いをすることによる。同様の解釈は津曲（1985: 237f）に見える。

■3 音節以上の語

2 音節語とほぼ同じ要領である。語例が少ないため体系的ではないが，いくつか挙げる。

(6) dəgiiyíi「鳥の」 dolaakə́N「暖かい」 kataayáár「塩で」
ačikčáaN ~ ačikčááN「鼠」 bəiyəəsə́ə「自分の体から」 kəukərsə́l「子供たち」

恩和巴图 [编著]（1988: 150）や Tsumagari (2003: 135) によれば，ダグール語のピッチは最終音節で卓立する。X 方言も同様であるが，具体的な記述がないために詳細な比較はできない。また，X 方言へのモンゴル語変種の影響も考える必要があるが，資料不足のため明らかでない。

■外来語

調査範囲内で得られた外来語は漢語借用語のみである。漢語由来の外来語は，ダグール固有語に見られる母音調和や母音弱化には従わないが，アクセントに関しては，もとの声調を無視してダグール固有語と同様のピッチで実現する。以下に例を挙げる（ç, ẓ は漢語の捲舌音 [tʂʰ], [tʂ]（ピンインの ch, zh）を表す）。

(7) byáu「時計」 (< Ch. 表 biǎo)
xwəəçə́ə「電車」 (< Ch. 火車 huǒchē)
çəəẓán「駅」 (< Ch. 車站 chēzhàn)
biiǰiibə́n「ノート」 (< Ch. 筆記本 bǐ jì běn)

2.3 ダグール語 X 方言と諸方言との関係

X 方言は，家庭内の主な模範者（両親および兄）をもとにして形成されたものであるから，外部（モンゴル語）からの影響を排除した残りの特徴は，おおよそ家族の使用するダグール語変種に由来するとみなすことができる。

そこで，本小節では X 方言に関わるダグール語変種を明らかにするため，諸方言との音韻的特徴および語彙の比較を行う。まずはダグール語の方言について概要を述べる。

2.3.1 ダグール語の方言区分

ダグール語の方言区分については，過去に二分論，三分論もあったが，いずれも十分な資料に拠っておらず，現在ではブトハ，チチハル，ハイラル，新疆（イリ）の 4 方言を認める四分論が一般的である[12]。本稿も便宜上この四分論に従い，恩和巴图 [编著]（1988: 22–26）や丁（1994, 2006: 275）等に拠り，各方言について略述する。

[12] 方言区分に関する研究史は丁（2006: 271–275）に詳しい。

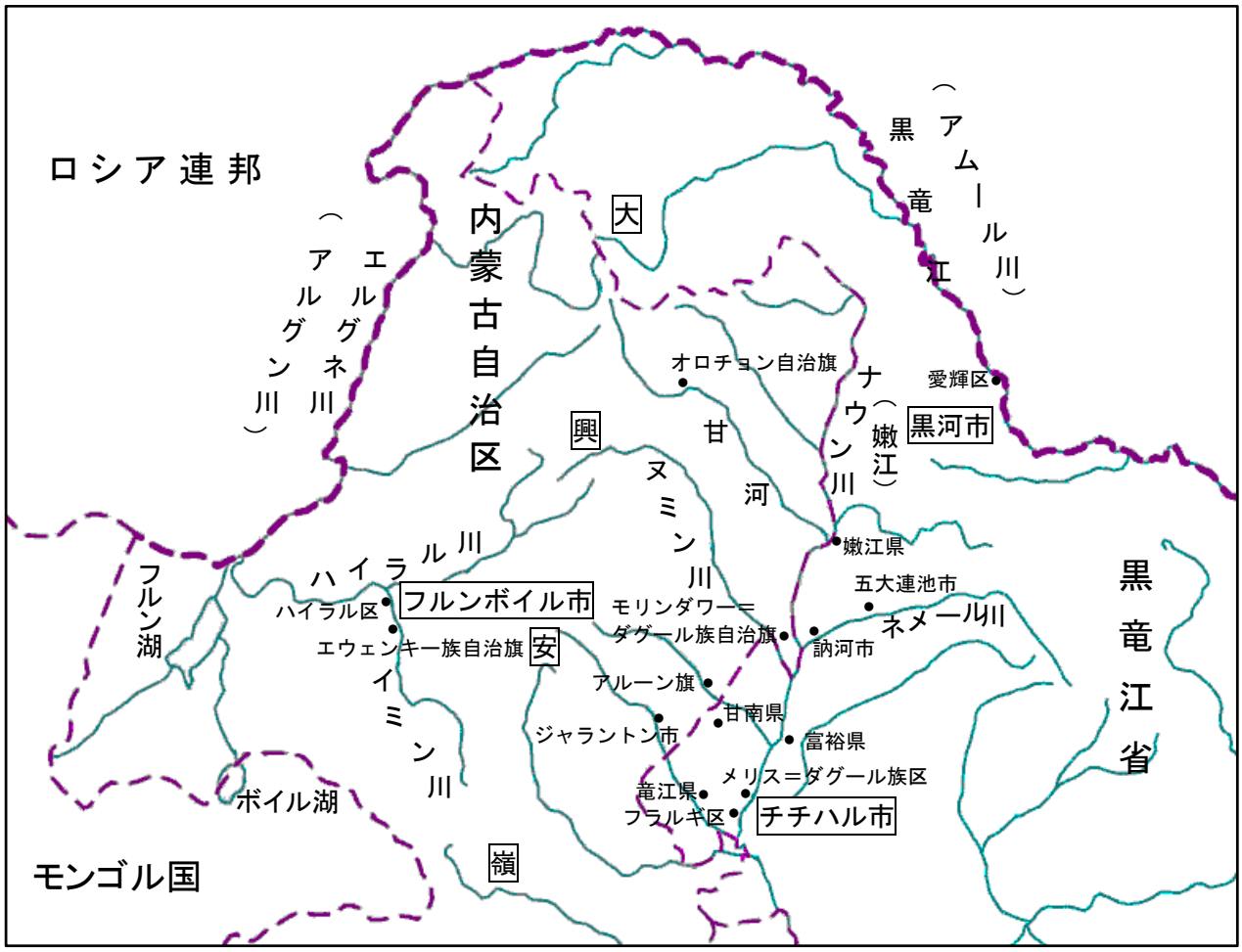


図 2　ダグール語使用地域（新疆地域を除く）

■ブトハ方言

主にナウン川（嫩江）上流域およびその支流のネメール川・ヌミン川流域等で話される方言。行政区分では内蒙古自治区フルンボイル市モリンダワー＝ダグール族自治旗・オロチョン自治旗，黒竜江省チチハル市甘南県・訥河市，黒河市五大連池市・嫩江県等に属する。ほかに，黒竜江（アムール川）沿岸の黒河市愛輝区等に話される方言も含まれる。

ナウン，ネメール，メルゲン，アイグンの 4 つの下位方言に分けられる。

ブトハ方言はダグール語の中で最も保守的で，また，満洲語からの借用語を多く残している。話者人口は約 5 万人という。

■チチハル方言

主にナウン川中流やその支流の流域にあたる黒竜江省チチハル市郊外（メリス＝ダグール族区やフラルギ区）・富裕県・竜江県，内蒙古自治区フルンボイル市ジャラントン市・アルーン旗等で話される方言。江東，江西，フラルギの 3 つの下位方言に分けられる。

チチハル地域は比較的早くから漢人の流入が盛んであったため，漢語からの影響が強い。話者人口は約 4.5 万人という。

■ハイラル方言

大興安嶺西麓のフルンボイル地域で話される方言。内蒙古自治区フルンボイル市エウェンキー族自治旗・ハイラル区に分布する。エメル＝アイル（南屯），モホルトの 2 つの下位方言に分けられる。

ハイラル方言はモンゴル語の影響が強い。話者人口は約 1.5 万人という。

■新疆方言

新疆ウイグル自治区イリ＝カザフ自治州塔城地区塔城市・霍城県，ウルムチ市等で話される方言。塔城（タルバガタイ），霍城（ホルゴス）の 2 つの下位方言に分けられる。

新疆方言はカザフ語の影響が強い。話者人口は約 0.5 万人という[13]。

2.3.2　諸方言との音韻比較

ダグール語の方言差はそれほど大きくないが，いくつかの特徴的な差異が存在する。本項では，X 方言も加えたダグール語諸方言の音韻的差異について述べる[14]。ただし新疆方言は割愛し[15]，参考のためモンゴル文語形（WMo.）とモンゴル語チャハル方言形（Ca.）を添える。各方言の語例は以下の辞書・語彙集に拠り，最低限の表記の統一を図った[16]。

ブトハ方言（Bu.）：恩和巴图 [编]（1983）《达汉小词典》
チチハル方言（Ci.）：胡和 [编]（1989）《达斡尔语汉语对照词汇》
ハイラル方言（Ha.）：津曲敏郎（1986）「ダグール語ハイラル方言基礎語彙」[17]

---

[13] 新疆のダグール人は，18 世紀に清朝によるジューンガル征討のためブトハ地域から派遣され駐防した者たちの子孫である（《达斡尔族简史》编写组 1986: 53–55 等）。

[14] ダグール語諸方言の差異については主に恩和巴图 [编著]（1988），丁（2006: 276–302, 2008）に拠った。

[15] 新疆方言の語彙については开英 [编]（1982）を，その特徴については丁（1995a, 1995b, 2006: 276–302, 2008）を参照されたい。

[16] 表記を改めた記号は次の通り。

本稿	au	č	ə	ǰ	š	x	y
恩和巴图 [编]（1983）	ao	q	e	j	x	h	y
胡和 [编]（1989）	ao	ch, q	e	zh, j	sh, x	h	y
津曲（1986）	au	č	ə	ǰ	š	x	j

このほか，胡和 [编]（1989）で前寄りの母音を表す a′, o′, u′ をそれぞれ ȧ, ȯ, u̇ で，ai, oi, ui を ȧȧ, ȯȯ, u̇u̇ で表記する。なお，同辞書では原則として非初頭音節の短母音は無表記，長母音は母音記号 1 字で表される。

[17] 津曲（1986）に記載のない語彙は Поппе (1930)（P.）により表記を簡略化して補う。

● X 方言とチチハル方言では，語幹末の i の音色（子音の口蓋化）が消失しており[18]，その代替として第一音節に a や o をもっていた語では前舌化母音 ȧ [ɛ], ȯ [œ] が生じている[19]（a）。これらの方言には i 音添加（第 3 節 (31) 参照）が見られないがチチハル方言では i 音添加に起因するような，前舌化した変異を持つ場合がある（b）。

(8)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
a.	tȧb	tabi	tȧb	tabi	tabi	tȧb	「50」
	mȯr	mori	mȯr	mori	mori	mȯr	「馬」
	ək	xəki	xək	əki	eki		「頭」
	bur	buri	bur	P. бypʹi	bös	bös	「布」
b.	gar	gari	gȧr ~ gar	gari	ɢar	gar	「手」
	xool	xooli	xȯȯl	xooli	qoɢulai	xoolȧȧ	「喉」

● チチハル方言では，他方言の ai, oi, ui 等に対してそれぞれ長母音 ȧȧ [ɛː], ȯȯ [œː], u̇u̇ [yː] が対応する。X 方言では，他方言の ai に対し，直後に N がある環境では ȧȧ [ɛː] が，他の子音が直後にある場合には ai [ɑe̯] が対応する（a）。また，チチハル方言では他方言の二重母音 əi に対して，長母音 ii が対応する（b）。

(9)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
a.	sȧȧN	sain	sȧȧn	saiŋ	sayin	sȧȧŋ	「よい」
	saikəN	saikan	sȧȧkn	saixəŋ	sayiqan	sȧȧxaŋ	「きれいな」
	kuitəN	kuitun	ku̇u̇tn	kuitəŋ	küiten	xiiteŋ	「寒冷な」
b.	məis	məis	miis	məisu	mö(l)sü[20]	mös	「氷」
	kəiN	xəin	xiin ~ xəin	kəiŋ ~ xəiŋ	kei	xii「空気」	「風」

● X 方言およびハイラル方言，チチハル方言では，1 音節の開音節語幹で，ブトハ方言の二重母音 au に対して長母音 oo が対応することが多い（Поппе 1930: 122 等，第 3 節 (23) 参照）。

(10)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	soo-	sau-	soo-	soo-	saɢu-	suu-	「座る」
	ǰoo	ǰau	ǰau	ǰau	ǰaɢu	ǰuu	「100」
	dao	dau	doo ~ dau	doo	daɢu	duu	「音，声；歌」

---

[18] ただし X 方言では aly「どれ」，tauly「兎」という 2 例の例外がある。

[19] 丁（2006: 277f, 2008: 301f）によると，チチハル方言の前舌化母音には u̇ [y] も存在する（syn; Mo. söni; Ca. šön「夜」）。

[20] 中世モンゴル語漢字文献には mölsün (YM, HY, DY, etc.)，meisü (BY, etc.) という語形が見られ，ダグール語の語形は後者と合致する。なお，ブリヤート語（ホリ方言）の語形は mülɨhen であり，モンゴル祖語形は *mölisün と再構される。

● X 方言およびハイラル方言では，ブトハ・チチハル方言で軟口蓋摩擦音として保持されている語頭の*h を保存しない[21]（第 3 節 (33) 参照）。

(11)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	arəb	xarab	xarb	arəbə	arba	arab	「10」
	ooN	xoon	xoon	ooŋ	on	oŋ	「年」
	wakər	xuakar	xuakr	waxərə	oqur	oxor	「短い」

● ハイラル方言およびチチハル方言では，モンゴル文語の q / k に対して，原則として摩擦音 x と破裂音 k が規則的な対応を示し，相補分布している。ブトハ方言では相補分布しておらず（第 3 節 (34) 参照）[22]，X 方言ではこれらの中間的な分布が見られる。すなわち X 方言では，語頭において a, o 等の前に立つ子音は，硬音が後続する場合に k，硬音以外が後続する場合は x であり（a），ə, u, i 等の前に立つ音は常に k である（b）。また非語頭では常に k である（c）。次表にこれら諸方言の k / x の分布を示す。

表 3　軟口蓋音 k / x の分布

<table>
<tr><th></th><th>WMo.</th><th>X</th><th>Bu.</th><th>Ci.</th><th>Ha.</th><th>Ca.</th></tr>
<tr><td rowspan="2">語頭</td><td>q（a, o, u の前）</td><td>k / x</td><td rowspan="2">k / x</td><td>x</td><td>x</td><td rowspan="4">x</td></tr>
<tr><td>k（それ以外）</td><td>k</td><td>k</td><td>k</td></tr>
<tr><td rowspan="2">非語頭</td><td>q（a, o, u の前）</td><td rowspan="2">k</td><td rowspan="2">k</td><td rowspan="2">k</td><td>x</td></tr>
<tr><td>k（それ以外）</td><td>k</td></tr>
</table>

(12)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
a.	kaučiN	kaučin	xaučn	xaučiŋ	qaɢučin	xuučiŋ	「古い」
	xar	xar	xar	xarə	qar·a	xar	「黒い」
b.	kuitəN	kuitun	kùùtn	kuitəŋ	küiten	xiiteŋ	「寒冷な」
	kəl	xəli	kəl	kəli	kele	xel	「舌」
c.	wakər	xuakar	xuakr	waxərə	oqur	oxor	「短い」
	ukər	xukur	xukr	ukuru	üker	üxer	「牛」

● ブトハ方言では，開口度や口唇形状の差が大きい母音の間で g が特に弱化または消失している。X 方言では，ブトハ方言形のように，g が弱化／消失した語が見られる場合がある。

---

[21] 恩和巴图 [编著]（1988: 128）によると，ブトハ方言の下位方言とされるネメール方言でも語頭の *h を保存しない。

[22] ただし，ネメール方言では全ての位置において k が対応し，x をもたない（恩和巴图 [编著] 1988: 125f）。

(13)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	ǰaus	ǰaus	ǰags	ǰagusu	ǰiɢasu	ǰagas	「魚」
	dawoor	daur ~ dawur	dagur	daguuru	(daɢur)		「ダグール」
	nugwaa	nuwaa	nuga	nogwaa	noɢuɢ·a	nogoo	「野菜」
	ugiN	uyin ~ ugin	ugun	ugiŋ	ökin		「娘」

2.3.3　諸方言との語彙比較

ここでは，前項で見たような音韻的な相違とは別に，個別的な異音同義語についていくつか取り上げる。

● 「言う」を表す語

恩和巴图 [编著]（1988: 25）によれば，「言う」を表す動詞は，ダグール語の方言を明確に区別する一つの指標となりうる。X 方言の語形はハイラル方言形と一致する。

(14)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	gəl-	əl-	xəl-	gəl-	kele-	xel-	「言う」

● 「青」「緑」を表す語

(15)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	kuk	šilaan	šilan	kuku	köke	göx	「青」
	nasəN ~ nugwaaN	kuku	kuk	nasuŋ	noɢuɢan	nogooŋ	「緑」

X 方言の形式は，ハイラル方言あるいはモンゴル語と合致する。なお，ブトハ・チチハル方言における šilaan「青」は漢語の「細藍 xìlán」に由来し，おそらく満洲語（Ma. silan）を経由して借用されたものと思われる。また，ハイラル方言で「緑」を表す nasan は，ブトハ方言では「水色」を表す。

● 「息子，少年」「子供」を表す語

(16)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	kəuk	kəku	kəkv [23]	kəukə	küü	xüü	「息子，少年」
	kəukər	kəkur	kəkur	kəukuru	keüked	xüüxed	「子供」

X 方言の語形はハイラル方言と合致する。なお，「子供」の意では učkər を頻用する。

● 「兎」を表す語

(17)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	tauly	tauli	taul	taulyəi	taulai	tuulàà	「兎」

[23] 胡和 [编]（1989）の表記法では v によって先行子音の唇音化が表現されている。

X 方言の tauly はブトハ方言形と合致する。恩和巴図 [編著]（1988: 25）によるとハイラル方言の tɑule: (taulyəi) はモンゴル語からの借用である。

● 「蛇」を表す語

(18)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	mog	mowo	mog	mogai	moɢai	mogȯȯ	「蛇」

X 方言形はブトハ方言形（恩和巴図 [等編] 1984 の表記によれば moɣ^{w}）やチチハル方言形と近似する。恩和巴図 [編著]（1988: 25）によるとハイラル方言の moɣɑi (mogai) はやはりモンゴル語からの借用である。

● 一人称複数排除／包括の区別

一般にダグール語では一人称複数における排除形・包括形の区別を保存しているが，モンゴル語の影響を強く受けたハイラル方言および X 方言では，両者の区別が失われている。例として各方言の主格形を挙げる（“ / ” で区切られた場合は左が排除形，右が包括形）。

(19)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
	baa	baa / bid	baa / bȧd	bidə	baa / bida	bid ~ bed	1PL 主格形

ただし，X 方言では baa のみを用い，ハイラル方言やモンゴル語では bid のみを用いることが注意される。

2.3.4 まとめ

2.3.2 および 2.3.3 で述べた事柄をまとめると，表 4 の如くである。

表 4　X 方言と諸方言との特徴共有関係

（○は適合，△は部分的に適合）

事項	X	Bu.	Ci.	Ha.	Ca.
(8) 語末口蓋化音消失と前舌化母音	○	—	○	—	○
(9) 二重母音 *Vi の長母音化	△	—	○	—	○
(10) 単音節語の *au > oo	○	—	○	○	○
(11) 語頭 *h の消失	○	—	—	○	○
(12) k / x の不規則的分布	△	○	—	—	—
(13) 母音間 *g の弱化／消失	△	○	—	—	—
(14) 「言う」gəl-	○	—	—	○	—
(15) 「青」kuk，「緑」nasəN / nugwaaN	○	—	—	○	○
(16) 「息子，少年」kəuk，「子供」kəukər	○	—	—	○	—
(17) 「兎」tauly	○	○	—	—	—
(18) 「蛇」mog	○	○	○	—	—
(19) 一人称複数排除／包括の区別の消失	○	—	—	○	○

このうち X 方言がチチハル方言と共有する音韻的特徴は，同時にモンゴル語とも共有される特徴であり，チチハル方言との関係を示唆するものではない。他にも，語彙がモンゴル語によって置き換えられたために，X 方言には多くのモンゴル語的特徴が見出される。例えば，

(20)	X	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.	gloss
a.	dolaaN	dulaan	dulan	dulaaŋ	dulaɢan	dulaaŋ	「暖かい」
	xalooN	xaluun	xalun	xalooŋ	qalaɢun	xaluuŋ	「熱い，暑い」
b.	anȧȧ	aniə	aniə	anyəi	Ma. aniya		「春節」[24]
	uňəə	uniə	uniə	unyəi	üniy·e	ünyee	「乳牛」[23]
c.	gorəb	guarab	guarb	gwarəbə	gurba	gurab	「3」
	door	duar	duar	dwarə	dour·a	door	「下」
d.	ǰorgaa	ǰirwoo	ǰirgo	ǰirgoo	ǰirɢuɢ·a	ǰurgaa	「6」
	noroo	niroo	niro	P. нʹipoo	niruɢu	nuruu	「背中」

(20a) のように [u] と [ɑ] が同一語中にほとんど共起せずに狭めの o が現れ（2.2.1，第 3 節 (21b), (24a) 参照），(20b) のように *i’a, *i’e の合流が生じておらず結果として音素 ee をもたず（第 3 節 (27c) 参照），(20c) のように円唇母音の折れが少なく（第 3 節 (22) 参照），(20d) のように *i の折れが多い（第 3 節 (28), (29) 参照）などは，いずれもダグール語諸方言の特徴とは合致しない，モンゴル語的特徴である。

さて，表 4 において，X 方言と最も特徴を共有するのはハイラル方言であり，特に X 方言における (11) および (14) ～ (16) の特徴は他方言・他言語に由来するものとは考えがたい。調査協力者の父親がハイラル方言地域の出身者であることを考慮すれば，ハイラル方言が X 方言の形成に大きく関与した可能性が高い。

しかしながら，X 方言にはブトハ方言的特徴も含まれることに注意しなければならない。特に X 方言の k / x の分布パターンを説明するには，ハイラル方言からの複雑化よりも，ブトハ方言からの簡素化と理解した方が現実的である。調査協力者の母親がブトハ方言地域の出身であり，一般に子は母親の言語の影響を受けやすいことを考慮するならば，むしろブトハ方言が X 方言の形成に大きな役割を果たしている可能性がある。

なお，今回は先行研究で述べられている方言的特徴をもとに比較したが，それとは合致しない特徴を備えた小方言が存在する可能性も否定できない[25]。実際，角道（1987）で報告

---

[24] 恩和巴图 [编]（1983）（Bu.）と胡和[编]（1989）（Ci.）においては iə が（単音節語，および複音節語の非初頭音節で）[eː] を表し，津曲（1986）（Ha.）では yəi が [eː] を表している。なお，ここに挙げた 2 つの語例の音価は，恩和巴图 [等编]（1984）によると Da. ɑneː, uɲeː であり，これらの表記ではこの 2 例における先行子音の口蓋化の有無（n か ɲ か）を書き分けられない。

[25] ただし，k / x の分布については，現在までに報告されているハイラル方言（Поппе 1930，津曲 1985, 1986，角道 1987，塩谷 1990）ではすべて，2.3.2 (12) で述べたような相補分布を原則として示すので，やはり X 方言にはハイラル以外の方言の関与を考えなければならない。

されているハイラル方言や Martin (1961) で記述されているブトハ方言などは，上で述べたような方言的特徴は満たしているものの，一部特異な音韻的特徴が見られ，また，註 21, 22 でも述べたように，ネメール方言はブトハ方言の下位方言に分類されながら，その特徴はいわゆるブトハ方言とは大きく異なっている。方言に関する更なる考究が俟たれる。

3　通時的に観たダグール語の音韻特徴

前節では，ダグール語の音韻全体の特徴について，或いはモンゴル語との差異について，十分には述べなかったので，本節で通時的な視点からダグール語の音韻的特徴を記述することにより，両者の差異を明らかにしたい[26]。モンゴル語は内蒙古の標準的方言とされるチャハル方言（主に孙竹 1985 による[27]）を用い，ダグール語は，標準的方言とされ，話者人口も最も多いブトハ方言（恩和巴图 [等编] 1984 による[28]）を用いる。また，祖形に近い形式としてモンゴル文語形（WMo.）あるいは中世モンゴル語形[29]（MMo.）を添える。

ダグール語とモンゴル語の母音体系は概略次のようである。

ダグール語
（ブトハ方言）

i　u
e　ə
o
a

モンゴル語
（チャハル方言）

i　ï　ü
(ė)　e ö　u
ȧ ȯ　o
a

(　) は長母音のみ

図 3　ダグール語・モンゴル語の母音体系

---

[26] 本節の内容は Поппе (1930) 以来の先行研究に多くを負っているが，筆者が新たに補った部分もある。煩雑を避けるため，多くの先行研究で指摘されてきた事実については出典を割愛した。筆者が参照しえた主な先行研究としては Поппе (1930)，Poppe (1934)，Poppe (1955)，Тодаева (1960)，Poppe (1964)，Namcarai & Qaserdeni (1983)，Тодаева (1986)，恩和巴图 [编著]（1988），栗林（1989a），Tsumagari (2003) が挙げられる。なお，以下に挙げる音変化には例外も存在するが，本稿の目的上，多くは割愛した。

[27] ただし表記を改める。主な変更点は次の通り。

本稿：	a	e	o	ö	u	ü	ï	i	ȧ	ȯ	ė	č	ǰ	š	y	g	y
原典：	ɑ	ə	ɔ	o	ʊ	u	ɪ	i	ɛ	œ	e	tʃ	dʒ	ʃ	j	ɡ	ʲ

[28] ただし表記を改める。主な変更点は次の通り。

本稿：	a	VV	ŋ	n	č	ǰ	š	ň	y	g	g	y	w
原典：	ɑ	V:	n / _ #	nə / _ #	ʧ	ʤ	ʃ	ɲ	j	ɣ	ɡ	ʲ	ʷ

[29] 中世モンゴル語は栗林 [編著]（2003, 2009），贾、朱风 [合辑]（1990）によって確認できる漢字諸文献に拠った。出典を各語例の (　) 内に示す。

● ダグール語では円唇母音の合流が生じ，*o, *u が o に，*ö, *ü が u になった（a）。ただし，長母音 aa が後続する場合には *u は u になった（b）[30]。

(21)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
a.	tos	tosu	dos	「油」
	tos-	tus-	dus-	「当たる」
	xuns-	ölüs-	öls-	「飢える」
	xuns	ünesü	üns	「灰」
b.	dulaaŋ	dulaɢan	dulaaŋ	「暖かい」

● 初頭音節において，短母音 *a が後続する *u は「折れ（breaking / Brechung）」を起こして wa となった（a）[31]。一方，(24b) のように長母音 aa が後続する場合は「折れ」が阻止される。また，一部の *o も，wa となった（b）。なお，頭子音が両唇音の場合は w が現れない（c）[32]。

(22)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
a.	want-	unta-	unt-	「眠る」
	twas	tusa	dus	「利益」
b.	dwatər	dotur·a	dotor	「内，中」
	xwakər	oqur	oxor	「短い」
c.	man	muna	mun	「アイスピック」

● 初頭音節において，中世モンゴル語の母音連続 a’u (awu), e’ü (ewü) を二重母音 au, əu として保存する（a）。ただし，頭子音が両唇音の場合は MMo. a’u (awu) は長母音 oo となった（b）。

現代モンゴル語諸方言ではこれらに全て長母音が対応する。

(23)	Da.	MMo.	Ca.	gloss
a.	aul	a’ula (YM)	uul	「山」
	dau	dawun (YM)	duu	「音，声；歌」
	əud	e’üden (HY)	üüd	「門，扉」
	dəu	de’ü (YM)	düü	「年下のきょうだい」
b.	moo	mawu (YM)	muu	「悪い」

---

[30] *ö, *ü の規則的な合流はブリヤート語東部（ホリ）方言やバルグ＝ブリヤート方言，モンゴル語ホルチン方言にも見られる。

[31] これと並行して，短母音 *e が後続するごく一部の *ü が wə となっている（Da. wəy; WMo. üy·e; Ca. üy「節」）。

[32] ダグール語における円唇母音の折れは栗林（1993）が詳しく扱っている。なお，円唇母音の折れ（*u > wa）はモンゴル語ハラチン方言にも見られる（野村 1960）。

● 非初頭音節においては，中世モンゴル語の母音連続は全て長母音となった。初頭音節に a をもつ MMo. a’u, u’u, i’u は，ダグール語では開音節で oo に，閉音節で uu に分裂した（a）。ただし，開音節でも両唇音を頭子音とする場合は uu となった（b）。また，他の母音を初頭音節にもつ場合は一律に oo になった（c）。

(24)	Da.	MMo.	Ca.	gloss
a.	adoo	adu’u (YM)	aduu「馬群」	「家畜の群れ」
	xaduur	qadu’ur (HY)	xaduur	「鎌」
b.	dawuu	cf. daba’ul- (YM)「超過する」		「優れた；かなり」
c.	niroo	niru’un (YM)	nuruu	「背中」
	šomool	šimu’ul (HY)「蠅」	šumuul	「蚊」

● 非初頭音節において，中世モンゴル語の母音連続 o’a は通例 oo になる（a）が，MMo. Coqo’a（WMo. Coɢuɢa，C は任意の子音）という音連続においては Cuwaa になる（b）。

(25)	Da.	MMo.	Ca.	gloss
a.	doloo	dolo’an (YM)	doloo	「7」
b.	tuwaa	toqo’an (HY)	togoo	「鍋」
	nuwaa	noqo’an (YM)	nogoo	「野菜」

● 中世モンゴル語の初頭の母音連続 ö’e, ö’ö は，原則として wəə となる（a）[33]が，非初頭の母音連続 ö’e, ü’e は əə になる（b）（恩和巴图 [编著] 1988: 71）。モンゴル語ではこれら全てに öö が対応する[34]。

(26)	Da.	MMo.	Ca.	gloss
a.	wəəd	ö’ede (YM)	ööd	「上へ」
	mwəər	mö’er (DY)	möör	「車輪の外縁部」
b.	gurəəs	görö’esün (YM)	göröös	「獣」
	kirəə	kirü’e (YM)	xöröö	「鋸」

● 新たな母音音素 e を生じた。短母音 e は，硬口蓋子音 *č, *ǰ, *š, *y を頭子音にもち，*i を後続させる初頭音節の *a に由来する。（a）[35]。長母音 ee は，*čai, *ǰai に由来する単音節

---

[33] 一部 uu になった例がある（Da. buus; MMo. bö’esün (YM); Ca. böös「虱」）。

[34] ダグール語において長母音 *öö が多くの場合に *üü（＞Da. uu）とは異なる変化をしたのは，短母音で *ö と *ü が合流した後も，長母音ではその区別が保たれていたことを示唆する。興味深いことに，ブリヤート語東部方言やバルグ＝ブリヤート方言では長母音でのみ öö が保持されている。

語（b）を除けば，他は非初頭音節にしか現れず，*i’a や *i’e に由来するもの（c）と，一部の*ai, *ei, *ui に由来するもの（d）等がある[36]。

(27)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
a.	šeby	šabi	šȧb	「学生」
b.	ǰee	ǰai	ǰȧȧ	「空間；距離」
c.	taree	tariy·a	tȧrȧȧ「農作物」	「畑」
	uree	üriy·e	üryee	「3～5 歳の雄馬」
d.	balee	balai	balȧȧ「無知な」	「盲目の」

● 長母音に先行する *i が，一定の条件[37]で「折れ」を起こさずに保存される。

(28)	Da.	MMo.	Ca.	gloss
	imaa	ima’an (HY)	yamaa	「羊」
	diloo	ǰilu’a (YM)	ǰoloo	「手綱」
	xirəəl	hirü’er (YM)	yöröölˈ「祝詞」	「呪文；祝詞」

● モンゴル語において見られる，先行子音の口蓋化を伴わない折れ（prebreaking，栗林 1981 の「完全な折れ」）がダグール語では生じていない。

(29)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
	myag	miq·a	max	「肉」
	ňos	nisu	nus	「鼻水」
	nid	nidü	nüd	「目」

● *č, *ǰ を頭子音とする初頭音節の *a は，長母音 aa が後続する（a）か鼻音＋破擦音 nč という音連続が直後にある（b）場合に，i になった。

(30)	Da.	MMo.	Ca.	gloss
a.	čigaaŋ	čaqa’an (YM)	čagaaŋ	「白い；白」
	ǰiyaa	ǰaya’an (YM)	ǰïyaa	「運命」
b.	činč	čamča (YM)	čȧmč	「単衣」
	ǰinč-	ǰanči- (YM)	ǰïnč-	「打つ」

---

[35] 一部は *a の後続する初頭音節の *i に由来する（Da. peč; WMo. biča; Ca. bïč「粉々に」）が，このような環境では *i の折れを起こすのが通例である（Da. gyad; WMo. ǰida, Ma. gida; Ca. ǰïd「槍」）。

[36] *i’a, *i’e の合流はハムニガン＝モンゴル語にも見られ，トゥングース系言語の影響が疑われる（Rybatzki 2003: 371）。

[37] 母音連続 *a’u, *u’u, *ü’e に由来する長母音が後続する *i は，頭子音が *č, *ǰ, *š の時には折れを生じる（Da. čoloo; MMo. čilawun (YM); Ca. čuluu「石」）。

● 流音終わりの一部の名詞（特に身体名称や所有物？）の語幹末に i の音色が添加される現象がある。

(31)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
	gary	ɢar	gar	「手」
	gəry	ger	ger	「家」
	kuly	köl	xöl	「足」
	dəəly	debel	deel	「裏地のある服」

● 名詞語幹末の二重母音 *ai, *ei が消失した（a）[38]。その直前が流音の場合は，(31) の i 音添加が見られることがある（b）。

(32)		Da.	WMo.	Ca.	gloss
	a.	gag	ɢaqai	gaxȧȧ	「豚」
		mələg	melekei	melxii	「蛙」
	b.	xooly	qoɢulai	xoolȧȧ	「喉」
		bəəly	begelei	beelėė	「手袋」

● 中世モンゴル語の語頭の h を軟口蓋摩擦音 x として保存する。これは現代モンゴル語諸方言では全て失われた。

(33)	Da.	MMo.	Ca.	gloss
	xarəb	harban (YM)	arab	「10」
	xulaaŋ	hula’an (YM)	ulaaŋ	「赤い；赤」
	xič-	hiče- (YM)	ič-	「恥ずかしがる」

● 語頭の *k が破裂音 k と摩擦音 x に分化した。喻（1983: 24）の述べるように一部の語は第二音節頭が硬音 *t, *s, *č, *k の場合に k，それ以外で x となる（b）が，その条件に適さなくとも k で現れる語が多くある（b）[39]。

(34)		Da.	WMo.	Ca.	gloss
	a.	kartəs	qabtasu	gabtas	「板」
		kəkw	keüken	xüüxeŋ「娘」	「息子，少年」
		xar	qar·a	xar	「黒い；黒」
		xəd	kedü	xed	「いくつ」
	b.	kan	qan·a	xan「壁」	「窓格子」
		kur-	kür-	xür-	「至る」

[38] ただし，いきなり *Vi > Ø となったのではなく，短母音化（*Vi > V）を経た後，母音弱化と音節改変により消失したものと考えられる。この名詞語幹末二重母音の短母音化は，かなり早期に生じた。

[39] 想定される他の条件の一つとして「*i の前では k が保たれる（Da. kyand; WMo. kimda; Ca. xïmd「安い，易い」）」（ただし単音節語 Da. xii-; WMo. ki-; Ca. xii-「する」は例外）が挙げられる。

● 母音間の *k が軟音化した（a）。ただし，直前の子音が硬音の破裂・破擦音または *h の場合（b），或いは，*k を含む音節が重音節（長母音・二重母音または母音＋鼻音 N を含む音節）の場合（c）に軟音化は阻止される[40]。

(35)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
a.	sagal	saqal	saxal	「ひげ」
	nugw	nüke	nöx	「穴」
b.	čiky	čiki	ǰix	「耳」
	kukw	köke	göx「青」	「緑色の；緑」
c.	ukaa	uqaɢ·a	uxaa	「智慧」
	wakəŋ	uqun·a	uxan	「種山羊」

● 語頭の破擦音 *č が *i の前で摩擦音 š になった（a）。ただし，第一音節が開音節で，かつ，第二音節の頭子音が硬音（b）または第二音節が重音節（c）の場合に摩擦音化は阻止される[41]。

(36)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
a.	šar	čirai	čȧrȧȧ	「顔」
	šurkul	čidkür	ǰötxör	「鬼」
b.	čos	čisu	ǰus	「血」
c.	činəə	činege	činee	「能力，力量」

● 一部の音節末子音 *b, *d, *g, *s が r になった（a）。この r 音化はダグール語特有の現象で，「ダグール・ロータシズム（Dagur rhotacism）」と呼ばれる（Tsumagari 2003: 133）。*s の r 音化は，直後の軟音の硬音化を伴う（b）。また，r 音化の結果，同一語幹内に r が重出する場合は，異化によって多くの場合後方の r が l になった（c）。

(37)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
a.	torč	tobči	dobč	「ボタン」
	kəkur	keüked	xüüxed	「子供」
	art	aɢta	agt	「去勢馬」
b.	aurky	aɢusgi	uušig	「肺」
	xərk-	esge-	eseg-	「切る」
c.	šurkul	čidkür	ǰötxör	「鬼」
	čərəl	čerig	čireg「兵，軍」	「兵役」

[40] ちなみに (35b) からわかるように，チャハル方言では第二音節頭が硬音の場合に，語頭の硬音が軟音化する（栗林 1989b: 1429）。この軟音化の条件は，ダグール語の軟音化の条件とは対照的で興味深い。また，チャハル方言の軟音化は当該音節が重音節（長母音・二重母音，母音＋鼻音を含む音節）の場合に阻止されるが，こちらはダグール語の軟音化の阻止条件と類似する。

[41] 破擦音の摩擦音化はブリヤート語やモンゴル語ホルチン方言にも見られる。

● 散発的な脱鼻音化・鼻音化が見られ，語頭や語末で n が l に（a），語中で l が n に（b）なることがある。

(38)	Da.	WMo.	Ca.	gloss
a.	larč	nabči	nábč	「葉」
	əməl	emün·e	ömön	「前，南」
b.	minaa	milaɢ·a		「鞭」

4　おわりに

本稿では，フフホトという非ダグール語地域においてモンゴル語の影響を受けたダグール語の変種「X 方言」の音韻について記述した。X 方言とダグール語諸方言との比較からは，X 方言の形成にブトハ方言とハイラル方言が関与した可能性が高いことが示された。また，X 方言にはモンゴル語の影響が色濃く観察されたので，何がダグール語の特徴なのかを明らかにする必要から，モンゴル語との差異についても通時的側面から記述した。

第 2 節で記述した X 方言については，データ不足から母音調和や子音連続の制約などの重要な特徴について述べられなかった。音韻論的解釈も部分的であり，表記は仮表記の段階である。また，今回の調査は簡単な語彙調査であったため，文法事項についてはほとんど確認できなかった。今後の課題である。

最後に，本稿執筆の機会と有用なコメントをくださった言語記述研究会の皆様，特に本稿の内容について多くのご助言をくださった稲垣和也氏に感謝申し上げる。

附録　調査語彙一覧

今回の調査で得られた語彙を，本文中で用いた辞書・語彙集（表記は本文中に述べた原則により改変）に記載された各方言形とともに示す。本文同様，ハイラル方言についてはПоппе (1930) により欠を補ったが，ブトハ方言についても那順达来 [编著]（2001）（一部表記を変更）により補った。なお，対応する各方言形や文語形は，意味よりも語形を優先させたため，X 方言とは意味のずれが生じている場合がある。表中の〔古〕は古い表現であまり使用しないものを指す。

配列順：a, ȧ, b, č, ç, d, ə, g, i, ǰ, k, l, m, n, ň, N, o, ȯ, p, r, s, š, t, u, w, x, y, ẓ

№	X 方言	gloss	Bu.	Ci.	Ha.	WMo.	Ca.
001	aa-	(家に)居る	aa-	aa-	aa-	a-	
002	ačikčaaN	鼠，(十二支の)子	ačikčaan ~ aškaa	ačkča	ačixičaaŋ		
003	ag	(自分の)兄	ag	ag	agə	aq·a	ax
004	ail	村	ail	ȧȧl	ailə	ayil	ȧȧl
005	aiš	助けになるもの	aiš	ȧȧš	cf. aišilə-	Ma. aisi	
006	aiš tos	ためになるもの	aiš tuas	ȧȧš tuas			
007	akaa	お兄さん	akaa	aka	axaa		
008	al-	殺す	al-	al-	alə-	ala-	al-
009	alt	金	alt	alt	altə	alta	alt
010	aly ~ aliN	どれ	N. ali	al	alini	ali	ȧl
011	am	口	am	am	amə	ama	am
012	anȧȧ	春節	aniə	aniə	anyəi	Ma. aniya	
013	arəb	10	xarab	xarb	arəbə	arba	arab
014	arig	酒	argi	ȧrg	arigi	ariki	ȧrax
015	ars	皮	ars	ars	arsə	arasu	ars
016	ašig	利益				asiɢ	ašig
017	aul	山	aul	aul	aulə	aɢula	uul
018	aur[1]	大気，空気	aur	aur	auru	aɢur	uur
019	aur[2]	怒り	aur	aur	auru	aɢur	uur
020	baa[1]	(1PL 主格)	baa / bid	baa / bȧd	bidə	ba / bida	bid ~ bed
021	baa[2]	お父さん		baa, baaba	baawaa	Ch. 爸?	
022	bagš	先生	bakš	(səb)	bagši	baɢsi	bagš
023	bait	事	bait	bȧȧt	baitə	Ma. baita	
024	baləg	土	balag	balg	baləgə		
025	baňgil-	感謝する	banigal-			Ma. banihala-	
026	baraaN	多い	baraan	baran	baraaŋ		
027	barkəN	神	barkan	barkn	barxuŋ	burqan	burxaŋ
028	barooN	右，西	baran	barn	barəŋ	baraɢun	baruuŋ
029	bayiN	裕福な	bayin	bayn	bayiŋ	bayan	bayiŋ
030	bəəd	外側	bəəd	bəəd	bəədə		
031	bəi[1]	ある，いる	bəi	bii	bəi	bui	bii
032	bəi[2]	体；～の方，側	bəy	bəy	bəji	bey·e	bey
033	bii	(1SG 主格)	bii	bii	bii	bi	bii
034	biiǰiibən	ノート				Ch. 筆記本	

035	bitəg	本	bitəg	bitg	bitəgə	Ma. bithe	
036	bod-[1]	思う, 考える	bod-	bod-	bodə-	bodu-	bod-
037	bod-[2]	染める	bod-	bod-	bodə-	budu-	bud-
038	bodaa ~ badaa ~budaa	御飯, 食事	budaa ~ badaa	bada	budaa ~ badaa	budaɢ·a	budaa
039	bok	種牛	bag	bak		buq·a	bux
040	bugs	尻	burs	burs	bugsu	bögse	bögs
041	buləN	温かい	bulun	bulun	bələəkuŋ	büliyen	büleeŋ
042	bulk	鏡	bulku	bilkv	bulku	Ma. buleku	
043	bun	明日	buni ~ boni	bun’	buni		
044	bun ərt	翌朝					
045	bun udər	明日	buni udur ~ bunidur	bun’ udr	buni udurə		
046	buNtər	尻	burtur				
047	bur	布	buri	bur	P. бур′i	bös	bös
048	bus	帯(細長い布)	bəs	bəs	P. бєсє ~ бус	büse	büs
049	buu	(禁止の前置小詞)	buu	bu	P. бyy	buu	büü
050	byau	時計	biau	biau		Ch. 表	
051	čaaǰ	明後日	čaaǰ	čaaǰ	čaaǰi	čaɢa—	
052	čaas	紙	čaas	čaas	čaasu	čaɢasu	čaas
053	čagaaN	白い; 白	čigaan	čigan	čigaaŋ	čaɢan	čagaaŋ
054	čas	雪	čas	čas	časə	času	ǰas
055	čää	茶	čiəə	čiää ~ čiə	čəi	čai	čää
056	čik	耳	čiki	čik	čiki	čiki	ǰix
057	čirəg	兵士, 軍隊	čərəl	čirl		čerig	čireg
058	čoloo	石	čoloo	čolo	čoloo	čilaɢu	čuluu
059	čos	血	čos	čos	čosə	čisu	ǰus
060	çəəẓan	駅				Ch. 車站	
061	dal	70	dal	dal	dalə	dala	dal
062	dalii ~ dalai	海	dalii	dali	dalai	dalai	dalää
063	daNg	煙草	danga	dang	daŋgə	damaɢ·a	damag
064	dau	音	dau	doo ~ dau	doo	daɢu	duu
065	dawoor	ダグール	daur ~ dawur	dagur	daguuru	daɢur	
066	dääN	戦争	dayin	dään	dayiŋ	dayin	dääŋ
067	dəər	上	dəər	dəər	dəərə	deger·e	deer
068	dəgii	鳥	dəgii	dəgi	dəgii	So. degii	
069	dəu	年下のきょうだい	dəu	dəu	dou	degüü	düü
070	dolaakəN ~ dolaaN	暖かい	dulaan	dulan, dulakn	dulaaŋ ~ dulaaxuŋ	dulaɢan	dulaaŋ
071	doloo	7	doloo	dolo	doloo	doluɢ·a	doloo
072	doNd ~ dwaNd	真ん中	duand	dond	dwandə	dumda	dund
073	doNd gurəN	中国	duand gurun	dondi gurn			
074	door	下	duar	duar	dwarə	dour·a	door
075	dotər ~ dwatər	内側	duatar	dotr	dwatərə	dotur·a	dotor
076	duč	40	duč	duč	duči	döči	döč
077	durəb	4	durub	durb	durubə	dörbe	döröb
078	dwar	好み, 願望	duar	dor	cf. dwarələ-	dur·a	dur
079	əčig	(自分の)父	əčig	əčg	əčigə	ečige	ečig
080	ədəə	今, 現在	ədəə	ədə	ədəə	edüge	

081	əg	(自分の)母	əg	əg	əgə	eke	ex
082	əi	このように	əi	ii ~ əii	P. єji	eyin	iim
083	əimər	このような	əimər	iimr	əimərə	eyimü	iim
084	ək	頭,	xəki	xək	əki	eki	
		脳	owo	ob	ogu		
085	əm	薬	əm	əm	əmə	em	em
086	əməl ~ əmən	前, 南	əməl	əml	əmunə	emun·e	ömön
087	əmgəN	女, 妻	əmwun	əmgun	əmguŋ	eme—	
088	ən	これ, この	ənə	ən'	ənə	ene	en
089	ən udər	今日	ənə udur	ənudr ~ ən' udr	ənə uduru	ene edür	önöödör
090	əNd	ここ	ənd	ənd	əndə	ende	end
091	ər	(立派な)男	ər	ər	ərə	er·e	er
092	ərčuu	胸(上半身)	ərčuu	ərču	ərčuu	ebčigüü	öbčüü
093	ərgəN	男, 夫	ərwun	ərgun	ərguŋ	ere—	
094	əriN	季節	ərin	ərn	əriŋ	Ma. erin	
095	ərt	朝;朝早い	ərd	ərt	ərtə	erte	ert
096	əud	扉, 門	əud	əud	əudə	egüde	üüd
	əug → wəəg						
097	əul[1]	雲	əulən	əuln	əuləŋ	egüle	üül
098	əul[2]	冬	uwul	ugul	ugulu	ebül	öböl
099	əuləN	曇っている	əulən	əuln	əuləŋ	egüle	üül
100	əur	病気	əur	əwr	əurə	*ebed	
101	əus	草	əus	əus	əusu	ebesü	öbs
102	gag	豚, (十二支の)亥	gag	gag	gagə	ɢaqai	gaxȧȧ
103	gaǰir	地, ところ	gaǰir	gaǰr	gaǰirə	ɢaǰar	gaǰir
104	gal	火	gali	gal	gali	ɢal	gal
105	gar	手	gari	gȧr ~ gar	gari	ɢar	gar
106	gar-	出る, 上る, (日が)昇る	gar-	gar-	garə-	ɢar-	gar-
107	gəl-	言う	əl-	xəl-, əl-	gələ-	kele-	xel-
108	gər	家	gəri	gər	gəri	ger	ger
109	goč	30	goč	goč	goči	ɢuči	guč
110	gočoor	長靴	gočoor	gočor ~ gočr		ɢutul	gutal
111	gol	(中規模の)川	N. gol	gol	golu	ɢoul	gol
112	gorəb	3	guarab	guarb	gwarəbə	ɢurba	gurab
113	gurəN	国	gurun	gurn	guruŋ	Ma. gurun	
114	guu	ガラス	guu	guu	guu	Ma. gu	
115	gyaa	街	giaa	giaa	gyaa	Ma. giyai < Ch. 街	
116	id-	食べる	id-	id-	idə-	ide-	id-
117	idəə ǰak	食べ物	idəə	idə	P. iдєє	idege	idee
118	idəš	保存食	idəš	idš	idiši	idesi	ideš
119	ig	大きい	xig	šig	igə	yeke	ix
120	ilgaa	花	ilgaa	ilga	ilgaa	Ma. ilha	
121	ir	90	yər	yir	yurə	yere	ir
122	is	9	is	yis	yusu	yisü	is
123	ǰak	もの	ǰak	ǰak	ǰaxə	Ma. ǰaka	
124	ǰaN	借金	ǰan	ǰan		Ch. 賬	
125	ǰar	60	ǰar	ǰar	ǰarə	ǰira	ǰïr
126	ǰaus	魚	ǰaus	ǰags	ǰagusu	ǰiɢasu	ǰagas

127	ǰəəǰəə	お姉さん		ǰiəǰiə	ǰəəǰəə	Ch. 姐姐	
128	ǰigaa	お金	ǰigaa	ǰiga	ǰigaa	Ma. ǰiha	
129	ǰiguur	翼				ǰigür	
130	ǰoo	100	ǰau	ǰau	ǰau	ǰaɢu	ǰuu
131	ǰorgaa	6	ǰirwoo	ǰirgo	ǰirgoo	ǰirɢuɢ·a	ǰurgaa
132	ǰurəg	心臓	ǰurwu	ǰurg	ǰurugu	ǰirüke	ǰürx
133	ǰus	色, 顔つき	ǰus	ǰus	ǰusu	ǰisü	ǰüs
134	ǰuuN	左, 東	(solwoi)	(solgi)	ǰuŋ	ǰigün	ǰüüŋ
135	kakraa	鶏, (十二支の)酉	kakraa	xakra	xaxraa		
136	kartəs	板〔古〕→ muubas	kartas	xarts	xartəsu	qabtasu	gabtas
137	kasoo	鉄	kasoo	xaso	xasoo	Kt. xašuu? (LS)	
138	kataa	塩	kataa	xata ~ kata	xataa		
139	kaučiN	古い	kaučin	xaučn	xaučiŋ	qaɢučin	xuučiŋ
140	kəčig	一昨日	kəčig	kəčg	kəčigu		
141	kəiN	風	xəin	xiin ~ xəin	kəiŋ ~ xəiŋ	kei	xii
142	kəǰəə	いつ	xəǰəə	kəǰə	kəǰəə	keǰiy·e	xeǰee
143	kəl	舌, 言葉	xəli	kəl	kəli	kele	xel
144	kəN	誰	xən	kən	kəŋ	ken	xeŋ
145	kər	どのように	xər	kər	P. кєрдєє	ker	xer
146	kərgəN	文字	xərgən	xərgn	kərəguŋ	Ma. hergen	
147	kərǰəə	畑	kərǰəə	kərǰə			
148	kəuk	息子, 男の子	kəku	kəkv	kəukə	keüken	xüüxeŋ
149	kəukər	子供	kəkur	kəkur	kəukuru	keüked	xüüxed
150	kii-	する	xii-	kii-	kii-	ki-	xii-
151	kimč	爪	kimč	kimč	kimči	kimusu	xums
152	kuitəN	冷たい, 寒い	kuitun	kùùtn	kuitəŋ	küiten	xiiteŋ
153	kuk	青い;青	kuku	kuk	kuku	köke	göx
154	kul	足	kuli	kul	kuli	köl	xöl
155	kuls	汗	xuls	xuns	kulsu	kölüsü	xöls
156	kurt	車輪	kurd	kurs	kurdə	kürdü	xürd
157	kuu	人	xuu	kuu	kuu	kümün	xüŋ
158	kwəəs	膨らんだもの	xuəs	kuəs	kwəəsu ~ wəəsu	kögesü	xöös
159	larč	葉	larč	larč	larči	nabči	nȧbč
160	məə	お母さん	məə	məə		Ch. 媽?	
161	məəməə	(相手の)お母さん	məəməə	məəmə	məəməə	Ch. 媽媽?	
162	məis	氷	məis	miis	məisu	mö(l)sü	mös
163	mod	木	mood	mood	moodə	modu	mod
164	mog	蛇, (十二支の)巳	mowo	mog	mogai	moɢai	mogȯȯ
165	moňoo	猿, (十二支の)申	monio	monio	monyoo	Ma. monio	
166	moNgəl	モンゴル	mongol	mongl		mongɢul	moŋgol
167	moo	悪い	moo	moo	moo	maɢu	muu
168	mȯr	馬, (十二支の)午	mori	mȯr	mori	mori	mȯr
169	mudər	竜, (十二支の)辰	mudur	mudur	P. мудур	Ma. muduri	
170	muNg	銀	mungu ~ mengu	mung	muŋgu	mönggü	möŋg
171	muubas	板				Ch. 木板	
172	myag	肉	miag	miag	myagə	miq·a	max
173	myaNg	1000	mianga	miang	myaŋgə	mingɢ·a	mïŋg

174	naaǰil yəəyəə	外祖父	naaǰil yəəyəə	(naaǰli utač)	P. нааɥ′іл′		
175	naim	8	naim	nȧȧm	naimə	naima	nȧȧm
176	naǰir	夏	naǰir	naǰr	naǰirə	MMo. naǰir (BY)	
177	namər	秋	namar	namr	namərə	namur	namar
178	nar	太陽	nar	nar	narə	nara	nar
179	nasəN	緑色の;緑	nasan		nasuŋ	nasun	
180	nay	80	nay	nay	nayi	naya	nay
181	nəg	1	nək	nək	nəkə	nige	neg
182	nog	犬,(十二支の)戌	nowu	nog	nogu	noqai	noxȯȯ
183	noir	眠り	noir	niər	noyiru	noyir	nȯȯr
184	nooN	男の子	noon	noon	nooŋ	nuɢun	
185	nooN dəu	弟					
186	noroo	背中	niroo	niro	P. н′іроо	niruɢu	nuruu
187	nugwaa ~ nogwaa	野菜	nuwaa	nuga	nugwaa	noɢuɢ·a	nogoo
188	nugwaaN	緑色の				noɢuɢan	nogooŋ
189	nuxər	配偶者	nuwur	nugur	nuxuru	nökür	nöxör
190	ňadəm	顔, 顔面	niadam	niadm ~ nȧdm	nyadəmə		
191	ňakəN	漢	niakan	niakn		Ma. nikan < Ch. 你漢	
192	ňakəN kərgəN	漢字	(niakan bitəg)				
193	ňid	目	nid	nid	nidə	nidü	nüd
194	ňid-ii guu	眼鏡	nidəi guu	nidi guu			
195	ňolməs	涙	niombos	nioms	nyombusə	nilmusu	nȯlmos
196	ňos	鼻水	nios	nios	nyosə	nisu	nus
197	od	星	xod	xod	odə	odu	od
198	oir ~ wair	近い	wair	wȧȧr	wairə(xəŋ)	oyir·a	ȯȯr
199	oǰoor	根源, 源	xoǰoor	xoǰor	oǰoorə	MMo. huǰa'ur (YM)	
200	olaaN	赤い;赤	xulaan	xulan	ulaaŋ	ulaɢan	ulaaŋ
201	olər	人々	olor	olr ~ oll	P. олор	ulus	uls
202	oNbəl	孫	omol	oml	omələ	Ma. omolo	
203	oNč	ナイフ	onč	onč	onči	MMo. onuči (YM)	
204	oo-	飲む	oo-	woo-	oo-	uuɢu-	uu-
205	ooN	(暦の)年	xoon	xoon	ooŋ	on	oŋ
206	orȧȧ[1]	夕方, 晩, 夜	oriə	oriə	oryəi	orui	ȯrȯȯ
207	orȧȧ[2]	頂上	xor	xor	oru	orui	ȯrȯȯ
208	orool	唇	xorol	xorl	orulə	uruɢul	uruul
209	ort	長い	ort	ort	ortə	urtu	urt
210	os	水	os	os	osu	usu	us
211	otaa	煙	(xoni)		utaa	utuɢ·a	utaa
212	saikəN	きれいな, 良い	saikan	sȧȧkn	saixəŋ	sayiqan	sȧȧxaŋ
213	sanaa	思い, 気持ち	sanaa	sana	sanaa	sanaɢ·a	sanaa
214	sanaa-tii	…したい			sanaatyəi	—-tai	—-tȧȧ
215	sar	(天体の)月,	saruul	sarol	saruulu	saraɢul	saruul
		(暦の)月	sar	sar	sarə	sar·a	sar
216	sarp	箸	sarp	sarp	P. сарпа	sabq·a	sabx
217	sȧȧN	良い	sain	sȧȧn	saiŋ	sayin	sȧȧŋ
218	sȧb	靴	sabi	sȧb	sabi	Ma. sabu	

219	səul	尻尾	səuli	səul	səulə	segül	süül
220	soo-	座る	sau-	soo-	soo-	saɢu-	suu-
221	sorəb	杖	sorbi	sȯrb	P. copwi	MMo. sorbi (HY)	
222	sorəgč	学生	(šiəbi)	sorgč	sorəgči	surugči	suragč
223	suk	斧	suwu	sug		süke	süx
224	sun	夜中	suni	sun’	suni	söni	sön ~ šön
225	šadəl	力，能力	šadal	šadl	šadələ	čidal	šadal
226	šar[1]	黄色い；黄色	šar	šiar	šarə	sir·a	šar
227	šar[2]	顔色，顔つき	šar	šar	šarə	čirai	čȧrȧȧ
228	šar-ii ǰus	顔色	šarəi ǰus				
229	šaur	泥	šaur	šawr	P. шawap	sibar	šabar
230	šȧb	学生〔古〕→ sorəgč	šiəbi	šiȧb		Ma. šabi	šȧb
231	šid	歯	šid	šid	šidə	sidü	šüd
232	šii	（二人称親称主格）	šii	šii	šii	či	čii
233	šiNkəN	新しい	šinkən	šinkn	šiŋkəŋ	sineken	šinxeŋ
234	šuətaN	学校	N. šuətang ~ šuitan	(taškv, sorgol)	šuitaaŋ	Ch. 学堂	
235	šutkər ~ šurkəl	鬼	šurkul	šutkur		čidkür	ǰötxör
236	taa	（二人称尊称主格）	taa	taa	taa	ta	taa
237	taab	5	taawu	taaw	taawu	tabu	tab
238	taitii	祖母	taitii	taiti	taitii	Ch. 太太	
239	tasəg	虎，（十二支の）寅	tasag	(bar)	P. тасах ~ тасха	Ma. tasha	
240	tauly	兎，（十二支の）卯	tauli	taul	taulyəi	taulai	tuulȧȧ
241	tȧb	50	tabi	tȧb	tabi	tabi	tȧb
242	təNd	そこ	tənd	tənd	təndə	tende	tend
243	təNgər	天	təngər	təngr	təŋgiri	tngri	teŋger
244	təNgər daul-	雷が鳴る	daul-	(xondl dood-)	(təŋgiri doogərə-)	daɢul-	duul-
245	tər	それ	tər	tər	tərə	tere	ter
246	tərəg	車	tərəg	tərg	tərəgə	terge	tereg
247	tərguul	道	tərwul	tərgul	tərguulu	MMo. terge’ür (YM)	
248	tii	そのように	tii	tii		teyin	tiim
249	tiimər	そのような	tiimər	tiimr	tiimərə ~ tiimu	teyimü	tiim
250	tikkəs	釘	tibkəəs	tiwkəs ~ tibks	P. тібкєєс	So. tibkesün ~ tikkesün	
251	torč	ボタン	torč	torč		tobči	dobč
252	tos[1]	油	tos	tos	tosə	tosu	dos
253	tos[2] ~ twas	効果，ためになるもの	tuas	tuas	cf. twasələ-	tusa	dus
254	tos-	当たる	tos-	tos-		tus-	dus-
255	tum	10000	tum	tum	tumu	tüme	töm
256	twaarəl	埃	tuaaral	tuaarl	twaarələ	toruɢ	
257	učkəN	小さい	uškən ~ učiikən	ičkn ~ ičikn	učiikəŋ	öčügüken	
258	učkər	子供	učiikər ~ uškər	ičkr	učiikuru	öčügüked	
259	udər	日，昼	udur	udr	uduru	edür	ödör
260	udəs	羽	xudus	xuts	udusu	ödü—	öd

261	udiš	昨日	udiš	udš	udiši (uduru)	üdesi	üdeš
262	ug-	死ぬ	uwu-	ug-	ugu-	ükü-	üx-
263	ugiN	娘, 女の子	ugin ~ uyin	ugun	ugiŋ	ökin	
264	ugiN dəu	妹	ugin dəu	ugun dəu	ugiŋ dou		
265	ugir	娘(PL)			ugiru	ökid	
266	ukər	牛, (十二支の)丑	xukur	xukr	ukuru	üker	üxer
267	ul	(否定の前置小詞)	ul	ul	P. ул	ülü	
268	uňəə	乳牛	uniə	uniə	unyəi	üniy·e	ünyee
269	uNdəg	卵	ənduwu	undg	əndugu	öndege	öndög
270	uNdəs	根	undus	unts	undusu	ündüsü	ündes
271	ur[1]	種	xur	xur	uru	ür·e	ür
272	ur[2]	借金	ur	ur		öri	ör
273	us	毛	xus	xus	usu	üsü	üs
274	usəg	文字, 言葉	usuwu	usg ~ xusg	usugu	üsüg	üseg
275	waa-	洗う	waa-	uga-	uwaa-	uɢa-	ugaa-
276	wakər	短い	xuakar	xuakr	waxərə	oqur	oxor
277	wal	底	wal	wal	P. woaлa	ula	ul
278	wan-	落ちる, (日が)沈む	wana-	wan'-	wanə-	una-	un-
279	waNt-	眠る, 寝る	want-	want-	wantə-	unta-	unt-
280	war-	入る	war-	war-	warə-	oru-	or-
281	warkəl	服	warkal	warkl	warxələ		
282	wəəg ~ əug	脂肪	əuwu	əug	əugə	ögekü	öox
283	wəi	関節	wəy	uy	P. wɛjɛ	üy·e	üy
284	wəil	労働	wəil	wəil	uilə	üile	üil
285	xaan	どこ	xaana	xaan'	xaanə	qamiɢ·a	xaa
286	xalooN	熱い, 暑い	xaluun	xalun	xalooŋ	qalaɢun	xaluuŋ
287	xamər	鼻	xamar	xamr	xamurə	qamar	xamar
288	xar	黒い;黒	xar	xar	xarə	qar·a	xar
289	xaur	春	xaur	xawr	xaurə	qabur	xabar
290	xoir	2	xoir	xoyr	xojirə	qoyar	xoyir
291	xol	遠い	xol	xol	xolə	qola	xol
292	xool	喉	xooli	xȯȯl	xooli	qoɢulai	xoolȧȧ
293	xorəg[1]	虫	xorwo	xorg	xorugu	qoruqai	gorxȯȯ
294	xorəg[2]	(小さい)川	xuarag	xȧrg	P. rop'кi	ɢoruq·a ~ ɢoriq·a	
295	xot ~ kot ~ kotəN	街, 都市	koton	xotn	xotuŋ	qotu	got
296	xȯn	羊, (十二支の)未	xoni	xȯn'	xoni	qoni	xȯn
297	xȯr	20	xori	xȯr	xori	qori	xȯr
298	xwain	後ろ, 北	xuaina	xuain'	xwainə	qoyin·a	xȯȯn
299	xwar	雨	xuar	xuar	xwarə	qur·a	
300	xwəəçəə	電車, 鉄道	xoočəə	xoočo		Ch. 火車	
301	yamər	どのような, 何の	yamar		yamərə	yamar	yamar
302	yamaa ~ imaa	山羊	imaa	(nima)		imaɢ·a	yamaa
303	yas	骨	yas	yas	yasə	yasu	yas
304	yau-	行く, 歩く	yau-	yaw-	yau-	yabu-	yab-
305	yəə	(疑問の文末助詞)	yəə	yə		(y)uu[2]	(y)uu[2]
306	yəəyəə	(父方の)祖父	yəəyəə	yəəyə	yəəyəə	Ch. 爺爺	
307	yoo	何	yoo	yuo	yoo	yaɢu	yuu

略号

〈言語・方言〉

Bu.　ダグール語ブトハ方言
Ca.　モンゴル語チャハル方言
Ch.　漢語
Ci.　ダグール語チチハル方言
Da.　ダグール語
Ha.　ダグール語ハイラル方言
Kt.　契丹語
Ma.　満洲文語
MMo.　中世モンゴル語
N.　那顺达来 [编著]（2001）のブトハ方言
P.　Поппе (1930) のハイラル方言
So.　ソロン＝エウェンキー語
WMo.　モンゴル文語

〈文献〉

BY　「北虜訳語」（『登壇必究』所収）
DY　「韃靼館訳語」（『華夷訳語』（丙種本）所収）
HY　『華夷訳語』（甲種本）
LS　『遼史』
YM　『元朝秘史』

参考文献

〈中文〉

《达斡尔族简史》编写组（1986）《达斡尔族简史》呼和浩特：内蒙古人民出版社.

丁石庆（1994）《达斡尔语方言成因试析》《齐齐哈尔师范学院学报》1994 年第 3 期, 73–76, 82.

————（1995a）《新疆达斡尔语语音及其特点》《语言与翻译》1995 年第 1 期, 61–68.

————（1995b）《新疆达斡尔语简述》《语言研究》1995 年第 1 期, 188–195.

————（2006）《双语族群语言文化的调适与重构——达斡尔族个案研究》北京：中央民族大学出版社.

————（2008）《达斡尔语简志 方言》《中国少数民族语言简志丛书 第 6 卷（修订本）》pp. 301–313（仲 1982 的增补部分）.

恩和巴图（1996）《19 世纪达斡尔人使用的文字》《内蒙古大学学报（哲学社会科学版）》1996 年第 6 期，82–87.

恩和巴图 [编]（1983）《达汉小词典》呼和浩特：内蒙古人民出版社（载《达斡尔资料集 6》（《达斡尔资料集》编辑委员会 [编]，北京：民族出版社，2005 年））.

恩和巴图 [编著]、新特克 [校阅]（1988）《达斡尔语和蒙古语》（蒙古语族语言方言研究丛书 004）呼和浩特：内蒙古人民出版社（Engkebatu [nayiraɢulun ǰokiyaba], Sinedke [kinan üǰebe] (1988) *Daɢur kele ba monɢɢul kele* (Monɢɢul törül-ün kele ayalɢun-u sudulul-un čuburil 004). Köke-qota: Öbür monɢɢul-un arad-un keblel-ün qoriy·a.）.

恩和巴图 [等编]（1984）《达斡尔语词汇》（蒙古语族语言方言研究丛书 005）呼和浩特：内蒙古人民出版社（Engkebatu [nar nayiraɢulba] (1984) *Daɢur kelen-ü üges* (Monɢɢul törül-ün kele ayalɢun-u sudulul-un čuburil 005). Köke-qota: Öbür monɢɢul-un arad-un keblel-ün qoriy·a.）（载《达斡尔资料集 4》（《达斡尔资料集》编辑委员会[编]，北京：民族出版社，2003 年））.

胡和 [编]（1989）《达斡尔语汉语对照词汇》齐齐哈尔：黑龙江省民族研究所、黑龙江省达斡尔学会（载《达斡尔资料集 6》）.

贾敬颜、朱风 [合辑]（1990）《蒙古译语女真译语汇编》天津：天津古籍出版社.

开英 [编]（1982）《达斡尔、哈萨克、汉语对照词典》乌鲁木齐：新疆人民出版社（载《达斡尔资料集 6》）.

那顺达来 [编著]（2001）《汉达词典》呼和浩特：内蒙古大学出版社（载《达斡尔资料集 6》）.

孙竹（1985）《察哈尔方音研究》《蒙古语文集》（西宁：青海人民出版社）pp. 34–321.

喻世长（1983）《论蒙古语族的形成和发展》北京：民族出版社.

仲素纯 [编著]（1982）《达斡尔语简志》（中国少数民族语言简志丛书）北京：民族出版社（2008 年修订，《中国少数民族语言简志丛书 第 6 卷（修订本）》（国家民委《民族问题五种丛书》之四）（孙宏开 [主编]、《中国少数民族语言简志丛书》修订本编委会[编著]，北京：民族出版社）pp. 247–320）.

〈英文〉

Martin, Samuel E. (1961) *Dagur Mongolian Grammar, Texts, and Lexicon: Based on the Speech of Peter Onon* (Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series Vol. 4). Bloomington: Indiana University. (Reprinted by Richmond: Curzon, 1997)

Poppe, Nicholas. (1955[1] 1987[2]) *Introduction to Mongolian Comparative Studies* (Suomalais-ugrilaisen Seuran Toimituksia 110). Helsinki: Suomalais-ugrilainen Seura.

Rybatzki, Volker. (2003) “Intra-Mongolic Taxonomy”. *The Mongolic Languages* (Routledge Language Family Series 5). Juha Janhunen, ed. London; New York: Routledge. pp. 364–390.

Tsumagari, Toshiro. (2003) “Dagur”. *The Mongolic Languages*. pp. 129–153.

〈独文〉

Poppe, Nikolaus. (1934) “Über die Sprache der Daguren”. *Asia Major* 10. 1–32, 183–220.

————. (1964) “Die dagurische Sprache”. *Mongolistik* (Handbuch der Orientalistik 1. Abt., V. Bd., 2. Abs.). mit Beiträgen von Nikolaus Poppe, et al. Leiden; Köln: E. J. Brill. S. 137–142.

〈和文〉

角道正佳（1987）「ダグール語南屯方言の特徴」『大阪外国語大学学報』74–1/2, 1–18.

栗林均（1981）「「*i の折れ」考――蒙古語における*i 音の発展の規則性と不規則性――」『モンゴル研究』12, 32–49.

――――（1989a）「ダグル語」『言語学大辞典 第 2 巻 世界言語編（中）』（亀井孝・河野六郎・千野栄一[編]，三省堂）pp. 597–603.

――――（1989b）「内蒙古語」『言語学大辞典 第 2 巻 世界言語編（中）』pp. 1427–1434.

――――（1993）「音声変化の規則性とその例外　――ダグル語における円唇母音の「折れ」――」『日本大学人文科学研究所研究紀要』45, 37–63.

栗林均 [編著]（2003）『『華夷訳語』（甲種本）モンゴル語全単語・語尾索引』（東北アジア研究センター叢書　第 10 号）東北大学東北アジア研究センター.

――――（2009）『『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』（東北アジア研究センター叢書　第 33 号）東北大学東北アジア研究センター.

塩谷茂樹（1990）「ダグール語ハイラル方言の口語資料　ーーテキストと註釈ーー」『日本モンゴル学会紀要』21, 47–95.

津曲敏郎（1985）「ダグール語ハイラル方言の音韻体系」『北方文化研究』17, 227–240.

――――（1986）「ダグール語ハイラル方言基礎語彙」『モンゴル研究』17, 2–38.

野村正良（1960）「蒙古語音韻史から観たハラチン方言とダグール方言との並行性に就いて」『名古屋大学文学部研究論集』22, 1–16.

〈蒙文〉

Namcarai & Qaserdeni. (1983) *Daɢur kele monɢul kelen-ü qaričaɢulun*. Köke-qota: Öbür monɢul-un arad-un keblel-ün qoriy·a.（拿木四来、哈斯额尔敦（1983）《达斡尔语与蒙古语比较》呼和浩特：内蒙古人民出版社）.

〈露文〉

Поппе, Н. Н. (1930) «Дагурское наречие» (Материалы Комиссии по исследованию Монгольской и Танну-Тувинской народных республик и Бурят-Монгольской АССР, в. 6) Ленинград: Изд-во АН СССР.

Тодаева, Б. Х. (1960) «Монгольские языки и диалекты китая» (Языки Зарубежного востока и Африки) Москва: Изд-во восточной литературы.

――――. (1986) «Дагурский язык» Москва: Наука.

ムラブリ語の音声的バリエーションについての予備的調査

伊藤雄馬

1　はじめに

ムラブリ語 (Mlabri: オーストロアジア語族 Austroasiatic、モン・クメール諸語 Mon-Khmer languages、クム語派 Khmuic) は、音声的バリエーション (以下「変異」) が大きいという調査報告が先行研究によってなされてきた (Egerod & Rischel 1987, Tongkum 1992, Rischel 1995)。しかし、その変異を中心に扱った研究はまだ存在しない。本稿はムラブリ語の変異を体系的に調査するための予備調査として、先行研究において変異が見られるとされた語彙を数十語集め、4 名にそれぞれ聞き取り調査を行った。本稿はその調査結果であり、得られたムラブリ語の変異を部分的に記述し、それについて若干の考察を加える。

なお、本稿で用いられる「変異」という用語は、「ある同一の言語共同体に属する成員らによって発音されうる、ある単語の音声形式ら」と定義する。ただし、音声学的に言えば、同じ話者の同じ単語の発音においてでさえ、全く同じ発音は 2 度とない。よって、それら全ての音声を「変異」とすることもこの定義においては可能であるが、本稿では音韻論的に有意義であると予想されるものに限定して「変異」という用語を用いることとする。

2　社会言語学的情報

2.1　方言、話者数

Rischel (2007: 26) はムラブリ語を A 方言、B 方言、C 方言に分けている。この分類は主に語彙の違いによって分類されている。いくつかの基礎語彙が形式を全く異にすること、また語彙によって共有される方言が異なる点で特徴的である。表 **1** は Rischel (2004: Fig. 1) からの例である。

表 1：**方言間の語彙の差** (Rischel 2004: Fig. 1 **より筆者作成**)

<table>
<tr><th>意味</th><th>A 方言</th><th>B 方言</th><th>C 方言</th></tr>
<tr><td>“to bathe”</td><td>tʰa.lɛːw</td><td colspan="2">ʔɯm</td></tr>
<tr><td>“to return home”</td><td colspan="2">wʌl</td><td>mɯː</td></tr>
<tr><td>“to speak”</td><td>tʌɲ</td><td>glaːʔ</td><td>tʌɲ</td></tr>
<tr><td>“to come”</td><td colspan="3">leh</td></tr>
</table>

この分類に従うならば、A 方言と B 方言を話す人々はタイ北部のナーン県 (Nan) とプレー県 (Phrae) に住み、Sakkarin (forthcoming) によれば、2010 年の段階で、A 方言話者は 351 人、

B 方言話者は 5 名である。C 方言を話す人々はラオスのサヤブリ県 (Sayaburi) に住んでおり、Chazée (2001: 9) [1] によれば、2000 年の段階で 22 名である。なお、本稿で扱うのは A 方言の特にフアイ・ユアク村 (Huai Yuak) に住む人々の方言である (図 1)。

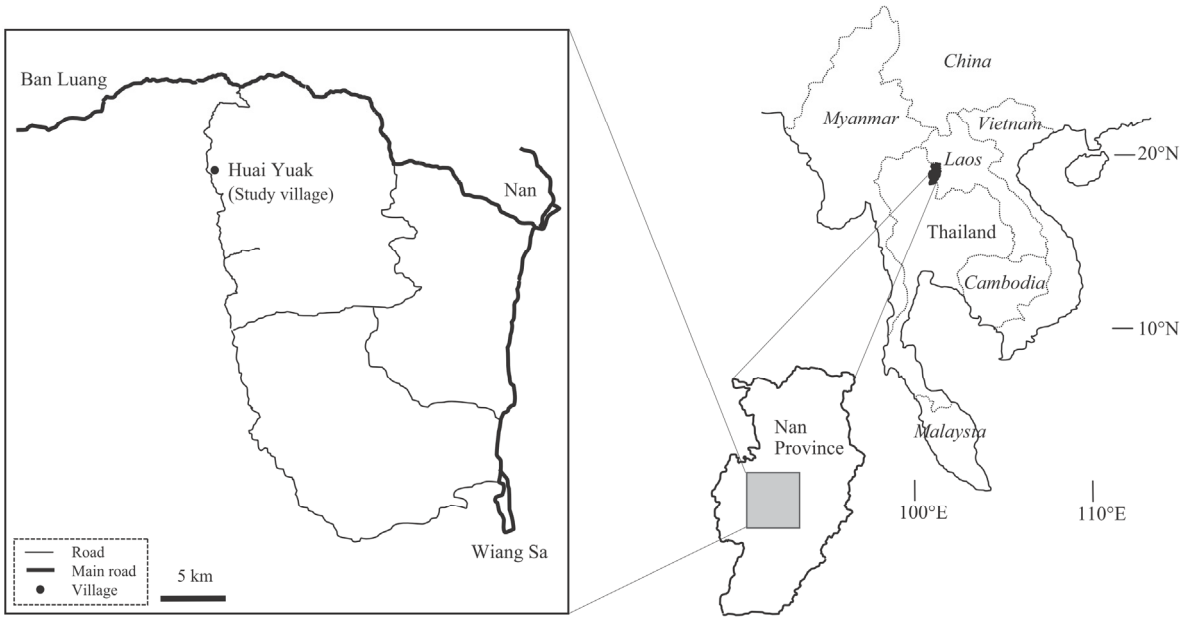


図 1：**調査地　フアイ・ユアク村** (Ikeya et al. 2009: 248)

2.2　生活の変化と言語使用実態

複数の家族から構成されるバンド (band) を組み、森の中で移動生活を行うのがムラブリの伝統的な生活様式である。狩猟採集を生業とし、精霊信仰によって農耕は禁忌とされていた (Trier 2009)。20 世紀中頃から、森林の開発などにより森での生活が続けられなくなると、フモンの畑を手伝う日雇い労働や、観光業者から雇われて観光の対象となり、森での生活を観光客に披露するなどして生計を立てるようになった (Sakkarin 2009)。

現在タイに住む A 方言の話者は、村を作って定住するようになり、これまで通りフモンの人々から仕事を請け負うか、また政府の出先機関である県の開発センターからの仕事を請け負って生活している (坂本 2011)。

筆者の観察によれば、ムラブリの間ではムラブリ語を使うことがほとんどである。家庭内ではムラブリ語のみが用いられ、子供もムラブリ語を母語として習得しており、ムラブリ語を話せない子供は見られない。フアイ・ユアク村には幼児委託施設が併設されており、そこにはタイ人の保育士が常駐し、幼児に対して中央タイ語 (Central Thai) による教育が行

---

[1] 題名には *The Mrabri in Laos* とあり、*Mlabri* の *l* が *r* になっている。この表記は Kraisri (1963) にも見られる。Rischel (1989: 53) は、データの比較から *Mlabri* と *Mrabri* は同じ言語であるとしている。Kraisri (1963: 181) 自身の記述から、彼が音声学の訓練を受けていないことが伺われるため、*r* が聞き間違いである可能性が高い。Chazée (2001) は言語学者ではなく、これも聞き間違いか、引用したものが間違っている可能性が考えられる。

われている。また、村には日常的に多くのタイ人やフモンの人々が訪れ、その会話では主に北タイ語 (Northern Thai) が用いられている。

さらに、村にはテレビやラジオが村の中には数台設置されてあり、放送では中央タイ語が使用されている。そのため、ムラブリの人々、特に若年層における中央タイ語、北タイ語の運用能力は年々高くなっている。

3　前提知識

本節では、本稿の議論に必要となるムラブリ語の音韻論と、先行研究を提示する。

3.1　音素目録

以下の表 2–4 に、Rischel (1995) の音素目録を示す[2]。

表 2：**頭子音音素** (Rischel: 1995、**一部筆者改変**[3])

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p, pʰ, b, ˀb [ˀb~ɓ]	t, tʰ, d, ˀd [ˀd~ɗ]	c, cʰ [t͡ɕ~ʃ~s], ɟ [d͡ʑ]	k, kʰ, g	ʔ
摩擦音					h
鼻音	m, ʰm [m̥͡m]	n, ʰn [n̥͡n]	ɲ, ʰɲ [ɲ̥͡ɲ]	ŋ, ʰŋ [ŋ̥͡ŋ]	
流音		r, ʰr [r̥͡r], l, ʰl [l̥͡l]			
わたり音	w, ʰw [w̥͡w], ˀw		j, ˀj		

表 3：**末子音音素** (Rischel: 1995、**一部筆者改変**)

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p [pˀ]	t [tˀ]	c [cˀ]	k [kˀ]	ʔ [ʔˀ]
摩擦音					h
鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
流音		r, rʰ [r̥͡r], l, lʰ [l̥͡l]			
わたり音	w		j, jʰ		

[2] Rischel (1995) は B 方言を中心に扱っており、A 方言を対象にする本稿と比較する場合は注意が必要である。ただ、Rischel (1995: 63) では音韻体系のうち、分節音については、両方言とも同じ体系を想定している。実際に A 方言を扱う Egerod & Rischel (1987) 、Tongkum (1992) も、Rischel (1995) とほぼ同じ体系を提示している。よって本稿では方言間の差は無視して扱う。

[3] Rischel (1995) では、有気音を /ph/ 等 (本稿では /pʰ/)、前声門化音 (pre-glottalized consonant) を /ʔb/ 等 (/ˀb/)、無声の鼻音・流音・わたり音を /hm/ (/ʰm/)、/hr/ (/ʰr/)、/lh/ (/lʰ/)、/jh/ (/jʰ/) と表記する。これらは Rischel (1995) ではいずれも単一の音素として扱われているが、分節音の連続に誤解される恐れがあると考え、表記を改めた。母音に関しては、鼻音の前にのみに現れ、舌の高さが /i/ と /e/ の間に位置する母音音素 /ɪ/ を立てているが、以降の Rischel のムラブリ語に関する論文に /ɪ/ を用いた記述が見られないため、目録から除いてある。また、長母音は /aa/ (/aː/) で記されている。

表 4：**母音音素** (Rischel: 1995、**一部筆者改変**)

	前舌	後舌・非円唇	後舌・円唇
狭	i / iː	ɯ / ɯː	u / uː
半狭	e / eː	ɤ / ɤː	o / oː
半広	ɛ / ɛː	ʌ / ʌː	ɔ / ɔː
広	a / aː		

3.2　音節構造

ムラブリ語の音節構造は、頭子音と母音は義務的であり、2 子音連続まで許される。よって、C(C)V(C)のように模式化できる。ただし、CCV は観察されない。以下に筆者の A 方言の調査データから具体例を表 5 に示す。

表 5：**音節の具体例** (**筆者データ**)

C	(C)	V	(C)	具体例
C		V		/ʔjaː/ “medicine”
C		V	C	/mat/ “eye”
C	C	V	C	/mlaʔ/ “human”

筆者のデータから、頭子音において観察される子音連続を表 6 に示す。

表 6：**子音連続** (**筆者データ**)

	b-	p-	p^h-	t-	t^h-	d-	c-	c^h-	k-	g-	m-
-r-	br-	pr-	p^hr-	tr-	t^hr-	dr-	cr-	c^hr-	kr-	gr-	
-l-	bl-	pl-	p^hl-						kl-	gl-	ml-

ムラブリ語の形態素は、筆者の調査の範囲内では 1 音節語と 1.5 音節語 (sesquisyllabic word) がその大部分を占める。1.5 音節語とは Matisoff (1973: 86) によって作られた形態音韻論的単位を指す用語で、‘a “sesquisyllabic” structure, with morphemes that were “a syllable and a half” in length’ と定義されている。

1.5 音節以上の形態素は、全て弱強格 (iambic) の韻脚パターンを示し、常に語の最終音節に強勢が置かれる。本稿では、強勢のある音節を「主音節」(main syllable) とし、強勢のない音節において軽音節のものを「副音節」(minor syllable) 、重音節のものを「無強勢音節」と呼び表す。そして、副音節と主音節の組み合わせからなる形態素を 1.5 音節語 (a) とし、無強勢音節と主音節の組み合わせからなる形態素を 2 音節語 (b) と本稿では定義する。

(a) [ca.ˈbut˺] “pig”
(b) [doc˺.ˈpan] “rainbow”

副音節には音節核が母音 (c) 、流音 (d, e) 、鼻音 (f) の場合がある。以下より、母音が音節核の副音節を「開-副音節」、子音が音節核の副音節を「閉-副音節」と呼び表す。

(c) pa.bɯl “to kill”
(d) kl.kil “knee”
(e) kr.pʰɛp “butterfly”
(f) bn.ʰnɛʔ “girl” 以上 Egerod & Rischel (1987) より引用

筆者自身の調査データの範囲で観察された閉-副音節を表 7 に示す。なお、成節的な鼻音は常に主音節の頭子音と調音点を同じにすることから、同器官的な鼻音 (N) と分析する。また、開-副音節の母音はその音価が不安定であるので、表 7 では V で表す。具体例は紙幅の関係上省略する。

表 7 : 副音節の種類 (筆者データ)

	b-	p-	pʰ-	t-	tʰ-	d-	c-	cʰ-	k-	g-	ʔ-	m-	r-	l-	h-
V	bV-	pV-	pʰV-	tV-	tʰV-	dV-	cV-	cʰV-	kV-	gV-	ʔV-	mV-	rV-	lV-	
N	bN-	pN-		tN-		dN-	cN-	cʰN-	kN-						hN-
r	br-	pr-	pʰr-	tr-	tʰr-	dr-		cʰr-	kr-	gr-					hr-
l		pl-							kl-						hl-

3.3 先行研究

ムラブリ語の「音声的な変異の多様さ」についての指摘は多くの先行研究に見られる (Egerod & Rischel 1987: 43、Rischel 1995: 206、Rischel 2004、Tongkum 1992: 45) が、それを分析した研究はない。その中で、Rischel (1995: 207) はムラブリ語に観察される変異を列挙し、またその変数に、「スタイル (speaking style)」と「個人差 (variation across speakers)」の 2 つが関係することを指摘している。ここで言う「スタイル」とは、「速度」や「明瞭さ」の他に、雑談であるか調査であるかといった「状況」、聞き手・話し手は誰かといった「参与者」という要素も含んでいる。

Rischel (ibid.: 209, 210) の指摘した変異をまとめ、以下に示す。

- 副音節
  副音節は強勢を持たず、その結果母音の弱化が起き、その音価が不安定である。また、副音節に現れる頭子音は有声音と無声音の間でしばしば揺れる。

- /ʌ/~/ɔ/
  /ʌ/ と /ɔ/ の間で揺れる語彙がいくつか存在する。A 方言では /ʌ/ を持つ単語が [ɔ] で発音される傾向が観察される。
- 硬口蓋音の前の /a/~/ɛ/
  硬口蓋音の前の /a/ と /ɛ/ は揺れる傾向にある (しかし、この書き方では /a/ [a~ɛ] かつ /ɛ/ [a~ɛ] という現象なのか、どちらか片方だけの現象なのか、区別できない)。
- 前声門子音
  前声門化子音 /ˀb, ˀd, ˀw, ˀj/ が、しばしばその前声門化を失うことがある。

Rischel (ibid.: 206–207) は、ムラブリ語のこのような「変異が多い」という特徴を興味深いとしながらも、それら変異を支配する変数を特定し、操作することは現時点では難しいとの判断から、調査と考察を断念している。

4　調査概要

4.1　調査目的

「音声的な変異の多様さ」がムラブリ語の特徴の一つである以上、その記述はムラブリ語研究にとって重要な位置を占める。しかし、それは先行研究においてはほとんど行われてこなかった。ムラブリ語の変異についての体系的な調査が今後の研究に必要である。

今後、体系的な調査をおこなうにあたり、どの語彙を調査項目とするべきか、また調査をする上で何に注意するべきかを明らかにすることを目的としている。

4.2　調査方法

本調査では、次の 2 つの調査をおこなった。すなわち、「スタイル」による変異を観察する調査と、「個人差」による変異を観察する調査である。

4.2.1　「スタイル」による変異の調査

1 人の協力者に限定 (つまり「個人差」という変数を固定) し、「スタイル」がどのような影響を与えるのか調査する。今回の調査では協力者 B (後述) に限定した。「スタイル」は「丁寧な発話」と「自然スピードでの発話」の 2 通りで調査した[4]。

4.2.2　「個人差」による変異の調査

「個人差」による変異への影響を調査するために、「スタイル」を一定にし、4 人の異なる協力者に語彙聞き取り調査を行った。調査環境は、協力者にはピンマイクを付けてもら

---

[4] 今回の調査では Rischel (1995) の挙げた「参与者」は反映できず、「筆者」と「協力者」の 2 人が「参与者」である状況でしか調査を行えなかった。

い、録音することを伝えたうえで、いつも通りの速さで発音するように指示した。想定した「スタイル」は「調査」という状況で、かつ「自然なスピードでの発話」である。

4.2.3　調査上の注意

どちらの調査においても共通して注意しなければならないことは、協力者 1 人ずつ行うことである。これは、2 人以上で同時に調査した場合、お互いの発音から影響を受けてしまうことが多々観察されたためである[5]。これと同様の理由で、こちらから誘導して、例えば「～と言ったが、…とも言えるか？」のような質問をすることは避けた。

加えて、変数の操作が成功しているかどうかの判断が難しいこと、また「偶然」や「言い間違い」を現段階では判断し排除することができないため、現れた全ての音声を変異として扱い記述することにする。

4.3　協力者情報

協力者はフアイ・ユアク村に住むムラブリ語の母語話者から、世代が重ならず、親族関係において直系でない 4 人を選んだ。協力者情報の概略をまず表 6 に示す。協力者の名前はイニシャルによって表す。

表 8：**協力者情報**

イニシャル	年齢	性別	学歴	結婚	母語	理解言語
P	60?	男	なし	既婚	Ml.	Hm., Tn., NT., CT.
S	40?	男	なし	既婚	Ml.	NT., CT., Hm.
B	20?	男	中学卒	未婚	Ml.	NT., CT. > Hm.
D	18	女	高校在学	未婚	Ml.	NT., CT. > Hm.

「個人差」による変異を扱う調査において、協力者情報は重要となる。よって、以下に、それぞれの協力者の情報について詳細に記す。

P：フアイ・ユアク村に住む。ムラブリの中で最も年齢が高い人物の一人である。正確な年齢は不明。既婚者であり、何人かの女性と結婚した経験を持ち[6]、子供を多く持つ。学歴はなく、タイ文字の読み書きはできない。ムラブリの文化、森の知識について最もよく知る人物の 1 人であり、これまで多くの調査に協力してきた経験を持つ。母語はムラブリ語 (Ml.) である。他に北タイ語 (NT.) を理解し操ることができるが、しばしば声調

[5] 当然の帰結として、しばしば協力者間で発音の不一致が見られる。その場合どちらの発音がより正しいとされるかは、その２人の社会的な関係に依るところが大きい。例えば、兄弟ならば兄、年上と年下ならば年上、同年齢同士であれば、より森暮らしの経験が長い方などの発音が優先される。しかし、どちらが正しいか判断がつかない場合も多い。

[6] ムラブリの人々はその生涯の内に数回配偶者を変えるのが普通である (Trier 2009: 44)。

が正確でない。中央タイ語 (CT.) も聞いて理解するが、話すことは少ない。また、フモン語 (Hm.) 、ティン (T'in) の言語 (Tn.) [7] も理解すると本人は言う。筆者はその使用を確認できていないが、P を知る人物が言うには、P はフモン語もティンの言語も流暢に話すことができるという。古くからフモンと深い関係があったという歴史的背景を考慮すると、フモン語が流暢であっても不思議はない。

S：フアイ・ユアク村に住む。正確な年齢は不明。大人になるまで森の中に暮らしていたため、森についての知識が豊富である。既婚者であり子供を持つ。学歴はなく、タイ文字については学習経験があるようだが、ほとんど読むことはできない。母語はムラブリ語である。中央タイ語、北タイ語を流暢に話し理解する。中央タイ語と北タイ語を言語として意識的に区別しており、北部のタイ人に対しては北タイ語で応じ、中央からのタイ人に対しては中央タイ語で応じる。フモン語も話し理解することができる。

B：フアイ・ユアク村に住む。12, 3 歳ほどになるまで森の中で暮らしていた。正確な年齢は不明。同年代の他のムラブリの若者と比べて、比較的長く森で生活していた。未婚である。学歴は、森から出た後、18 歳までの間に中学校卒業相当の教育を受けたため、タイ文字による読み書きが可能である。また、宣教師等からタイ文字によるムラブリ語の表記方法を習得しており、ムラブリ語を読み書きすることが可能である。母語はムラブリ語である。中央タイ語、北タイ語、フモン語が理解できる。中央タイ語と北タイ語の運用能力は P, S よりも高い。フモン語よりも中央タイ語、北タイ語の運用能力が高い。

D：フアイ・ユアク村出身であり、現役の高校生である。現在はナーン県内の高校にある学生寮に住む。フアイ・ユアク村に定住した家庭で生まれたため、森の中での生活は経験していない。未婚である。幼いころからタイ語での教育を受けており、タイ文字の読み書きができる。タイ文字を使って不完全ながらもムラブリ語を読み書きできる。母語はムラブリ語と推測されるが、現在は、村から離れて高校の寮で暮らしており、日常生活で使用するのは中央タイ語か、北タイ語が多い。ムラブリ語についての質問に答えられないこともよくある。他にもフモン語を聞いて理解するが、流暢に話すことはできない。

4.4 調査項目

本調査では、ムラブリ語とりわけ特徴的な音声変異を見せる、A）1.5 音節語 [8] 、B）母音 /ʌ/ または /ɔ/ を持つ語、C）硬口蓋子音の前に /a/ または /ɛ/ を持つ語、D）前声門化 [9]

---

[7] ティンの言語は言語学的には、マル語 (Mal) とプライ語 (Prai) に分けられる。A の言うティンの言語が厳密にどちらの言語を指すかは判断できない。

[8] 今回の調査では鼻音が音節主音の副音節を持つ 1.5 音節語は調査していない。今後の課題とする。

[9] /ʔw/の音素を持つ語彙は、筆者の調査した限りでは観察されなかった。Rischel (1995: 342) においても語彙数が 1 語と非常に少なく、音素として目録に含めるかどうか再度検討する必要がある。

(pre-glottalized) 子音を持つ語、E）先行研究において音価の広い /cʰ/ [t͡ɕ~ʃ~s] を持つ語を、同じ方言を扱っている Egerod & Rischel (1987) [10] から選び調査項目とする。

以下に調査項目の語彙を示す。

表 9：A） 1.5 音節語

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
1)	pa.bɯl	“to kill”
2)	bak.kah	“flower”
3)	ta.hoʔ	“armpit”
4)	kɤ.pʰɛp	“butterfly”
5)	kɤ.ʔuŋ	“hole”
6)	rə.map	“upland”
7)	rə.ʔɤk	“chest”
8)	kl.kil	“knee”
9)	kl.muj~kul.muj	“hair”

表 10：B）/ʌ/ または /ɔ/ を持つ語

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
10)	gʌh	“this”
11)	wʌl	“to return”
12)	ɟʌjʰ	“delicious”
13)	mɔj	“one”
14)	dɔk	“to put”
15)	kɔk	“pipe”

表 11：C）硬口蓋子音の前に /a/ または /ɛ/ を持つ語

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
16)	gajʰ	“nine”
17)	braɲ	“dog”
18)	ʔac	“bird”
19)	gɛjʰ	“crab”
20)	pɛj	“to insert”

[10] Egerod & Rischel (1987: 42) は、母音の長短による対立を認めていないが、Rischel (2007: 26) では、母音の長短は弁別的であるとし、Egerod & Rischel (1987) の分析は誤っていたことを認めている。よって、ここで引用する Egerod & Rischel (ibid.) の表記には母音の長短が反映されていない。

表 12：D）前声門化子音

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
21)	ˀbuʔ	“slow”
22)	ˀbɛk	“carry on shoulder”
23)	ˀbiʔ	“caterpillar”
24)	ˀdiŋ	“big”
25)	ˀdi	“good”
26)	ˀjaa	“medicine”
27)	ˀjɛʔ	“far”
28)	ˀjak	“shit”

表 13：E）/c^h/ を持つ語

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
29)	c^hak	“body”
30)	c^hoʔ	“spade”
31)	c^hm.bɛp	“mouth”

5　調査結果

5.1　「スタイル」による変異の調査結果

スタイルに関して、音声学的に有意義な結果が得られたのは、A）1.5 音節語のみだった。

表 14：「スタイル」：A）1.5 音節語

No	先行研究の形式	丁寧	自然スピード
1)	pa.bɯl “to kill”	[papˀ.bɯːl]	[pə.bɯːl]
2)	bak.kah “flower”	[bakˀ.kaːh]	[ba.kaːh]~[bə.kaːh]
3)	ta.hoʔ “armpit”	[ta.hoːʔˀ]~[taʔˀ.hoːʔˀ]	[to.hoːʔˀ]~[tə.hoːʔˀ]
4)	kr.p^hɛp “butterfly”	[ra.p^hɛpˀ]	[rə.p^hɛpˀ]~[r.p^hɛpˀ]
5)	kr.ʔuŋ “hole”	[kur.ʔuŋ]	[kr.ʔuŋ]
6)	rə.map “upland”	[ra.maːpˀ]~[raʔˀ.maːpˀ]	[ra.maːpˀ]~[rə.maːpˀ]
7)	rə.ʔɤk “chest”	[la.ʔɤkˀ]~[laʔˀ.ʔɤkˀ]	[la.ʔɤkː]
8)	kl.kil “knee”	[kil.kiːl]~[kɨl.kiːl]	[kl.kiːl]
9)	kl.muj “hair”	[kul.muːj]~[kɯl.muːj]	[kl.muːj]

先行研究において開-副音節の語は、「丁寧」では末子音を持ち無強勢音節になる語が観察される (1, 3, 6, 7)。末子音は、主音節の頭子音と同じ調音点の閉鎖音 (1)、もしくは声門閉鎖音が現れる (3, 6, 7)。「自然スピード」では、副音節に末子音が現れることはない。

また、「丁寧」では (2) を除く全ての母音が [a] となり、「自然スピード」では曖昧母音 (1, 3, 4, 6) か、主音節の母音が非主音節と同じ母音となる (3)。

先行研究において閉-副音節の語は、「丁寧」では子音連続の間に母音の挿入が見られ、無強勢音節となる語がいくつか観察される (5, 8, 9)。挿入される母音は主音節の母音と同じ (5, 8, 9) か、円唇性を同じくした中舌の母音が現れる (8, 9)。「自然スピード」ではこの挿入母音は観察されない。

また、先行研究では閉-副音節であるとされたものが、調査では初頭の閉鎖音 /k/ が落ち、母音が挿入され開-副音節 [ra] になっている例 (4) や、先行研究ではふるえ音 /r/ であったものが、側面接近音 [l] で観察された例があった (7)。先行研究で 2 音節語であったものが、「自然スピード」で開-副音節を持つ 1.5 音節語として観察された (2)。

また、ふるえ音 [r] が単独で副音節を形成している例が観察された (4)。

5.2 「個人差」による変異の調査結果

表 15：「個人差」 A） 1.5 音節語

No.	先行研究の形式		P	S	B	D
1)	pa.bɯl “to kill”	[pa]	[pa.bɯːl]	[pa.bɯːl]	[pa.bɯːl]	[pa.bɯːl]
2)	ba.kah “flower”	[ba][h]	[ba.kaːh]			
		[pa][h]		[pa.kaːh]	[pa.kaːh]	
		[ˀba][h]		[ˀba.kaːh]		
		[pa][Ø]				[pa.kaː]
3)	ta.hoʔ “armpit”	[tə]	[tə.hoːʔ˖]			
		[to]		[to.hoːʔ˖]	[to.hoːʔ˖]	
		[ta]				[ta.hoːʔ˖]
4)	kr.pʰɛp	[kr]	[kr.pʰɛp˖]			
	“butterfly”	[pʰr]		[pʰr.pʰɛp˖]		
		[rə]			[rə.pʰɛp˖]	
		[pr]				[pr.pʰɛp˖]
5)	kr.ʔuŋ “hole”	[kl]		[kl.ʔuŋ]		[kl.ʔuŋ]
		[kr]	[kr.ʔuŋ]		[kr.ʔuŋ]	
6)	rə.map “upland”	[rə]	[rə.maːp˖]			
		[kr]		[kr.maːp˖]		
		[ra]			[ra.maːp˖]	[ra.maːp˖]
7)	rə.ʔɤk “chest”	[la][ɤ]	[la.ʔɤk˖]		[la.ʔɤk˖]	
		[kl][ɤ]		[kl.ʔɤk˖]		
		[kl][ɯ]				[kl.ʔɯk˖]
8)	kl.kil “knee”	[kr]	[kr.kil]			
		[kl]		[kl.kil]	[kl.kil]	[kl.kil]
9)	kl.muj “hair”	[kr]	[kr.muːj]			
		[kl]		[kl.muːj]	[kl.muːj]	[kl.muːj]

(1) を除く全ての例で、副音節が「個人差」による変異を示している。それに対して主音節に変異が見られたのは (7) のみである。

副音節に見られる変異を分類すると、開-副音節では、頭子音の有声、無声が異なる例 (2)、母音が異なる例 (3, 6) が観察される。母音が異なる場合は、その範囲は曖昧母音 [ə]、主音節と同じ母音、広母音 [a] の範囲である (3, 6)。

閉-副音節では、成節的な子音がふるえ音か側面接近音かで異なる例 (5, 8, 9)、共通要素が [r] のみで、頭子音が異なる例 (4) がある。また、音節構造が異なる例 (4, 6, 7) も観察される。

さらに、4 人とも異なる副音節が現れた語も観察される (4)。

表 16：「個人差」　B） /ʌ/ または /ɔ/ を持つ語

No.	先行研究の形式		P	S	B	D
10)	gʌh “this”	[ʌ]	[gʌh]			
		[ɔ]		[gɔh]	[gɔh]	[gɔh]
11)	wʌl “to return”	[ʌː]	[wʌːl]	[wʌːl]	[wʌːl]	[wʌːl]
12)	ɟʌj^{h} “delicious”	[ʌː][ɕ]	[d͡ʑʌːɕ]			
		[ɔː][jh]		[d͡ʑɔːjh]		
		[ɔː][j]			[d͡ʑɔːj]	[d͡ʑɔːj]
13)	mɔj “one”	[ɔ]	[mɔj]	[mɔj]	[mɔj]	[mɔj]
14)	dɔk “to put”	[ɔ]	[dɔkˀ]	[dɔkˀ]	[dɔkˀ]	[dɔkˀ]
15)	kɔk “pipe”	[ɔ]	[kɔkˀ]	[kɔkˀ]	[kɔkˀ]	[kɔkˀ]

先行研究において /ɔ/ を持つ語は、本調査でも全て [ɔ] が現れたのに対し、/ʌ/ を持つ語は (11) 以外、[ʌ] と [ɔ]の両方が「個人差」として現れた。また、協力者 P は 非円唇母音[ʌ] 、P 以外は円唇母音 [ɔ] が優勢であった。

また、(12) の末子音 /j^{h}/ には、P は摩擦音 [ɕ] 、S は有気わたり音 [jh] 、B, D はわたり音 [j] といった個人差が見られた。

表 17：「個人差」　C） 硬口蓋子音の前に /a/ または /ɛ/ を持つ語

No.	先行研究		P	S	B	D
16)	gaj^{h} “nine”	[a][ɕ]	[gaɕ]			
		[a][jh]		[gajh]		
		[a][j]			[gaj]	[gaj]
		[ɛ][ɕ]	[gɛɕ]			
17)	braɲ “dog”	[a]	[braɲ]	[braɲ]	[braɲ]	[braɲ]
18)	ʔac “bird”	[a]	[ʔacˀ]	[ʔacˀ]	[ʔacˀ]	[ʔacˀ]
19)	gɛj^{h} “crab”	[ɛ][ɕ]	[gɛɕ]			
		[ɛ][jh]		[gɛjh]		
		[ɛ][j]			[gɛj]	[gɛj]
20)	pɛj “to insert”	[ɛ]	[pɛj]	[pɛj]	[pɛj]	[pɛj]

/ɛ/ を持つ語は、調査でも全て [ɛ] が現れたのに対し、/a/ を持つ語の (16) は、P の発音に限って [ɛ] が現れ、個人内で自由変異の関係にあった。

また、末子音 /jʰ/ について、B） 同様、P は摩擦音 [ɕ] 、S は有気わたり音 [jh] 、B, D はわたり音 [j] といった個人差が見られた (16, 19)。

表 18：「個人差」D）前声門化子音

No.	先行研究の形式		P	S	B	D
21)	ˀbuʔ “slow”	[ˀb]	[ˀbuʔ˖]	[ˀbuʔ˖]	[ˀbuʔ˖]	
		[ˀb]				[buʔ˖]
22)	ˀbɛk “to carry”	[ˀb]	[ˀbɛk˖]	[ˀbɛk˖]	[ˀbɛk˖]	
		[b]				[bɛk˖]
23)	ˀbiʔ “caterpillar”	[ˀb]	[ˀbiʔ˖]	[ˀbiʔ˖]	[ˀbiʔ˖]	
		[b]				[biʔ˖]
24)	ˀdiŋ “big”	[ˀd]	[ˀdiŋ]	[ˀdiŋ]	[ˀdiŋ]	
		[d]				[diŋ]
25)	ˀdi “good”	[ˀd]	[ˀdiː]	[ˀdiː]	[ˀdiː]	
		[d]				[diː]
26)	ˀja “medicine”	[ˀj]	[ˀjaː]	[ˀjaː]	[ˀjaː]	
		[j]				[jaː]
27)	ˀjɛʔ “far”	[ˀj]	[ˀjɛʔ˖]	[ˀjɛʔ˖]	[ˀjɛʔ˖]	
		[j]				[jɛʔ˖]
28)	ˀjak “shit”	[ˀj]	[ˀjak˖]	[ˀjak˖]	[ˀjak˖]	
		[j]				[jak˖]

P, S, B では前声門化音 [ˀb, ˀd, ˀj] 、D は有声破裂音 [b, d] もしくわたり音 [j] が観察された。

表 **19**：「個人差」　E）/cʰ/ を持つ語

No.	先行研究の形式		P	S	B	D
29)	cʰak “body”	[ʃ]	[ʃak˖]			
		[s]		[sak˖]	[sak˖]	[sak˖]
30)	cʰoʔ “spade”	[s][o]	[soʔ˖]	[soʔ˖]	[soʔ˖]	[soʔ˖]
		[s][oː]	[soːʔ˖]			
31)	cʰm.bɛp	[ʃ]	[ʃim.bɛp˖]	[ʃm.bɛp˖]		
	“mouth”	[s]			[sm.bɛp˖]	[sm.bɛp˖]

破擦音 [t͡ɕ] は観察されなかった。また後部歯茎摩擦音 [ʃ] は A, B の 2 人のみに観察され、B, D はいずれの語彙も [s] で発音された。

(31) は協力者 P に限ってであるが、無強勢音節となり、2 音節語になっている。

6　考察

本調査は予備的調査であり、得られたデータからの一般化は別稿でおこなうことにしたい。ここでは、ムラブリ語の変異を調査する上で、何に注意する必要があるのかを考察する。

6.1　副音節

まず、「スタイル」と「個人差」両方の調査において、多くの変異がみられたのは 1.5 音節語の特に副音節であった。

「スタイル」をコントロールした調査では、「丁寧」に発話されると 2 音節語的、「自然なスピード」だと 1.5 音節語的に発音される傾向が観察された。例えば、Egerod & Rischel (1987) で 2 音節語として表記されている、No.2「花」/bak.kah/ は、本調査では「丁寧」では [bakˇ.kaːh] で 2 音節語、「自然なスピード」では [ba.kaːh~bə.kaːh] と 1.5 音節語であり、「スタイル」によって形態素の音節構造が異なる。よって、ある語が 1.5 音節語か 2 音節語のどちらであるかは、ムラブリ語において判断が難しいことがわかる。

また、「個人差」による調査においても、1.5 音節語の副音節に見られる変異が顕著であった。例えば、No.4「蝶」では、協力者 4 人ともが異なる副音節を示し、その範囲は [kr~p^{h}r~rə~pr] と、ある種の傾向は認められるものの、音韻的解釈に問題が残る。

以上から、ムラブリ語の変異について、1.5 音節語の特に副音節の調査が重要であると考える。

6.2　年代差と磨滅の可能性

「個人差」の調査結果の内、「年代差」とも解釈可能な例がいくつか観察された。末子音の無声わたり音 /-j^{h}/ は、P は摩擦音 [ɕ] 、S は有気わたり音 [jh] 、B, D はわたり音 [j] として発音されている。Rischel (1995: 76) においても、 /-j^{h}/ の異音として歯擦音 (strident) が聞かれることがあると述べているが、その条件については触れておらず、自由変異扱いである。

今回の調査の範囲では、摩擦音 [ɕ] で発音するのは老年層の P、有気わたり音で発音するのは [jh] S のような 40 代近くの中年層、そしてわたり音 [j] で発音するのは B、D のような若年層とでき、これは「年代差」の可能性が示唆される。また、B, D の音韻体系では /-j^{h}/ と /-j/ が合流している可能性が考えられる。

また、前声門化子音 /ˀb, ˀd, ˀj/ は D では観察されず、代わりに有声閉鎖音、わたり音 /b, d, j/ が観察された。よって D の音韻体系において頭子音の前声門化子音 /ˀb, ˀd, ˀj/ が有声閉鎖音、わたり音 /b, d, j/ と合流している可能性が考えられる。これは、D の協力者情報を照らし合わせて考えると、D に磨滅 (attrition) が起きていることが示唆される。

以上から、若年層の話者を調査する際には、磨滅を想定しながら調査をする必要がある。

7　まとめ

本稿はムラブリ語の多様な変異の実態を明らかにする調査の準備として、「スタイル」と「個人差」といった変数を操作して予備的調査を行った。

その結果、1.5 音節語は「丁寧」なスタイルにおいて 2 音節語のように発話されること、また主音節に比べ「個人差」が顕著であることが明らかになり、ムラブリ語の変異の多くはこの副音節に関係することがわかった。

また「個人差」のいくつかは「年代差」に還元できる可能性が高く、加えて、ムラブリ語話者の若年層に「磨滅」が起きている可能性が高いことを示唆した。

謝辞

本稿は 2011 年 7 月下旬に筆者自身が行ったフィールドワークの調査結果に基づいている。この調査は多くの人々、特に調査に協力してくれたムラブリの人々、またナーン県開発センターの職員の人々の協力なくしては成しえなかった。また、論文執筆にあたって、言語記述研究会の皆様から多くの助言をいただいた。特に倉部慶太氏には論文の構成から内容まで詳細に原稿を見ていただいた。これら全ての人々に深く感謝を申し上げる。

略号	英語	日本語
C	Consonant	子音
V	Vowel	母音
N	Homorganic nasal	同器官的鼻音
Ml.	Mlabri	ムラブリ語
CT.	Central Thai	中央タイ語
NT.	Northern Thai	北タイ語
Hm.	Hmong	フモン語
Tn.	T’in	ティンの言語 (Mal, Prai)

参考文献

坂本比奈子. (2011) 「ムラブリ族の移住 採集狩猟民, 他民族支配, 土地所有, 言語文化多様性, 山地民対策」『言語と文明』9: 103-111. 東京: 麗澤大学.

Chazée, Laurent. (2001) *The Mrabri in Laos: A World under the Canopy.* Bangkok: White Lotus.

Egerod, Søren and Rischel, Jørgen. (1987) “A Mlabri-English Dictionary.” *Acta Orientalia 48*: 35–88.

Ikeya Kazunobu and Nakai Shinsuke. (2009) “Historical and contemporary relations between Mlabri and Hmong in Northen Thailand.” *Senri Ethnological Studies 73*: 247–261.

Kraisri Nimmanahaeminda. (1963) “The Mrabri language.” *The jornal of the Siam Society L1 Part2*. 179–184.

Matisoff, J. A. (1973) “Tonogenesis in Southeast Asia.” *Consonant types and Tone*: 71–95. Los Angeles: UCLA.

Rischel, Jørgen. (1989) “Fifty years of research on the Mlabri language: A re-appraisal of old and recent field work data.” *Acta Orientalia 50*: 49–78.

————. (1995) *Minor Mlabri: A Hunter-Gatherer Language of Northern Indochina.* Copenhagen: Museum Tusculanum.

————. (2004) *Pan-dialectal Databases: Mlabri, an Oral Mon-Khmer Language*. Lexicography Conference. Payap University, Chiangmai.

————. (2007) *Mlabri and Mon-Khmer: Tracing the History of a Hunter-Gatherer Language.* Copenhagen: Royal Danish Academy of Sciences and Letter.

————. (2009) *Sound Structure in Language.* New York: Oxford University Press.

Sakkarin, Na Nan (2009) “Resource contestation between hunter-gatherer and farmer societies: Revisiting the Mlabri and the Hmong communities in Northern Thailand.” In *Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers: from Prehistory to Present.* 229–246. Osaka: National Museum of Ethnology.

————. (forthcoming) “The incomplete sedentarization of nomadic populations: The case of the Mlabri.”

Thongkum, Theraphan, L. (1992) “The language of the Mlabri (Phi Tong Luang).” In *The Phitong luang(Mlabri): A hunter Gather Group in Thailand.* 43–65. Bangkok: Odeon Store.

Trier, Jesper (2009) *Invoking the Spirits: Fieldwork on the Material and Spiritual Life of the Hunter-Gatherers Mlabri in Northern Thailand.* Copenhagen: Aarhus University Press.

ジンポー語文法概要および民話資料 — 兄弟が湖を動かした話

倉部　慶太

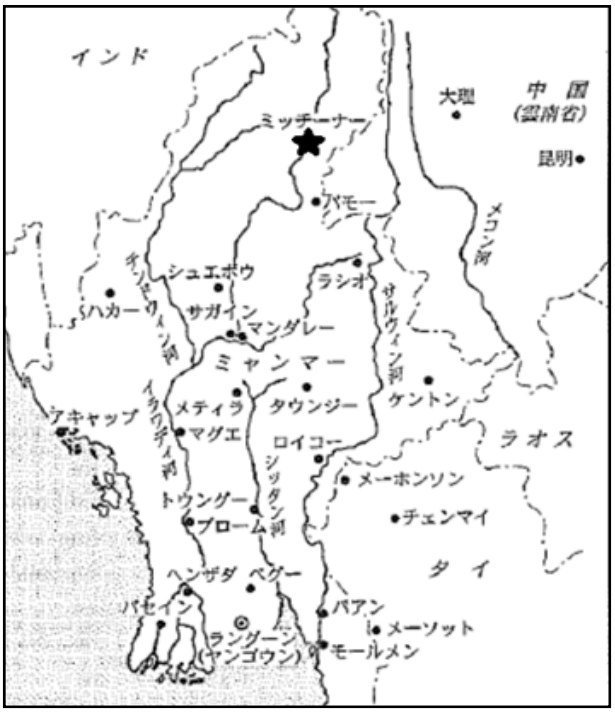
1　はじめに

本稿の目的はジンポー語の文法概要およびテキストを提示することにある。本稿で提示するデータは筆者が 2009 年から 2011 年にかけて行ったミャンマー連邦共和国における 5 回のフィールドワークの成果に基づいている。本稿では、**2** 節でジンポー語の概況に関して述べ、**3** 節以降で文法スケッチを行う。そして、最後の **10** 節でテキストを提示する。

2　ジンポー語とは

2.1　地域・系統

ジンポー語はミャンマー連邦共和国 (ビルマ) 北部を中心に、東は中国西南部雲南省徳宏傣族景頗族自治州、西は東北インドアッサム州、アルナーチャル・プラデーシュ州にかけ、国境を越えて分布するチベット・ビルマ系言語である。この言語が話されるミャンマー北部の主要な地域には、カチン州のミッチーナー、バモー (マンモー)、ダナイ、シャン州北部のナムカム、クッカイ、ラーショー (ラシオ) などがある。筆者の主な調査地はミャンマー北部カチン州ミッチーナー市である (地図の★印)。



地図 1：**ミャンマー (西田 2000)**

系統的にはこの言語はシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan)、チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属する。

民族的には、ジンポー人は、ロンウォー (マル)、ラチッ (ラシ)、ツァイワ (アツィ) などの民族と共に「カチン」と呼ばれる文化的集団の成員を成す。ジンポー語はロンウォー語、ラチッ語、ツァイワ語とはチベット・ビルマ語派内で必ずしも系統的に近い関係にあるとはいえないが、カチン民族の中でジンポー語はリンガフランカとして通用しており、通常、「カチン語」というとジンポー語を指す。

ミャンマーにおけるジンポー人の人口は 630,000 程度とされる (以下の表を参照)。この人口の多くがジンポー語を使用しているものと推測される。また、上述の通り、カチン民族

に属する他の民族もジンポー語を使用することが多いため、これらの人口も含めると、ジンポー語の話者数はさらに増加するものと考えられる。

表 1：カチン民族の推定人口 1992 (Bradley 1996)

Group	Myanmar	China	India	Thailand	Total
Jinghpaw	630,000	15,000	2,000	500	650,000
Atsi	80,000	90,000		20	170,000
Maru	90,000	10,000		100	100,000
Ngochang	10,000	30,000		5	40,000
Lashi	25,000	5,000		5	30,000
Pola		2,000			2,000

2.2　類型的特徴

音韻面に関しては、6 つの母音と24 の子音を持つ。母音の長短の対立および二重母音は音韻的には認められない。音節声調を持ち、4 つの声調が認められるが、そのうちのひとつは二次的な性格を示す。また、閉鎖音末子音を持つ閉音節においては 2 つの声調のみが対立する。音節構造は比較的単純であり、基本的に音節頭に現れうる子音結合は最大 2 つまでである。また、音節末に現れうる子音の数は 9 個と限られており、音節末に子音結合は現れない。派生、複合、借用語を除く語の大部分は一音節もしくは二音節から成り、三音節以上の語は異質であるといえる。二音節語の大部分はその第一音節が Cə の形式を取る副音節であり、この位置に副音節以外の形式が来ることは比較的まれであるといえる。

形態面については、この言語の形態論は分析的・膠着的であるといえる。最も一般的な語形成法は複合であり、複合語が生産的に形成される。複合語の中には同一要素の繰り返しを含む 4 つの形態素から成る複合語 (‘elaborate expressions’) も観察される。複合の他に重複も一般的な語形成法である。派生形態論は比較的単純であり生産的な接辞の数は少ない。接辞は接頭辞が最も多いが少数の接尾辞も認められる。接中辞は見られない。接頭辞の中には固有の意味を持たず一音節語を二音節語に膨張させるためだけに用いられる接頭辞も観察される。

統語面に関しては、基本的に従属部標示型 (dependant-marking) の言語であり、文法関係は主に名詞句に後接される格標識によって示される。格標示のパタンは主格・対格型 (S/A vs. O) である。所有構造においては従属部名詞に属格が付加される。

語順に関しては、動詞末尾型 (verb-final) の基本語順を持ち、動詞 (述語) は必ず節末に置かれる。節中の名詞句の順序は比較的自由であるが、無標の文脈においては他動詞節の主語は目的語に先行するパタンを示す。従属部と主要部の順序は多様な様相を呈する。すなわち、所有者、関係節、副詞節は主要部に先行するパタンを示し、数詞、類別詞は主要部に後続するパタンを見せる。また、指示詞、形容詞的要素は主要部に先行することも後続

することもありうる。助動詞的要素の中にも主動詞の前後どちらにも現れうる形式が観察される。副詞は基本的に動詞の直前に置かれ、特にアスペクト的意味を表す副詞は必ず動詞の直前に置かれなければならない。したがって、同一節中に複数の副詞が生起する場合、程度・様態副詞はアスペクト副詞よりも左側に出現することになる。

名詞の下位類である閉じたクラスには人称代名詞、指示詞、数詞、疑問代名詞、場所名詞などが認められる。普通名詞・人称代名詞ともに文法性を持たず、普通名詞は数も義務的なカテゴリではない。類別詞の数は少なく、基本的に数詞が名詞を直接的に修飾するパタンを見せる。名詞句は文脈から明らかである場合、しばしば省略される。

最小の動詞複合 (Verbal Complex) は [動詞 + TAM標識] という構造を持つ。この動詞複合は動詞連続や助動詞によって拡張され、多様な意味を獲得する。文法カテゴリとしてのテンスは持たず、アスペクト・ムード卓立型言語であるといえる。アスペクトおよびムードは TAM 標識によって義務的に示される。アスペクトは TELIC vs. ATELIC の二項対立を成す。多様な文末助詞を持ち、モダリティは文末助詞によっても表される。

2.3　地域的特徴

ジンポー語が分布するミャンマー北部は、チベット・ビルマ諸語の観点からはそれらの言語が話される中心地に相当する。また、シナ文化圏 (Sinosphere) とインド文化圏 (Indosphere) という観点からはその緩衝地帯 (buffer zone) に当たると考えられる。そして、東南アジア大陸部という観点からはその周辺として位置付けられる。本小節では、この第三の観点から見たジンポー語の地域的言語特徴に関して若干概観する。

東南アジア大陸部 (Mainland Southeast Asia) ではオーストロアジア語族、シナ・チベット語族、タイ・カダイ語族、フモン・ミエン (ミャオ・ヤオ) 語族、オーストロネシア語族という5つの語族に属する一千以上の言語が話される。これらの言語は高度な言語多様性を呈する一方、長期に渡る言語接触の結果、音韻・形態・統語・語彙の全領域に渡って、系統を超えた共通の言語特徴を持つに至ったとされる。

ジンポー語にも東南アジア大陸部諸語が有するとされる言語特徴が多数認められる。例えば、音韻面に関しては、声調、副音節、音節末子音の制限などが、形態面では、複合・重複の多用、単純な派生形態論、‘elaborate expressions’ などが、統語面では、類別詞、動詞連続、アスペクト卓立 (aspect prominent)、多様な文末助詞 (sentence-final particles)、文の名詞化 (sentential nominalization)、動詞のサブタイプとしての形容詞などが挙げられる。

この地域の言語は語彙面でも系統を超えた共通性を見せる (‘Southeast Asia semantic area’)。例えば、「洗う」「運ぶ」「切る」「乾燥させる」「引き抜く」などの意味を表す動詞の細分化、「炊いた米」と「炊いていない米」の区別、「年上の兄弟姉妹」と「年下の兄弟姉妹」の区別などが広く見られるとされる。また、この地域の言語では 3人称単数代名詞は性の対立を持たないことが多いという特徴も指摘されている (‘areal lexicon’, Matisoff 1978, 2003, 2004)。ジンポー語に見られる例を次表に掲げておく。

表 1：ジンポー語に見られる ‘areal lexicon’ の例

意味	ジンポー語
‘WASH’	khrùt「(服を) を洗う」, myít「(顔を) 洗う」, gəšìn「(手や皿を) 洗う」
‘CARRY’	gun「手や背中で運ぶ」, phay「肩に担いで運ぶ」, laŋ「手で運ぶ」
‘CUT’	rèp「(鋏で) 切る」, gəthàm「(刀で) 切る」, dìʔ「(ロープを) 切る」, phyáʔ「(肉を) 切る」
‘RICE’	šàt「炊いた米」, ngu「脱穀米」, mam「稲, 脱穀前の米」
‘SIBLING’	gəphù「兄」, gəna「姉」, gənaw「弟, 妹」

また、同様の構成要素から成る複合語も系統を超えて観察される (‘areal calques’)。次のような複合語は東南アジア大陸部諸語に広く見られる例とされている (Matisoff 1978, 2004) (なお、主要部と修飾部の順序は言語ごとに異なる。表中網掛け部分はジンポー語で該当する例が見られない例である。PTB はチベット・ビルマ祖語を指す)。

表 2：ジンポー語における ‘areal calques’ の例

意味	**areal calques**	ジンポー語
‘flame’	‘fire’ ＋ ‘tongue’	wàn「火」+ šìŋlèt「舌」
‘dental caries’	‘tooth’ ＋ ‘insect’	wa「歯」+ ʔutuŋ「虫」
‘thumbs’	‘finger/hand’ ＋ ‘mother/female’	(1) yùŋ「指」+ nû「母」> yùŋnù (2) lə- (< PTB *lak「手」) + nû「母」 > lənu
‘train’	‘fire’ ＋ ‘car’	wàn「火」+ lèŋ「輪」
‘freckle/mole’	‘fly’ ＋ ‘shit’	cf. jìʔnù「蠅」+ dì「卵」
‘meteor’	‘star’ ＋ ‘shit’	šəgan「星」 + pyen「飛ぶ」
‘epilepsy’	‘pig’ ＋ ‘crazy/illness’	mà.mu (<シャン語)
‘knee’	‘leg’ ＋ ‘joint’	lə- (< PTB *lak) + phùt「跪く」
‘tear’	‘eye’ ＋ ‘water’	myìʔ「目」 ＋ pruy「?」
‘anklebone’	‘eye’ ＋ X (‘foot’, ‘cow’, ‘elephant’, ‘fish’)	?

さらに、「米」+「食べる」>「食べる」、「道」+「歩く」>「歩く」のような、名詞 + 動詞全体と動詞が意味的に等価であり、名詞要素がリダンダントであるようなコロケーションも東南アジア大陸部諸語においてしばしば見られる表現であるとされる (Matisoff 2003)。

表 3：ジンポー語に見られる ‘areal collocations’ の例

意味	ジンポー語	意味	ジンポー語
食べる	šàt「飯」＋šá「食べる」	生きる	sàk「命」＋khruŋ「生きる」
歩く	lam「道」＋khom「歩く」	空腹だ	kan「腹」＋kóʔsi「空腹だ」
話す	gà「言葉」＋šəga「話す」	喉が渇く	khàʔ「水」＋gəràʔ「喉が乾く」
学ぶ	làyka「本」＋šərín「学ぶ」	泳ぐ	khàʔ「水」＋phùŋyòt「泳ぐ」

東南アジア大陸部諸語では同様のパタンを示す文法化が系統を超えてしばしば観察されることも知られている (‘grammaticalization area’, Heine & Kuteva 2005)。次表のような文法化は東南アジア大陸部諸語に広く見られる例とされる (Matisoff 1991a, 2004, Enfield 2001):

表 4：ジンポー語に見られる ‘areal grammaticalization’ の例

areal grammaticalization	ジンポー語
‘to get’ ---> ‘MANAGE TO, MUST, BE ABLE’	lù「得る」---> 「できる」
‘to give’ ---> ‘BENEFACTIVE, CAUSATIVE’	jòʔ「与える」---> ‘BENEFACTIVE, CAUSATIVE’
‘to stay, be at, dwell’ ---> ‘PROGRESSIVE’	ŋà「いる」---> ‘PROGRESSIVE’
‘to say’ ---> ‘COMPLEMENTIZER’	ŋú, ŋa「言う」---> ‘COMPLEMENTIZER’
‘to surpass, exeed’ ---> ‘MORE’	graw「超える」---> ‘MORE’
‘MOTHER/CHILD’ ---> ‘AUGMENTATIVE/DIMINUTIVE’	nû (or gənù)「母」(cf. làyka「文字」 + gənù > 「字母」, yùŋ「指」＋nû > yùŋnù 「親指」) gəšà「子供」---> ‘DIMINUTIVE’

ジンポー語の借用語の大部分はビルマ語、シャン語、漢語の借用である。中国側のジンポー語には漢語からの借用語が多く見られ、ビルマ語からの借用語は少数のようである (戴・徐 1983)。一方、ビルマ側のジンポー語にはビルマ語からの借用語が数多く見られ、漢語からの借用語は極少数にすぎない。シャン語の借用語はどちらの方言にも多数見られる。

ビルマ語借用語には rúŋ「事務所」(< yóuɴ), jòŋ「学校」(< cáuɴ), seŋ「店」 (< sáiɴ), bàt「週」(< paʔ), jàk「機械」(< sɛʔ), myúʔ「町」(< myô) などが見られる。

漢語借用語としては zèn「切る」(< jiǎn), zèndàw「鋏」(< jiǎndāo), khoyzè「割り箸」(< kùaizi), khiŋ「千」(< qiān), làwbàn「ボス」(< lǎobǎn), janmaw「冠」(< guānmiǎn) などがある。

シャン語借用語としては次表のような例がある。

表 5：ジンポー語におけるシャン語由来の借用語

bənàw「魚醤」(< paa^{1}law^{1})	bəlúk「鰻」(< paa^{1}luk^{4})
cò「スプーン」(< tsɔ^{5})	dùsàt「動物」(< s^{h}at^{4})
gát「市場」(< kaat^{2})	gòŋ「紡績機」(< koŋ^{4})
joŋ「傘」(< tsɔŋ^{3})	kók「瓶」(< k^{h}ɔk^{4})
khaw「田」(< k^{h}aw^{3})	khyèpdin「靴」(< tin^{1})
kho.khám「王」(< hɔ^{1}k^{h}am^{4})	mà.mu「癲癇」(< maa^{3}mu^{1})
məgo「梨」(< maak^{2}kɔ^{3})	məkók「林檎」(< maak^{2}kɔk^{2})
məʔûn「ココヤシ」(< maak^{2}ʔun^{1})	məlaŋ「ジャックフルーツ」(< maak^{2}laaŋ^{4})
màkcòk「蜜柑」(< maak^{2}tsɔk^{4})	mákphyíkpòm「胡椒」(< maak^{2}p^{h}it^{5}pɔm^{3})
màysàk「チーク」(< maj^{5}s^{h}ak^{4})	múŋ「国」(< mɤŋ^{4})
mo「鉱山」(< mɔ^{4})	mo「壺」(< mɔ^{3})
mùn「万」(< mɯn^{2})	praŋtáy「兎」(< paaŋ^{1}taaj^{4})
phəjèt「タオル」(< p^{h}aa^{3}tset^{5})	phəro「ニンニク」(< p^{h}ak^{4}lo^{4})
sèn「十万」(< s^{h}ɛn^{1})	sún「庭」(< s^{h}on^{1})
tawba「へちま」(< taw^{3})	taw「亀」(< taw^{2})

3　音韻

3.1　分節音

ジンポー語には 24 の子音音素と 6 つの母音音素がある。

表 6：子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p, ph, b	t, th, d	c[ʧ], j[ʤ]	k, kh, g	ʔ
摩擦音		ts[s], s[s^{h}], z	š[ʃ]		h
鼻音	m	n		ŋ	
流音		l, r			
半母音	w		y		

表 7：母音音素

	前舌	中舌	後舌
狭	i		u
中	e	ə	o
広		a	

筆者のデータの中では、子音 /h/ は /kəhám/ [kəhám]「欠伸する」の一語にしか見られず、極めて副次的な性格を有する。この語は方言によっては [kəkʰám] とも発音されるため、この /h/ は /kh/ に由来することが分かる。母音音素には /i, e, a, o, u, ə/ がある。母音 /ə/ は閉音節や単語末には現れず、副音節 (minor syllable) にのみ現れる点で特殊な母音である (後述)。

3.2 声調

音節声調を持ち、開音節において、高平調 (High-level)、中平調 (Mid-level)、低下降調 (Low-falling)、高下降調 (High-falling) の 4 つの声調を持つ。ただし、閉鎖音末子音を持つ閉音節においては、High と Low の 2 声調のみが対立する。本稿ではジンポー語の 4 つの声調をそれぞれ /má/ [55], /ma/ [33], /mà/ [31], /mâ/ [51] と表す: yó「計画する」, yo「浮く」, yò「弱まる」, yô「よ、ね」(cf. gát「市場」, gàt「走る」).

なお、4 つの声調の中で高下降調の割合は極度に低い。声調の割合に見られるこの非対称性は、東南アジア大陸部の声調言語によく見られる性質であるが、この理由は声調発生論 (tonogenesis) の観点から説明できるケースが多い。ジンポー語の場合、高下降調を持つ語は基本的には次の 2 つがある。1) 親族名称・間投詞・文末助詞 2) 低下降調から形態音韻論的プロセスにより発生した場合。後者は特定の接頭辞が付加されることにより高下降調が出現するという例である (例：tsòm「美しい」> ʔə-tsôm 「よく、十分に」)。このように高下降調は二次的に発生したため、この声調の割合は低い。とはいうものの、上記したとおりミニマルペアも存在するため、高下降調も独立の声調素 (toneme) として認める必要がある。

3.3 音節構造

基本的な音節構造は次のように図式化することができる。

$$\sigma = C_1(C_2)V(C_3)/(T)$$

図 1：**音節構造**

C_2 のスロットには /r, y/ が、C_3 のスロットには /p, t, k, ʔ, m, n, ŋ, w, y/ が入る。また、子音結合 C_1C_2 には /pr, kr, phr, khr, br, gr, py, ky, phy, khy, by, gy, my, ny/ が見られる。子音結合はソノリティーの低いものから高いものへという順に配列されるといえる。

表 8：**音節の種類**

音節の種類	例
開音節	jà「金」, jé「裂く」, jí「小便する」, jó「染める」, jú「棘」
ソノラント末子音	mam「稲」, man「表」, maŋ「死体」, maw「驚く」, may「よい」
閉鎖音末子音	jàp「辛い」, jàt「加える」, jàk「機械」, jàʔ 「硬い」
成節鼻音	npúʔ [m̩.púʔ]「下」, nten [n̩.ten]「唇」, ngúp [ŋ̩.gúp]「口」

ソノラント末子音には /m, n, ŋ, w, y/ がある。また、閉鎖音末子音には /p, t, k, ʔ/ があるが、このうち末子音 -k の頻度は低い。上表のとおり、成節鼻音から成る音節も観察されるがこれは二音節語の第一音節にのみ出現する点で特殊である (後述)。

3.4 語構造

ジンポー語の語構造には次表の 4 タイプが存在するとされる (Matisoff 1999)。この言語では三音節語は極めてまれであり、筆者のデータ中では、三音節語の例は pəlâmláʔ「蝶」くらいしか見られない。この例は共時的には単一の語であるにしても、通時的には分析可能であると考えられる (cf. ビルマ文語 phalam「蛾」)。以下では、4 タイプの語構造についてそれぞれ記述していく。

表 9：**語構造**

語構造のタイプ	語構造
1) ‘monosyllabic words’	C(C)V(C)
2) ‘sesquisyllabic words’	Cə-C(C)V(C)
3) ‘prenasalized words’	N-C(C)V(C)
4) ‘disyllabic words’	CV(C)-C(C)V(C)

3.4.1 ‘Monosyllabic words’

一音節から成る語であり、動詞の中で最も多く、名詞中 35.6%もこのタイプである (後述)。

表 10：**ジンポー語における ‘monosyllabic words’**

šá「食べる」	lùʔ「飲む」	sa「行く、来る」	yúp「寝る」
myìʔ「目」	na「耳」	say「血」	wàʔ「豚」

3.4.2 ‘Sesquisyllabic words’

副音節 (Cə) + 主音節の構造を持つ二音節語は ‘sesquisyllabic words’ と呼ばれる (Matisoff 1973, 1999)。Matisoff (1999) はチベット・ビルマ語派諸言語を声調などのプロソディックな特徴および語構造の観点から類型化し、ジンポー語が sesquisyllabic words を豊富に有することから、この言語を ‘sesquisyllabic tone language’ として分類している。

3.4.2.1 副音節

二音節語の大部分 (基礎語彙中約 74%) は副音節をその第一音節に持つ。ジンポー語の副音節の特徴は次のように一般化することができる。副音節は 1) 母音が /ə/ である、2) 声調を持たない、3) 強勢を持たない、4) 開音節である (cf. *kən, *pət) 、5) 単語末には現れない

(cf. *kə#, *gumpə#)、6) 子音結合を持たない (cf. *krə, *pyə)。これらの特徴の多くは副音節を持つ東南アジア大陸部諸語の副音節にも共通に見られる特徴であるとされる (Mazaudon 1977)。

副音節の形式は限定的であり、頻度的にも大きな偏りが見られる。Hanson (1906) 収録の副音節を持つ語彙 (3,024 語) を分析したところ、副音節の形式およびその頻度に関して次表の結果が得られた (表中の数字は語彙数、*はその形式が存在しないことを示す)。

表 11：副音節の形式およびその頻度 (Hanson 1906)

	p-	ph-	b-	t-	th-	d-	c-	š-	j-	k-	kh-	g-
-ə	53	24	17	4	8	55	95	383	97	23	85	588
%	1.8	0.8	0.6	0.1	0.3	1.8	3.1	12.7	3.2	0.8	2.8	19.4
	ʔ-	ts-	s-	z-	h-	m-	n-	ŋ-	l-	r-	w-	y-
-ə	534	13	124	*	*	511	*	*	408	*	*	2
%	17.7	0.4	4.1			16.9			13.5			0.1

この表より、次の 2 点が言える。1) 副音節の形式は、頻度の高い順に gə, ʔə, mə (511-588 語; 16.9-19.4%) > lə, šə (383-408 語; 12.7-13.5%) > sə, jə, cə, khə (85-124 語; 2.8-4.1%) > də, pə (55-53 語; 1.8%) > phə, kə, bə (17-24; 0.6-0.8%) > tsə, thə, tə, yə (2-13 語; 0.1-0.4%) である。2) *zə, *hə, *nə, *ŋə, *rə, *wə のような副音節は存在しない。

副音節は形式が限定的であるが、少なくとも共時的には固有の意味を持たない場合がほとんどである。例えば、次のような語の lə に共通の意味を見出すことは困難である: ləpran「間」, lədî「鼻」, lədòʔ「時期」, ləyaŋ「原野」, ləbáw「歴史」, ləthàʔ「上部」, ləgòn「暇な」, ləjàŋ「準備する」.

ただし、いくつかの例に関しては通時的な説明が可能である。例えば、手に関する語の多くは lə という第一音節を持つ：lətáʔ「手」, ləphàn「掌」, ləyuŋ「指」, ləmyin「爪」, ləphàʔ「肩」, ləkhôn「腕輪」, lədón「手を伸ばす」等。この lə は通時的にはチベット・ビルマ祖語 (PTB) *lak「手」に遡る。すなわち、ləkhôn「腕輪」という語は本来 *lak「手」+ khon「嵌める」のような N+V 複合語の第一音節が弱化して成立したものであると考えることができる。

このように、弱化が一音節 + 一音節から成る複合語に起こると前部要素の本来の意味は極めて不透明 (opaque) なものになる。この種の現象は東南アジア大陸部諸語に広く認められ、Matisoff (1989) は ‘prefixization of compound constituents’ と呼んでいる。同様の例を次表に挙げる。

表 12：ジンポー語に見られる ‘prefixization of compound constituents’

例				起源
šəday「臍」	šəbí「頬」	šəro「虎」	səgû「羊」	< PTB *sya「肉, 動物」
bərèn「龍」				< *(lə)pu「蛇」+ rèn「長い」

3.4.2.2 ‘Sesquisyllabization’

ジンポー語は本来的な sesquisyllabic words を豊富に有するのみならず、一音節語や二音節語も派生や弱化によって sesquisyllabic words へと移行する現象が観察される。前者の例としては、一音節語に ʔə- という無意味接頭辞を付加して一音節語を sesquisyllabic words へと膨張させる例が見られる。この接頭辞は固有の意味を持たず、音節数を増加させるためだけに用いられる。なお、この接頭辞が付加される語は語彙的に指定されており、どの語にでも付加できるというわけではない。

表 13：無意味接頭辞 ʔə-

cen「半分」	>	ʔə-cen	gà「語」	>	ʔə-gà	gá「地」	>	ʔə-gá
jà「金」	>	ʔə-jà	kòp「貝」	>	ʔə-kòp	tèn「時」	>	ʔə-tèn
kyú「利益」	>	ʔə-kyú	làp「葉」	>	ʔə-làp	la「男」	>	ʔə-la
mú「仕事」	>	ʔə-mú	mun「髪」	>	ʔə-mun	maŋ「死体」	>	ʔə-maŋ
myìʔ「目」	>	ʔə-myìʔ	myiŋ「名」	>	ʔə-myiŋ	myú「種類」	>	ʔə-myú
nàm「森」	>	ʔə-nàm	này「ヤム」	>	ʔə-này	num「女」	>	ʔə-num
núʔ「脳」	>	ʔə-núʔ	pràt「時期」	>	ʔə-pràt	phìʔ「皮」	>	ʔə-phìʔ
rì「糸」	>	ʔə-rì	rì「槍」	>	ʔə-rì	rù「根」	>	ʔə-rù
ráy「物」	>	ʔə-ráy	sày「血」	>	ʔə-sày	šàn「肉」	>	ʔə-šàn
šàt「米」	>	ʔə-šàt	sàk「年齢」	>	ʔə-sàk	sáw「油」	>	ʔə-sáw
tàw「壺」	>	ʔə-tàw	tsàm「力」	>	ʔə-tsàm	tsì「薬」	>	ʔə-tsì
tsiŋ「草」	>	ʔə-tsiŋ	tsíp「巣」	>	ʔə-tsíp	wa「歯」	>	ʔə-wa
wàn「火」	>	ʔə-wàn	wan「皿」	>	ʔə-wan			

後者の例としては、本来‘full’な第一音節を持つ二音節語が第一音節の弱化によって sesquisyllabic words へ移行する現象が挙げられる。この変化は通時的にも共時的にも観察される。通時的変化の例は先述したが、*lak「手」+ khon「嵌める」---> ləkhon「腕輪」のような例である。この種の例では共時的には sesquisyllabic words のみが観察されることになる。

一方、この弱化プロセスは共時的にも観察される。例えば、gìnsúp ~ gəsúp「遊ぶ」, šìŋgrùp ~ šəgrùp「囲む」, mìwà ~ məwà「漢族」, wùloy ~ wəloy「水牛」のような例である。後者の発音は早い発話においてしばしば観察される形式である。この種の例では、二音節語と sesquisyllabic words が共時的に併存している状態にある。これらの二音節語も最終的には完全な sesquisyllabic words へと移行する可能性がある。この弱化プロセスが一音節 + 一音節の複合語に生じた場合、前部要素の本来の意味は極めて不明瞭になる。これは共時態に見られる ‘prefixization of compound constituents’ の例といえよう。例えば、sùtdèk ~ sədèk「箱」

(cf. sùt「富」, dèk「箱」), gùpcóp ~ gəcóp「帽子」(cf. gùp「被る」, cóp「被る」), lùydùy sì ~ lədùy sì「蜜柑」(cf. lùy「多汁の」, dùy「甘い」, sì「実」) などの例が観察される。

上記の交替は多くの話者に観察される例であるが、ある種の例は一部の話者にのみ見られる。これには次の 2 通りのパタンがある。1) 大部分の話者は弱化形のみを用いるが一部の話者は非弱化形と弱化形の両方を用いる。例えば、「カメレオン」を表す語に関して、大部分の話者は sənyên という形式のみを用いるが、一部の話者 (特に、高年齢層) は šíŋnyên という形式をも用いる。同様の例として sìnlí と səlí「遺産」, sìnlu と səlu「水蒸気」, sùmmyít と səmyít「針」, gìnlen と gəlen「手渡す」のような例がある。2) 大部分の話者が非弱化形を用いるが、一部の話者は弱化形をも用いる。例えば、「居間」を表す語に関して、大部分の話者は dódàp (cf. dó「供する」, dàp「部屋」) という非弱化形のみを用いるが、一部の話者は dədàp という弱化形をも用いる。以上のバリエーションに関しては次ような解釈が許されると思われる。すなわち、1) のパタンを示す語は弱化プロセスの末期にある語であり、一方、2) のパタンを示す語は弱化プロセスの初期的状態にあるものと考えられる。

以上、一音節語および二音節語の sesquisyllabic words への移行を見たが、さらに、この言語では 'full' な第一音節を持つ二音節語が sesquisyllabic words として借用語されるという例も観察される。このとき、借用元の語が複合語である場合、その借用元複合語の語構成は不明瞭になるといえる。例えば、次表のような例がある。表の例ではシャン語 class term の paa^{1}「魚」や maak^{2}「実」がジンポー語において二音節語の一部になっている例が見られる。この種の語は、ジンポー語において、ジンポー語の class term をさらに伴って用いられることもある (例：ŋá「魚」+ bəlúk「鰻」>「鰻」)。

表 14：借用語の 'sesquisyllabization'

ビルマ語形式		ジンポー語形式
s^{h}é＋leiʔ	「煙草」(lit. 煙草＋巻く)	səlík

シャン語形式		ジンポー語形式
paa^{1}+luk^{4}	「鰻」(lit. 魚+穴)	bəlúk
paa^{1}+law^{1}	「魚醤」(lit. 魚+？)	bənàw
maak^{2}+ʔun^{1}	「ココナツ」(lit. 実+ココナツ)	məʔûn
maak^{2}+kɔ^{3}	「梨」(lit. 実+？)	məgo
maak^{2}+kɔk^{2}	「林檎」(lit. 実+？)	məkók
maak^{2}+laaŋ^{4}	「ジャックフルーツ」(lit. 実+？)	məlaŋ
p^{h}aa^{3}+tset^{5}	「タオル」(lit. 布+拭く)	phəjèt
p^{h}ak^{4}lo^{4}	「ニンニク」	phəro

3.4.3 ‘Prenasalized words’

第一音節に成節鼻音を持つ二音節語を ‘prenasalized words’ と呼ぶ。

表 15：ジンポー語における ‘prenasalized words’

名詞	nbuŋ「風」	ntsin「水」	ngu「米」	nmày「尾」	nlùŋ「石」	nsén「声」
動詞	nnan「新しい」					

この種の成節鼻音は丁寧に発音された場合、声調を持つように発音されることがあるが、しばしば非強勢で発音されその場合は声調が曖昧になる。成節鼻音のピッチが語の弁別に用いられることはないため、本稿では、音韻的には成節鼻音は声調を持たないものと考える。成節鼻音は 1) 二音節語の第一音節にのみ出現する 2) 単語末には現れない 3) しばしば非強勢で発音される 4) 声調を持たない、などの点で先述の副音節と類似性を見せる。さらに、次表のように ‘full’ な第一音節を持つ二音節語が弱化して prenasalized words になることがあるが、この点でも副音節と類似している。副音節の表 (表 **11**) を見ると *nə, *ŋə のような形式が欠けており、成節鼻音はこの穴を埋めるため、成節鼻音は音韻論的には nə または ŋə のような副音節として解釈することができる可能性があるといえる。

表 16：‘Prenasalized words’ への弱化

nìŋmày	>	nmày「尾」	nìŋsén	>	nsén「声」	nìŋgùn	>	ngùn「力」
nìŋthu	>	nthu「刀」	nìŋnan	>	nnan「新しい」	númphû	>	nphû「埃」

3.4.4 ‘Disyllabic words’

本稿では副音節または成節鼻音ではない ‘full’ な第一音節を持つ二音節語を ‘disyllabic words’ と呼ぶ。この種の語の大部分は第一音節の形式が限定的である点で特徴的である。

表 17：ジンポー語における ‘disyllabic words’

gùm	gùmgay「老婆」	gùmphrò「銀」	gùmrà「馬」	gùmsà「封建」
	gùmlàw「抗する」	gùmlót「跳ねる」	gùmphòn「纏める」	gùmróŋ「誇る」
gìn	gìnrà「場所」	gìnthóŋ「暑季」	gìnwaŋ「地区」	gìnday「茎」
	gìnlút「陥没する」	gìnkhaʔ「区別する」	gìnsá「老いた」	gìnsúp「遊ぶ」
šiŋ	šìŋma「背中」	šìŋlét「舌」	šìŋgàn「外」	šíŋná「棒」
	šìŋjòŋ「競う」	šìŋtót「跳ぶ」	šìŋgrúp「囲む」	šìŋgà「遮る」
sum	sumpi「笛」	sumri「ロープ」	sùmla「図」	sùmdu「金槌」
	sùmrù「考慮する」	sùmli「飾る」	sùmróʔ「武装する」	súmsáy「笑う」

この種の語彙は第一音節の形式が同一であるにも関わらず、意味的共通性を有していない。そのため、この種の第一音節に特定の意味を認めることは困難である。また、これらの語彙は通常、分析することのできない単一の形態素である。例えば、gùmrà「馬」を gùm-rà、gùmsà「封建」を gùm-sà のように分析することはできない。ただし、一部の例では第二音節目に意味を認めることも可能である。例えば、gùmgay「老婆」(cf. dìŋgay「老婆」, *gay), gùmphrò「銀」(cf. phrò「白い」) のような例は第二音節に意味が認められる。ただし、この種の例も通常、話者には分析できない単一の語として認識されている。

ジンポー語の disyllabic words の大部分は上述の第一音節を持つ語が占めている。この種の第一音節を持たない disyllabic words は少数である。本稿では、仮にこの種の第一音節を 'general preformative' と呼ぶ。

general preformative は、先述の副音節と同様、その形式が限定的であり、また、頻度にも偏りが認められる。Hanson (1906) 収録の全語彙を分析した結果、general preformative は次表のような形式にまとめられることが判明した (表中括弧内の数字は収録語彙数、*はその形式が存在しないことを示す)。

表 18：ジンポー語における 'general preformative' (Hanson 1906)

	-m		-n		-ŋ	
	-i-	-u-	-i-	-u-	-i-	-u-
p-	*	*	pin- (2)	*	*	puŋ- (2)
ph-	*	*	*	*	*	phuŋ- (3)
b-	*	*	*	*	*	buŋ- (32)
t-	*	*	*	*	tiŋ- (24)	*
th-	*	*	*	*	thiŋ- (69)	*
d-	*	dum- (40)	*	*	diŋ- (136)	*
k-	*	kum- (31)	kin- (20)	*	*	kuŋ- (13)
kh-	*	khum- (2)	khin- (39)	*	khiŋ- (3)	khuŋ- (9)
g-	*	gum- (98)	gin- (70)	*	giŋ- (8)	guŋ- (22)
c-	*	*	*	*	ciŋ- (44)	*
j-	*	*	*	*	jiŋ- (21)	*
š-	*	*	*	*	šiŋ- (119)	*
ts-	*	*	tsin- (9)	*	*	*
s-	*	sum- (82)	sin- (19)	*	siŋ- (34)	*
z-	*	zum- (1)	zin- (2)	zun- (2)	ziŋ- (10)	*
m-	*	*	min- (1)	*	*	*
n-	*	num- (65)	*	*	niŋ- (64)	*
w-	*	*	*	wun- (39)	*	*

これらの形式は次のように一般化することが許される。general preformative の大部分は 1) 閉音節である、2) 鼻音末子音を持つ、3) 狭母音を持つ、4) 子音結合を持たない。さらに、5) 末子音 -m を持つ音節の主母音は u である、6) 末子音 -n を持つ音節の主母音は i である、7) 末子音 -ŋ を持つ音節の主母音は頭子音が歯茎音であるとき i であり、それ以外では u である (表の形式のうち網掛けの形式は以上の一般化に反する形式である。反例は wun- を除いて語彙数が少ないといえる)。また、表では声調を示していないが general preformative の多くは 8) 低下降調を持つ。なお、表を見れば分かるように、子音 ʔ, h, ŋ, l, r, y を頭子音に持つ general preformative は存在しないといえる。

次表に general preformative を持つ語の他の例も掲げておく。

表 19：'general preformative' を持つ語

dùm	dùmsu「牛」	dùmsa「霊能者」	dùmsí「瓶の口」	dùmbrì「散らばる」
nùm	nùmríʔ「露」	nùmgo「屋根」	nùmthèt「指示する」	nùmjùt「突く」
khin	khìngàw「岸」	khínrû「田螺」	khíntûm「抱く」	khyìndiŋ「妨げる」
sìn	sìnphróʔ「東」	sìnnáʔ「西」	sìn.yú「ワイヤー」	sìnlí「遺産」
dìŋ	dìŋduŋ「北」	dìŋdàʔ「南」	dìŋkhu「世帯」	dìŋla「老人」
nìŋ	nìŋbo「指導者」	nìŋmày「尾」	níŋthóy「光」	nìŋnan「新しい」

3.4.5 語構造：まとめ

上述した語構造の各例を音節構造も含め挙げると次のようになる。

表 20：語構造：まとめ

Monosyllabic words: C(C)V(C)	
CV	bá「疲れた」
CVC	bàn「休む」
CCV	brá「広がる」
CCVC	bràŋ「長男」

Prenasalized words: N-C(C)V(C)	
NCV	ngu「米」
NCVC	nbuŋ「風」
NCCV	npyê「鞄」
NCCVC	nkruŋ「刀尖」

Sesquisyllabic words: Cə-C(C)V(C)	
CəCV	ləpu「蛇」
CəCVC	ləpay「左手」
CəCCV	ləkhrá「右手」
CəCCVC	ləpran「間」

Disyllabic words: CV(C)-C(C)V(C)	
CVCCV	gùmrà「馬」
CVCCVC	gùmgay「老婆」
CVCCCV (少)	gùmphrò「銀」
CVCCCVC (少)	šìŋgrùp「囲む」

以上の 4 タイプの語構造の基礎語彙全体に占める割合を割り出すための予備的調査として、筆者は服部編 (1967) に基づく 681 語 (名詞と動詞のみ。名詞 331 語; 動詞 350 語) を分析した。その結果、以下の結果が得られた。

表 21：基礎語彙に占める語構造の割合

	1 音節語	2 音節語		
	Monosyllabic	Prenasalized	Disyllabic	Sesquisyllabic
語彙数 (割合)	345 語 (50.7%)	336 語 (49.3%)		
		31 語 (4.6%)	57 語 (8.4%)	248 語 (36.4%)
2 音節語に占める割合	—	9.2%	17.0%	73.8%
非 sesqui. 対 sesqui.	433 語 (63.6%)			248 語 (36.4%)
名詞 (名詞中の割合)	118 語 (35.6%)	30 語(9.1%)	48 語(14.5%)	135 語 (40.8%)
動詞 (動詞中の割合)	227 語 (64.9%)	1 語(0.3%)	9 語 (2.6%)	113 語 (32.3%)

4　語類

本稿では、語類を次の 3 つの基準を用いて認定する: a) 単独で文を形成することができる、b) 否定辞を付加することができる、c) 動詞の項になりうる：名詞 [+a, −b, +c]；動詞 [−a, +b, ±c]；副詞 [+a, −b, −c]；助詞 [−a, −b, −c]。このうち助詞は相互に異なる特徴を持つものを含んでおり、8 つのサブタイプに分類される：類別詞、名詞助詞、格標識、TAM 標識、助動詞、副助詞、接続助詞、文末助詞。なお、以上の 4 つの語類に加えて間投詞も認められる。

5　名詞句

最大の名詞句の内部構造は以下のように示すことができる。ただし、以下のカテゴリをすべて含む名詞句が現れることはほとんどない。

DEM-NOUN-V_{adj}-DEM-PL-[CLF-NUM]-NOMINAL PARTICLE

図 2：名詞句の構造

5.1　指示詞

指示詞は近/中/遠の対立によって構成される。また、遠称は高/中/低の対立をも持つ。

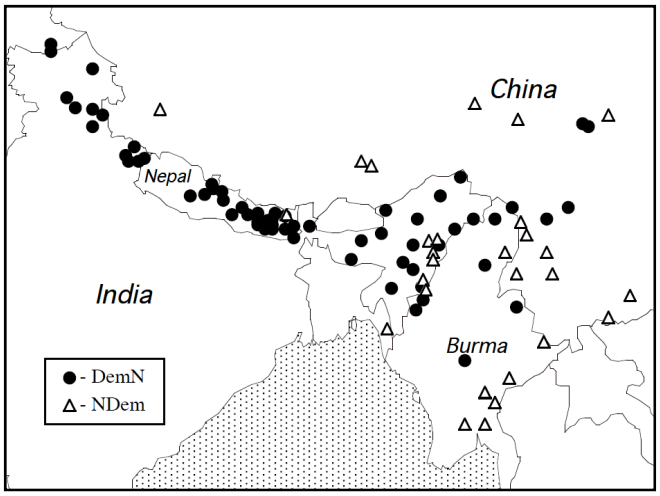
表 22：指示詞

	近称	中称	遠称
中	nday「この、これ」	day「その、それ」	wó (or wórà)「あの、あれ」
高			thó (or thórà)「(上の) あの、あれ」
低			lé (or lérà)「(下の) あの、あれ」

指示詞は主要部名詞の前後どちらにも現れうる: nday mà, mà nday「この子供」. (なお、**10** 節のテキストの例はすべて主要部名詞の前に指示詞が置かれるパタンを取っているが、同

一話者による別のテキストでは主要部名詞に後続する例も多数見られた)。指示詞の位置による意味的差異は不明である。なお、口語では指示詞が主要部名詞を取り囲む形で 2 つ現れる例も見られる: nday mà nday「この子供」. この種の例はおそらく [nday mà] nday または nday [mà nday] のような構造を持ち、指示詞+名詞と指示詞の並列構造を持つものと思われる。照応用法には day「その、それ」または nday「この、これ」が用いられ、遠称は用いられない。

以上のような指示詞の位置に見られる二面性はジンポー語の分布地域と無関係ではないと思われる。すなわち、この言語が分布する西側には DEM-N のパタンを示すインド圏 (Indosphere) の諸言語が分布し、一方、東・南東には N-DEM のパタンを示す東南アジア大陸部諸語が分布しているのである (右の地図も参照。なお、Dryer (2008) において、ジンポー語は DEM-N パタンのみを示す言語として分類されており、この地図では ● で示されているのであるが、これは誤りである)。



地図 2: チベット・ビルマ諸語における指示詞と名詞の順序 (Dryer 2008)

5.2 数詞

数詞は 10 進法を用いる。

表 23 : 数詞

0	—	10	ši	20	khun
1	ləŋây	11	ši+ləŋây	21	khun+ləŋây
2	ləkhôŋ	12	ši+ləkhôŋ	22	khun+ləkhôŋ
3	məsum	13	ši+məsum	23	khun+məsum
4	məli	14	ši+məli	24	khun+məli
5	məŋa	15	ši+məŋa	25	khun+məŋa
6	krúʔ	16	ši+krúʔ	26	khun+krúʔ
7	sənìt	17	ši+sənìt	27	khun+sənìt
8	mətsát	18	ši+mətsát	28	khun+mətsát
9	jəkhù	19	ši+jəkhù	29	khun+jəkhù

10 以上の数はそれぞれを組み合わせて作られるが、「30」は sùm+ši のように第一音節が脱落する (*məsum+ši)。また「20」は khun という特殊な形式を用いる (*ləkhôŋ+ši)。これは

手足の指の数の合計が 20 本であることと無関係ではないであろう。100 以上は lətsa「100」, ləkhôŋ+tsa「200」, məsum+tsa「300」のように言う。注意を要するのは十と百の桁数が基数の後に置かれるのに対し、千以上の桁数が基数の前に置かれる点である (次表を参照)。なお、gədè「いくつ、いくら」の分布は数詞と同一であるため、この語は数詞の一種であると考えられる。

表 24：桁数の分布

‘50’	məŋa+ši	*ši+məŋa	「何十」	gədè+ši	*ši+gədè
‘500’	məŋa+tsa	*tsa+məŋa	「何百」	gədè+tsa	*tsa+gədè
‘5,000’	*məŋa+khiŋ	khiŋ+məŋa	「何千」	*gədè+khiŋ	khiŋ+gədè
‘50,000’	*məŋa+mùn	mùn+məŋa	「何万」	*gədè+mùn	mùn+gədè
‘500,000’	*məŋa+sèn	sèn+məŋa	「何十万」	*gədè+sèn	sèn+gədè
‘5,000,000’	*məŋa+wàn	wàn+məŋa	「何百万」	*gədè+wàn	wàn+gədè
	~ *məŋa+ši+sèn	~ sèn+məŋa+ši	「何百万」	~ *gədè+ši+sèn	~ sèn+gədè+ši

チベット・ビルマ語派の観点から見るとジンポー語の数詞 ləŋây「1」と ləkhôŋ「2」はこの言語にのみ見られ、これらの数詞はこの言語における二次的発展であることが分かる。本来の形式 (mi「1」, ni「2」) は一部の複合語にのみ残存している: bàt+mi「一週」, ni+ní「二日」, ni+phót「二朝」, ni+náʔ「二夜」, ni+niŋ「二年」.この mi「1」という形式は他にも、ləŋây「1」の後に置かれて不定「ある～」の意味を表すこともある (テキストの例 4)。

また、数に関する注意すべき語として他に yán という語がある。この語は「二人」を意味するが、この語が特殊であるのはふたつの名詞を接続する働きをも有する点である。

(1) gənù=thèʔ gəwà yán
母=COM 父 二人
「母と父二人」

(2) gənù yán gəwà
母 二人 父
「母と父二人」

5.3 類別詞

類別詞の数は少ない。類別詞の多くは借用語である: məray「人」, bùk「本」(< 英語), joy「秤」 (< シャン語)。名詞句における類別詞の順序は主要部名詞－類別詞－数詞の順である。数詞は類別詞を介さず、直接的に名詞を修飾することも多いが、類別詞が用いられる場合と用いられない場合とでの意味的差異は明らかではない。

(3)　məšà　məray+məsum
　人　　CLF+3
　「三人の人」
(4)　məšà　məsum
　人　　3
　「三人の人」

また、類別詞の独立性は高く、主要部名詞を伴わずに用いられることもある。類別詞 məray は単独では用いることができないが、この形式に指示詞を付加することも可能であり、名詞的であるといえる。

(5)　məray+məsum
　CLF+3
　「三人の人」
(6)　məray　nday
　CLF　　この
　「この人」

measure words の中には上記の類別詞とは統語的な振る舞いが異なるものが存在する。例えば、məsum+niŋ「三年」, məsum+làŋ「三回」のような例である。これらは、1) 主要部名詞を取らない 2) numeral-measure words の順を取る。したがって、本稿ではこれらの形式は類別詞ではなく複合語の要素であると考える (cf. šəniŋ「年」, kəlàŋ「一回」)。

テキストには (7) のような例が見られ、この例では表面上、類別詞と数詞が副助詞により分断されている。このような例の構造をどのように分析できるかは現時点では不明である。

(7)　jùm　joy=mùŋ　sùmši　šá=na
　塩　　CLF=も　　30　　食べる=FUT
　「塩も 30 秤食べる」

上述の通り名詞句中の類別詞の順序は主要部名詞－類別詞－数詞の順であるが本テキストには類別詞－数詞－主要部名詞の例も現れる。筆者のデータ中この順序が見られるのは本テキストのみである。この例は [məray+məsum]+məšà という複合語ではないかと思われる。

(8)　məray　məsum　　məšà
　CLF　　3　　人
　「3 人の人」

5.4　複数標識

名詞句中の PL スロットには =ni のみが入る: la=ni「男たち」. 複数を表す形式には他にも =the があるが、この形式は PL スロットには現れず NOMINAL PARTICLE のスロットに現れるため、これは名詞助詞であると考えられる (以下の表を参照。表中の語彙: mà「子供」, məray「～人」, məsum「3」, yòŋ「全て」)。なお、=ni および =the の意味的差異は現時点では不明である。

表 25：**複数標識の分布**

	=ni	=the
「三人の子供たち」	mà=ni məray+məsum	*mà=the məray+məsum
「三人の子供たち」	*mà məray+məsum=ni	mà məray+məsum=the
「三人の子供たち」	mà=ni məsum	*mà=the məsum
「三人の子供たち」	*mà məsum=ni	mà məsum=the
「全ての子供たち」	mà=ni yòŋ	*mà=the yòŋ
「全ての子供たち」	*mà yòŋ=ni	mà yòŋ=the

5.5　名詞助詞

名詞助詞 (NOMINAL PARTICLE) は名詞句の末尾に現れる助詞である。次のような形式がある：=dərám (or rám)「くらい」, =šəgù「それぞれ」, =phràʔ「ずつ」, =ján「余り」, =the 'PL'。

5.6　'Adjectival verbs'

'adjectival verbs' (V_{adj}) とは名詞を後ろから修飾する能力を持つ動詞である。ジンポー語における基本的な名詞修飾の方法は関係節標識 (=TAM 標識) =ʔay を用いて名詞を前から修飾する方法である。ところが、いくつかの動詞は統語的に自由に名詞を後置修飾する能力を持つ (例 9, 10 および表 **26** を参照)。

本稿ではこの能力を持つ動詞を 'adjectival verbs' と呼ぶ。adjectival verbs は 12 語しかなく、これらは 4 つの意味タイプに収束する (表 **27** を参照)。これら 4 つの意味タイプは、類型的に閉じたクラスの形容詞を持つ言語の形容詞に見られる意味タイプと同様である点で興味深い (Dixon 1977)。これらの形式には否定辞を前接できるため、本稿の基準ではこれらは動詞のサブタイプとして分類される。

(9)　gəbà=ʔay　šəkûm
　　大きい=TAM　壁
　　「大きい壁」

(10)　šəkûm　gəbà
　　壁　大きい
　　「大きい壁」

表 26：状態動詞による名詞修飾

		後置修飾	前置修飾	意味
gəbà	「大きい」	šəkûm gəbà	gəbà=ʔay šəkûm	「大きな壁」
nnan	「新しい」	šəkûm nnan	nnan=ʔay šəkûm	「新しい壁」
gəjà	「よい」	šəkûm gəjà	gəjà=ʔay šəkûm	「よい壁」
caŋ	「黒い」	šəkûm caŋ	caŋ=ʔay šəkûm	「黒い壁」
jàʔ	「硬い」	*šəkûm jàʔ	jàʔ=ʔay šəkûm	「硬い壁」
thàt	「厚い」	*šəkûm thàt	thàt=ʔay šəkûm	「厚い壁」
tsò	「高い」	*šəkûm tsò	tsò=ʔay šəkûm	「高い壁」
li	「重い」	*šəkûm li	li=ʔay šəkûm	「重い壁」
šáy	「違う」	*šəkûm šáy	šáy=ʔay šəkûm	「違う壁」

表 27：ジンポー語における 'adjectival verbs'

意味	例
'DIMENSION'	gəbà「大きい」gəjì「小さい」gəlù「長い」gədùn「短い」
'AGE'	nnan「新しい」dìŋsà「古い」
'VALUE'	gəja「よい」
'COLOUR'	phrò「白い」, caŋ「黒い」, khyeŋ「赤い」, tsìt「緑の」, mùt「青い」

なお、jùm「塩」+ dùy「甘い」>「砂糖」のような例でも動詞が名詞を後置修飾しているのであるが、dùy「甘い」のような動詞の後置修飾には統語的な自由度がないことから、このような例は複合語であると考えられる (cf. *mùk+dùy lit. 菓子+甘い).

5.7 人称代名詞

人称代名詞は単数/双数/複数と 1/2/3 人称の対立を成す。

表 28：人称代名詞

	SG	DU	PL
1st	ŋay	ʔán	ʔánthe
2nd	naŋ	nán	nánthe
3rd	ši	šán	šánthe

人称代名詞は性の区別および除外・包括の区別を持たない。

(11) {ŋay/naŋ/ši} {la/num} rê
1SG/2SG/3SG 男/女 COP
「私/あなた/彼彼女は男/女です」

(12) <u>ʔánthe</u> naŋ=phéʔ yu=ʔay
1PL 2SG=ACC 見る=TAM
「私たちはあなたを見た」

(13) <u>ʔánthe</u> ràw sa=gàʔ
1PL 一緒に 行く=HORT
「私たちは一緒に行きましょう」

5.8 疑問詞

疑問詞には次のような形式がある: pha「何」, gəday「誰」, gərà「どの」, gədè「いくつ」. gərà「どの」は格標識を伴って、様々な意味を表すことができる：gərà=kóʔ「どこに」, gərà=dèʔ「どこへ」gərà=khu「どのように」(cf. =kóʔ「に、で」, =dèʔ「へ」, =khu「ように」)。

5.9 場所名詞

場所名詞は場所的概念を表す名詞であり、閉じたクラスを成す：ntsa「上」, npúʔ「下」, šoŋ「前」, phaŋ「後」, gətà「中」, šìŋgàn「外」。

5.10 名詞サブクラスの特徴

以上で見てきた名詞サブクラスの特徴をまとめると次表のようになる。

a) GEN/REL__, b) __ni 'PL', c) CLF__, d) __V_{adj}, e) __CLF+NUM, f) DEM__, g) ±RDP:

表 29：名詞サブクラスの特徴

	a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)
普通名詞.	yes	yes	no	yes	yes	yes	no/yes
指示詞.	no	yes	yes	no	yes	no	no
人称代名詞.	no	no/yes	no	no	yes	no	no
疑問詞.	no	yes	no	no	no	no	yes
数詞.	no	no	yes	no	no	no	yes
場所名詞.	yes	no	no	no	no	yes	no

6 格標識

名詞句の統語的・意味的役割は主に名詞句に後置される格標識によって示される。

表 30：格標識

形式	必須項を標示	必須でない項を標示	現れるレベル	グロス
ʔàʔ		所有者	句, 節	GEN
ná		所有者, 起点	句, 節	GEN
phéʔ	被動者, 受領者	経路	節	ACC
thèʔ		道具, 材料, 随伴者, 様態, 原因, 列挙物	節, 句	COM
kóʔ		場所, 着点	節	LOC
thàʔ		場所, 比較の基準	節	LOC
ʔè		場所, 着点	節	LOC
dèʔ		方向, 着点, 場所	節	ALL
kóʔnná		起点	節, 句	ABL
dùhkrà		着点	節	LMT

必須項を標示する格標識は =phéʔ ‘ACC’ のひとつのみである。必須項のうち、S/A は格標示されず、O は =phéʔ で標示されうる。したがって、必須項の格標示パタンは主格・対格型である。A と O が同一の意味範疇に属する名詞句である場合、A と O に曖昧性が生じる。このときに O 側に付加される格助詞が =phéʔ である (14, 15, 16, 17)。したがって、どの名詞句が A でどの名詞句が O かが明らかである場合は、=phéʔ が通常省略される (18)。

(14) ŋay ši=phéʔ gəyèt=ʔay
1SG 3SG=ACC 殴る=TAM
「私は彼を殴った」

(15) ši ŋay=phéʔ gəyèt=ʔay
3SG 1SG=ACC 殴る=TAM
「彼は私を殴った」

(16) gùy ləʔnyaw=phéʔ gəwá=ʔay
犬 猫=ACC 噛む=TAM
「犬が猫を噛んだ」

(17) ləʔnyaw gùy=phéʔ gəwá=ʔay
猫 犬=ACC 噛む=TAM
「猫が犬を噛んだ」

(18) ŋay šàt šá=ʔay
1SG 飯 食べる=TAM
「私はご飯を食べた」

7　動詞複合

動詞複合 (Verbal Complex, VC) の内部構造は以下のように示すことができる。

[$_{VC}$ [V_1+…V_n]-AUX-TAM]

図 3：動詞複合の構造

7.1　動詞

本稿では否定辞 n- を付加することができる語をすべて動詞であると見なす (negatability): n-šá「食べない」, n-gəbà「大きくない」, *n-məšà (cf. məšà「人」).

ジンポー語には反義語を持たない語がいくつか存在し、否定辞はこのような反義語の欠如を埋める役割も果たしている: n-gəja「悪い」(cf. gəja「よい」) 、n-lóʔ「少ない」(cf. lóʔ「多い」) 、n-ràʔ「嫌う」(cf.ràʔ「好む」).

動詞の引用形式 (citation form) には TAM 標識のうち最も無標である =ʔay 'ATELIC' が付加される。動詞は開いたクラスを成し、借用語も比較的自由に動詞として取り入れられる: sèt=ʔay「電話する」(< ビルマ語 s^{h}εʔ), zèn=ʔay「切る」(< 漢語 jiǎn), khájá=ʔay「教える」(< シャン語), *out*=ʔay「ログアウトする」.

7.2　動詞連続

動詞のスロットには統語的な依存関係を示す標識を伴うことなく複数の動詞が生起しうる (動詞連続, serial verbs)。動詞連続の特徴は次の二点にまとめられる。a) 動詞連続には統語的要素が介在しない b) 主語は動詞間で共有されなければならない。

a) については、例えば、khàʔ「水」+ phùŋyòt「泳ぐ」のようなイディオム的表現が動詞連続の V_2 として用いられた場合、khàʔ「水」は V_1 と V_2 の間には現れえず、V_1 の前に置かれなければならない: khàʔ sa phùŋyòt「行って泳いだ」 (cf. sa「行く」, *sa khàʔ phùŋyòt)。

b) については、例えば、東南アジア大陸部の SVO 語順を持つ言語にしばしば見られるような、V_1の主語がV_2の目的語になるような動詞連続 (switch-function SVCs) は認められない: *gàp si「撃ち殺す」(lit. 撃つ-死ぬ). この種の意味を表す動詞連続を形成する場合、gàp sàt (lit. 撃つ-殺す) のようにV_2を他動詞にして主語を統一するか、もしくは、継起を表す nná 'SEQ' を用いて gàp nná si のように複文の形にして表す必要がある。

動詞連続は並列される動詞間に次のような様々な意味関係が現れる。

1) 'SEQUENTIAL' 継起的な事象を表す。他動詞、動作自動詞、状態自動詞をそれぞれ A, Sa, So と表すと、このタイプの動詞連続にありうる組み合わせは Sa+Sa, Sa+A, A+Sa, A+A, So+So のどれかである (*Sa＋So, *So＋Sa, *A＋So, *So＋A の組み合わせは無い)。

表 31：SEQUENTIAL タイプの動詞連続に可能な組み合わせ

	e.g.	gross
Sa＋Sa	šàŋ yúp「入って寝る」	(lit. 入る-寝る)
Sa＋A	sa šá「行って食べる」	(lit. 行く-食べる)
A＋Sa	gəšún phròŋ「奪って逃げる」	(lit. 奪う-逃げる)
A＋A	gəlo dùt「作って売る」	(lit. 作る-売る)
So＋So	thèn khràt「壊れて落ちる」	(lit. 壊れる-落ちる)

2) ‘DESCRIPTIVE’ このタイプの動詞連続では V_1 が V_2 を副詞のように修飾する。この種の V_1 には意味変化が起きたものも観察される。

表 32：DESCRIPTIVE タイプの動詞連続の例

意味変化	e.g.	gross
	gəthè šəga「ささやいて話す」	(lit. ささやく-話す)
	ləʔnyàn khom「ゆっくり歩く」	(lit. ゆっくりだ-歩く)
	ləwàn tsun「速く言う」	(lit. 速い-言う)
	mərón šəgá「叫んで呼ぶ」	(lit. 叫ぶ-呼ぶ)
	šəkòn tsun「ほめて言う」	(lit. ほめる-言う)
盗む　＞こっそり	ləgú yúp「こっそり寝る」	(lit. 盗む-寝る)
協力する＞一緒に	jóm khom「一緒に歩く」	(lit. 協力する-歩く)
繋げる　＞続けて	mətút gəlo 「続けて行う」	(lit. 繋げる-行う)
加える　＞加えて	gəthàp tsun「加えて言う」	(lit. 加える-言う)

3) ‘PURPOSE’ 目的の意味関係を表す。このタイプのV_2は移動動詞 sa「行く、来る」のみである。

(19)　šá　　sa=ʔay
　　食べる　行く=TAM
　　「食べに行った」

(20)　ka　　sa=ʔay
　　踊る　行く=TAM
　　「踊りに行った」

4) ‘COMPLEMENTATION’ このタイプのV_2の数は限られている。

表 33：COMPLEMENTATION タイプの動詞連続の例

	e.g.	gross
V_2が他動詞	šədu gərum「料理するのを手伝う」	(lit. 料理する-手伝う)
	ka šərín「書くのを教える」	(lit. 書く-教える)
	gəlo šəkùt「作るのを頑張る」	(lit. 作る-頑張る)
	šá ràʔ「食べるのを好む」	(lit. 食べる-好む)
	yu šərǒŋ「見るのを好む」	(lit. 見る-好む)
V_2が自動詞	lətáʔ yàk「選ぶのが難しい」	(lit. 選ぶ-難しい)
	tsúʔ lòy「腐りやすい」	(lit. 腐る-簡単だ)
	khom ləʔnyàn「歩くのが遅い」	(lit. 歩く-遅い)
	dùt gəja「売り上げがよい」	(lit. 売る-良い)
	kháy lóʔ「植えることが多い」	(lit. 植える-少ない)
	thí ləgòn「読むのが退屈だ」	(lit. 読む-退屈だ)

7.3 'Versatile verbs'

動詞連続を構成する動詞の中には文法化によって助動詞のような抽象度の高い意味を獲得した動詞が存在する。この種の動詞は単一の統語的位置のみならず、複数の統語的位置に出現する能力を持つ。このような性質を'versatility'と呼び、この性質を持つ動詞を'versatile verbs'と呼ぶ (Matisoff 1969, 1991a, Bisang 2006)[1]。

例えば、動詞 ce は本来、「知る」という意味を持つ動詞であるが、他の動詞とともに用いられた場合、「～できる」や「～する習慣がある」という意味を表すのであるが、この形式は本動詞の前後どちらにも現れることが可能である。この形式は、基本的に、本動詞の前に置かれた場合は「～できる」という能力可能の意味を表し、本動詞の後に置かれた場合は「～する習慣がある」という習慣の意味を表す。

(21) məjàp ce šá=ʔay
唐辛子 ce 食べる=TAM
「唐辛子を食べることができる」

(22) məjàp šá ce=ʔay
唐辛子 食べる ce=TAM
「唐辛子を食べる習慣がある」

versatile verbs は抽象的な意味を持ち、一見すると助動詞であるかのように見える。しか

[1] Matisoff は必ずしもこの意味に限って 'versatile verbs' という用語を用いているわけではないが、Bisang はこの意味に限定して用いている。ジンポー語ではこの用語を Bisang のように限定的な意味で用いるのが便利であるため、本稿では限定的な意味でこの用語を用いる。

しながら、これらの形式には否定辞を付加することができるため、本稿の基準では動詞と見なさなければならない。

(23) məjàp n-ce šá=ʔay
唐辛子 NEG-ce 食べる=TAM
「唐辛子を食べることができない」

(24) məjàp šá n-ce=ʔay
唐辛子 食べる NEG-ce=TAM
「唐辛子を食べる習慣がない」

次表に versatile verbs とその例をまとめて掲げておく (例中の šá は「食べる」という意味を表す動詞である。

表 34：ジンポー語における 'versatile verbs'

形式	本来の意味	派生的意味	否定	前置用法		後置用法	
ce	知る	できる		ce šá		šá ce	
			n-	n-ce šá	*ce n-šá	šá n-ce	n-šá ce
lù	得る	できる		lù šá		šá lù	
			n-	n-lù šá	*lù n-šá	šá n-lù	n-šá lù
may	よい	できる		may šá		šá may	
			n-	n-may šá	*may n-šá	šá n-may	n-šá may
daŋ	勝つ	できる		daŋ šá		šá daŋ	
			n-	n-daŋ šá	*daŋ n-šá	šá n-daŋ	n-šá daŋ
kam	意志がある	つもりだ		kam šá		šá kam	
			n-	n-kam šá	*kam n-šá	šá n-kam	n-šá kam
gúy	勇気がある	勇気がある		gúy šá		šá gúy	
			n-	n-gúy šá	*gúy n-šá	šá n-gúy	n-šá gúy
màʔ	なくなる	全て		màʔ šá		šá màʔ	
			n-	n-màʔ šá	*màʔ n-šá	šá n-màʔ	n-šá màʔ

本動詞と versatile verbs から成る動詞連続における否定辞の付加位置に関しては、論理的に4つの可能性があるが、上表を見れば判明する通り、versatile verbs－否定辞－本動詞という順序は容認されない。この事実から「否定辞は versatile verbs よりも左側になければならない」という一般化を導き出すことが許される。

versatile verbs を動詞と見なす分析を支持する証拠は他にもある。助動詞が動詞連続の間に現れることができないのに対して、versatile verbs は動詞連続に介在することができると

いう事実である。つまり、動詞連続の間には助動詞などの統語的要素は介在しないが、「動詞」ならば介在してよいのである。

(25) šàt sa may šá=ʔay
飯 行く may 食べる=TAM
「ご飯を行って食べてよい」

7.4 助動詞

助動詞は動詞に後接され、ヴォイス性、アスペクト的意味、モダリティ、エヴィデンシャリティ、甚だしさなどの意味を表す。

表 35：助動詞

'VOICE'	'ASPECTUAL'	'MODALITY'	'EXTENTIVE'
=ya 'BEN'	=ŋà「ている」	=na 'FUT'	=káw「徹底的に」
=šəŋún 'CAUS'	=ši「まだ」	=sám「ようだ」	=láʔ「とても」
=lóm 'APPLICATIVE'	=màt「てしまう」	=giŋ「すべきだ」	=dìk「最も」
=khát 'RECIPROCAL'	=ga「ことがある」	=məyu「したい」	

助動詞は動詞複合に複数生起することがあるが、その場合の順序は必ずしも固定的ではない。ただし、生起順序に傾向は見られ、甚だしさのカテゴリは動詞に近い位置に現れ、一方、モダリティのカテゴリは基本的に助動詞の連続の末尾に現れるといえる。なお、一部の助動詞は重複させることができる。この場合「いつも」のような習慣的な意味を表す(テキストの例 8).

7.5 TAM 標識

TAM 標識は動詞複合の末尾に現れる。すべての動詞複合は TAM 標識を持つ。ただし、例外が 3 つある。1) 新聞の見出し・タイトルでは TAM 標識が現れない (テキストの例 1) 2) 助動詞 =na 'FUT' の後部には TAM 標識が現れないことがある (以下で述べる) 3) コピュラ動詞 rê は TAM 標識を取らない (**8.3** 節)。これら例外を除き、基本的に動詞複合は TAM 標識を持たなければならないといえる。

TAM 標識はアスペクトおよびムードを表す。ジンポー語は文法カテゴリとしてのテンスを持たず、アスペクト・ムード卓立型言語であるといえる。平叙文のアスペクトは =ʔay/=say 'ATELIC/TELIC' の二項対立を成す。=ʔay は最も無標な TAM 標識であり、動詞の引用形 (citation form) には =ʔay が付加される。一方、=say は開始点であれ終結点であれ、事態・状況が新局面に変化したこと・変化しつつあることを今のこととして述べる場合に用いら

れる: kóʔsi=say「もう空腹だ」, šá=say「もう食べ終わった」, wà=say=yô「もう帰るよ」, yúp=say=yô「もう寝るよ」(cf. yô ‘よ’)。その他の事象はすべて =ʔay によって表される。

典型的に、=ʔay は状態動詞に付加される場合は現在または過去、動作動詞に付加される場合は過去の事態を表す: gəja=ʔay「元気だ」, khyeŋ=ʔay「赤い」, khom=ʔay「歩いた」, gəyèt=ʔay「殴った」.

なお、現在の動作は助動詞 =ŋà ‘CONT’、未来の動作・状態は助動詞 =na ‘FUT’ を用いて表す: šá=ŋà=ʔay「食べている」, šá=na「行くつもりだ」. いまの例のように助動詞 =na ‘FUT’ を取る動詞には例外的に TAM 標識が現れないことが多い。このため =na ‘FUT’ も TAM 標識の一種と見なせる可能性がある。しかし、=na は TAM 標識ではない。なぜならば、=na の後に TAM 標識が現れうるからである: wà=na=say「もう帰ります」(cf. wà「帰る」).

ムードは DECLARATIVE/IMPERATIVE/HORTATIVE/OPTATIVE/INTERROGATIVE/EXCLAMATIVE の 6 項対立を成す (表 **36** を参照)。平叙文、疑問文、感嘆文には主語の人称制限が見られないが、その他の動詞文には主語の人称制限が見られる。すなわち、命令文の主語は 2 人称、勧誘文の主語は 1・2 人称、希求文の主語は 2 人称または 3 人称である。また、平叙文、疑問文、感嘆文の述語動詞としては意志動詞・無意志動詞ともに現れるのに対して、命令文および勧誘文の述語動詞は意志動詞であり、希求文の述語動詞は無意志動詞でなければならない。さらに、平叙文、疑問文、感嘆文には過去を表す要素が現れうるが、命令文、勧誘文、希求文には現れない。このようにジンポー語の動詞文は大きくふたつの類型に分類することができる。暫定的に本稿では、上述のようなある種の制限を持つ命令文、勧誘文、祈願文を行為的タイプの文と呼び、この種の制限を持たない平叙文および疑問文を認識的タイプの文と呼ぶ。なお、感嘆文はこのどちらにも属さない特殊なタイプであると考えておく。

表 36：**ムード**

TAM 標識	代表的な形式	e.g.
DECL	=ʔay	šá=ʔay「食べた」
IMP	=ʔùʔ	šá=ʔùʔ「食べろ」
HORT	=gàʔ	šá=gàʔ「食べよう」
OPT	=ʔùʔgàʔ	pyo=ʔùʔgàʔ「楽しくあれ」
INT	=nnî	šá=nnî「食べますか？」
EXCL	=ʔàʔkha	šá=ʔàʔkha「食べたのか！？」

8　その他の範疇

テキストを理解するうえで必要な範疇のうち、上述していない範疇についてここで若干触れておく。

8.1　副助詞

副助詞 (focal particles) には =gò ‘TOP’, =šà「だけ」, =cú「だけ」, =mùŋ「も」, =má「も」, =pi「さえ」などが認められる。副助詞は名詞句、動詞、副詞、節の後に置かれる。名詞句に付加される場合、副助詞は必ず格標識の後に置かれなければならない (テキストの例 10).

8.2　文末助詞

文末助詞 (sentence-final particles, SFP) には yô「よ、ね」, lo「よ、ね」, dàʔ「そうだ」, ŋa「だって」, nthén「かしら」, kún「かしら」, ʔi「ね、か」, ráy「か」, tâ「か」, mà「か」, lò「か」などがある。文末助詞は文の末尾に置かれる。疑問文は TAM 標識を用いて形成することも可能であるが (**7.5** 節)、特に口語では疑問文は文末助詞を用いて形成されることが多い。疑問を表す文末助詞の数は多くその意味的差異の詳細は不明であるが、ʔi「ね、か」, ráy「か」が一般的であり、mà「か」はややぞんざいである。文末助詞は時に数珠つなぎに複数個続けて用いられ、最大で 3 つ連続して現れることがある。

(26)　gərà=kóʔ　ŋà=ʔay=ráy
　　どこ=LOC　いる=TAM=SFP.Q
　　「どこにいますか」

(27)　gərà=kóʔ　ŋà=ʔay=ráy=kún=ʔi
　　どこ=LOC　いる=TAM=SFP.Q=SFP.Q=SFP.Q
　　「どこにいますか」

8.3　コピュラ

コピュラは rê, ré, ráy の 3 種が認められる。3 種のうち最も一般的なコピュラは rê である。コピュラは否定辞 n- を付加することができるため、語類としては動詞である: mà rê「子供である」, mà n-rê「子供ではない」(cf. mà「子供」). コピュラとその前に現れる名詞句の間には副詞を介在させることができるため、コピュラの前の名詞句は独立性を有しており、この名詞句はコピュラ補語 (copula complement) であると考えられる: mà nóʔ rê「まだ子供です」(cf. nóʔ「まだ」). 以上より、コピュラ節はコピュラ主語とコピュラ補語という必須項を 2 つ取る節であるといえる。上例の通り、例外的にコピュラ rê の後には TAM 標識が現れない。また、rê は助動詞を取ることもできない。rê を含む動詞複合は rê のみから成るといえる。コピュラが TAM 標識や助動詞を取る場合にはコピュラ ráy が用いられる: mà ráy=sám=ʔay「子供のようだ」, *mà rê=sám (cf. =sám「ようだ」). なお、コピュラ ré に関しては不明な点が多いため、ここでは触れないでおく。

9　複文

9.1　副詞節

副詞節は接続助詞 (subordinators) を付加して構成される。接続助詞には二種ある。1) 動詞に付くタイプ 2) 動詞複合に付くタイプ。動詞に直接的に付加される接続助詞には =yàŋ「ならば」, =jaŋ「とき」, =nná ‘SEQ’, =khrà「まで」, mətu ‘PURP’, tíʔmùŋ (or tîm)「だが」などがある: šá=yàŋ「食べるならば」. 一方、動詞複合に付加される接続助詞には =məjò「ので」, =šəlóy「とき」などがある: šá=ʔay=məjò「食べたので」. また、後者のタイプの接続助詞には格標識と動詞からなるイディオム的形式も見られる: =thèʔ ‘COM’ + mərên「同じだ」>「するやいなや」(テキストの例 37).

9.2　名詞節・関係節

名詞節 (29 から 35) および関係節 (36, 38, 39) は平叙文そのままの形と同形である。

(28)　ši　šàt　šá=ʔay
3SG　飯　食べる=TAM
「彼はご飯を食べた」

(29)　ši　šàt　šá=ʔay　mù=ʔay
3SG　飯　食べる=TAM　見る=TAM
「彼がご飯を食べるのを見た」

(30)　ši　šàt　šá=ʔay　n-ce=ʔay
3SG　飯　食べる=TAM　NEG-知る=TAM
「彼がご飯を食べたのを知らない」

(31)　ši　šàt　šá=ʔay=kóʔ
3SG　飯　食べる=TAM=LOC
「彼がご飯を食べた場所で」

(32)　ši　šàt　šá=ʔay=dèʔ
3SG　飯　食べる=TAM=ALL
「彼がご飯を食べたところへ」

(33)　šàt　šá=ʔay=ni
飯　食べる=TAM=PL
「ご飯を食べた人たち」

(34)　day　[šàt　šá=ʔay=ni]
この　飯　食べる=TAM=PL
「この[ご飯を食べた人たち]」

(35)　ši　šàt　šá=ʔay　rê
3SG　飯　食べる=TAM　COP
「彼はご飯を食べたのだ」

(36) ši šàt šá=ʔay lam
3SG 飯 食べる=TAM こと
「彼がご飯を食べたこと」

(37) ʔəphù šàt šá=ʔay
兄 飯 食べる=TAM
「兄はご飯を食べた」

(38) ʔəphù šá=ʔay šàt
兄 食べる=TAM 飯
「兄が食べたご飯」

(39) šàt šá=ʔay ʔəphù
飯 食べる=TAM 兄
「ご飯を食べた兄」

このような文、名詞節、関係節の ‘syncretism’ はチベット・ビルマ語派の言語や東南アジア大陸部諸語でしばしば見られる現象である (Matisoff 1972)。本稿では、ジンポー語の関係節は名詞節+主名詞の並列 (juxtaposition) であると分析する。また、この言語の平叙文の多くは名詞節であると分析することができる可能性があるが、本稿では現象を指摘するにとどめておく。

9.3 引用節

引用節は引用標識を動詞複合に付加して形成される。引用標識には ŋú および ŋa のふたつがあるが、このふたつの使い分けは現時点では不明である。これらの引用標識は動詞 ŋú「言う、と言う」および ŋa「言う、と言う」より発展した形式であるが、引用標識を動詞と見なさない理由は、引用標識に否定辞 n- を付加することができないためである。

(40) šá=na ŋú=ʔay
食べる=FUT 言う=TAM
「食べると言った」

(41) šá=na=ŋú n-šədùʔ=ʔay
食べる=FUT NEG-思う=TAM
「食べると思わなかった」

10　テキスト

以下のテキストは 2011 年 2 月から 3 月にかけて筆者がミャンマー連邦共和国北部カチン州ミッチーナー市に滞在した際に収集した約 30 本の民話テキストのうちのひとつである。このテキストの収集日は 2 月 22 日である。調査協力者はミッチーナー市在住の 70 代男性である。テキストの表記に関しては、一段目は正書法表記、二段目は音韻表記である。なお、テキストの訳は基本的に直訳にしたため、日本語として多少不自然なところもある。

(1)　***"Kahpu kanau masum myit hkrum yang, panglai nawng htawk dang"***

gəphù+gənaw　　məsum　myìt　khrúm=yàŋ　paŋlay+nóŋ　thòk　daŋ

elder.bro+younger.bro　three　mind　meet=if　sea+lake　remove　can

「兄弟三人協力すれば海のような湖も動かせる」

(2)　***Jinghpaw maumwi grai law ai kaw na "kahpu kanau masum myit hkrum yang panglai nawng htawk dang" ngu ai maumwi hpe, moi na ji woi ni, nu wa ni ma grai dan leng ai hku hkai tsun ma ai.***

jìŋphòʔ+màwmùy　gràỳ　lóʔ=ʔay=kóʔná　gəphù+gənaw　məsum

jinghpaw+story　very　many=TAM=ABL　elder.bro+younger.bro　three

myìt　khrúm=yàŋ　paŋlay+nóŋ　thòk　daŋ　ŋú=ʔay　màwmùy=phéʔ

mind　meet=if　sea+lake　remove　can　say=TAM　story=ACC

mòy=ná　ji+woy=ni　nû+wâ=ni=má

long.ago=GEN　grandpa+grandma=PL　mother+father=PL=also

gràỳ　dànléŋ=ʔay=khu　tsun=màʔʔay.

very　open=TAM=like　say=TAM.PL

ジンポーの民話がとても多い中から「兄弟三人協力すれば海のような湖も動かせる」という民話を昔の祖父母たち両親たちも広く語っていた。

(3)　***"Kahpu kanau masum myit hkrum yang panglai nawng htawk dang" da.***

gəphù+gənaw　　məsum　myìt　khrúm=yàŋ　paŋlay+nóŋ　thòk　daŋ=dàʔ.

elder.bro+younger.bro　three　mind　meet=if　sea+lake　remove　can=HS

「兄弟三人協力すれば海のような湖も動かせる」だそうだ。

(4)　***Moi kalang mi na aten hta, mare kaba langai mi a makau kaw grai kaba ai hka nawng langai mi nga ai da.***

mòy　kəlàŋ mɨ=ná　ʔətèɪ=thàʔ　məre　gəbà　ləŋây mɨ=ʔàʔ　məkaw=kóʔ

long.ago　once=GEN　time=LOC　city　big　one=GEN　beside=LOC

gràỳ　gəbà=ʔay　khàʔ+nóŋ　ləŋây mi　ŋà=ʔay=dàʔ.

very　big=TAM　water+lake　one　be=TAM=HS

昔あるとき、ある大きな町のそばにとても大きな湖がひとつあったそうだ。

(5) ***Dai nawng gaw panglai daram kaba ai da.***

day nóŋ=gò paŋlay=dərám gəbà=ʔay=dàʔ.

that lake=TOP sea=about big=TAM=HS

その湖は海ぐらい大きかったそうだ。

(6) ***Dai nawng kata kaw e, grai n hkru ai baren, grai n kaja ai lapu baren langai mi rawng ai da.***

day nóŋ+gətà=kóʔ=ʔè grày n-khrúʔ=ʔay bərèn

that lake+inside=LOC=LOC very NEG-good=TAM dragon

grày n-gəja=ʔay ləpu+bərèn ləŋây mi roŋ=ʔay=dàʔ.

very NEG-good=TAM snake+dragon one be.in=TAM=HS

その湖の中には、とても悪い龍、とても悪い龍が一匹いたそうだ。

(7) ***Shaloi e, dai makau hkan na dumsu yam nga ni jahkring hkring gang sha ai da.***

šəlóy=ʔè day məkaw=khárn=ná dùmsu+yam+ŋa=ni

then=LOC that beside=near=GEN cow+enslave+cattle=PL

jəkhrìŋ-khrìŋ gaŋ šá=ʔay=dàʔ.

often drag eat=TAM=HS

そのとき、その近くの家畜をしばしば湖の中に引き込んでは食べたそうだ。

(8) ***Dai baren wa gang nna dai nawng kaba de garawt mat wa wa re ai da.***

day bərèn+wa garŋ=nná day nóŋ gəbà=dèʔ

that dragon+man drag=SEQ that lake big=ALL

gəròt=màt=wà-wà ré=ʔay=dàʔ.

drag=COMPL=MOVE-RDP COP=TAM=HS

その龍は引きずり込んでその大きな湖へ引きずり込んでばかりいたそうだ。

(9) ***Karawt sha ai.***

gəròt šá=ʔay.

drag eat=TAM

引きずり込んで食べた。

(10) ***Kalang lang masha hpe pyi karawt sha ai da.***

kəlàŋ-làŋ məšà=phéʔ=pi gəròt šá=ʔay=dàʔ.

sometimes people=ACC=even drag eat=TAM=HS

ときどき人をさえ引きずり込んで食べたそうだ。

(11) ***Dai shaloi gaw dai hkan na masha ni gaw grai hkrit ma ai da.***

day šəlóy=gò day khán=ná məšà=ni=gò gràу khrìt=màʔʔay=dàʔ.

that then=TOP that vicinity=GEN people=PL=TOP very fear=TAM.PL=HS

そのときはその近くの人々はとても恐れたそうだ。

(12) ***Dai majaw shanhte mare hpe kahtawng hpe htawt kau na myit ma ai da.***

day məjò šánthe məre=phéʔ gəthòŋ=phéʔ thòt=káw=na

that because 3PL city=ACC village=ACC move=THOROUGHLY=FUT

myìt=màʔʔay=dàʔ.

think=TAM.PL=HS

そこで彼らは村を移住してしまおうと考えたそうだ。

(13) ***Rai timung, dai kahtawng hpe htawt kau yang, mana maka sutgan ginlut nna htawt na shara mung n nga ai da.***

Ráy tíʔmùŋ day gəthòŋ=phéʔ thòt=káw=yàŋ mənà-məkà

COP but that village=ACC move=THOROUGHLY=if very

sùt+gan gìnlút=nná thòt=ná šərà=mùŋ n-ŋà=ʔay=dàʔ.

wealth+wealth waste=SEQ move=FUT place=also NEG-be=TAM=HS

しかし、その村を移住してしまうとたいそう費用を浪費してしまい、移住する場所もなかったそうだ。

(14) ***Re majaw, mare masha ni grai myit ru ma ai da.***

rê məjò məre+məšà=ni gràу myìt rúʔ=màʔʔay=dàʔ.

COP because city+people=PL very mind be.distressed=TAM.PL=HS

そのため村人たちはたいそう苦しんだそうだ。

(15) ***Baren mung hkrit ra, htawt shara mung n lu rai grai myit ru ma ai da.***

bərèn=mùŋ khrìt=rà thòt+šəra=mùŋ n-lù=ráy

dragon=also fear=OBRG move+place=also NEG-get=COP

gràу myìt rúʔ=màʔʔay=dàʔ.

very mind be.distressed=TAM.PL=HS

龍も恐れなければならず、移住する場所もなくてたいそう苦しんだそうだ。

(16) ***Dai shaloi dai kahtawng kaw grai share ai kahpu kanau marai masum nga ai da.***

day šəlóy day gəthòŋ=kóʔ gràу šəre=ʔay

that then that village=LOC very brave=TAM

gəphù+gənaw məray+məsum ŋà=ʔay=dàʔ.

elder.bro+younger bro CLF+three be=TAM.PL=HS

そのときその村にたいそう勇敢な 3 人の兄弟が住んでいたそうだ。

(17) ***Ndai marai masum hte gaw ndai nawng hpe e htawt kabai kau na, nawng hpe hka htum hkra shagawt kabai kau na nga nna nawng makau de sa wa ma ai da.***

nday *məray+məsum=the=gò* *nday* *nóŋ=phé?* *?è*
this CLF+three=PL=TOP this lake=ACC INTJ
thòt *gəbày=káw=na* *nóŋ=phé?* *khà?* *thùm=khrà*
remove throw.away=THOROUGHLY=FUT lake=ACC water be.lost=till
šəgót *gəbày=káw=na* *ŋa=nná* *nóŋ+məkaw=dè?*
scoop.up throw.away=THOROUGHLY=FUT say=SEQ lake+beside=ACC
sa=wà=mà??ay=dà?.
come=MOVE=TAM.PL=HS
この 3 人はこの湖をね、取り去ってしまおう、湖を水がなくなるまで掬ってしまおうと言って湖のそばにやってきたそうだ。

(18) ***Nawng makau de sa wa ai shaloi gaw, kahpu yan gaw hka gawt nga ai da.***

nóŋ+məkaw=dè? *sa=wà=?ay=šəlóy=gò* *gəphù* *yán=gò*
lake+beside=ACC come=MOVE=TAM=when=TOP elder.bro two.people=TOP
khà? *gòt=ŋà=?ay=dà?.*
water remove=CONT=TAM=HS
湖のそばへ来たとき、兄ふたりは水を取り除いていたそうだ。

(19) ***Hka htawk nga ai.***

khà? *thòk=ŋà=?ay.*
water remove=CONT=TAM
水を取り除いていた。

(20) ***Kanau wa gaw nawng makau kaw lu sha sha shadu nga ai da.***

gənaw+wa=gò *nóŋ+məkaw=kó?* *lù?+šá=šà*
younger.bro+man=TOP lake+beside=LOC drink+eat=only
šədu=ŋà=?ay=dà?.
cook=CONT=TAM=HS
弟は湖のそばで食べ物をだけ料理していたそうだ。

(21) ***Lu sha na shadu nga ai da.***

lù?+šá=na *šədu=ŋà=?ay=dà?.*
drink+eat=FUT cook=CONT=TAM=HS
飲み食いするために料理していたそうだ。

(22) ***Dai shaloi e, kanau wa gaw kahpu yan hpe san ai da.***

day šəlóy=ʔè gənaw+wa=gò gəphù yán=phéʔ sán=ʔay=dàʔ.

that then=LOC younger.bro+man=TOP elder.bro two.people=ACC ask=TAM=HS

そのとき弟は兄ふたりに尋ねたそうだ。

(23) ***"Dai ni anhte sha na matu n-gu kade shadu na i?", ngu kanau wa san ai da.***

dàyní ʔánthe šá=na=mətu ngu gədè šədu=na=ʔi=ŋú

today 1PL eat=FUT=PURP rice how.much cook=FUT=SFP.Q=QUOT

gənaw+wa sán=ʔay=dàʔ.

younger.bro+man ask=TAM=HS

「今日私たちが食べるために米をどれくらい炊きますか」と弟は尋ねたそうだ。

(24) ***Shaloi kahpu yan gaw, "anhte n-gun grai dat ra ai re majaw n-gu dang sumshi shadu u", ngu ai da.***

šəlóy gəphù yán=gò ʔánthe ngùn grày dàt=rà=ʔay rê məjò

then elder.bro two=TOP 1PL power very release=OBRG=TAM COP=because

ngu dàŋ+sùmši šədu=ʔùʔ ŋú=ʔay=dàʔ.

rice CLF+thirty cook=IMP say=TAM=HS

そのとき兄ふたりは、「私たちは力をたくさん出さなければならないから米を30 笊炊きなさい」と言ったそうだ。

(25) ***"Aw, rai sai. Dai rai yang gaw, shat mai hta gaw jum kade bang na i?"***

ʔò ráy=say. day ráy=yàŋ=gò šàt+may=thàʔ=gò

INTJ COP=TAM. that COP=if=TOP food+good=LOC=TOP

jùm gədè bàŋ=na=ʔi.

salt how.much put.in=FUT=SFP.Q

「ああ、分かりました。それでは料理には塩をどれくらい入れますか？」

(26) ***"Joi sumshi bang u", bai ngu ai da.***

joy+sùmši bàŋ=ʔùʔ báy ŋú=ʔay=dàʔ.

CLF+thirty put.in=IMP again say=TAM=HS

「30 秤入れなさい」また言ったそうだ。

(27) ***Shaloi, "dai rai yang majap gaw kade bang na i?", bai ngu ai da.***

šəlóy day ráy=yàŋ məjàp=gò gədè bàŋ=na=ʔi báy ŋú=ʔay=dàʔ.

then that COP=if chili=TOP how.much put.in=FUT=SFP.Q again say=TAM=HS

そのとき「それなら唐辛子はどれくらい入れますか？」また言ったそうだ。

(28) ***"Majap joi shi bang u", ngu ai da.***

məjàp=mùŋ joy+sùmši bàŋ=ʔùʔ ŋú=ʔay=dàʔ.

chili=also CLF+thirty put.in=IMP say=TAM=HS

「唐辛子も 30 秤入れなさい」と言ったそうだ。

(29) ***Dai ga hpe na jang le hka kata na baren wa gaw, "Aga! marai masum masha n-gu dang sumshi sha na nga.***

day gà=phéʔ na=jaŋ lé khàʔ+gətà=ná bərèn+wa=gò

that word=ACC hear=when down.there water+inside=GEN dragon+man=TOP

ʔəgâ məray+məsum+məšà ngu dàŋ+sùmši šá=na=ŋa.

INTJ CLF+three+people rice CLF+thirty eat=FUT=HS

その言葉を聞いたとき水の中の龍は「うわこの 3 人は米を 30 笊食べるだって！

(30) ***Jum joi mung sumshi sha na nga nna, majap joi mung sumshi sha na nga.***

jùm joy=mùŋ sùmši šá=na ŋa=nná məjàp joy=mùŋ sùmši šá=na=ŋa.

salt CLF=also thirty eat=FUT say=SEQ chili CLF=also thirty eat=FUT=SFP

塩も 30 秤食べると言って唐辛子も 30 秤食べるだって！

(31) ***Rai yang gaw, ndai ni gaw hkrit ram ai masha ni re.***

ráy=yàŋ=gò nday=ni=gò khrìt ram=ʔay məšà=ni rê.

COP=if=TOP this=PL=TOP fear enough=TAM people=PL COP

それならばこの人たちは恐れるに足る人たちだ。

(32) ***Ya hka htawk tawn sai.***

yáʔ khàʔ thòk=tòn=say.

now water remove=RESL=TAM

いま水を取り除き始めた。

(33) ***Loi hkring ndai hka hkyet hkra htawk na masha ni re.***

lòy khrìŋ nday khàʔ khyèt=khrà thòk=na məšà=ni rê.

few while this water dry=till remove=FUT people=PL COP

しばらくすればこの水が乾くまで水を取り去ってしまう人たちだ。

(34) ***Ndai ram ram lu sha sha ai ni gaw hkrit ra sai nga nna baren wa hprawng mat ai da.***

nday ram-ram lùʔ+šá šá=ʔay=ni=gò khrìt=rà=say ŋa nná

this enough-RDP drink+eat eat=TAM=PL=TOP fear=OBRG=TAM say=SEQ

bərèn+wa phròŋ=màt=ʔay=dàʔ.

dragon+man run.away=COMPL=TAM=HS

これほど食べ物を食べる人たちは恐れるべき」と言って龍は逃げてしまったそうだ。

(35) ***Baren wa hprawng mat ai shaloi gaw hka gaw shi chyu chyu hkyet mat wa ai da.***

bərèn+wa phròŋ=màt=ʔay=šəlóy=gò

dragon+man run.away=COMPL=TAM=when=TOP

khàʔ=gò ši=cú-cú khyèt=màt=wà=ʔay=dàʔ.

water=TOP by itself dry=COMPL=MOVE=TAM=HS

龍が逃げてしまったとき水はひとりでに乾いてしまったそうだ。

(36) ***Hkyet mat wa nna dai kahtawng kaw e zungri zingrat ai baren wa dai nawng kaw nna hprawng sai.***

khyèt=màt=wà=nná day gəthòŋ=kóʔ=ʔè zìŋrì+zìŋrát=ʔay bərèn+wa

dry=COMPL=MOVE=SEQ that village=LOC=LOC trouble+COUP=TAM dragon+man

day nóŋ=kóʔná phròŋ=say.

that lake=ABL run.away =TAM

乾いてしまってその村で人々を苦しめていた龍はその湖から逃げた。

(37) ***Dai hka mung baren hprawng ai hte maren hka ma hkyet mat sai da.***

day khàʔ=mùŋ bərèn phròŋ=ʔay=thèʔ mərên

that watern=also dragon run.away=TAM=COM similar

khàʔ=má khyèt=màt=say=dàʔ.

water=also dry=COMPL=TAM=HS

その水も龍が逃げるやいなや水も乾いてしまったそうだ。

(38) ***Dai majaw dai kahtawng gaw grai ngwi pyaw ai hku nga ai da.***

Day məjò day gəthòŋ=gò grày ŋùy+pyo=ʔay=khu ŋà=ʔay=dàʔ.

that because that village=TOP very calm+happy=TAM=like be=TAM=HS

そのためにその村はとても穏やかでいたそうだ。

(39) ***Ndai maumwi hpe la-kap nna "kahpu kanau masum myit hkrum yang panglai nawng htawk dang" ngu ai maumwi rai nga ai law.***

nday màwmùy=phéʔ lá+káp=nná gəphù+gənaw məsum

this story=ACC take+adhere=SEQ elder.bro+younger.bro three

myìt khrúm=yàŋ paŋlay+nóŋ thòk daŋ

mind meet=if sea+lake remove can

ŋú=ʔay màwmùy ráy=ŋà=ʔay=lo.

say=TAM story COP=CONT=TAM=SFP

この物語に基づいて「兄弟三人力を合わせれば湖も動かせる」という物語なんだよ。

Abbreviation

ABL	ablative	COUP	coupulet	PL	plural
ACC	accusative	GEN	genitive	PURP	purpose
ALL	allative	FUT	future	Q	question
AUX	auxiliary	HS	hearsay	QUOT	quotative
CLF	classifier	IMP	imperative	RDP	reduplication
COM	comitative	INTJ	interjection	SEP	sentence-final particle
COMPL	complete	LOC	locative	SEQ	sequential
CONT	continuous	NEG	negative	TAM	tense-aspect-mood
COP	copula	OBRG	obrigatory	TOP	topic

参考文献

Bradley, David. (1996) Kachin. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler, Darrell T. Tryon ed., *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*. Vol.2.1. 749–51. Berlin: Mouton de Gruyter.

Bisang, Walter. (2006) Southeast Asia as a linguistic area. In Keith Brown ed., *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. 2nd Edition, Vol.11. 587–95. Oxford: Elsevier.

戴慶厦・徐悉艱・肖家成・岳相昆編. (1983) 『景漢辞典』昆明: 雲南民族出版社.

Dixon, R.M.W. (1977) *Where have all the adjectives gone? and other essays in semantics and syntax*. Berlin: Mouton.

Dryer, Matthew S. (2008) Word order in Tibeto-Burman languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 31: 1–88.

Enfield, Nick J. (2001) On genetic and areal linguistics in Mainland South-East Asia: Parallel polyfunctionality of 'acquire'. In A. Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon ed., *Areal Diffusion and Genetic Inheritance: Problems in Comparative Linguistics*. 255–90. Oxford University Press.

Hanson, Ola. (1906) *A Dictionary of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.

服部四郎 (編). 『基礎語彙調査票』東京大学言語学研究室.

Heine, Bernd and T. Kuteva. (2005) *Language Contact and Grammatical Change.* Cambridge: Cambridge University Press.

倉部慶太. (2010)「ジンポー (カチン) 語における動詞連続の文法化」大西正幸・稲垣和也（編）『地球研言語記述論集』2：15–37. 京都：総合地球環境学研究所.

————. (2011)「ジンポー語文法の概要」京都大学大学院文学研究科修士論文.

Kurabe, Keita. (2011) Co-compounds in the Jinghpaw or Kachin language of Northern Burma. Circulated at the 17th Himalayan Languages Symposium (Kobe City University of Foreign Studies, Kobe, Japan).

Matisoff, James A. (1969) Verb concatenation in Lahu: the syntax and semantics of 'simple' juxtaposition. *Acta Linguistica Hafniensia.* 12.1, 69–120. Copenhagen.

————. (1972) Lahu nominalization, relativization, and genitivization. In John Kimball, ed., *Syntax and Semantics*, Volume I, 237–57. Studies in Language Series. Seminar Press, New York.

————. (1973) Tonogenesis in Southeast Asia. In Larry M. Hyman, ed., *Consonant Types and Tone*, 71–95. Southern California Occasional Papers in Linguistics, No. 1. Los Angeles: UCLA.

————. (1978) *Variational Semantics in Tibeto-Burman: The 'Organic' Approach to Linguistic Comparison*. Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Volume VI. Publication of the Institute for the Study of Human Issues, Philadelphia.

————. (1989) The bulging monosyllable, or the mora the merrier: echo-vowel adverbialization in Lahu. In Jeremy Davidson, ed., *South-East Asian Linguistics: Essays in honour of Eugénie J. A. Henderson*, 163–97. School of Oriental and African Studies. London.

————. (1991a) Areal and universal dimensions of grammatization in Lahu. In Elizabeth C. Traugott and B. Heine ed., *Approaches to Grammaticalization*, Vol. II, 383–453. Amsterdam: Benjamins.

————. (1991b) Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects. *Annual Review of Anthropology*. 20:469–504.

————. (1999) Tibeto-Burman tonology in an areal context. In Shigeki KAJI, ed., *Proceedings of the Symposium 'Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Typology, and Related Topics'*, 3–32. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

————. (2003) Southeast Asian languages. In William Frawley and Bernard Comrie, ed., *International Encyclopedia of Linguistics*, 2nd Edition, Vol. IV, 126–30. New York and Oxford: Oxford University Press.

————. (2004) Areal semantics: is there such a thing? In Anju Saxena ed., *Himalayan Languages, Past and Present*, 347–93. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Mazaudon, Martine. (1977) Tibeto-Burman tonogenetics. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 3 2:1–123.

西田龍雄. (2000) 『巨大言語群 ― シナ･チベット語族の展望』京都: 京都大学学術出版.

ディアスポラの南部スーダン・アラビア語
—オーストラリアにおける現状と言語政策—

仲尾周一郎

1　はじめに

オーストラリアにおける (南部) スーダン出身者[1] の人口は、2006 年の国勢調査で 19,000 人を超えている。その大半はオーストラリア政府の人道支援に基づく第三国定住プログラムによる来豪者であり、第二次スーダン南北紛争 (1983–2005) 等のためエジプトやケニアで難民生活を経た背景を持つ。本稿ではそのような人々を「在豪南部スーダン人」と呼ぶ。

南部スーダンでは、リンガフランカとしてアラビア語変種が話されるが、言語政策上は公的な地位や規範 (標準語・正書法・識字教育など) を持たない。これに対して、オーストラリアでは、在豪南部スーダン人の支援にあたり、彼らの話すアラビア語変種に実践的な価値が見出され、言語政策 (主として通訳・翻訳サービス) において運用されている。しかしながら、その言語政策の現場では混乱が生じている。

本稿では、在豪南部スーダン人によって使用されているアラビア語変種を分類した上で、主にオーストラリアの政府機関 (GO)・非政府機関 (NGO) による出版物を対象に、そこでの言語政策の混乱を指摘する。2 節では南部スーダンおよび在豪南部スーダン人の社会言語学的概観、およびオーストラリアでの言語教育・言語サービスにおける南部スーダンの諸言語の概観を提示する。3 節では筆者による南部スーダンのアラビア語変種の予備的調査に基づき、オーストラリアにおける南部スーダン人向け GO・NGO 出版物の分析を行う。

2　南部スーダン人の社会言語学的背景

2.1　南部スーダンにおける言語政策と主要言語の話者人口

多くのアフリカ諸国同様、南部スーダンでは、第一言語として話される民族語 (土着のアフリカ諸語) とリンガフランカとして話されるアラビア語変種、法規的地位を持つ公用作業語 (“official working language”) からなる垂直的多言語使用が認められる (仲尾 2011a)。

---

[1] 2011 年 7 月に南スーダン共和国は (旧) スーダン共和国より分離、独立している。これを受け 2011 年度以降のオーストラリア国勢調査では南スーダン共和国と (現) スーダン共和国出身の移民人口は別々に計上される予定である。本稿では旧南部スーダン暫定自治政府統治地域 (南部 10 州) および現南スーダン共和国を包括する名称として「南部スーダン」を用いる (地理的にほぼ一致している)。ただし、Hajek & Musgrave (2010) がメルボルンで話される「スーダン人の言語」として、(現) スーダン共和国南部 (南コルドファンや南ダルフール) に分布する諸言語を記録しているように、オーストラリア統計局資料で従来「スーダン人」とされていた人々には、僅かながら (現) スーダン共和国出身者が含まれる。

公用作業語に関しては、独立前の南部スーダン中間期憲法 (Interim Constitution, 2005–2011) では英語およびアラビア語とされていたが、独立後の南スーダン移行期憲法 (Transitional Constitution, 2011–) では英語のみに変更されている。教育政策は現憲法に明記されていないが、現憲法制定に前後して、標準アラビア語を排し、諸民族語による初等教育や英語による中高等教育が行われることが政府により決定された。

南部スーダンは 1948 年以降、図 1 のようにエクアトリア地域・バハル＝エル＝ガザル地域・上ナイル地域に大別される。南部スーダンの人口は、2008 年のスーダン共和国国勢調査では、約 826 万人とされている。

民族語の話者人口に関しては、バハル＝エル＝ガザル地域東部および上ナイル地域の北部などで話されるディンカ語 (Dinka, Western Nilotic) が約 135 万人で最大であり、上ナイル地域南部などで話されるヌエル語 (Nuer, Western Nilotic) が約 74 万人、エクアトリア地域でジュバを中心に話されるバリ語 (Bari, Eastern Nilotic) が約 42 万人でこれに次ぐ (Lewis 2009)。リンガフランカとして話されるアラビア語変種については 3.1 で述べる。

図 1　南部スーダンの三地域

2.2　在豪南部スーダン人のデモグラフィと言語

オーストラリア統計局 (Australian Bureau of Statictics) による国勢調査では在豪南部スーダン人の人口は 2001–2006 年間に急激に拡大し、2006 年時点で 19050 人に上った。2006 年の国勢調査では、ビクトリア州 (図 2: VIC) およびニューサウスウェールズ州 (図 2: NSW) にそれぞれ約 6000 人が居住しており、その合計は在豪南部スーダン人の約 60%強を占める。年齢の中央値は 24.6 歳、男女比は約 6 : 5 とされる (DIAC n.d.)。

在豪南部スーダン人は主要都市の郊外に集住する傾向が見られる。メルボルン近郊では①グレーター・ダンデノン市 (Greater Dandenong)、②ブリンバンク市 (Brimbank)、③マリビノン市 (Maribyrnong) の順に人口が多い (MRCWR 2006)。そのうち、特に図 2 に示したフッツクレイ (Footscray)、ノーブルパーク (Noble Park)、ダンデノン (Dandenong) に在豪南部スーダン人が経営する商店や、ディンカ語・ヌエル語やアラビア語変種で説教を行う教会が存在し、このコミュニティの文化や経済の中心としての役割を果たしている。さらに、セイント･アルバンズ (St. Albans)、サンシャイン (Sunshine) などにも在豪南部スーダン人は多く居住している [2]。

---

[2] メルボルン西部郊外には在豪エチオピア・エリトリア・ソマリ人も集住しており (Borland & Mphande 2006)、筆者の調査時点で、在豪南部スーダン人は彼らとともにアフリカ人街を形成していた。なお、西部郊外・南東部郊外における最大の移民はベトナム出身者である (VMC 2007)。

Borland & Mphande (2006) は AMEP (成人移民英語プログラム, cf. 2.3) 利用者の申告に基づく第一言語に関するデータを用い、「ディンカ語」話者の約 70% が西部郊外に居住しているのに対し、「ヌエル語」話者の約 70% が南東部郊外に、“Sudanese” (いずれの言語を指しているか不明) 話者に関しては約 70% が南東部郊外に居住していると推定している [3]。実際、西部郊外はディンカ語話者が多数を占め、南東部郊外にはヌエル語話者やエクアトリア地域出身者が多く居住する傾向は、筆者の調査時期 (2011 年 9 月) にも確認できた [4]。

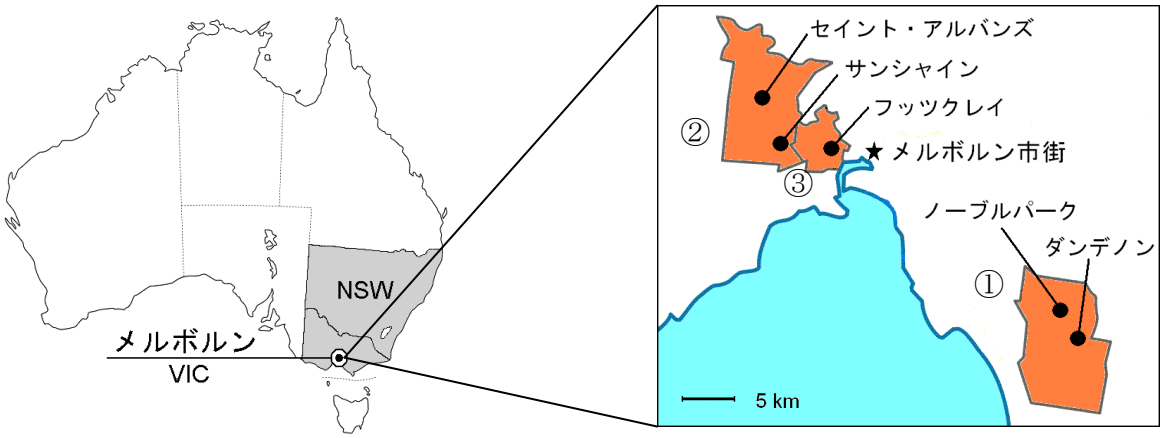


図 2　在豪南部スーダン人の集住地区

在豪南部スーダン人によって話されている民族語の言語数に関しては、Hatoss & Sheely (2009) は 8 言語、Borland & Mphande (2006) は 15 言語、Hajek & Musgrave (2010) は 40 言語を挙げており、それぞれに重複した言語を除けば計 47 言語が確認されている [5]。

Borland & Mphande (2006) は主要な通訳・翻訳サービス機関にリクエストされた言語と回数をもとにビクトリア州における各言語話者数を推定している。その結果、在豪南部スーダン人の話す民族語に関しては「ディンカ語」3500 人が最多で、「ヌエル語」700 人がそれに次ぐ。アラビア語変種に関しては Borland & Mphande (2006) は “Arabic”, “Sudanese Arabic”, “Juba Arabic” の 3 種を認め、話者人口に “Sudanese Arabic” には 2400 人、“Juba Arabic” には 500 人を推定しているが、一次データではこの峻別が行われていない可能性が高く (cf. 3.3)、アラビア語各変種の話者数の推定は十分な根拠を持って行われたとはいえない。

また、アラビア語変種は南部スーダンではふつうリンガフランカ、つまり第二言語であるにも関わらず、ディンカ語やヌエル語など、ふつう第一言語としてしか話されない民族語 [6] と同列に扱われ、(やや強引に) 相互排他的な話者数が推測されている。この一次データと分析では、垂直的多言語使用 (cf. 2.1)の実態が反映されていないという問題も指摘できる。

---

[3] 以下、オーストラリアの GO・NGO 出版物において使用されている言語名に「」または“ ”を付す。

[4] この傾向は 2004 年には既に見られた (Coffey 2004)。

[5] (現) スーダン共和国南部 (南ダルフール州・南コルドファン州) で話される 11 言語を含む。

[6] ただし、南部スーダン都市部やスーダンのハルツームにはクレオール化した話者も多いことはこれまでに多数報告がある (仲尾 2011a)。なお、民族語維持はオーストラリアでも問題化している (cf. 2.3.1)。

2.3　在豪南部スーダン人向け言語教育・言語サービス

現在、オーストラリア政府は「アクセスと平等」の理念 (松田 2005) に則り、新来の移民に対し、① 成人移民英語プログラム (Adult Migrant English Program; AMEP)、② 翻訳・通訳サービス (Translating and Interpreting Service; TIS)、③ 主要な移民言語による公共多言語放送 (Special Broadcasting Services; SBS)、④ 二世以降の移民の言語維持を目的とした、コミュニティ言語教育 (Community Languages School) 等の、言語教育および言語サービスを行っている。これらに加え、移民リソースセンター・図書館・NGO・市民団体・民間企業なども同様の機能を果たしており、言語教育や言語サービスのあり方は非常に多様である。こうした言語教育・言語サービスは 1978 年以降のフレーザー政権下で開始されたものであり、当初はドイツ語・オランダ語・イタリア語・ギリシャ語・ベトナム語など、その標準語や正書法が確立し、識字能力を持つ話者の多い言語が射程に入っていた。

2000 年代以降のオーストラリアでは難民経験を背景に持つ移民が増加する傾向にある。その典型例の一つと目されている在豪南部スーダン人は、出生地ごとに言語背景が多様である上、公用作業語 (標準アラビア語や英語) 教育の不足、民族語の識字教育 (さらに一部の民族語に関しては正書法整備) の不足、リンガフランカ (アラビア語変種) に至っては正書法さえ存在しないなど、近代国家において前提とされる言語背景とは大きく異なっている。

2.3.1　言語教育

在豪南部スーダン人向けの言語教育は、特に一世に対しての「第二言語としての英語教育 (English as a Second Language; ESL)」や民族語の識字教育、二世以降に対してのコミュニティ民族語教育などに分けられる。ESL に関してはオーストラリア政府によって行われている先述の AMEP、および NGO による活動が主要なものとして挙げられる [7]。

特に一世などを対象にした民族語の識字教育は、近年開始されている。ディンカ語に関しては、英語教育に先行した識字教育 (DEEWR 2009) や、ディンカ語協会やウェブサイト (Agamlöŋ Online) 立ち上げ支援などが行われている (Bianco et al. 2009)。

特に二世以降を対象にしたコミュニティ言語教育は、近年「バリ語」・「ディンカ語」・「ヌエル語」・「マディ語」については行われている (CLA 2007)。Hatoss & Sheely (2009) は、在豪南部スーダン人の若年層では、英語や「アラビア語」、「スワヒリ語」が使用領域を拡大しており、民族語の維持がやや問題であることを指摘しているなど、在豪南部スーダン人の言語維持に対する (少なくとも学術的な) 関心は高まりつつある。

なお、南部スーダン本国でリンガフランカとして話されているアラビア語変種に関しては、現時点では識字教育やコミュニティ言語教育は全く行われていない [8]。

---

[7] 在豪南部スーダン人に対する AMEP の現状や問題点については Dumenden (2007) 参照。主要な NGO 活動としては、大都市を中心に活動している SAIL Program などがある。

[8] ただし、上記の SAIL Program では、所属する支援者向けに “Juba Arabic” 教室が開かれていたようである (SAIL Program 2005) が、これは在豪南部スーダン人に対する教育ではない。

2.3.2　翻訳・通訳サービス (TIS)

オーストラリア政府移民市民権省 (DIAC) が実施している翻訳・通訳サービス (TIS) は「国家 TIS (TIS National)」と呼ばれている。主に翻訳・通訳国家資格 (NAATI; National Accreditation Authority for Translators and Interpreters) 取得者が、政府との契約に則り、利用者の申請に基づいて電話や対面による通訳、および文書の翻訳などの業務を行うシステムである。現在 171 言語によるサービスが提供されており、在豪南部スーダン人向けには 10 以上の民族語、およびアラビア語 2 変種 “Juba” と “Sudanese Arabic” が用意されているようである [9]。

在豪南部スーダン人の話す言語への NAATI 取得者の養成に関しては、ロイヤル･メルボルン工科大学 (RMIT) 大学がその役を任ぜられており、ビクトリア多文化委員会 (VMC) からの奨学金により、2010 年までに “Dinka”, “Nuer”, “Sudanese Arabic” の通訳としてコースを修めた NAATI 取得者が輩出している。このうち “Sudanese Arabic” に関しては、NAATI で 1 言語として認可されていないため、名目上は標準アラビア語の資格となっている (Lai & Mulayim 2011)。

図 3：ビクトリア通訳カード (上)
国家 TIS のカード (下)

ビクトリア州政府は、独自の TIS として、ビクトリア通訳カード (Victorian Interpreter Card) を発行している。このカードはより地域的な公共機関 (病院、警察、裁判所、州立学校など) で提示することで、電話または対面による通訳を利用できる仕組みになっている。現在、少なくとも 30 言語によるサービスが行われており、そのうち在豪南部スーダン人向けの言語には、「アラビア語」に加え、「ディンカ語」および「ヌエル語」が用意されている。

2.1 で述べた南スーダン共和国の言語政策は、(旧) スーダン共和国政府との紛争や、国内での民族対立などの政治的背景に依拠している。そのため、リンガフランカを含めたアラビア語 (変種) や特定の民族語を公用語として用いることを避けた結果、実践面に関して問題を抱えていると考えられる。オーストラリアでの言語サービス (や言語教育) が、特定の民族語やアラビア語変種を実践に即して選択し、運用していることは対照的である [10]。

---

[9] 国家 TIS の申請フォーム (URL: www.immi.gov.au/living-in-australia/help-with-english/help_with_translating/booking.htm 最終閲覧 2011.12.30) で選択可能な 171 の言語名のうち、在豪南部スーダン人の話す民族語と考えうるものには、“Acholi”, “Bari”, “Dinka”, “Fur”, “Kakwa”, “Kuku”, “Luo”(?), “Luwa”(?), “Madi”, “Moru”, “Mundari”(?), “Nuer”, “Nyangwara”, “Pojulu”, “Zande” がある (ただし、“Fur” はスーダン共和国ダルフールで話されるフール語を指すと考えられる)。管見の限り “Juba” と “Sudanese Arabic” が峻別されている例はオーストラリアの全言語サービスにおいてこの申請フォームのみである。

[10] ただし、アメリカ合衆国やカナダなどの難民ホスト国のほか、南部スーダンにおいてもラジオ局やテレビ局、国連開発計画 (UNDP) などの国連関連機関の活動 (URL: intra.sd.undp.org/bids/doc/449.pdf 最終閲覧 2011.12.28) でも、オーストラリアと同様の措置が採られている。

3　在豪南部スーダン人のアラビア語諸変種

3.1　南部スーダンにおけるアラビア語諸変種

南部スーダンで話されるアラビア語変種としては、エクアトリア地域都市部でリンガフランカとして話されるジュバ・アラビア語 (Juba Arabic; JA, アラビア語系ピジンクレオール) が最もよく知られている。この言語の共時的な語彙供給言語は、スーダン共和国における口語レベルでの威信言語である、スーダン・アラビア語 (Sudanese Colloquial Arabic; SCA, またはハルツーム・アラビア語 Khartoum Arabic) であると考えられる。また、南部スーダンでは 2011 年の独立までは標準アラビア語 (Modern Standard Arabic; MSA) も公用作業語として使用されていた。以上の 3 種のアラビア語変種は Lewis (2009) でも峻別されている。

さらに、南部スーダン人の言説に基づけば、南部スーダンの北部地域 (バハル＝エル＝ガザル地域や上ナイル地域) の特に都市部では、スーダン口語アラビア語およびジュバ･アラビア語の「中間的な特徴を持つアラビア語」が話されていると言われる。一般的な南部スーダン人による言説では、一回的なジャーゴンとして、地名を冠した名称 (e.g. *Wau* Arabic, *Malakal* Arabic) が用いられることがある。Kaye (1991) は “Bahr El-Ghazal Arabic”, “Raga Arabic” といった名称でそのような変種を呼んでいるようだが、これまでにこうしたアラビア語変種の記述言語学的調査は行われておらず、変種としての認定さえ不十分である。

3.2　メルボルン在住南部スーダン人のアラビア語変種

仲尾 (2011b) ではハルツーム在住経験をもつ南部スーダン人の話すアラビア語変種「KJA」(およびオーストラリア等の出版物に現れる文語的な JA) を、JA を基層話体、SCA を上層話体とした後クレオール連続体における「中層話体」として位置づけた。

ただしこの段階では、この「中層話体」が南部スーダンの北部地域の「中間的なアラビア語」と単一の言語変種をなすか不明であった。この問題を補足するため、筆者は 2011 年 9 月にメルボルン (ラトローブ大学構内、ビクトリア大学構内、フッツクレイ商店街、ノーブルパーク商店街) において在豪南部スーダン人を対象に自由談話を収集した。1 節で述べたように、在豪南部スーダン人は出自が多様であるが、現スーダン共和国の国内避難民キャンプ、ケニアやエジプトの難民キャンプを経て渡豪した経緯を持っている。以下、まずは渡豪の経緯がやや異なる二人の話者 EG 氏と MT 氏の自然談話から得られた例文を分析したのち、二人の話す変種が単一の変種 (**「中層話体的ジュバ･アラビア語」**Mesolectal Juba Arabic; **MJA**) をなすことを認め、このデータから推測される MJA の歴史について述べる。また、在豪南部スーダン人の民族語とアラビア語変種の相関についてのデータを提示する。

なお、音韻的分析は本稿の主目的ではないため、以下では便宜的に次のように音声を簡易転写する。単母音は i, ii, e, ee, a, aa, o, oo, u, uu (文字の連続は長母音を表す)、単子音は ’ [ʔ], b, t, th [θ], j [ɟ], kh [χ], ḥ [ħ], d, dh [ð], r, z, s, sh [ʃ], ṣ [sˤ], ḍ [dˤ], ṭ [tˤ], ẓ [zˤ], ‘ [ʕ], gh [ʁ], f, g, k, l, m, n, h, w, y, ŋ (アラビア文字アルファベット順) のように表記する。プロソディ上の卓立 (ストレス／ピッチアクセント) は鋭アクセント記号にて表記する。なお、グロスの略号はグロス略号一覧を参照されたい。

3.2.1　ハルツーム居住経験のある南部スーダン人のアラビア語変種

EG 氏はディンカ語母語話者であり、バハル＝エル＝ガザル地域の最北部に位置するトゥイチ地域 (Twic, アビエイ地域に隣接) 出身の若年層男性である。彼は言語形成期をハルツームで過ごした後、カイロやナイロビに居住した経験を持つ。EG 氏の話すアラビア語変種 (KJA) は、主語や TAM に応じた (随意的な) 動詞活用が観察される点で JA とは異なる (ただし、SCA では動詞活用は義務的)。(1) に一人称主語を表す動詞形式を含む例文を挙げる。

(1) a. *ána* ***jíi-t*** *junúub táani,* ***já*** *ríja fi junúub* [...].
1SG 来る.PERF-1SG 南部 また 来る 戻る LOC 南部

「僕はまた南部に [帰って] きた。帰ってきたんだ。」

b. ***kún-ta*** *fi khartúum, aaí.* ***mashée-na*** *khartúum,* ***kún-na***
COP.PERF-1SG LOC ハルツーム はい 行く.PERF-1PL ハルツーム COP.PERF-1PL

iyáal sukáar zee dé. ***masée-t*** ***kabír-na*** *hináak.*
子供.PL 小さい.PL ように この 行く.PERF-1SG 大きくなる.PERF-1PL そこ

「僕はハルツームにいたよ。ああ。僕たちはそんな感じで、小さい子供の頃にハルツームに行って、そこで育ったんだ。」

c. *ána* ***ne-shúuf*** *íta. yaú, ána bi* ***ád*** *íta kaláas.*
1SG 1SG-見る.IMPERF 2SG ほら 1SG TAM *add* 2SG もう

「僕は (SNS 上で) 君のことを見てみよう。ほら、もう友達申請しといたよ。」

d. *wokit mára, ána bi* ***nadí*** *íta,* ***nó-gwud*** *sáwa,* ***wónusu*** *sáwa.*
また今度 1SG TAM 呼ぶ 2SG 1PL-座る.IMPERF 一緒に 話す 一緒に

「また今度 (君を) 呼ぶから、一緒に座って話でもしよう。」

ただし、ここで見られる 1 人称主語動詞活用は以下のように整理できるが、未完了形に見られる 1 人称複数形主語接頭辞は JA (人称活用なし) にも SCA にも見られないものである。

表 1：1 人称主語動詞活用 (ただし V は母音、STEM は動詞語幹)

	JA	EG 氏	SCA
1SG.PERF	なし	STEM-*t(a)*	STEM-*t(a)*
1PL.PERF	なし	STEM –*na*	STEM-*na*
1SG.IMPERF	なし	***nV*- STEM**	*'a*- STEM
1PL.IMPERF	なし	*nV*- STEM	*nV*- STEM

なお、(2) に示すように 2 人称主語についても同様に動詞活用が観察される (3 人称主語を表す形式は無標の形式であるため、認定が難しい)。

(2) a. *mofrúud* ***tó-gwud***. *welé* *íta* ***máasi***? *íta* *máa* *déer* ***tó-gwud***?
よりよい 2SG-座る.IMPERF または 2SG 行く 2SG NEG 欲する 2SG-座る.IMPERF

「座ったらいいじゃないか。行くの？　座りたくないってかい？」

b. *welé* *bés* ***tá-mshi*** *ma* *suudaníiz.*
または だけ 2SG-行く.IMPERF COM *Sudanese*

「あるいはまあ、(君が) スーダン人と一緒に行くだけさ。」

次に、接尾人称代名詞の獲得が観察される。例えば、「だけ」をあらわす焦点化副詞は、SCA では義務的に主要部の人称に一致して接尾人称代名詞が付加される (SCA. 1SG *baráa-y*, 2SG.M *baráa-k*, 3SG.M. *baráa-hu*) が、JA では常に単一の形式 (JA. *baráu* < 3SG.M) が使用される。しかし、(3b) が示すように、EG 氏のアラビア語変種ではこのような一致は随意的である。

(3) a. *ána* ***baráa-y***, *ína* *fi* *kompyúuta,* *máafi* *zóol* *wónusu* [...]
1SG だけ-1SG ここ LOC コンピュータ ない 人 話す

「僕はここでコンピュータの前に一人で、話す人もいなかった。」

b. *íta* ***baráa-k*** *béss?* [...] *íta* *yaú* *jáa* ***baráu*** *fi* *ostréelya.*
2SG だけ-2SG だけ 2SG FOC 来る だけ LOC オーストラリア

「君だけなのか？君だけでオーストラリアに来たのか？」

さらに、表 2 が示すように、EG 氏の話すアラビア語変種は SCA から一部の基礎語彙を借用している。このように、EG 氏の話すアラビア語変種は、動詞活用や接尾人称代名詞が(随意的ながら) 存在する点、一部の基礎語彙に関しては SCA と共通する。

表 2：基礎語彙の比較

	JA	EG 氏	SCA
行く	*rúwa* *(máshi)*	*-mshi* (IMPERF) *mash(ee)-* (PERF)	*-mshi* (IMPERF) *mash(ee)-* (PERF)
居る	*géni*	*-gwud* (IMPERF) *gaad-* (PERF)	*-g'ud* (IMPERF) *ga'ad-* (PERF)

逆に、EG 氏の話すアラビア語変種は /sh/ の実現が不安定であり /s/ と揺れ (e.g. (1b) *ma**sh**ee-na* vs. *ma**s**ee-t*)、(3b) が示す焦点化標識 (*yaú*)、次の (4) が示す文末助詞 (*ke*) や照応副詞 (*fógo*) を持つ。これらの特徴はいずれも SCA では見られず、JA に顕著である。

(4) *fíi* *mahál* *kída,* *bi* *gullóu* *sánalbon.* *híla* ***ke.***
ある 場所 そんな TAM という *St. Albans* 村 よ

fóogo *suudaníiz* *ketíir* *hináak.*
そこに *Sudanese* 沢山 そこ

「セイント・アルバンズという所がある。小さな町だよ。
そこにはスーダン人が沢山居るんだ。」

その他、本稿では特に例は示さないが、EG 氏のアラビア語変種は、/kh/ や /h/ の実現も不安定である点 (前者は /k/ と揺れ、後者は脱落しやすい)、咽頭摩擦音や咽頭化／軟口蓋化子音を持たない点、SCA に存在する定性 (definiteness) や文法性 (gender) などの文法範疇を持たない点でも JA と共通している。

3.2.2 バハル＝エル＝ガザル出身者のアラビア語変種

MT 氏はヌエル語母語話者であり、バハル＝エル＝ガザル地域の中では最南東にあたる、ベンティウ (Bentiu) 周辺地域出身の中年層男性である。彼はエチオピア南西部、ジュバ、カクマ (ケニア北西部) に居住した経験を持つが、ハルツームには居住した経験がない。つまり、彼は KJA ではなく、南部スーダンの北部のアラビア語変種の話者である。

MT 氏のアラビア語変種には、先述の EG 氏と同様に、(5a) [随意的な] 動詞主語人称活用や (5b) 1SG. ***nV*-STEM** の形式、(6) 接尾人称代名詞のように SCA と共通する特徴や、(7) 焦点化標識や文末助詞の存在など、JA と共通する特徴が見られる。

(5) a. *ána* ***jée-t*** […] *min* *béled* *le* *ityóopya,* *u* ***mashée-ta*** *kénya.*
1SG 来る.PERF-1SG から 田舎 に エチオピア そして 行く.PERF-1SG ケニア
[...] *máa* ***garée-t*** *kitáab* *ta* *árabi.*
NEG 読む.PERF-1SG 本 の アラビア語

「俺は田舎から出てきて [まず] エチオピアへ、それからケニアに行った。[そういうわけで] アラビア語は勉強していない。」

b. *aaí,* *déer* ***n-ágra*** *ziyáada.* [...] *aaí,* *déer* ***ná-amul.***
はい 欲する 1SG-読む.IMPERF もっと はい 欲する 1SG-する.IMPERF

「うん、もっと勉強したい。もっとやりたい。」

(6) *lissa* ***ind-í*** *wáahid sána, ána bi intáa.*
まだ 持つ-1SG 一 年 1SG TAM 終わる

「俺はあと一年で終わりだ [卒業する]。」

(7) *laakín bés, dé* ***yaú*** *sókol ta dúniya* ***ke****.*
しかし だけ これ FOC 仕事 の 世界 よ

「だけどまあ、これが娑婆の理ってもんよ。」

3.2.3 中層話体的ジュバ･アラビア語

仲尾 (2011b) や 3.2.1 で分析したハルツーム居住経験者の話すアラビア語変種 (KJA)、3.2.2 で分析した南部スーダン北部地域で話されると考えられるアラビア語変種が以下のような点で概ね一致している (それぞれの特徴に関して詳細に調査する必要はある)。

(8) a. (随意的な) 動詞現実法 (完了・未完了) の主語人称活用を持つ。
b. (随意的な) 特殊な動詞非現実法の主語人称活用 (1SG. = 1PL. *nV*- STEM) を持つ。
c. (随意的な) 接尾人称代名詞を持つ。
d. SCA からの借用 (基礎語彙) が顕著である。
e. JA に顕著な焦点化標識 *yaú*、文末助詞 *ke*、照応副詞 *fógo* などを持つ。
f. 文法性や定性などの文法範疇を持たない。
g. /sh/, /kh/, /h/ などの実現が不安定、咽頭摩擦音や咽頭化子音を持たない。

以上より、本稿ではこれらのアラビア語変種を単一の言語変種と認めることは、ある程度妥当であると考え、これらを総括して「中層話体的ジュバ･アラビア語」(MJA) と呼ぶ。一般的には、いわゆる「中層話体」の言語体系は上層話体と基層話体の言語体系の集合の和に対する部分集合であると解釈されるが、Gil (2006) は「中層話体のみに見られる範疇 (Distinctly Mesolectal Properties)」の存在を認めている。上記 (8b) は明らかにその 1 例であり、これは MJA を独立の言語変種と認める基準として重要である。

またこのとき、MJA は ① 南部スーダン北部地域の MJA、② ハルツーム (避難民) の MJA に二別できることになるが、歴史的には前者が後者に影響を与えたと推定できそうである。前者の発生に関しては、単なる類推である可能性も否定できないが、南部スーダン北部と隣接する、現スーダン共和国南コルドファン地域で話される口語アラビア語変種には、(8b) にやや類似した現象が見られるため (Manfredi 2010, 1SG. *a-/nV*-STEM, 1PL. *nV*-STEM*(-u)*)、こうしたアラビア語変種との言語接触に起因する言語変化の可能性も疑われる [11]。

---

[11] なお、20 世紀初頭のウガンダ～南部スーダン地域では既に「後クレオール連続体」のようなものが存在した可能性がある (cf. Kaye & Tosco 1993) が、現在の MJA 発生との因果関係に関しては不明である。

3.2.4　民族語とアラビア語変種の相関

さらに、筆者は話者の民族語とアラビア語変種、およびその運用能力の相関に関して在豪南部スーダン人を対象に予備的調査を行った (ラトローブ大学構内、ビクトリア大学構内、フッツクレイ商店街、ノーブルパーク商店街などで無作為にインタビューを行い、その言語特徴を表 3 の 4 段階で記録した。「なし」はアラビア語変種を話さない人数)。

表 3：在豪南部スーダン人の話すアラビア語変種と運用能力の相関

	JA	MJA	MJA 少	なし
ディンカ語話者	0	11	3	6
ヌエル語話者	0	7	2	1
その他	4	1	0	0

表 3 の示すように、MJA はディンカ語・ヌエル語話者に顕著であり、その他の民族語話者 (MJA を話す一人を除いて、エクアトリア地域出身) は JA を話す傾向が見られた。この傾向は明らかに南部スーダンにおける出身地域ごとのアラビア語変種の分布を反映しており、メルボルンにおける民族語の分布 (cf. 2.2) とも一致しない。また、ディンカ語・ヌエル語は話者人口が多いため、必然的に MJA 話者数は JA 話者数より多いことも観察できる。

3.3　GO・NGO 出版物における南部スーダン・アラビア語諸変種

GO・NGO は TIS に準じて特定の民族語やアラビア語変種による出版 (パンフレット・CD・DVD) も行っている。ある程度は臨機応変な対応が可能な通訳とは異なり、出版物、特に印刷物は正書法などの規範が要請される。このため、正書法をもつ大言語が多用される傾向が見られる。例えば、DIAC は英語に加え 37 言語による印刷物 *Beginning a Life in Australia* を発行しており、在豪南部スーダン人向けには「アラビア語」(MSA)、「ディンカ語」、「ヌエル語」の 3 言語が用意されているが、いずれも正書法をもつ大言語である。

また、いわゆるアラブ地域では一般に標準アラビア語と口語アラビア語からなるダイグロッシアが観察されるが、オーストラリアにおいてはこうした地域出身者に向けた口語アラビア語変種 (e.g. エジプト・アラビア語、レバノン・アラビア語、イラク・アラビア語) による言語サービスや出版物は存在せず、標準アラビア語のみが用いられている [12]。

以上のような背景があるにも関わらず、在豪南部スーダン人は標準アラビア語の運用能力が不十分である (Borland & Mphande 2008) などの理由から、“Juba Arabic”, “Sudanese Arabic” と題された出版物が存在する。本節では、このような規範の欠如した言語変種に出版を行う際、どのような措置が採られ、現時点でどのような問題があるかを分析する。

---

[12] ただし、マルタ語 (Maltese) は言語系統としては口語アラビア語に含まれるが、在豪マルタ人向けの言語教育や言語サービス、出版物に運用されている。こうした特別の措置が採られている理由としては、在豪南部スーダン人や在豪マルタ人が標準アラビア語の運用能力を持たず、なおかつ標準アラビア語をそのアイデンティティの拠り所としていないことが挙げられよう。

3.3.1　在豪南部スーダン人向け出版物におけるアラビア語変種の多様性

筆者は 2011 年 12 月 31 日時点で、“Juba Arabic” または “Sudanese Arabic” と表記された在豪南部スーダン人向け出版物 (ウェブサイト・パンフレット・CD・DVD) に関して、本稿付録に挙げた 38 点を収集している[13]。これらのうち、単一の出版物において “Juba Arabic” と “Sudanese Arabic” が分類されて出版された例は存在せず、発注者 (オーストラリア人) 側がこれらの 2 変種を区別していない可能性が指摘できる。次に、出版物の作成者 (在豪南部スーダン人) が発注された言語名に対し、実際にどの変種に翻訳しているかが問題となる。

まず、実際にこれらの出版物を言語資料として分析する上で、標準アラビア語以外のアラビア語変種について、3.2 での議論を簡略化し、(9) のように動詞活用の有無を認定基準として設けた。この上で JA, MJA, SCA, MSA の 4 種類に分類するが、MSA はある程度、正書法などの規範を持っているため、本稿では特に認定基準を設けていない。

(9)　**JA**：　動詞活用を持たない (テクスト内で動詞全てが活用しない)。
　　MJA：随意的な動詞活用を持つ (テクスト内の動詞活用の有無が揺れる)。
　　SCA：義務的な動詞活用を持つ (テクスト内の動詞全てが活用する)。

具体的に各変種を代表する例文を以下に示す。まず、(10) は JA の例であるが、動詞は活用を持たない。なお、一般的に出版物における JA には高級語彙を中心に SCA や MSA からの借用が顕著である (仲尾 2011b) が、今回は JA や MJA の認定基準とはしない。

(10)　**JA の例** (Migrant Resource Centre Southern Tasmania n.d., 表記はママ)

a. *Nas CBS bi* ***arufu*** *gale nas ajusin bi* ***hibu geni*** *fi beit ketir.*
人々 CBS TAM 知る COMP 人々 老人.PL TAM 好む 居る LOC 家 沢山

「CBS の人々は、老年の方々が長く家に居たがることを知っています。」

b. *Fi wokit tani umon* ***deiru*** *nas bi* ***geni*** *wa* ***saudu*** *umon.*
LOC とき INDEF 3PL 欲する 人々 TAM 居る そして 助ける 3PL

「時に、彼らは誰かに居てもらい、手伝ってもらいたがっています。

次に、(11) は MJA の例であるが、*sadu*「助ける」、*ishtakalu*「働く」、*bi agder*「できる」などは動詞活用を持たないのに対して、*na amulu*「私たちは作る」、*ta ligo*「あなたが見つける」は主語人称による動詞活用を示していると考えられる。また、(8) で言及した接尾人称代名詞 (11a. *inda na*　「私たちは持つ」) も観察される。

---

[13] 対象者が在豪南部スーダン人に限定されない、“Arabic” と表記された出版物も当然ながら多数存在する。しかし、筆者の調査の限り、この言語名表記が JA、MJA、SCA を表している例は存在せず、南部スーダン以外のいわゆるアラブ地域出身者が作成していると考えられる。

(11) **MJA の例** (Centrelink n.d., 表記はママ)

a. *Anina* ***inda na*** *malumat al bi* ***sadu*** *ita bi arabi juba.*
1PL 持つ-1PL 情報 REL TAM 助ける 2SG INS JA

「私どもには、皆様に役立つジュバ･アラビア語での情報があります。」

b. *Anina ga* ***ishtakalu*** *shaded al shan* ***na amulu*** *le ita sika sahil/basit*
1PL TAM 働く とても ために 1PL-作る DAT 2SG 道 簡単な

kef ita ***bi agider*** ***ta ligo*** *malumat fi shabaka ta nina bi arabi juba.*
どう 2SG できる 2SG-見つける 情報 LOC ウェブ の 1PL INS JA

「私どもは、皆様がジュバ･アラビア語で私どものウェブサイト上の情報を見つけやすい方法を構築するため、一生懸命努めております。」

(12) は SCA の例であるが、このテクストでは動詞は必ず活用 (*shiil*「取れ」、*ta-mrug*「あなたが外出する」) している。また、接尾人称代名詞を持つ (*ma'aa-k*「あなたと共に」, *beet-ak*「あなたの家」)。なお、(8) では MJA がふつう文法性を持たないことを述べたが、以下の例では性の一致を表す接尾辞 (*muhimm-a*, ただし無生物名詞複数形は文法性体系上、女性単数形として一致する) が観察される。

(12) **SCA の例** (NSW States Eergency Service n.d.)

shiil ***ma'aa-k*** *'ayyi 'awraak, ṣuwar fotoghrafiiy-a, 'aw 'idhbaat hawiiya*
取る.IMP COM-2SG 全 紙.PL 写真.PL または 身分証明書

muhimm-a, *lamman* ***ta-mrug*** *min* ***beet-ak.***
重要な-F とき 2SG-外出する.IMPERF から 家-2SG

「家から出るときには重要な書類、写真または身分証明書を持っていくこと。」

(13) は MSA の例であるが、MSA に顕著な語彙 (MSA. *marḥaban bi-kum*, cf. SCA. *marḥab bee-kum*「(皆様) ようこそ」、MSA. *haadha*, cf. SCA. *da*「この.M」) が観察される。

(13) **MSA の例** (Maribyrnong City Council n.d.)

marḥaban ***bi-kum*** *fii madiinat maribanoŋ.*
ようこそ INS-2PL LOC 市 マリビノン

haadha *d-daliil 'ibaara 'an tagdiim li majlis maribanoŋ.*
この.M DEF-指南 説明 について 紹介 DAT 市議会 マリビノン

「ようこそマリビノン市へ。この指南はマリビノン市議会についての説明です。」

以上のような基準に基づいて分類した結果、表 4 が得られた。

“Juba Arabic” と題されている場合には JA または MJA、“Sudanese Arabic” と題されている場合には SCA または MSA が観察され、言語名が実際の言語変種と相関している傾向が見られる。このことからは、結論として出版物の作成者 (在豪南部スーダン人) が、少なくとも “Juba Arabic” と “Sudanese Arabic” という言語名に関して異なる変種であると認識している可能性が指摘できる。また、筆者が現時点で収集した限りにおいては、“Juba Arabic” に比べて “Sudanese Arabic” と言語名表記された出版物が多いことも指摘できそうである。

表 4：在豪南部スーダン人向けアラビア語変種出版物

	JA	**MJA**	**SCA**	**MSA**
“Juba Arabic” [14]	12	1	0	0
“Sudanese Arabic” [15]	0	0	17	8

Borland & Mphande (2008) はスーダン共和国やエジプト共和国で難民経験を経た在豪南部スーダン人以外は “Sudanese Arabic” や “Classical Arabic” (= 標準アラビア語) を好まない傾向を報告している。表 4 から浮かび上がる、“Sudanese Arabic” が出版物に多用される傾向は、元来の「アクセスと平等」の理念に反しており、この状況は現代オーストラリアの言語サービスにおいて、今後改善されるべき課題であろう。

なお、仲尾 (2011b) では、Centrelink の提供している出版物 *Helping Centrelink customers get work* の “Juba Arabic” (MJA) 版、*Musaada le zabain ta Centrelink al shan ligo shokol* について言及したが、Internet Archive (www.archive.org) で確認できる限り、この翻訳版は 2006 年にウェブ上にアップロードされ、2009 年に削除されていたため、表 4 には反映されていない。

これに前後して、Centrelink は 2008 年に “Sudanese Arabic” による *Centrelink information for new Australians* (CD, cf. 本稿付録) を出版している。この事例から Centrelink の在豪南部スーダン人向け出版物において、アラビア語変種が “Juba Arabic” から “Sudanese Arabic” に移行したといえそうであるが、その理由は今後、今回分析した出版物資料がどのように移行 (削除・改版) されていくかを観察した上で考察すべき問題である。

3.3.2　在豪南部スーダン人向け出版物における媒体の多様性

変種の多様性に関しては上記のような結果が得られたが、さらに問題となるのは媒体である。一般的に標準アラビア語を除くアラビア語変種 (JA, MJA, SCA など) は正書法を持たず、当然、識字教育も公的には行われていない。Borland & Mphande (2008) は “Sudanese Arabic” に関し、(特に老年層は) 対面による通訳や音声や映像による出版物を望む傾向を報告している。本稿付録に示した出版物のうち、例えば Victorian Electoral Commission (n.d.) が

---

[14] “Arabic Juba”, “Juba”, “Juba Arabic (Sudanese Arabic)” を含む。

[15] “Arabic - Sudanese”, “Sudanese”, “Southern Sudanese Arabic” を含む。

「アラビア語」(MSA) および「ディンカ語」に関しては正書法を用いた印刷物、“Sudanese Arabic” (SCA) に関しては mp3 ファイルを公開しているなど、在豪南部スーダン人の要望は、少なくとも部分的には実現しつつあるようである。

しかし、文字を用いた印刷物の出版も行われている。本稿付録に挙げた出版物一覧に見られる一般的な傾向として、“Juba Arabic” はラテン文字、“Sudanese Arabic” はアラビア文字によりそれぞれ表記されている。興味深い例外として、Legal Aid NSW (2011) によるアラビア文字を用いた “Juba Arabic” (JA) 表記の試みがある (さらに mp3 ファイルも付されている)。この出版物には仲尾 (2011a) で分析した旧版 (Legal Aid NSW, n.d. *Welcome to Legal Aid*) が存在し、そこではラテン文字により “Juba Arabic” (JA) が表記されていた。先述の Centrelink の出版物におけるアラビア語変種の移行と併せて、Legal Aid NSW における文字の移行は、21 世紀初頭オーストラリアにおいて、規範なき在豪南部スーダン人のリンガフランカと格闘する言語サービスの混乱を示す貴重な例といえるかもしれない。

4　まとめ

本稿では、仲尾 (2011b) を補足・修正し、南部スーダンで話されるアラビア語変種の一つとして「中層話体的ジュバ･アラビア語 (MJA)」を認め、MJA は上層話体にも基層話体にも存在しない独自の特徴を持っていることを指摘した。また、MJA は南部スーダン北部地域で話されているものと、ハルツームなどのディアスポラコミュニティで話されているものに大別でき、前者が後者の発生に影響を与えた可能性についても言及した。また、簡易インタビューに基づき、メルボルンでは MJA 話者が JA 話者より多い可能性についても述べた。

さらに、本稿ではオーストラリアで言語サービスの名の下に出版された「スーダン・アラビア語」・「ジュバ･アラビア語」資料を分析し、「スーダン・アラビア語」と「ジュバ･アラビア語」を峻別して別々に翻訳版が作成された例はないこと、「スーダン・アラビア語」はアラビア文字で書かれた SCA または MSA、「ジュバ･アラビア語」はラテン文字で書かれた JA や MJA を指す傾向が強いこと、「スーダン・アラビア語」の出版物数の方が「ジュバ･アラビア語」の出版物数より多いことなどが明らかになった。どちらかといえば MSA や SCA 偏重のこの傾向は、実際の在豪南部スーダン人の需要とは必ずしも一致しておらず、結論的に言語サービスとしては未だ混乱している状況であると言える。

この混乱の原因としては、まず、在豪南部スーダン人 (の一部) が一次避難先のハルツームやカイロで威信的な SCA や MSA を獲得し、その威信がオーストラリアの言語サービスに移植されたことに起因する可能性が指摘できる (JA と比べてやや SCA 的な特徴を持つ MJA を、話者自身が “Juba Arabic” ではなく “Sudanese Arabic” だと主張した可能性もある)。また、ホストであるオーストラリア人側でもそのような言語背景に無理解であり、正書法などの規範がない言語変種を、従来の言語サービスに強引に組み込んだことも問題である。

在豪南部スーダン人は未だ若いコミュニティであり、今後も言語維持や言語サービスなどはさらに重要な課題となることが予想される。本稿は予備的ながら、2011 年時点での彼らの社会言語学的・記述言語学的報告としたい。

グロス略号一覧

1	1 人称	DEF	定冠詞	LOC	位格前置詞
2	2 人称	F	女性形語尾	NEG	否定標識
3	3 人称	FOC	焦点化標識	PERF	完了相
COM	共格前置詞	IMP	命令	PL	複数
COMP	補文標識	IMPERF	未完了相	REL	関係節標識
COP	コピュラ	INDEF	不定性標識	SG	単数
DAT	与格前置詞	INS	具格前置詞	TAM	TAM 標識

付録：GO・NGO のアラビア語変種による出版物一覧

3.3 で分析した GO・NGO 出版物 (印刷物以外は媒体の種類を記す) を以下に挙げる。言語名に関しては、まず “Sudanese Arabic” または “Juba Arabic” を挙げ、標準アラビア語やディンカ語・ヌエル語によるものがあれば併記した。なお、これらには全て英語版が存在しているが、言語名一覧からは削除した。また、ウェブページには URL を、その他の出版物にも参考 URL を付した (いずれも最終閲覧日は 2011 年 12 月 31 日)。

Australian multicultural foundation (n.d.) *Memory loss: Disrupting daily life. A national dementia campaign*. (参考 URL: amf.net.au/entry/national-dementia-campaign): **“Arabic - Sudanese” (SCA)**

Brimbank City Council (n.d.) *Multilingual*. (参考 URL: www.brimbank.vic.gov.au/Multilingual): **“Sudanese” (SCA), “Arabic” (MSA)**

Cancer Council Victoria (n.d.) *Skin: UV radiation and vitamin D*. (参考 URL: www.cancervic.org.au/resources/default.asp): **“Sudanese Arabic” (MSA), “Arabic” (MSA), “Dinka”, “Nuer”**

Centrelink (2008) *Centrelink information for new Australians* (CD). (参考 URL: www.centrelink.gov.au/internet/internet.nsf/publications/ah1723.htm): **“Sudanese Arabic” (SCA), “Arabic” (MSA), “Dinka”**

Centrelink (n.d.) *We speak your language* (ウェブページ). (URL: www.centrelink.gov.au/internet/internet.nsf/languages/index.htm および www.centrelink.gov.au/internet/internet.nsf/languages/jz.htm): **“Juba Arabic” (MJA), “Arabic” (MSA), “Dinka”, “Nuer”**

City of Casey (n.d.) *Community Grants*. (参考 URL: www.casey.vic.gov.au/doclib/document7Apr2010-100802.pdf?saveAs=Community_Grants_Translation_v7Apr10.pdf): **“Juba Arabic” (JA), “Arabic” (MSA), “Dinka”**

Energy & Water Ombudsman NSW (n.d.) *Information for electricity, gas and water customers*. (参考 URL: www.ewon.com.au/index.cfm/publications/translated-information): **“Juba Arabic (Sudanese Arabic)” (JA), “Arabic” (MSA), “Dinka”**

Good Shepherd (2009) *Education Costs Kit: A Resource for Community Agencies*. (参考 URL: www.goodshepvic.org.au/resources): **"Sudanese Arabic" (SCA), "Arabic" (MSA)**

Government of Western Australia, Fire & Emergency Services Authority (2011a) *Evaporative Air Conditioners*. (参考 URL: www.fesa.wa.gov.au/safetyinformation/fire/bushfire/Pages/evaporative airconditioners.aspx): **"Sudanese Arabic" (SCA), "Arabic" (MSA), "Dinka", "Nuer"**

Government of Western Australia, Fire & Emergency Services Authority (2011b) *If a Storm has Damaged Your Home*. (参考 URL: www.fesa.wa.gov.au/safetyinformation/storm/Pages/publications.aspx): **"Sudanese Arabic" (SCA), "Arabic" (MSA), "Dinka", "Nuer"**

Government of Western Australia, Fire & Emergency Services Authority (2011c) *Picking up the Pieces – After a Fire in the Home*. (参考 URL: www.fesa.wa.gov.au/safetyinformation/fire/fireinthehome/Pages/publications.aspx): **"Sudanese Arabic" (SCA), "Arabic" (MSA), "Dinka", "Nuer"**

Government of Western Australia, Fire & Emergency Services Authority (2011d) *Prepare for a Storm*. (参考 URL: www.fesa.wa.gov.au/safetyinformation/storm/Pages/publications.aspx): **"Sudanese Arabic" (SCA), "Arabic" (MSA), "Dinka", "Nuer"**

Government of Queensland, Office for Early Childhood Education and Care (n.d.a) *Kindergarten brochure*. (参考 URL: deta.qld.gov.au/earlychildhood/families/resources.html): **"Juba Arabic" (JA), "Arabic" (MSA)**

Government of Queensland, Office for Early Childhood Education and Care (n.d.b) *A kindergarten program for every child fact sheet*. (参考 URL: deta.qld.gov.au/earlychildhood/families/resources.html): **"Juba Arabic" (JA), "Arabic" (MSA)**

Government of Queensland, Office for Early Childhood Education and Care (n.d.c) *More kindergarten services for Queensland families fact sheet*. (参考 URL: deta.qld.gov.au/earlychildhood/families/resources.html): **"Juba Arabic" (JA), "Arabic" (MSA)**

Italk Library (n.d.) *A Sudanese Story* (DVD). (参考 URL: www.italklibrary.com/a-sudanese-story-sudanese-arabic): **"Sudanese Arabic" (SCA)**

Legal Aid New South Wales (2011) *How Legal Aid NSW can help you*. (参考 URL: www.legalaid.nsw.gov.au/languages, mp3 ファイル付き): **"Arabic (Juba)" (JA), "Arabic" (MSA), "Dinka"**

Legal Aid Queensland (n.d.) *Help in Court... for Women*. (参考 URL: www.legalaid.qld.gov.au/publications/pages/translated-material-by-publication.aspx): **"Sudanese Arabic" (MSA), "Arabic" (MSA)**, ただし、タイトル以外は同じ文面。

Loddon Compaspe Community Legal Centre (n.d.) *Victoria Legal Aid*. (参考 URL: www.communitylaw.org.au/loddoncampaspe/cb_pages/Fact_Sheets.php): **"Sudanese Arabic" (SCA)**

Loddon Compaspe Community Legal Centre (n.d.) *Community Legal Centres*. (参考 URL: www.communitylaw.org.au/loddoncampaspe/cb_pages/Fact_Sheets.php): **"Sudanese Arabic" (SCA)**

Maribyrnong City Council (n.d.) *Welcome to Maribyrnong* (ウェブページ). (URL: www.maribyrnong.vic.gov.au/Page/ Page.asp?Page_id=5533, mp3 による解説付き): **“Sudanese Arabic” (MSA)**, ただし SCA の影響が顕著。

Migrant Information Centre Eastern Melbourne (2006a) *Understanding Money in Australia*. (参考 URL: www.miceastmelb.com.au/research.htm): **“Sudanese Arabic” (MSA), “Dinka”, “Nuer”**

Migrant Information Centre Eastern Melbourne (2006b) *Using ATM's*. (参考 URL: www.miceastmelb.com.au/research.htm): **“Sudanese Arabic” (MSA), “Dinka”, “Nuer”**

Migrant Resource Centre Southern Tasmania (n.d.) *Community Partners Program Aged Care Information Resource Kit*. (参考 URL: www.mrchobart.org.au/content/aged-care-resources): **“Arabic Juba” (JA)**

Multicultural Health & Support Service (n.d.) *Multicultural Health & Support Service*. (印刷物のみ): **“Sudanese Arabic” (MSA), “Nuer”**

National Disability Coordination Officer Program Victoria (n.d.) *What is the NDCO Program?* (参考 URL: www.ndcovictoria.net.au): **“Juba Arabic” (JA), “Dinka”**

NSW Fair Trading (2009) *Renting – what you need to know* (mp3). (参考 URL: www.fairtrading.nsw.gov.au/About_us/Video_and_audio/Renting_what_you_need_to_know.html): **“Juba” (JA), “Dinka”**

NSW Family & Community Services (n.d.) *Raising kids together*. (参考 URL: www.adhc.nsw.gov.au/publications/other_languages): **“Juba Arabic” (JA), “Arabic” (MSA), “Dinka”**

NSW Lawlink Attorney General & Justice (2010) *The Law and You, Legal Information for African Communities in NSW* (DVD). (参考 URL: www.lawlink.nsw.gov.au/lawlink/diversityservices/LL_DiversitySrvces.nsf/pages/diversity_services_justicesys_eng): **“Juba Arabic” (JA), “Arabic” (MSA), “Dinka”**

NSW Refugee Health Improvement Network (2007) *Health Check DVD: Health information for recently arrived African communities in Australia* (DVD). (参考 URL: www.mhcs.health.nsw.gov.au/publicationsandresources/audioandvideo/audiovideo.asp および www.youtube.com/user/refugeehealth): **“Juba Arabic” (JA), “Dinka”**

NSW Refugee Health Service (2005) *Talking about Medicines* (CD). (参考 URL: www.sswahs.nsw.gov.au/sswahs/refugee/mhr.html): **“Southern Sudanese Arabic” (SCA), “Dinka”**

NSW States Emergency Service (n.d.) *FloodSafe*. (参考 URL: www.ses.nsw.gov.au/community-safety/communitylanguageresources2, mp3 ファイル付き): **“Sudanese Arabic” (SCA), “Arabic” (MSA), “Dinka”, “Nuer”**

VIC Department of Health (2011) *Cheers: alcohol and your family*. (参考 URL: www.druginfo.adf.org.au/information-for/cheers-alcohol-and-your-family): **“Sudanese Arabic” (SCA), “Arabic” (MSA)**

Victorian Electoral Commission (n.d.) Information. (参考 URL: www.vec.vic.gov.au/language-tis.html および www.vec.vic.gov.au/language-Sudanese-Arabic.html): **“Sudanese Arabic” (SCA), “Arabic” (MSA), “Dinka”**, ただし“Sudanese Arabic” は mp3

Victorian Equal Opportunity & Human Rights Commission (n.d.) *Information in languages other than English*. (参考 URL: www.humanrightscommission.vic.gov.au/index.php?option=com_k2&view=item&id=1218&Itemid=688): **"Sudanese Arabic" (SCA), "Arabic" (MSA), "Dinka", "Nuer"**

South Australia Department of Health (n.d.) *Lye Water information for the African Community*. (参考 URL: www.health.sa.gov.au/pehs/lye-water-translations.htm): **"Sudanese Arabic" (MSA), "Arabic" (MSA), "Dinka"**

Tennis Victoria (n.d.) *Welcome to tennis – Tennis in 14 languages*. (参考 URL: www.tennis.com.au/vic/play-tennis/getting-started/multicultural-program): **"Sudanese Arabic" (SCA), "Arabic" (MSA)**

Victorian Refugee Health Network (n.d.) *First Foods for Babies*. (参考URL: www.refugeehealthnetwork.org.au/resources/Nutrition): **"Sudanese Arabic" (MSA), "Arabic" (MSA), "Nuer"**

参考文献 (URL の最終閲覧日はいずれも 2011 年 12 月 31 日)

Bianco, Nicky Lo, Andrew Cunningham & Colleen McCombe (2009) *New communities, emerging content: digital inclusion for minority language groups*. Melbourne: State Library of Victoria. (URL: www.law4community.org.au/scope/wp-content/uploads/2010/04/NCEC-report.pdf)

Borland, Helen & Charles Mphande (2006) *The Numbers of Speakers of African Languages Emerging in Victoria: Report to Victorian Office of Multicultural Affairs Department for Victorian Communities.* Melbourne: Victoria University. (URL: vuir.vu.edu.au/439)

Borland, Helen & Charles Mphande (2008) "Communicating with Victoria's Emerging African Language Communities: Issues and Responses" *Openroad 2008 Conference: Multilingualism and Information Society, 15–16 May, 2008, Melbourne*. (URL: www.openroad.net.au/conferences/2008/borland.html)

Coffey, Margaret. (2004) *Life in transit; the experiences of Sudanese refugees arriving in Australia*. (URL: sora.akm.net.au/publish.php)

Dumenden, Iris Enriquez (2007) *A Case Study of an ESL Literacy Learner from Sudan*. La Trobe University: MA thesis.

Gil, David (2006) "Distinctly Mesolectal Properties in Malay/Indonesian Dialects". Paper presented at the Sixteenth Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, Jakarta, Indonesia, 21 Sept. 2006. (URL: lingweb.eva.mpg.de/Jakarta/seals/Gil_SEALS_XVI_Abstract.pdf)

Hajek, John & Simon Musgrave (2010) "Sudanese Languages in Melbourne: Linguistic Demography and Language Maintenance" in Y. Treis & R. de Busser (eds.) *Selected Papers from the 2009 Conference of Australian Linguistic Society*. (URL: www.als.asn.au/proceedings/als2009.html)

Hatoss, Aniko & Terry Sheely (2009) "Language Maintenance and Identity among Sudanese-Australian refugee-background youth" *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 30 (2): 127–144.

Kaye, Alan. S. (1991) “Nilo-Saharan influence on Kinubi” *Proceedings of the Third Nilo-Saharan Linguistics Colloquium Kisumu, Kenya, August 4-9, 1986* (Nilo-Saharan Vol. 6). Hamburg: Helmute Buske, pp. 123–129.

Kaye, Alan S. & Mauro Tosco (1993) “Early East African Pidgin Arabic” *Sprache und Geschichte in Afrika*. 14: 269–305.

Lai, Miranda & Sedat Mulayim (2011) “Training Interpreters in Rare and Emerging Languages: The Problems of Adjustment to a Tertiary Education Setting” *International Journal of Social Inquiry* 4 (1): 159–184.

Lewis, M. Paul ed. (2009) *Ethnologue: Languages of the World, Sixteenth edition*. (Online version). (URL: www.ethnologue.com)

Manfredi, Stefano (2010) *A Grammatical Description of Kadugli Baggara Arabic*. Università degli Studi di Napoli “L’Orientale”: Ph.D. thesis.

仲尾周一郎（2011a）「ジュバ・アラビア語の現在 ―社会言語学的諸相および表記の発達から見るその動態」『アラブ・イスラーム研究』 9: 79–103.

仲尾周一郎 (2011b)「現代若年層ジュバ･アラビア語についての予備的報告」『地球研言語記述論集』3: 59–83.

松田陽子（2005）『オーストラリアの言語政策と多言語主義：多文化共生社会にむけて』兵庫県立大学経済経営研究所.

GO・NGO 関連参考文献・URL (注記のない限り、URL の最終閲覧日は 2011 年 12 月 31 日)

Agamlöŋ Online. (URL: home.vicnet.net.au/~agamlong)

CLA; Community Languages Australia (2007) *Operational and Administrative Procedures Manual for Community Languages Schools*. (参考 URL: www.communitylanguagesaustralia.org.au./D)ocuments/Operational_Manual.pdf)

DEEWR; Australian Government: Department of Education, Employment and Workplace Relations (2009) *First Language (Dinka) Literacy as a Foundation for English Language, Literacy and Numeracy: Report*. (参考 URL: www.deewr.gov.au/Skills/Programs/LitandNum/LiteracyNet/Documents/FirstLanguageDinkaLiteracy.pdf)

DIAC; Australian Government: Department of Immigration and Citizenship. (URL: www.immi.gov.au)

DIAC (2007) *Sudanese Community Profile*. (参考 URL: www.immi.gov.au/living-in-australia/delivering-assistance/government-programs/settlement-planning/_pdf/community-profile-sudan.pdf)

DIAC (2010) *Beginning a life in Australia*. (参考 URL: www.immi.gov.au/living-in-australia/settle-in-australia/beginning-life)

DIAC (n.d.) *Community Information Summary: Sudan-born*. (参考 URL: http://www.immi.gov.au/media/publications/statistics/comm-summ/_pdf/sudan.pdf)

MRCNWR; Migrant Resource Centre North West Region (2006) *Community Profiles: Sudan Born Community*. (参考 URL: www.mrcnorthwest.org.au/content/Publications/Community%20Profiles/sudan06.pdf, 最終閲覧日は 2011.9.26)

SAIL (Sudanese Australian Integrated Learning) Program. (URL: www.sailprogram.org.au)

SAIL Program (2005) *SAIL Program Newsletter*. March 2005. (参考 URL: www.sailprogram.org.au/site/category/newsletters)

VMC; Victorian Multicultural Commission (URL: www.multicultural.vic.gov.au)

VMC (2007) *Population Diversity in Local Councils in Victoria: 2006 Census*. (参考 URL: www.multicultural.vic.gov.au/population-and-migration/victorias-diversity/population-diversity-in-local-councils)

VMC (n.d.) *Victorian Interpreter Card*. (URL: www.multicultural.vic.gov.au/projects-and-initiatives/improving-language-services/victorian-interpreter-card)

謝辞

本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費 (DC1) (課題番号 23･6924) による研究成果の一部である。本調査の大半はラトローブ大学言語類型論研究センター (RCLT) に客員研究員として在籍した期間 (2011 年 9 月) に行った。この調査を行うにあたってご助力いただいた総合地球環境学研究所の大西正幸先生、長田俊樹先生、RCLT の Tonya Stebbins 先生、モナシュ大学の Simon Musgrave 先生、ラトローブ大学構内・ビクトリア大学構内・フッツクレイ商店街・ノーブルパーク商店街などで自由談話を提供していただいた在豪南部スーダン人の皆様、またコメントを頂いた言語記述研究会の稲垣和也氏に、記して謝意を表します。

カムチベット語燕門・斯嘎 [Sakar] 方言の文法スケッチ

鈴木 博之

キーワード：カムチベット語、雲嶺山脈西部下位方言群、格体系、動詞接辞

[要旨] 本稿では、中国雲南省徳欽県燕門郷拖拉行政村で話されるカムチベット語斯嘎 [Sakar] 方言（sDerong-nJol 方言群雲嶺山脈西部下位方言群）の音声・音韻および形態統語論の簡便な記述を行う。後者については、特に格体系と動詞句周辺の接辞を中心に述べる。

1　はじめに

中国雲南省迪慶藏族自治州徳欽県西部を中心に話されるカムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群雲嶺山脈西部下位方言群に属する各種方言[1]は、音声方面において多様な異なりをもつ方言群であり、少なくともこれらの特徴に基づいてさらに下位分類することが可能であると見込まれる（鈴木 2010）[2]。このうち、本稿で記述する燕門郷拖拉 [Thang-la] 行政村斯嘎 [Sa-dkar] 自然村で話される Sakar 方言は、燕門郷政府以南の拖拉村および瀾滄江をはさんで対岸にある春多樂 [Chu-mdo-ldug] 村、茨中 [Che-grong] 村、および南接する維西県巴迪郷の諸方言とともに、１つのグループを形成していると考えられる。これまで筆者は Sakar 方言の音声分析を提供した（鈴木 2010）が、形態統語の記述はまだ提出していない。

斯嘎村に居住するチベット語母語話者の普段の言語使用は、ほぼ土地のチベット語方言を用いて行われ、必要に応じて漢語の使用も見られる。大部分の村民はこれら二言語を併用する。このため、Sakar 方言の使用環境はきわめて良好な部類に入ると考えられる。また、斯嘎村のほとんどの村民は互いに親戚関係にあるという。呉光范 (2009:370[3]) によれば、斯嘎村の人口は 173 人で、この数を狭義の Sakar 方言の話者数と見積もることができる。なお、拖拉行政村全体では 1144 人の人口を数える[4]。

本稿で用いる Sakar 方言の言語資料は、筆者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者はスナン・ツモ [bSod-nams mTsho-mo] さん（女性）で、調査は主に香格里拉県建塘鎮で行った。語彙調査および文法調査ともに漢語を媒介言語とした翻訳形式を中心に行い、自然発話における用例の観察は斯嘎村で行うとともに、香格里拉県城でも同郷の人との会話を中心に

---

[1] 方言区分については鈴木 (2009b)、Suzuki (2009a:17) を参照。雲嶺山脈西部下位方言群に属する方言は、現段階では徳欽県升平 [’Jol] 鎮、雲嶺 [Lung-gling] 郷、佛山郷、燕門郷および維西傈僳族自治県巴迪 [’Ba’-sdod] 郷に分布する。

[2] しかし現段階ではいくつの下位分類が成立するのかは判明していない。

[3] 2005 年末のデータに基づく。

[4] 狭義の Sakar 方言は斯嘎村のみで話される変種と定義しなければならない。この意味で Sakar 方言は、たとえば隣村の Yethong（頁通）方言とは若干の異なりを認めることができる。

用例を収集した。その際には、スナン・ツモ [bSod-nams mTsho-mo] さん（女性；通称 Selena）とチェガ・ラモ [bCo-lnga Lha-mo] さん（女性）の協力を得た。

本稿の構成は、大きく I. 音声・音韻、II. 形態・統語と分けるが、各節は通し番号にしている。内容は Sakar 方言の記述に的を絞り、近縁方言やチベット文語形式との対比という観点からの分析は行わない[5]。なお、形態・統語についてはなお詳細な分析を必要とする部分が少なくない。これについては、稿を改め行うことにする。

I. 音声・音韻

音節構造、超分節音素、母音、子音に分けて述べる。

表記には音標文字を用い、IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も断りなく用いる。

2　音節構造

2.1　最大の音節構造

Sakar 方言の最大の音節構造（分節音の配列）は、鈴木 (2005) を参照して以下のように記述できる。

$^{C}C_{i}GVCC$　および　$CC_{i}GVCC$

このうち C_i（初頭子音）と V（音節核の母音）が必須であり、C_iV を音節の最小構成とみなすことができる。

末子音が２つ続くとき、最後の要素は/ʔ/である[6]。G（わたり音）と末子音 CC は共起しない。

これに超分節音素として声調が加わって実現される。ただし声調は語単位でかかる（**3** 参照）。

2.2　具体例

以下、各種分節音の配列について、それぞれ１つずつ例を掲げる。

^{C}	C_i	G	V	C	C	具体例	語義
	C_i		V			´tɕ^{h}aː	雨
	C_i	G	V			´pjẽ t^{h}u	ひざ
^{C}	C_i		V			´^{ɦ}du	石
^{C}	C_i	G	V			$^{-h}$kwɔ̃ ma	足
C	C_i		V			´mbə ^{h}tɑw	火箸
C	C_i	G	V			$^{-}$mbje	消化する
	C_i		V	C		$^{-}$nɑ̃w	空

[5] Sakar 方言における主要なチベット文語形式との対応関係は鈴木 (2010) が記述している。

[6] 末子音の CC の第１要素は半母音である。そして G（わたり音）の位置にも半母音のみが現れうる。これらの位置に現れる半母音は母音の一種と解釈し、二重母音を認めるという分析も可能であろう。

	C_i		V	C	C	ˆtɑwʔ	滑る
	C_i	G	V	C		¯ʈwɔʔ	6
C	C_i		V	C		$^{-h}$kaj nɑ̃w	流星
C	C_i		V	C	C	$^{-ɦ}$gɑwʔ	かぶせる
C	C_i	G	V	C		未確認	
C	C_i		V	C		´mbəʔ ts^how	こぶし
C	C_i		V	C	C	未確認	
C	C_i	G	V	C		未確認	

各種音節構造はその出現頻度に大きな異なりが認められ、CC_i 型や末子音 CC 型はあまり見かけない。

3　超分節音素

3.1　声調とその表記

Sakar 方言の超分節音素はピッチの高低による声調として実現される。声調パターンとして、以下の４種が認められる。

¯：高平　　´：上昇　　`：下降　　ˆ：上昇下降

声調は語単位でかかるが、最大で２音節を単位とし、３音節以降は低平〜中平のピッチで発音され、弁別的でない。声調のかかる単位の中には各種接尾辞類（格標識、名詞化標識、動詞接尾辞など）も含まれるが、接頭辞がある場合は接頭辞の声調パターンが語全体の声調に影響し、必ずしも中核的な語の声調が維持されるとは限らない。

以上の声調記号は語（または音節）の初頭に付される。

3.2　具体例

以下に１〜２音節語の声調の具体的な現れを示す。[ ] 内には各音節の分節音を S で代表し、その右肩に調値を５段階で表示する。

	高平	上昇	下降	昇降
１音節語	¯mɤ	´mə	`mə	ˆroʔ
	[S^{55}]	[S^{24}]	[S^{52}]	[S^{132}]
	「虫」	「人」	「２」	「友人」
２音節語	$^{-ɦ}$mə ^{ɦ}ma	´mə ^{h}tow	`^{ɦ}ljeː pa	ˆmə l̥je
	[$S^{55}S^{55}$]	[$S^{24}S^{55}$]	[$S^{55}S^{32}$]	[$S^{24}S^{53}$]
	「低い」	「花」	「脳」	「軟らかい」

以上に示した調値は、初頭子音によって若干異なりが現れるが、弁別的ではない。声調は型が弁別的に作用すると考えられる。

4　母音

4.1　母音の舌位置による一覧

Sakar 方言の母音の舌位置による一覧は次のようになる。

i　　ʉ　　u

e　　ə ɵ　　ɤ o

ɛ　　ɔ

a　　ɑ

調音方法に関して、特に必要とされる音声学的記述は以下の通りである。

/ɛ/　舌位置は [ɛ] またはそれよりやや広い [ɛ] と [æ] の中間になる。

/a/　複音節語において、最後以外の音節に現れる場合は [ɜ] 程度で発音される[7]。

/u/　開音節の場合は [ʊ] と発音されることが多く、それ以外は [u̟] になる。

/ɤ/　舌位置は [ɤ] または [ɯ] と [ɤ] の中間もしくはその前寄りの位置になる。

Sakar 方言の母音には、長短の対立、鼻母音/非鼻母音の対立が認められる。鼻母音には長短の対立は認められず、多くの場合短母音よりは長く長母音よりは短い半長の長さで実現される。鼻母音は/Ṽ/と表示し、/Ṽ·/とは記述しない。鼻母音は末子音位置に鼻音の子音的要素を伴うことはない。

4.2　具体例

以下に短母音、長母音、鼻母音の具体例を掲げる。

	短母音例		長母音例		鼻母音例	
i	ˋn̥̩i	火	⁻ᶠᶦn̩iː pɤ	眉毛	⁻n̥̩ĩ	心臓
e	⁻tɕe lə ˋlje	舌	´seː pa	露	⁻n̩aw djẽ	ほほ
ɛ	ˆjɛ ʰtoʔ	支える	ˆjɛː tɑw	以上	ˋpʰaj tʰjɛ̃	遅れる
a	⁻z̩a	虹	´ⁿdzaː	昼食	⁻n̩e wã	地獄
ə	´ji gə	本	⁻ᶠᶦjəː	借りる	⁻n̩aː nwə̃	手荒く扱う
ɑ	ˋl̩ɑw	学ぶ	´ᵐbɑː	埋める	⁻ʰtsɑ̃	刺繍する
ɔ	´tʰɔ nə	短い	ˆʈɔː	衝突する	⁻ᶠᶦlɔ̃	つかむ
o	´l̩a mo	女神	´kʰa ᵐboː	霜	⁻ʰsõ	3
ɤ	⁻ʰʈa pɤ	髪	⁻ᶠᶦŋɤː	銀	⁻kʰɤ̃ ⁿɖi	ケーキ
u	ˋsʰu	歯	´lɤ puː	体	´dũ	切れる
ʉ	⁻ʰʈʉ ᶠᶦma	猿	⁻tʰʉː tɕə	額	´m̩ʉ̃	霧
ɵ	´sʰɵ lʉː	種	´tɵː	植物油	⁻ɕʰə ŋ̊ɵ̃ ⁿdʑo	まき散らす

[7] 例によってはさらに舌位置が高くなり、[ə] で実現されることも珍しくない。このような場合には/ə/と記述する。

5　子音

5.1　子音音素一覧

Sakar 方言の子音の一覧は次のようになる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	pʰ	tʰ	ʈʰ		kʰ	
	無気	p	t	ʈ		k	ʔ
	有声	b	d	ɖ		g	
破擦音	無声有気		tsʰ		tɕʰ		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		sʰ	ʂʰ	ɕʰ		
	無気		s	ʂ	ɕ	x	h
	有声		z	ʐ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̊	ŋ̊	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

5.2　具体例

子音は、初頭子音について単子音および子音連続に分けて具体例を挙げつつ考察する[8]。

5.2.1　単子音

単子音の具体例は、可能な限り２例ずつ挙げる。

閉鎖音・破擦音

Sakar 方言は基本的に閉鎖/破擦音に無声有気、無声無気、有声の３系列を有する。ただし、声門閉鎖音は/ʔ/の１つである。

そり舌閉鎖音系列/ʈʰ, ʈ, ɖ/は、場合によって微弱な摩擦を伴う破擦音として実現されることが、その摩擦の弱さから破擦音とはみなせない。

有声音の系列はいずれも単子音としてはあまり見られず、語中に現れる例が多い。

	例語	語義	例語	語義
pʰ	ˉpʰɑʔ	ぶた	´pʰiː	抜く
p	ˉpaj	印鑑	´peː	（風が）吹く

[8] 末子音としては、/ʔ, w, j/およびその組み合わせのみが認められるため、特にここでは議論しない。

b	´bə la	服	´biː pa	蛙
tʰ	´tʰɑː rə	縄	´tʰoː lje	リス
t	´taj pu	チーズ	´te ʰka	きゅうり
d	ˉʰkaj daj	皿	´dũ	切れる
ʈʰ	ˉʈʰɑʔ	血	`ʈʰiʔ	世話をする
ʈ	´ʈaː	剃る	ˆʈiː	火であぶる
ɖ	ˉⁿdə ɣə ˉɖa	外見	ˉdʑaw ɖa	聾唖者
kʰ	´kʰaː	雪	´kʰeː ɳa tsʰẽj	彼ら
k	´ka ŋa	影	ˆkiʔ	しゃっくりする
g	ˉgẽ gu	老婦人	´gu kwɔʔ ´ʱzu	曲げる
ʔ	ˉʔa ja	赤ん坊	ˉʔə ᶯɖə ʰtɕiʔ	ほとんど
tsʰ	´tsʰaj mɤ	とげ	ˉtsʰə	犬
ts	ˉtsaj ʱda	ひっつかむ	`tse nɑʔ	森
dz	ˉʔa rɑʔ ´põ dza	酒かす	ˉtɕʰɤ dzĩ	井戸
tɕʰ	´tɕʰaː	雨	`tɕʰi	何
tɕ	ˆtɕa nə	ありがとう	ˉtɕiː	斤
dʑ	ˉdʑaw ɕʰuʔ	裏の	ˉdʑaw ɖa	聴覚障碍者

摩擦音

Sakar 方言は基本的に摩擦音に無声有気、無声無気、有声の３系列を有する。ただし、軟口蓋摩擦音および声門摩擦音には無声有気音がない。

	例語	語義	例語	語義
sʰ	ˉsʰa	地	`sʰu	歯
s	´saː rĩ	そば	´seː pa	露
z	ˉza	つるす	´zejʔ	ライオン
ʂʰ	ˉʂʰa	肉	`ʂʰiʔ	しらみ
ʂ	ˉʂaː ⁿdzə	チュバ	ˆʂiʔ	崩壊する
ʐ	ˉʐa	虹	´ʐi pa pa	隠す
ɕʰ	ˉʱdʑɑw ɕʰuʔ ˆɕʰa nã	退く	ˉɕʰi	開ける
ɕ	´ɕa	鶏	ˉɕiː pa	商品
ʑ	´ʑiː pa	もの		
x	ˉxa ŋɖɤ	鬼	ˉxõ xõ	凹の
ɣ	´ɣə naː ɖo	自分	ˉʂɛː ɣə	夕方
h	ˉha ´ku	理解する		
ɦ	´ɦo tɕa	ミルクティー	´ɦɔ̃ te ˉkaː rɔ̃	おのおの

共鳴音

Sakar 方言は基本的に鼻音/流音に無声、有声の２系列を有し、半母音には有声の系列のみが認められる。ただし、/r/には無声音がない。/r/は音価が多様で、中でも [ɾ, ɹ] といった発音がよく認められる。

	例語	語義	例語	語義
m	´maː	バター	´mi sĩ	人民
m̥	ˉm̥ã hwa	あざ		
n	´naj pa	耳	´nɔw ʰpɤ	翼
n̥	ˉn̥a	鼻	ˆn̥əʔ l̥je	ゆるい
ɲ	´ɲa mje	猫	ˉha ´ɲi gu	知らない人
ɲ̊	`ɲ̊i	火	ˉɲ̊ũ ma	竹
ŋ	´ŋa	私	ˉŋɛj	甘い
ŋ̊	ˉŋ̊o sẽj	青い	ˉŋ̊ĩ ɕwĩ	枕
l	ˉlaw tɕʰə	瀾滄江	´liː luʔ ˆjɯː	動く
l̥	´l̥a mo	女神	ˉl̥ẽ	はぐ
r	´ra	山羊	´riː tʰɔ̃	距離
w	´wa	キツネ	ˉwõ tɕʰɤ	汗
j	ˆjaː kwɔ̃	膨張する	´ji gə	本

5.2.2　子音連続

Sakar 方言に見られる子音連続の組み合わせは比較的多いが、その組み合わせには大きく分けて主たる子音に先行する前鼻音と前気音、そして主たる子音に後続するわたり音に分けられる。わたり音と前２者は独立しているため、最大で３子音連続が認められる。

また、基本的に前鼻音・前気音と主たる子音の間の有声性は一致する。

なお、Sakar 方言の前鼻音は鼻音部の調音が弱いものと後続子音より強いものに分かれる。後者は少数例にのみ見られるが、発話速度が早い場合鼻音のみの発音になるという特徴がある[9]。

以下に子音連続の組み合わせを基準に分類して具体例を掲げる。

前鼻音

前鼻音は有声および無声有気閉鎖・破擦音および一部の流音に先行し、調音位置および有声性において一致するのが基本である。

有声音に先行するもの（$^{C}C_{i}$ 型構造）

[9] ただしこの現象は、鼻音の後続子音が脱落したのではなく、鼻音に同化したと分析できる。鼻音だけが聞こえる場合、その調音は単独の鼻音よりもやや長い。

ᵐb : ˊᵐbɑː　埋める
ⁿd : ˆⁿdzaː nəw　正午
ᶯɖ : ˊᶯɖu ᶯɖu　ボタン
ᵑg : ˉᵑgo　頭
ⁿdz : ˊⁿdzɑw lĩ　世界
ⁿʑ : ˊⁿdʑo du　尻
ⁿl : ˊⁿlə wa / ˉⁿla ka　月（天体）

有声音に先行するもの（CC_i 型構造）

mb : ˋmbɑʔ　お面
nd : ˆndɯ　弾
ŋg : ˉŋgaj　鍛冶屋
ndz : ˉndze pu　美しい
ɲʑ : ˉɲdʑaː　終わる

無声有気音に先行するもの

ᵐ̥pʰ : ˉɕʰɑʔ ˊᵐ̥pʰeː　拝む
ⁿ̥tʰ : ˉⁿ̥tʰɯ̃ mo　高い
ᶯ̊ʈʰ : ˋᶯ̊ʈʰuʔ　略奪する
ᵑ̊kʰ : ˊᵑ̊kʰɔ̃ ma　家
ⁿ̥tsʰ : ˉⁿ̥tsʰu　湖
ᶯ̊tɕʰ : ˊᶯ̊tɕʰɯː pa　唇

前気音

前気音は各種無声無気音および有声音に先行し、有声性において一致する。
無声有気音に先行するもの

ʰp : ˉʰpɔ̃ ma　肩
ʰt : ˉʰta　馬
ʰʈ : ˉʰʈɯ ᶯma　猿
ʰk : ˋʰkɑ rɑʔ　ベルト
ʰts : ˉʰtsa　脈
ʰtɕ : ˉʰtɕĩ　小便
ʰs : ˆʰsẽ ma　豆
ʰʂ : ˉʰʂɛː　ほとばしる
ʰɕ : ˉʰɕẽ mɤ　横の

ʰl̥ : ˉʰl̥ɑ̃w　靴

有声音に先行するもの

ɦb : ˉɦba　首
ɦd : ˉɦdõ　顔
ɦɖ : ˉɦɖə　蛇
ɦg : ´ɦgɔ̃ tʰaː　ハリネズミ
ɦdz : ˉɦdzẽ　火薬
ɦdʑ : ˉɦdʑẽ　秤
ɦz : ˉɦzẽ　袈裟
ɦʐ : ˆɦʐa ɳã　さきおととい
ɦm : ˉɦma ja　孔雀
ɦn : ˉɦnə ma　息子の嫁
ɦɲ : ˉɦɲiː tsə　目
ɦŋ : ˉɦŋɤː　銀
ɦl : ˉɦlo ma　風
ɦj : ˋɦje ɦmõ　花椒

わたり音

わたり音には/w/と/j/が認められる。いずれも語によっては発話速度が速い場合にわたり音部分が脱落することがあり、その存在は不安定である[10]。

/w/をもつもの

pʰw : ˉsʰẽ pʰwɔ̃　悔いる
pw : ´pwɔʔ　雨が降る
tʰw : ´pə lɔ̃ tʰwo ra　牛小屋
tw : ˆtwɔʔ　毒
ʈʰw : ´ʈʰwɔ ku　私生児
ʈw : ´ʈwɔ̃ zo　ひじ
ɖw : ´pʰuː ɖwi　鳩
kʰw : ˋkʰwɔʔ　溝
kw : ˉkwa　電気を消す
gw : ´gwɔ kwɔʔ　曲がる

---

[10] なお、続く II の形態・統語で記述する例文では、わたり音の脱落した形式を記述する場合がある。それは語単独で発音する形式と、文中で発音する形式に異なりが認められるからであり、文中ではわたり音が脱落する形式のみが許容されるという事例も見られる。このゆれの要因は判明していない。

tɕw : ´tɕwi kʰɔ̃　監獄
sʰw : ´sʰwɵː lje　鋸
sw : ´swɔ̃　銅
zw : `zwe ˋʰtɕiʔ　１つの部屋
ʂʰw : ¯ʂʰwɔʔ　力
ʂw : ¯ʔa ʂwi　箸
ɕʰw : `ɕʰwɔʔ　裕福な
ɕw : ´ɕweː sʰa　用途
xw : `xwa　沸く
ɣw : ´ʈo ɣwa tɕu　傲慢な
hw : ¯m̥ã hwa　あざ
nw : ¯ȵaː nwɔ̃　手荒く扱う
ȵw : ˆȵwɔ̃ lje　軽い
lw : ˆlwɔʔ　綿羊
rw : ¯rwi rwi　若い

/j/をもつもの

pʰj : ´pʰjeː lje　子ぶた
pj : ´pje　チベット人
tʰj : ¯pʰaː tʰje　染料
tj : ¯pʰaj ´tjẽ　破壊する
dj : ¯sʰa dje　マットレス
ʈj : ´ʈjeː ⁿɖɤ　玄米
tsʰj : ¯tsʰje　命
ɕj : ˆɕjã de　休む
mj : ´ʔa mjẽ　母の兄弟の妻
m̥j : ¯m̥jẽ　薬
nj : ´njẽ pa　病人
lj : ˆljeː ka　危険
l̥j : ´ja l̥jẽ　補修する

３子音連続

ʰpj : `ʰpjeː　線香
ᵐbj : ¯ᵐbjeː tɕa　鞭
mbj : ¯mbje　消える

ⁿ̥tʰj : ´ⁿ̥tʰjẽ　吸い込む
ʰtj : ´tsə ʰtjẽ　はさみ
ɦdj : ⁻ɦdjẽ　7
ⁿlj : ´ⁿlje ⁿlje　猫
ɦrj : ´ko ɦrje　ごみ
ⁿdw : ´ⁿdwɔʔ　いる
ndw : ˆjĩ ndwɔ̃　疑う
ɦbw : ⁻ɦbwɔʔ　空気
ɦdw : ⁻ɦdwɔ̃　梁
ʰʈw : ⁻ʰʈwɔ̃ lɔ̃　こじき
ɦɖw : ⁻ɦɖwɔː nɑʔ　ハエ
ʰkw : ⁻ʰkwɔ̃ ma　足
ᵑgw : `kə ᵑgwə　越える
ɦgw : ⁻pʰaj ɦgwə　開墾する
ⁿ̥tsʰw : ⁻ⁿ̥tsʰwɵ　調理される
ʰtsw : `ʰtswo　集まる
ⁿdzw : ´kə ⁿdzwɔ　どのように
ʰtɕw : ⁻ʰtɕwɔː ma　柳
ȵdʑw : ⁻ȵdʑwɵː　鋤
ʰʈʂw : ⁻ʰʈʂwᴀː ˆʐwe dᴀ　噛む
ɦɖʐw : `ɦɖʐwᴀ　蚤
ʰpj : ⁻ʰpjᴀ　よい
ʰkj : `ʰkjɛ　かぶせる

5.3　形態音韻論上の注意点

阻害音について、初頭子音が無声無気音[11]でありなおかつ低声調はじまりの語は、接頭辞がつくとそれぞれの調音点の有声音と交替する。たとえば以下のようである。

	例語	語義	例語	語義
k - g	⁻ha ´ku	分かる	⁻ha ´ȵi-gu	分からない
tɕ- dʑ	´tɕɯː	着る	´ȵi-dʑɯː	着ない
s - z	´sa	食べる	´pə-za	食べなさい
ʂ- ʐ	´ʂɔ̃	おいしい	´ȵi-ʐɔ̃	おいしくない

[11] ただし対応する有声音のない/ç/は除く。

II. 形態・統語

名詞、代名詞、数詞・量詞、形容詞、動詞、複文と動詞句の埋め込みに分けて述べる。格標識は名詞の項で、動詞句周辺の接辞は動詞の項で扱う。

適宜具体例を挙げつつ記述を行う。語釈つき例文には通し番号を与える。

6　名詞

6.1　形態

単音節語、２音節語が多い。派生語や複合語の場合、３音節や４音節で１語になっているものもある。

1. 単音節語
   ˉnɑ̃w「空」、ˉsʰa「土」、ˉŋgo「頭」、ˉpʰɑʔ「ぶた」
2. ２音節語
   ˉˢʰlo ma「風」、´lɑ ʰkwa「手」、´ra ro「子供」、´ʂʰẽj pʰõ「木」
3. ３音節語
   ´tə lɯ lɯ「トカゲ」、`ʰʈaː tɑ̃ ɕa「ネックレス」、´ʐi pa lje「定規」
4. ４音節語
   ´ʰdʑa ga ka ra「蜘蛛の糸」、´ɕʰi mã kə loʔ「蝶」、´pə lɔ̃ tʰwo ra「牛小屋」

３、４音節語の中には、２音節ごとに個別の声調を担うものもある。たとえば´tsʰə tsʰa ˉjɔ̃ ˢˡɖwɔ̃「ばった」、´ᵐbɤ bu ˆɣwa mu「かたつむり」などがある。

6.2　名詞化標識

頻繁に見出される名詞化標識には、/mə/、/zə/、/sʰa/などがある。最初の２つは「こと・もの・人」の意味になり、最後のものは「ところ・道具・もの」の意味を表す。それぞれ生産的であり、また弁別的な声調を担わない。名詞化接辞が接続するにあたり、先行する語が１音節語の場合、/a/で終わる語は/ə/になったり[12]、声門閉鎖音で終わる語は先行する母音が長母音化することがある。形容詞に専用の名詞化接辞/kə tə/もある。

名詞化される品詞は通常動詞または形容詞である。

名詞化前	名詞化後
ˉʰtɕɑʔ「担ぐ」	ˉʰtɕɑː mə「担ぐもの、担ぐ人」
´sa「食べる」	´sə zə / ´sə sʰa「食べ物」
ˉʰl̥ɑ̃w `ʰtsõ 「靴を売る」	`ʰl̥ɑ̃w ʰtsõ sʰa「靴屋」
ˉtɕʰɤ `ˢʰlwɔʔ「水を入れる」	ˉtɕʰɤ lwɔː sʰa 「バケツ」
ˉsʰə sʰɛː「黄色い」	ˉsʰə sʰɛː kə tə 「黄色いもの」

[12] これは音韻規則として成立しているとは言い切れない。そのため、**5.3** で触れてはいないが、実際の発音上高い頻度で実現される。注７も参照。

上の「靴屋」「バケツ」のように、複数の項を伴う節も名詞化することができる。また、次の例のように、疑問詞を含む節を名詞化し疑問文にすることができ、名詞化標識の後には格標識が接続する。

(1) `tɕʰaː tsʰẽj-ϕ `tɕʰi-ϕ ´rɑʔ-de-mə-ϕ ´çe
2.[複]-[絶] 何-[絶] する-[状態]-[名]-[絶] [判]
あなたたちは何をしている人ですか？

節の表す動作が完了している場合、それを名詞化するときは/-koː/（弱形に/-kə/もある）を用いる。ほかにも/-tɕiʔ/も用いられるが、用法の差異はよく分かっていない。

(2) `kʰu-kə ´ʰtsə-koː-kə ´ɳi-ʐə̃-nə
3-[能] 料理する-[名]-[主] [否]-おいしい-[現認]
彼が料理したものはといえば、おいしくありません。

名詞化する節が目的の意味になる場合、/-sʰa/が用いられる場合がある。

(3) ´pə lɔ̃-ϕ `ʰteː-sʰa ˆɳaː tsʰẽj-ϕ ⁻ʰtswa-ϕ `ʱŋa-de-çe
牛-[絶] 与える-[名] 1.[複]-[絶] 草-[絶] 刈る-[状態]-[判]
牛に与えるため、私たちは草を刈っています。

また、名詞化要素は修飾節になることができ、その際修飾句は被修飾語（句）の直前に特別な標識を伴うことなくおかれる。

(4) `tɕʰɯʔ-ϕ ´ŋa-ϕ ⁻ʰteː-mə ⁻ⁿdzə ʰʈə-ϕ ´ŋa-rɔ̃-ϕ ´ɳɯː-mə-kõ rə
2-[絶] 1-[絶] 与える-[名] 指輪-[絶] 1-自身-[絶] 買う-[名]-[比]
ˆjɑʔ-nə
よい-[現認]
あなたが私にくれた指輪は私が買ったものよりよいです。

6.3 格標識

Sakar 方言は、文法格として行為者をマークする能格型の格体系を持つ。

6.3.1 一覧表

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
無標（ϕ）	絶対格	位格
kə	能格	具格
tsə	与格	与格
kə / da		属格
nə		位格
tsʰə / tsə		奪格
kõ rə		比較格

以上のうち、能格/具格はそれぞれ形態的に同一のものとして実現されうる。また、与格と奪格もまた通常の発話では同一となることがあるが、奪格は有気音で実現されるという異なりがある。ただし格の機能、そして格標識の脱落の可否において異なるため、分離して扱う。

一方、絶対格は無標であり、例文中に ϕ で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なっている。以下の例文において、音形式の認められない位格は一律表示しない[13]。格標識の連続は認められないが、属格が「～のもの」を意味する場合、それは名詞化用法の一種と見られるが、その後ろには格標識は何も付加されない[14]。

そのほか、/-kə/は主題標識として用いられることもあり、この場合格標識とは共起しない。すなわち、絶対格もしくは位格につく。能格標識と同形であるが、発話において次の点で区別することができる。主題標識の/-kə/は常に [kə] というように初頭子音は閉鎖音であるが、能格/具格の/-kə/は [kə] のほかに発話によって [γə] と発音される。

なお、人称代名詞は特定の格について形態変化によって標示する場合がある。詳細は **7.1** を参照。

6.3.2　用法

以下、文法格（S/A/P 標示）、非文法格（非 S/A/P 標示）の順に、簡潔に用法を記述する。

文法格：絶対格

絶対格の用法としては、判断動詞の主語および補語、存在動詞の主語および所有者、自動詞の主語、他動詞の目的語（被動者）、他動詞の主語（行為者）、使役文における被使役者などがある。

判断動詞の主語および補語

(5)　`tɕʰɯʔ-ϕ　´kwɔː-ϕ　´çe
　　2-[絶]　誰-[絶]　[判]
　　あなたは誰ですか？

存在動詞の主語および補語

(6)　´ŋa-ϕ　⁻ʰsə mə-ϕ　´ɳi-ⁿdwɔʔ
　　1-[絶]　妹-[絶]　[否]-[存]
　　私には妹がいません。

自動詞の主語

(7)　´tɕʰaː-ϕ　´pɔʔ-tɕi
　　雨-[絶]　降る-[近接未来]
　　雨が（間もなく）降るでしょう。

他動詞の被動者および行為者

---

[13] 時間（/´ʔa rĩ/「今日」、/⁻ⁿ̥tsʰẽ rĩ/「夜」など）・空間（/⁻ʰtẽ/「上」、/´ʂoː/「下」など）を表す語は、品詞としては名詞の一種と考えられるが、格標識を伴わない形式は通常意味上は位格として用いられると考え、絶対格の標示を行わない。

[14] 文の構造上、この種の属格は絶対格におかれていると分析できるかもしれないが、本稿では絶対格の記述を行わない。

(8) ˊŋa-ϕ ˊɦo ma-ϕ $^{-ŋ}$t^{h}ɔ̃
1-[絶] 牛乳-[絶] 飲む
私は牛乳を飲みます。

使役文における被使役者[15]

(9) ˊŋa-ϕ ˋtɕ^{h}ɯʔ-ϕ ˊsẽ-ϕ ˊsa-tɕɔʔ-t^{h}ɯː
1-[絶] 2-[絶] ごはん-[絶] たべる-させる-終える
私はあなたにごはんを食べさせました。

(10) ˊŋa-ϕ ˊ^{ŋ}gwə-tɕɔʔ-roʔ
1-[絶] 行く-させる-してください
私に行かせてください。

文法格：能格

能格は他動詞の主語（行為者）を示すが、通常はあまり用いられず、行為者を強調したり対比したい場合に特に用いられる。ただし行為者が被動者より後に来る場合[16]は、ほぼ義務的に用いられる。

行為者が文頭にある場合

(11) ˆn̥i-kə ˋtɕ^{h}ɯʔ-ϕ ˊpə sẽ-ϕ $^{-h}$teː
1-[能] 2-[絶] 食事-[絶] 与える
私があなたに食事をおごりましょう。

行為者が被動者より後に来る場合

(12) ˆtjẽ naw-ϕ ˆn̥i-da ˊʔa wo-kə ˊjɛː ^{ɦ}zu -tɕiʔ ˆt^{h}ɯː-nə
パソコン-[絶] 1-[属] 兄-[能] 修理する-[名] 完了する-[現認]
パソコンは私の兄によって修理され終わっています。

行為者のみが発話に現れる場合

(13) {ˊŋa-ϕ/ˆn̥i-kə} ˋ^{h}tsə-wə
{1-[絶]/1-[能]} 料理する-[意思未来]
私が料理しましょう。

文法格：与格

文法格としての与格は、一部の他動詞の感情の向く対象を示す際に用いられる。この場合の与格標識は通常省略されない。

(14) $^{-ɦ}$jɯ ^{ɦ}ɖwĩ-ϕ ˋk^{h}u-tsə ˋn̥ĩ ˊk^{h}a-de-reʔ
[人名]-[絶] 3-[与] 腹を立てる-[状態]-[判]
ユドゥンは彼に腹を立てています。

---

[15] 使役文における動詞が自動詞でも他動詞でも、被使役者は絶対格で標示される。

[16] この語順の場合、日本語では受け身で訳すほうが意味的に近いと考えられる。

非文法格：属格

属格は所属、属性を表す際に用いられる。中立の属格標識は/kə/で、人物が所有者となる場合、/kə/のほかに/ke ɦa/という形式も用いられるが、差異は不明である。人称代名詞の場合、形態変化のみで属格を表すことがある。

(15) ˉʈa ʂʰi-{kə / ke ɦa} ´jə gə
[人名]-[属] 本
タシの本

(16) ´ɲiː ˆruʔ
1.[属] 友人
私の友人

代名詞、人名および人間を表す普通名詞には/da/も属格として用いられ、「～の家の、～のところの」の意味をもつ。

(17) ˆɲi-da ˉpʰɑʔ
1-[属] ぶた
私の家のぶた

一方、属格で終わる句は、「～のもの」という名詞句として用いることができる[17]。

(18) ˆɲi-da ´ʔa wo-ϕ ´ʈʰɔ̃ ma-ϕ ´rə rə ´ɲiː ´ˡɖə ˡɖa-reʔ
1-[属] 兄-[絶] 身長-[絶] それぞれ 1.[属] 同じである-[判]
私の兄は身長が私の（身長）とそれぞれ同じくらいです。

(19) ˉnə-ϕ ˉˡtsʰu mu-ke ɦa ´reʔ
これ-[絶] [人名]-[属] [判]
これはツモのものです。

非文法格：具格

具格は道具、手段、材質および原因を示す際に用いられる。能格標識と共通の形態であるが、能格と異なり脱落する（絶対格になる）ことはない。

次の例は、主題標識、能格標識、具格標識のすべてのタイプの/kə/が用いられている。

(20) ˉnəj tɕi ˉʱgɑ̃w-kə ˋʱdo ʱdʑi-kə ˋʰtɕɑʔ-kə ´ʱzu-rɑʔ-koː-ϕ ´reʔ
あれ 箱-[主] [人名]-[能] 鉄-[具] 作る-する-[名]-[絶] [判]
あの箱は、ドジが鉄を用いて作ったものです。

道具

(21) ˉtɕʰɯʔ-ϕ ˆjɯː lɑʔ-kə ´ʔa ʂõ-ϕ ˉʱzɔ̃-de-ja
2-[絶] 左手-[具] 箸-[絶] 持つ-[状態]-[疑]
あなたは左手で箸を持つのですか？

材質

[17] 人名に後続する形式は/ke ɦa/になるのが通例である。

(22) ˉmʌ-ϕ ̀ʂʰẽj-je ´zʉ-n̥ɔŋ
これ-[絶] 木-[具] 作る-[目撃証拠]
これは木でできています。

原因

(23) ´pej tsə-ϕ ⁻ʱlo ma-kə ̀ʰpje-tɕiʔ ̂tʰʉː-nə
コップ-[絶] 風-[具] 倒れる-[名] し終わる-[現認]
コップが風で倒れてしまい、倒れたままになっています。

非文法格：与格

非文法格としての与格は、受益者・受領者および行為の向かう先を示す際に用いられる。これらの場合の与格標識は文脈が明瞭であれば省略されることがしばしばある。

受益者・受領者

(24) ̀tɕʰʉʔ-ϕ ̀kʰɤ-tsə ´põ ᵐbɤ ̀ʰtɕiʔ-ϕ ´pə-ʰteː
2-[絶] 3-[与] プレゼント 1 -[絶] [方]-与える
あなたは彼にプレゼントをあげなさい。

(25) ̂ŋa-tsə ⁻ʱgo ʱdʑi-ϕ ⁻ɕʰi-de-roʔ
1-[与] 門-[絶] 開ける-[現在状態]-してください
私のために門を開けてください。

行為の向かう先

(26) ´ŋa-ϕ ̀tɕʰiʔ-tsə ´pje ʱgu ⁻ʰta
1-[絶] 2-[与] 話す
私はあなたに話しましょう。

非文法格：位格

位格は無標の位置・方向を示す。文意が明快な場合は省略可能で、しばしば絶対格として現れる。

(27) ⁻kʰu-ϕ ̂jĩ xã-nə ´ɕʰi ʱŋɯː-ϕ ´kə ⁿdzeː ̀ʱjaː-kʰə-reʔ
3-[絶] 銀行-[位] 資金-[絶] いくら 借りる-[完了]-[判]
彼は銀行で資金をいくら借りたのですか？

(28) ⁻pʰɑʔ ra-nə ´pʰɑʔ li-ϕ ´me tsʰe ´n̥i-ⁿdwɔʔ
ぶた小屋-[位] 子ぶた-[絶] 以外 [否]-[存]
ぶた小屋には子ぶた以外いません。

(29) ´ʔa ko tsʰẽj-ϕ ´sʰɔ̃ n̥ĩ ̂rə-nə ⁻ʰku la ´ᵑgu
1（複数/包括）-[絶] 明日 山-[位] コルラに行く
私たちは明日山をコルラしに行きます。

また、/⁻ʰtẽ/「上」など空間を表す１音節の語は、名詞に後続するとき声調のかかる範囲が直前の名詞と同一になり、それ自体の独立の声調を担わない点で、格標識へ文法化が進行してい

ると考えられる。

(30)　ˊʈoː tsə-ʰtẽ　ˊpʰã tsə-ϕ　ˉlaː-ʱgɯː-reʔ
テーブル-上　皿-[絶]　置く-必要である-[判]
テーブルの上にお皿を置く必要があります。

非文法格：奪格

奪格は時間・空間の起点を表す。奪格標識には初頭子音について有気無気の異なる２つの形態が認められるが、自由変異かどうかは不明である。

(31)　ˊŋa-ϕ　`sʰə kaː-tsʰə　`ʰpeʔ ɦõ-jĩ
1-[絶]　[地名]-[奪]　来る-[判]
私は斯嘎村から来ました。

非文法格：比較格

比較格は比較対象を表し、起点を示す場所格の一種と考えられる。

(32)　ˊʔa mje-ϕ　ˊʔa ʱdʑa-kõ rə　`ʰpeː ʰtɕiʔ ɲə　ˉʱdʑɑʔ
祖父-[絶]　祖母-[比]　ちょっと　太っている
おじいさんはおばあさんよりちょっと太っています。

(33)　ˊʱɖo ma-ϕ　ˉl̥a mu-kõ rə　ˊseː　`ⁿdʑoʔ-nə
[人名]-[絶]　[人名]-[比]　言う　速い-[現認]
ドマはラモより話すのが速いです。

以上のように、比較される程度を表す語（たいていは形容詞）は文末に置かれる。

7　代名詞

人称代名詞、指示詞、疑問詞類に分けて述べる。

7.1　人称代名詞

人称代名詞は、人称と数が区別される。

人称	単数	複数	双数
1	ˊŋa	ˊʔa ko tsʰẽj [包括]	ˊʔa ko `mə [包括]
		ˆɲaː tsʰẽj [排除]	ˆɲaː mə [排除]
2	`tɕʰɯʔ	`tɕʰaː tsʰẽj	`tɕʰaː mə
3	ˉkʰu	ˊkʰeː ɲa tsʰẽj	ˉkʰɤ ɲaː `mə

「性」は区別されない。「双数」は「複数」の形式に数詞「２」を付加して表すことができ、それ以外の数も現れうる。「敬称」は認められない。１人称複数および双数には「包括」「排除」の区別がある。文意が明快であれば、各複数形の最後の音節は脱落することが可能である。

各人称の単数は、格標識を伴うと代名詞語幹の形態が変化するほか、場合によっては形態変化のみで表し、次のようになる。

格	１人称単数	２人称単数	３人称単数
絶対格	´ŋa	`tɕʰɯʔ	¯kʰu
属格独立形	´n̩iː	`tɕʰiʔ	`kʰɤ
格標識を伴うとき	ˆn̩i-	`tɕʰiʔ-	`kʰɤ-

7.2　指示詞（修飾形式を含む）

指示詞は近称と遠称の区別があり、事物（人も含む）と場所の異なる系列がある。

	近称	遠称
事物	¯nə / ¯ⁿdə / ¯kʰu	`tə kʰu / ¯nəj tɕi
場所	¯nəj ka / ¯kʰu na	´pʰa na / ´pʰaj na

/¯kʰu/は３人称代名詞と同形であり、語義としては既知の事物に対する「それ」が近いと考えられる。

複数の事物を示す形式に、/ˆkʰɤ n̩aː ʈə, `nə kʰẽ/「これら」、/´tə kʰẽ/「あれら」がある。

様態の指示詞には、/`ʔa ⁿɖa/「このような、あのような」がある。

(34)　¯ⁿdə-ϕ　´pʰɑʔ lɯ-ϕ　´reʔ
これ-[絶]　子ぶた-[絶]　[判]
これは子ぶたです。

指示詞は代名詞の機能と形容詞の機能を兼ねる部分がある。指示形容詞として用いる場合、/¯ⁿdə/「この」と/¯nəj tɕi/「あの」が修飾対象の名詞に前置される。指示形容詞は独立の声調を持つ。また、これが単なる指示形容詞として用いられるときに後置される例は認められない。

7.3　疑問詞類（形容詞・副詞も含む）

´kwɔ「誰」

`tɕʰi「何」、`tɕʰi sʰe ɦa「何の、どんな」、´kə ⁿde「どの」

´kɑː「どこへ」、ˆkɑː tsʰə「どこから[18]」

ˆkə ljẽ「いつ」、´nɑ̃w「いつ」

´kə ⁿdzwɔ「どう（する）、どのような方法で」

ˆkə ljẽ「どれぐらい、いくら」、´kə ⁿdzeː「いくら」

「なぜ」にはいくつかの表現があり、たとえば/`tɕʰi ´jəʔ-tʰeː/（直訳は「何がありましたか」）といった表現が「なぜ」に相当すると考えられる。

複数のものについて尋ねる場合、疑問詞を重複させて表すことができ、その場合疑問詞はそれぞれ声調を担う[19]。

(35)　¯tɕʰiʔ-da　´kwɔ　´kwɔ　´ⁿdwɔʔ
2-[属]　誰　誰　[存]
あなたの家族はだれだれがいますか？

---

[18] /´kɑː/「どこ」＋奪格/tsʰə/に由来する。

[19] それゆえ、疑問詞の重複は動詞や形容詞に見られる文法化した重複と異なるものと考える。

疑問詞は、次のような文では疑問を表さない[20]。

(36)　　´nɑ̃w-ze　　ˋʰtoʔ　　´nɑ̃w-ze　　´sa

いつ-[？]　飢える　いつ-[？]　食べる

おなかがすいたときに、そのときに食べます。/おなかがすいたら食べなさい。

8　数詞・量詞

8.1　基数詞

以下に１から 29 までの形態を示す。

		+10	+20
0		⁻ʰtɕɤ	´ɳə ʂʰɤ
1	ˋʰtɕiʔ	ˋʰtɕoː tɕiʔ	´ɳə ʂʰɤ ⁻ʰtsaː ʰtɕiʔ
2	ˋmə	⁻ʰtɕoː mə	´ɳə ʂʰɤ ´ʰtsaː mə
3	⁻ʰsõ	⁻ʰtɕoː sõ	´ɳə ʂʰɤ ⁻ʰtsaw ʰsõ
4	´ʱʐə	⁻ʰtɕoː ʱʐə	´ɳə ʂʰɤ ˋʰtsɔw ʐə
5	ˋʱŋa	⁻ʰtɕɛː ʱŋa	´ɳə ʂʰɤ ⁻ʰtsaː ʱŋa
6	⁻ʈwɔʔ	⁻ʰtɕi ʰʈwɔʔ	´ɳə ʂʰɤ ˋʰtsə ʱɖwɔʔ
7	⁻ʱdjẽ	ˋʰtɕuː djẽ	´ɳə ʂʰɤ ˋʰtsɔw djẽ
8	ˆʱdʑiʔ	ˋʰtɕuː dʑiʔ	´ɳə ʂʰɤ ⁻ʰtsaw dʑiʔ
9	⁻ʱgɤ	ˋʰtɕɛː gɤ	´ɳə ʂʰɤ ˋʰtsa ʱgɤ

20 台の数は「20 ＋つなぎの要素/ʰtsa/[21] ＋１の位」で表し、「30」以降のきりの悪い数字も 20 台と同様の構成をとる。

30 から 100 までのきりのよい数は以下のようになる。

⁻sʰõ tɕʰɤ「30」

´ʐə ʰtɕɤ「40」

⁻ʱŋãw tɕɤ「50」

´ʈwɔː tɕɤ「60」

⁻ʱdjẽ ʰtɕɤ「70」

´ʱdʑiː tɕɤ「80」

⁻ʱgɤw tɕɤ「90」

⁻ʱdʑa 「100」

「100」から「199」までは「100 ＋各種２けたの数」を並列して構成する。「200」は/´ɳə ʱdʑa/となる。「1000」以上の数は以下のようなものがある。

⁻ʰtõ ʈʰa「1000」

⁻ʈʰə ʈʰa「10000」

´tɔ̃「１億」

---

[20] /-ze/の意味はまだ分かっていない。

[21] 後続の１の位によって若干形式が異なる。

8.2　序数詞

序数詞は基本的に基数詞に/ˋŋgo/を先行させることによって形成されるが、「第２」は/ˋŋgo ᶯn̩ə/となる点に注意が必要である。

8.3　量詞

量詞は大きく類別詞と計量の単位（度量衡の単位を含む）に分けられるが、前者は Sakar 方言には認められず、名詞（句）に直接数詞を後続させることができる。また、度量衡の単位は漢語をそのまま用いることが多い。

量詞を含む語順は「名詞＋量詞＋数詞」である。何らかの容器による単位を表す場合、「１」に/´kwɔ̃/が用いられる場合がある。また「１」が/ˋʰtɕiʔ/のとき、場合によっては [tɕiʔ] と発音されることがある。

(37)　´mə　{ˋʰtɕiʔ / ˋmə}
人　{ 1 / 2 }
１人の人/２人の人

(38)　´ʔa rɑʔ　´pʰĩ　ˋʰtɕiʔ
酒　瓶　1
１瓶の酒

(39)　´ʔa rɑʔ　´ʈe　´kwɔ̃
酒　升　1
酒１升

9　形容詞

Sakar 方言において、形容詞は状態を表す動詞と考えることができるが、名詞を修飾する構造が形容詞に独特であるので、ここで述べる。

9.1　形態

形容詞の形態としては、以下のようなものが代表的である。

1. １音節語幹
   ´tsʰaː「熱い」、ˋn̥tɕʰɑʔ 「寒い」、ˋkʰa「苦い」
2. １音節語幹の重複
   ´tɕʰɤ tɕʰɔ̃「小さい」、¯xõ xõ「凹の」、´na na「黒い」
3. ２音節語
   ¯ᶯ̥tʰɯ̃ mo「高い」、´n̩i mɔ̃「多い」、¯ʰsəː kwa「明るい」

重複タイプは、必ずしも第１音節と第２音節の音形式が同じになるとは限らない。また、重複それ自体は形態の一特徴であり、特別な意味機能があるわけではない。

9.2　用法

形容詞は単独で述語になることができる。２音節以上からなる形容詞で、語末が接尾辞/po, mo/で終わるものは、述語用法のとき末尾音節が脱落する。語幹の重複形式のものは、重複を行わないこともある。その形式に動詞句末接辞を付加することもできる。

(40)　ˊŋa-ϕ　`moː ʰɕoː ʰtɕiʔ　⁻ʂʰa-ϕ　ˊsa　ˊn̥õ
1-[絶]　通常　肉-[絶]　食べる　少ない
私はふつう肉を食べることは少ないです。

(41)　ˊŋa-ϕ　ˊʰse ma　`sʰẽ ga
1-[絶]　とても　うれしい
私はとてもうれしいです。

一方で形容詞に判断動詞が後続することも認められる。この場合は形容詞末の/po, mo/は脱落せず、重複形は重複形のままである。

(42)　ˊʔa rĩ　ˊn̥i ma-ϕ　ˊʰse ma　ˊjɑʔ po　ˊçe
今日　太陽-[絶]　とても　よい　[判]
今日は天気がとてもいいです。

形容詞の程度を強調するには、以上のように/ˊʰse ma/「とても」を用いるか、または語幹を重複させて表すことができる。

文中で修飾語として用いられる場合、形容詞は被修飾名詞に後置されるのを基本とし、数詞は形容詞に後続する。

(43)　ˊŋa-ϕ　ˊbə la　⁻ʰkə ʰkaj　`ʰtɕiʔ-ϕ　ˊjɵʔ
1-[絶]　服　白い　1 -[絶]　[存]
私は１着の白い服を持っています。

形容詞の名詞化は接尾辞/nə/を用いる。

(44)　ˊŋʌ-ϕ　ˊʔʌ mjẽ-nə-ϕ　ˊn̥i-ⁿdɯː
1-[絶]　小さい-[名]-[絶]　[否]-必要である
私は小さいのは必要ないです。

比較級に相当する表現は、形容詞に/⁻tɕʰi/「大きい」を後続させて作ることができる。この際、/⁻tɕʰi/は直前の形容詞とは独立した声調を担う。

(45)　ˊkʰaj tsʰõ　`n̥̊tɕʰɑʔ　ˊʔa rĩ　`n̥̊tɕʰɑʔ　⁻tɕʰi-n̥̊õ
昨日　寒い　今日　寒い　大きい-[目撃証拠]
昨日は寒かったですが、今日はもっと寒いです。

「もっとも〜」を表すには、形容詞の直後に/wa/を置く。

(46)　ˊʔa ko tsʰẽj　`sʰẽ rĩ　ˊlu tɕʰi wa　⁻ʰʈa ʂʰi-ϕ　ˊreʔ
1（複数/包括）　間　もっとも年長である　[人名]-[絶]　[判]
私たちの中でもっとも年上なのはタシです。

形容詞の述語用法では常に状態を表し、状態変化は動詞/ˊlɛː/を用いて表す。

(47)　ˊnə ma-ϕ　ˋʰpu ji　ˉmə mɛː　ˆlɛː-xə-ɕõ
葉-[絶]　みんな　赤い　なる-[完了]-[体験]
葉はみんな赤くなりました。

10　動詞

動詞の分類、動詞を取り巻く接辞、動詞連続、使役・態に分けて述べる。

10.1　分類

動詞は述語動詞と本動詞に分けることができる。

10.1.1　述語動詞

述語動詞には、判断動詞と存在動詞がある。これらは単独用法のほかに動詞句末接辞として置かれて動詞句を形成する要素にもなる。これらには後述の TAM 接辞はつかない。

判断動詞および存在動詞の一部には、語幹そのものに肯定と否定の 2 種がある。以下に一覧表を掲げる。

	肯定	否定
判断動詞	ˊçe	ˊmẽ
	ˊreʔ	ˊma-reʔ
存在動詞	ˊjəʔ	ˊn̩eʔ
	ˉn̥õ	ˊn̩i-n̥õ
	ˊⁿdwɔʔ	ˊn̩i-ⁿdwɔʔ

判断動詞の/ˊçe/と/ˊreʔ/の使い分けは、前者が発話内容に話者自らが関連づけられているときに用いられ、そうでない場合は後者が用いられる[22]。

(48)　ˊŋa-ϕ　ˊpje-ϕ　ˊçe
1-[絶]　チベット人-[絶]　[判]
私はチベット人です。

(49)　ˉkʰu-ϕ　ˉpʰɑʔ-ϕ　ˊreʔ
3-[絶]　ぶた-[絶]　[判]
それはぶたです。

不確定な事柄についての話者の判断や話者個人の感想を述べる場合、判断動詞は/ˊçe/が選択され、なおかつ動詞句末標識を伴うことができる。

(50)　ˊpʰɑʔ li-ϕ　ˆnɑ nɑʔ　ˆçe-n̥õ
子ぶた-[絶]　黒い　[判]-[不確実]　注[23]
（おそらく）子ぶたは黒いでしょう。

---

[22] 判断動詞の用例については、例文 (1), (10), (17), (34) も参照。

[23] この発話は、「父ぶたが白く、母ぶたが黒い場合、その子ぶたは何色になるか？」という問いに対する答えである。事実が起こっていないため、推測を述べている。

(51)　　˜kʰu-ϕ　ˊʰse ma　`kʰo ʔaj　ˆçe-n̥õ
　　3-[絶]　とても　かわいい　[判]-[目撃証拠]
　　彼女はとてもかわいいと思います。

存在動詞については、/ˊjɵʔ/は主に所有および話者のよく知っている事物の存在を表し、/˜n̥õ/は見て知っている非人物の存在を表し、/ˊⁿdwɔʔ/は人物の存在を表すのが基本的な用法といえる。ただし、後２者の使い分けは話者によって判断基準が異なり、話者の管理下にある有生物（家畜なども含む）に/ˊⁿdwɔʔ/を用いる話者もいる[24]。

(52)　　ˊŋa-ϕ　˜pʰɑʔ-ϕ　ˊjɵʔ
　　1-[絶]　ぶた-[絶]　[存]
　　私はぶたを持って（飼って）います。

(53)　　ˆpʰɤ rə-ϕ　ˊs̬o tsə-ʰtẽ　{ˊjɵʔ/˜n̥õ}
　　碗-[絶]　テーブル-上　[存]
　　碗はテーブルの上にあります。

(54)　　ˊrə ᵑgo　˜s̬ʰĩ pʰũ-ϕ　˜n̥õ
　　山の上　木-[絶]　[存]
　　山の上に木があります。

次のように、話者がその存在をよく知っているが見えない場合は/ˊjɵʔ/が選択される。

(55)　　˜ᶠʰgɑ̃w-nə　ˊbə la-ϕ　{ˊjɵʔ/*˜n̥õ}
　　箱-[位]　服-[絶]　[存]
　　箱の中には服があります。

存在動詞の否定は、必ずしも肯定形の否定の意味とならず、話者のよく知っている事柄には/ˊn̩eʔ/が、今知った事柄や話者自らにかかわりのない事柄には/ˊn̩i-n̥õ/が用いられる。

(56)　a　ˊlɑ̃w-ϕ　ˊn̩eʔ
　　道　[否/存]
　　道は（そもそも）ありません。
　　b　ˊlɑ̃w-ϕ　ˊn̩i-n̥õ
　　道　[否]-[存]
　　道は（以前はありましたが今はなくなって）ありません。

なお、本動詞/˜ᶠʰdeʔ/「いる、住んでいる」も意味的に有生物の存在表現として用いられる[25]。

(57)　　ˊn̩a-ϕ　ˊkõ tɕa　`ᶠʰdeʔ-nə
　　魚-[絶]　たくさん　いる-[現認]
　　魚がたくさんいます。

なお、述語動詞の場合の完全疑問文は、疑問接頭辞/˜ʔa/を付加して形成することができる。

---

[24] 存在動詞の用例については、例文 (2), (25) も参照。

[25] /˜ᶠʰdeʔ/「いる」を本動詞とするのは、たとえば **10.2.4** で扱う TAM 接辞が付加できることによる。TAM 接辞は存在動詞にはつかない。

(58)　　ˊpʰã tsə-ϕ　　`ʔa-n̥ɔ̃
　　皿　　[疑]-[存]
　　お皿はありますか？

10.1.2　本動詞

動詞の形態としては、次のようなものが代表的である。

1. １音節語幹
   ⁻ⁿ̥tʰwɔ̃「飲む」、⁻ʰkwɵ「耕す」
2. 語幹（音節数を問わない）＋ˊrɑʔ[26]「する」
   ˊleː ˊrɑʔ「働く」、⁻ʱgeʔ rɑʔ「賭ける」

/ˊrɑʔ/に先行する部分には漢語の動詞がそのまま挿入されることがある。

本動詞の語幹自体は無変化であるが、命令形と非命令形で語幹が異なる動詞がある。

語義	非命令形	命令形
行く	ˊᵑgwə	`sʰõ
来る	ˊɦõ	`ʂʰoʔ

また、動詞の要求する項の数とその格標示の観点から、次のような分類が可能である。

1. 自動詞（主語は絶対格；形容詞の述語用法もここに含まれる）
   ˊᵑgwə「行く」、ˊŋɤ「泣く」
2. 他動詞（行為者は能格か絶対格、被動者は絶対格）
   ˊn̥ɯː「買う」、⁻ʈə「書く」
3. 他動詞：感情動詞（感情を抱く主体は絶対格、感情の向く対象は与格か絶対格）
   ⁻ʱdɑ̃「愛する」、⁻n̥ɯ̃ ˊkʰa「腹を立てる」

10.2　動詞につく音節を有する接辞

動詞に付加され、かつ音節を有する接辞には、以下のものがある。

1. 接頭辞：否定辞、疑問接辞、方向接辞
2. 接尾辞：TAM を表す接辞、動詞句末接辞、疑問接辞

これらは付加される本動詞とともに１つの声調範囲に入る。接頭辞には特定の声調の型が認められ、本動詞の声調にかかわらず音節初頭の高低が決定される。第２音節末の高低は本動詞の性格によって決まる。

なお、動詞語幹が複音節からなる場合、多くの場合最終音節に接辞類を付加する。ただし重複語幹の場合は必ず動詞第１音節に先行する位置に接頭辞がつくが、その際接頭辞だけが単独の声調を担うことがある。

[26] 先行する語幹が１音節の場合、語幹と１つの声調範囲を形成する場合がある。

10.2.1　否定辞

否定辞には、以下の２種がある。

1. 未完了否定：´ɲi-
2. 完了否定：´ma-[27]

(59)　a　´ŋa-ϕ　´ɲẽ　´ɲi-ɕ^{h}ẽ-çe
1-[絶]　聞く　[否]-理解する-[判]
私は聞いて理解できません。

b　´ŋa-ϕ　´ɲẽ　´ma-ɕ^{h}ẽ-ɕɔ̃
1-[絶]　聞く　[否]-理解する-[判]
私は聞いて理解できませんでした。

完了否定は禁止命令[28]にも用いられる。

(60)　´lɑ ^{h}kwa-kə　´sẽ-ϕ　´sa　´ma-^{ɦ}deʔ
手-[具]　ごはん-[絶]　食べる　[否]-いる
（直接）手でごはんを食べてはいけません。

10.2.2　疑問接辞

疑問文を形成する接辞は接頭辞と接尾辞がある。ただし両者は共起しない。

接頭辞・接尾辞ともに１種類ある。

1. 接頭辞：¯ʔa-
2. 接尾辞：-jĩ / -ja / -jə[29]

接頭辞は動詞語幹に他の接頭辞がつかない場合に限って現れる。動詞が TAM 接辞を伴う場合、疑問接頭辞は動詞語幹ではなく TAM 接辞の直前にも現れうる。接尾辞は文末に置かれる。両者の差異は明確ではない。

(61)　¯tɕ^{h}ɯʔ-ϕ　´li su-ϕ　`ʔa-jĩ
2-[絶]　リス族-[絶]　[疑]-[判]
あなたはリス族ですか？

(62)　`$^{n}$deː　´rɑː k$^{h}$owʔ-$\phi$　`^{h}tɕuʔ-xə-mə-ϕ　`tɕ^{h}ɯʔ-ϕ　ˆreʔ-jĩ
この　さかずき-[絶]　壊す-[完了]-[名]-[絶]　2-[絶]　[判]-[疑]
このさかずきを壊したのはあなたはですか？

選択疑問文の場合は疑問接尾辞が用いられ、最後におかれる選択の要素に付加されるものを除き/-ja/で現れる。/-ja/には強勢が置かれる。

---

[27] 完了否定の/´ma-/はしばしば [´mə] と発音される（**6.2** 参照）。

[28] 禁止命令の/´ma-/は常に [´ma] と発音される。完了否定か禁止命令かは文脈によって決まる。

[29] これらは文中における環境や強勢の置き方による異形態と考える。

(63) `tɕʰɯʔ-ϕ　⁻ɦdʑi: dɔ̃　´ᵑgwə-rə　⁻ʈʰa tsə　´ⁿdoʔ-ja　⁻fej tɕi　´ⁿdoʔ-jə
あなた-[絶]　[地名]　行く-とき　車　座る-[疑]　飛行機　座る-[疑]
あなたは香格里拉に行くとき、車に乗りますか？それとも飛行機に乗りますか？

10.2.3　方向接辞

方向接辞と考えられる要素には、次の５種類がある[30]。

1. 上方：´jɛː
2. 下方：´ɕa
3. 向心：⁻tsʰəj
4. 離心：⁻pʰaj
5. 中立：´pə

中立以外の接辞は、通常移動動詞に付加され、移動の方向を示す。向心・離心の基準点は、通常発話者に置かれるが、特定の環境ではその特定の場所を中心とみなした用いられ方をする[31]。また、特定の動詞と結びついて直接方向とは関係のない慣用的な表現もあるが、その場合は方向接辞と共通の要素は独立した声調を担う場合があり、ふるまいが異なる。

(64) a　´ŋa-ϕ　´ja-ᵑgwə
1-[絶]　[方]-行く
私は上へ行きます。

b　´ŋa-ϕ　ˆɕa-ɦõ-çe
1-[絶]　[方]-来る-[判]
私は下りてきます。

c　`tɕʰɯʔ-ϕ　`tsʰəj-ɦõ-za
2-[絶]　[方]-来る-[未来/疑]
あなたがこちら（話者のほう）へ来ますか？

d　´ŋa-ϕ　`pʰaj-ɦõ-za
1-[絶]　[方]-来る-[未来/疑]
私がそちらへ行きましょうか？

中立の接辞は、肯定の命令形を形成するときに用いられる文法化した範疇であると考えられる。丁寧な命令には用いられない。

(65)　´sẽ-ϕ　´pə-za
ごはん　[方]-食べる
ごはんを食べなさい。

---

[30] 「中立」の方向接辞は以下に解説するように、純粋に方向を示すものではないが、接辞それ自体のふるまいや他の方向接辞とも共起しない点を考慮し、方向接辞と同列に扱うことにする。

[31] たとえば、「家」の中への移動には向心が、外への移動には離心がそれぞれ用いられる。また、囲炉裏の周辺について上座と下座の区別をする話者は、話者がどこにいるかにかかわらず、上座を基準点にとる。

なお、/´pə-/は形容詞にも付加されて「その状態にしろ」という命令文を作る。

(66) ´bə la-ϕ ´pə-^{h}kɑ̃w
服 [方]-乾いた
服を乾かしなさい。

10.2.4 TAM を表す接辞群

動詞語幹の後部には TAM を表す接辞がつく。この接辞は動詞句に付加され複数の要素が共起することはないと見られるが、動詞句末接辞の部分において話者の発話に対する態度 (M) を表現することができる。動詞句末接辞を伴わなくても文を終止することができる。述語動詞（存在動詞）・本動詞・形容詞に共通して付加できるものと、どれかに限定されるものに分かれる。

動詞句を否定する場合は否定辞（接頭辞）が本動詞につく場合と、動詞句末接辞に否定形を用いる場合がある。疑問文の場合は疑問接頭辞は TAM を表す接辞につくことがあり、その場合本動詞とは異なる声調範囲を形成する。

なお、接辞を伴わず動詞語幹で発話が終止する例も見られ、その場合は通例意思を持ってその行為をするという意味を帯びる。

(67) ´ŋa-ϕ ´rɑʔ
1-[絶] する
私がしましょう。

Sakar 方言における TAM の全体像は明確に記述できる段階に至っていないが、少なくとも次のような枠組みが認められる。

1. 時制（時間の直示）：現在・過去・未来
2. 完了性：継続・非完了・完了
3. 証拠性：判断・目撃証拠・直接知覚

これらのうち、証拠性と完了性の一部は動詞句末接辞が担う。

TAM を表す接辞群には以下のようなものが確認されている。

-ze（未来）：本動詞のみ

この形式はしばしば/-zeː/と発音される。疑問接尾辞がこの要素に直接後続する場合、/-za/と縮約することがある。

(68) `tɕ^{h}ɯʔ-ϕ ´kɑː ´^{ŋ}gwə-ze
2-[絶] どこへ 行く-[未来]
あなたはどこへ行きますか？

-tɕi / -^{h}tɕi（近接未来）：本動詞のみ

(69) ´ɲaː-ϕ `^{h}pu ji ´^{ɦ}dʑiː dɔ̃ ´^{ŋ}gwə-^{h}tɕi-jĩ
1（複数）-[絶] みんな [地名] 行く-[近接未来]-[判]
私たちは（間もなく）香格里拉に行くでしょう。

-wə（意思未来）：本動詞のみ

(70)　　ˊŋa-ϕ　　$^{-h}$ʈa ʂ^{h}i-ϕ　　ˆ^{ɦ}dɔ̃-wə

1-[絶]　[人名]-[絶]　叩く-[意思未来]

私はタシを叩いてやろう。

-de（現在状態・進行）：本動詞のみ

主に動作を表す動詞につき、動作の進行中であることを表す[32]。

(71)　　ˊŋa-ϕ　　ˊk^{h}waː-ϕ　　ˊ^{ɦ}zu-de-jĩ

1-[絶]　パン-[絶]　作る-[現在状態]-[判]

私はパンを作っているところです。

また、/-de/は動詞の表す行為の結果状態を表すこともある。

(72)　　$^{-n}$də　`ts$^{h}$ə-kə　$^{-}$l̥a mu-kə　`ʂ^{h}ĩ ^{ⁿ}dʑɑʔ-kə　ˆ^{ɦ}dɔ̃-de

これ　犬-[主]　[人名]-[能]　棒切れ-[具]　殴る-[現在状態]　注[33]

この犬は、ラモが棒切れで殴りました（だからぐったりしています）。

/-de/は存在動詞/ˊjəʔ/[34]に後続する事例が認められる。

(73)　　$^{-}$k^{h}u-ϕ　ˊʔa ta　`ɕju ɕi　ˆjəʔ-de-nə

3-[絶]　今　休憩　[存]-[状態]-[現認]

彼は今休憩しているところです。

-k^{h}ə / -xə（完了）：本動詞・形容詞

(74)　　$^{-}$k^{h}u-ϕ　ˊts^{h}aj-ϕ　ˊɳʉː-xə-ɕɔ̃

3-[絶]　野菜-[絶]　買う-[完了]-[体験]

彼は野菜を買いました。

-^{h}tse（持続）：本動詞のみ

(75)　　$^{-}$tɕ^{h}i-ϕ　ˊrɔː　`ɕ^{h}e-^{h}tse-nə

ガス-[絶]　まだ　開く-[持続]-[現認]

ガス（の元栓）はまだ開いたままです。

10.2.5　動詞句末接辞

動詞句末接辞は本動詞語幹もしくは TAM 接辞に後続し、主として発話に対する発話者のさまざまな態度の表明を担う。１つの動詞句において複数の動詞句末接辞が通常共起することはないとみられる[35]。動詞句末接辞に後続しうるのは疑問接尾辞に限られる。動詞句を名詞化する名詞化接辞とは共起しない[36]。疑問文形成時に疑問接頭辞を用いる場合は動詞句末接辞に付加され、動詞語幹と異なる声調範囲を形成する。

---

[32] 進行中であることを強調する場合は、動詞句末接辞の/-^{n}dwɔʔ/が用いられる。

[33] この例文では、「犬」が主題化されているため、「ラモが今殴っている」という解釈はとりづらい。もちろん、犬の目線で発話すれば成立しうるが、不自然である。

[34] この場合の/ˊjəʔ/は存在動詞の用法として用いられているわけではなく、特定の漢語の語彙とともに用いられ、「その状態にある」ということを意味する。しかし語釈は [存] で統一する。

[35] 若干例外的なものがあるため、それについては後に解説する。

[36] 動詞句末というが、実際は形容詞句にも付加される。**9.2** の例も参照。

動詞句末接辞は、述語動詞の複数の形式と共通するが、それ以外に独自のものもまた若干認められる。判断動詞は、それがコピュラとして用いられる時と同様、発話が発話者と関連づけられている場合には/-çe/がつき、それ以外の判断を表す場合には/-reʔ/がつく[37]。否定形は動詞句末接辞/-mĩ/を用いて動詞句を否定することができるほか、本動詞に否定辞/˝ma-/を付加して/-çe/または/-reʔ/をつける構造も認められる[38]。この接辞が TAM 接辞を伴わず動詞語幹に付加されるときは、過去/完了の意味となる。存在動詞については、各種肯定形すなわち/-jəʔ/、/-n̥ɔ̃/および/-ⁿdwɔʔ/[39]および否定形として/-˴ṇiⁿdwɔʔ/[40]が動詞句末接辞として用いられる[41]。

-çe：

(76) ˴ŋa-ϕ ˆruʔ-da ˴ɦde-de-çe
1-[絶] 友人-[属] 泊まる-[状態]-[判]
私は友人の家に泊まっています。

(77) ˴ŋa-ϕ ˴ṇi ma ko ʰte ˴tsʰə-nə ˴jə gə-ϕ ˴ma-ʈə-çe
1-[絶] しばしば 家-[位] 手紙-[絶] [否]-書く-[判]
私はしょっちゅう家に手紙を書きませんでした。

(78) ˋtɕʰɯʔ-ϕ ˴jə gə-ϕ ˉʔa-ʈə-çe
2-[絶] 手紙-[絶] [疑]-書く-[判]
あなたは手紙を書きましたか？

-mĩ：

(79) ˴ŋa-ϕ ˴ṇi moː ˴sa-ze-mĩ
1-[絶] たくさん 食べる-[未来]-[判/否]
私は（こんなに）たくさん食べきれません。

-reʔ：

(80) ˉkʰu ma ˴sẽ sa-sʰa-ϕ ˆjəʔ-reʔ
ここ ごはんを食べる-[名]-[絶] [存]-[判]
ここには食堂（ごはんを食べるところ）があります。

-jəʔ：

/-jəʔ/は動作が習慣的に行われることを示す。

(81) ˴ŋa-ϕ ˉnə ˴bə la ˴ʰse ma-ϕ ˴tɕɯː-jəʔ
1-[絶] この 服-[絶] とても 着る-[状態]
私はこの服をよく着ます。

完了の否定辞のついた本動詞とともに用いられると、「まだ～していない」の意味になる。

---

[37] これらには、判断動詞と同じ語釈 [判] をあてる。

[38] /˴ṇi-/はつかない。言い換えれば、/˴ṇi-/のついた動詞句とこの種の動詞句末接辞は共起することができない。

[39] 通常は [ⁿdɔʔ] と発音される。

[40] /-˴ṇiⁿdwɔʔ/は独自の声調を担う。

[41] これらは「存在」を表さないため、語釈としてはそれぞれ [状態]、[目撃証拠]、[進行]、[進行/否] をあてる。

(82) ´ŋa-ϕ ´sẽ-ϕ ´ma-za-jɵʔ
1-[絶] ごはん-[絶] [否]-食べる-[状態]
私はまだごはんを食べていません。

-n̥õ：

/-n̥õ/は見て確認したこともしくは今見ている状況について用いられる場合と、発話に対して不確実であるときに用いられる場合がある[42]。そのため、１人称主語の場合には用いられにくい。

(83) `tɕʰɯʔ-ϕ ⁻ᵐbaʔ `ʰtɕɔʔ-n̥õ
2-[絶] 今 吐く-[目撃証拠]
あなたは今吐いています。

-ⁿdwɔʔ：

/-ⁿdwɔʔ/は発話の行為が現在進行中であることを強調する場合に用いられる。

(84) ´ŋᴀ-ϕ ⁻ᵐbaʔ `ʱzu-ⁿdwɔʔ
1-[絶] 今 する-[進行]
私は今（準備を）している最中です。

-nə：

発話の内容を実際確認して知っている場合に用いられる。

(85) ´ŋa-ϕ ´ʰse ma `tsʰaː-nə
1-[絶] とても 暑い-[現認]
私はとても暑く感じます。

疑問文で用いられるときは、話者の聞き手に対する感じた印象を表すことになる。

(86) `tɕʰɯʔ-ϕ `tɕʰeʔ ´ʔa-ɖɑʔ-nə
2-[絶] 疲れる [疑]-なる-[現認]
あなたは疲れましたか？

-ʈɑʔ：

発話の直前に起きた事柄を表す。

(87) ´ŋa-ϕ ˆʈu ji `ʰtɕiʔ-ϕ ˆʈẽ-ʈɑʔ
1-[絶] 考え １-[絶] 思う-[直前過去]
私は１つ考えを思いつきました。

-ɕõ：

通常は発話者（１人称）の体験、感想、および何らかのかかわりのある出来事が起こったことを表す。言外の状況を含めて用いられるため、１人称代名詞が文中に現れるとは限らない。

(88) ´ŋa-ϕ `tɕʰi nə-ϕ `ʰpu ji ⁻ha ´ma-gu-ɕõ
1-[絶] 何も-[絶] まったく [否]-理解する-[体験]
私は何もまったく分かりませんでした。

---

[42] このため語釈は前者の場合 [目撃証拠] とし、後者の場合 [不確実] とする。

(89)　　⁻ⁿɖɯ bu-ϕ　`ʰpeː-ɕɔ̃
客-[絶]　　やって来る-[体験]
お客さまがやって来ました。

ただし、まったく１人称にかかわらない発話にも用いることがあり、その場合はその文の主語の体験・経過を表すと考えられる。

(90)　　⁻kʰu-ϕ　´kʰɔ̃ ba-ϕ　´ɲɯː-xə-ɕɔ̃
3-[絶]　家-[絶]　買う-[完了]-[体験]
彼は家を買いました。

以上のほか、推測を表すものとして/-ʈə/があるが、この形態素にはさらに動詞句末接辞がつき、以下のようになる。

(91)　　`tɕʰɯʔ-ϕ　`tɕʰeʔ-ʈə-ⁿdwɔʔ
2-[絶]　疲れる-[推測]-[進行]
あなたは疲れたでしょう。

10.3　動詞連続

各種動詞語幹は特別な形態的手続きを加えることなく並列することで、動詞連続を形成することが可能である。その際、動詞の接辞類は最後の要素につく。動詞連続は移動を伴う動作を表現するものや、第１の動詞の表す語義に付加的な意味合いを与えるものがある。

前者の場合は各動詞が独立した声調をもつ。たとえば次のようなものがある。

(92)　　`ᵑʲdʑɔʔ　´ᵑgwə-ze-çe
見物する　行く-[未来]-[判]
（私たちは）見物しに行きましょうか？

(93)　　`tɕʰɯʔ-ϕ　⁻kʰaj　´kʰə-sʰõ
2-[絶]　持つ　[方]-行く　注[43]
（あなたはこれを）持っていきなさい。

後者の場合、第２の動詞に接頭辞を伴わない限り動詞連続は１つの声調範囲の中にある[44]。また、以下に言及する要素は共起可能であり、その中で「経験がある」「し終える、し終わる」が最も後ろにくる。その後ろには動詞句末接辞が付加されうる。

´ɲõ[45]「経験がある」

(94)　　´ŋa-ϕ　´do　⁻kʰu-ϕ　`ᵑ̊tʰõ-ɲõ
1-[絶]　そして　3-[絶]　出会う-経験がある
私と彼は出会ったことがあります。

---

[43]「行く」の命令については、先行する動詞の表す動作と同時に「行く」の意味を表す場合、方向接辞として/´kʰə-/が用いられる。「～しに行く」の場合は現れない。

[44] この場合、２つの動詞は - でつないで表される。

[45] この語の単独使用は未確認である。

ˊtʰɯː / -tʰə[46]「し終える、し終わる[47]」

(95) ˆⁿdaː-nə ˊŋa-ϕ ˊkʰwaj tsʰaj mjẽ-ϕ ˊsa-tʰɯː
昼-[位] 1-[絶] カップめん-[絶] 食べる-し終える
お昼に私はカップめんを食べました。

(96) ˊŋa-ϕ ˊpiʔ ʰtɕi-ϕ ⁻ʰl̥ɔwʔ ˊtə rə ˊlu ˋmə ˊreː-tʰɯː
1-[絶] チベット語-[絶] 学ぶ 以来 年 2 経る-し終わる
私はチベット語を学んで２年がたちました。

(97) ˋtɕʰɯʔ-ϕ ˊsa ˋʔa-tʰɯː
2-[絶] 食べる [疑]-し終える
あなたは食べ終えましたか？

⁻tɕɔʔ[48]「させる」

(98) ˋtɕʰɯʔ-ϕ ⁻kʰu-ϕ ˊsẽ-ϕ ˊsa ˋʔa-tɕɔʔ-tʰɯː
2-[絶] 3-[与] ごはん-[絶] 食べる [疑]-させる-し終える
あなたは彼にごはんを食べさせ終えましたか？

⁻ʱgɯː「必要である」

(99) ˊʈoː tsə-ʰtẽ ˊpej tsə-ϕ ⁻laː ˊn̩i-ʱgɯː-reʔ
デーブル-上 コップ-[絶] 置く [否]-必要である-[判]
デーブルの上にコップを置く必要はありません。

⁻tɕʰoʔ「してもよい、できる」

(100) ˊʈo ma-ϕ ˊsa-tɕʰoʔ-reʔ
アリ-[絶] 食べる-できる-[判]
アリは食べることができます。

⁻n̩dʑaː「なくなる、終える」

(101) ˊŋa-ϕ ˊrɑʔ-ʱgɯː-mə ˊŋa rɔ̃ na rɔ̃-ϕ ˊrɑʔ-n̩dʑaː-tʰɯː
1-[絶] する-必要である-[名] 私自身-[絶] する-なくなる-し終える
私がすべきことは、私自身し終えました。

ˆroʔ「してください[49]」

(102) ˊtɕa-ϕ ˋn̥tʰɔ̃-roʔ
茶-[絶] 飲む-してください
お茶をお飲みください。

ほかにも、⁻ɕʰẽ「知っている」、ˋpʰoʔ「あえてする」、⁻ʱdɑ̃「好きだ」などがある。

---

[46] /-tʰə/は特に発話の途中に現れる。

[47] 先行する動詞が自動詞でも他動詞でもつく。語釈は本動詞の性格によって決まる。単独で本動詞として用いられる場合、「終わる」の語義になる。/tʰə/という形式は独立して現れることはない。

[48] この語の単独使用は未確認である。

[49] この語は本来「助ける」という語義をもつ。丁寧な命令にのみ用いられる。音声的な変異として、[roː, ruʔ, ruː] なども見られる。

10.4　使役・態

使役文は先に触れた動詞˜tɕɔʔ「させる」を用いて形成される。動詞語幹に特定の接辞を付加して使役動詞を形成する形態論的手続きは未確認である。使役の動詞が何であれ、使役者も被使役者も絶対格で標示される。

受動態に関しては特定の表示手段がない。意味上は動作主および被動者の語順によってどちらに焦点をあてるかを決めることができる。

11　複文と動詞句の埋め込み

ここでは、複文の形式と動詞句の埋め込みについて用例を掲げる。

２つの文で述べられる事象が継起的であったり、分かりやすい因果関係にあったりする場合、特に接続詞を用いることなく文を並列させることによって表すことができる。逆接の場合は/´nə rə/「しかし」などが入る。

順接の例

(103)　´kʰə nõ　´kʰɑː-*ϕ*　ˆpoʔ-tʰə　´lɑ̃w-*ϕ*　´ʰse ma　ˆʱdəʔ-reʔ
昨晩　雪-[絶]　降る-し終わる　道-[絶]　とても　滑る-[判]
昨晩雪が降り、（今はやんでいますが）道はとても滑りやすいです。

(104)　˜ⁿdə　´jə gə-kə　˜ʱjɛː-koː-*ϕ*　´mẽ　´ŋa-rɔ̃-*ϕ*　´ɳʉː-koː-*ϕ*　´çe
この　本-[主]　借りる-[名]-[絶]　[判/否]　私-自身-[絶]　買う-[名]-[絶]　[判]
この本は借りたものではなく、私自身が買ったものです。

逆接の例

(105)　´ʔa ta　´tɕʰaː-*ϕ*　ˆpoʔ-´ɳi ⁿdwɔʔ　´nə rə　´tɕʰe ʱdwɔʔ-*ϕ*　`ʰtɕiʔ　˜kʰa ´tsʰɑː
今　雨-[絶]　降る-[進行/否]　しかし　雨傘-[絶]　1　持っていく
ˆjɑʔ-reʔ
よい-[判]
今は雨が降っていないですが、雨傘を持っていくのがよいです。

文と文をつなぐ接続詞については、/´kʰə re/「～のとき」、/´ʰteː rə/「～のとき」、/´ɳi ma ´ɳa/「～する前に」、/´sə ra/「～ではあるけれども」などが認められる[50]。

(106)　´ŋa-*ϕ*　`ʈʰe tsə　´ⁿdwɔʔ　´kʰə re　`ʱdʑoː ɕʰoʔ　´kʰɑː-*ϕ*　ˆpoʔ-ⁿdwɔʔ-reʔ
1-[絶]　車　[存]　とき　外　雪-[絶]　降る-[進行]-[判]
私が車に乗っていたとき、外は雪が降っていました。

(107)　ˆɳaː tsʰẽj-*ϕ*　´ʂã kʰo　´ʰteː rə　˜sʰə ŋgɤ　ˆŋgɑː-kə-ɕɔ̃
1（複数）-[絶]　授業を受ける　とき　地震-[絶]　揺れる-[完了]-[体験]
私たちが授業を受けていたとき、地震が起こりました。

---

[50] 名詞句どうしをつなぐ接続詞として、/´do/「そして」がある。

(108) ˊʔa rĩ ˊŋa-ϕ ˊlẽ kʰa-ϕ ˊpʰaj rɑʔ ˊn̩i ma ˊn̩a ŋa-ϕ ˊtsʰə-nə
今日 1-[絶] 仕事-[絶] し終える 前に 1-[絶] 家-[位]
¯pʰaj ˊn̩i-ᵑgwə
[否]-帰る
今日私は仕事をし終えるまで家へ帰りません。

(109) ˆn̩aː mə-ϕ ˊʱdeʔ-sʰa ˊʰse ma ˆʱdʑeː-reʔ ˊsə ra ˆma tɕiʔ
1.[双]-[絶] 住む-[名] とても 近い-[判] けれども あまり
ˆn̩i-ʈʰeʔ-reʔ
[否]-会う-[判]
私たち 2 人は住んでいるところがとても近いですが、あまり会いません。

動詞句が「尋ねる」「知っている」「言う」などの動詞の補文になるときには、従属文に何ら標識を伴わず埋め込み、最後に主たる動詞をもってくるタイプが多く見られる。ほかにも、会話などでは主たる動詞に続いて補文の部分を連続させる方法も認められるようである。ただし、「言う」については動詞の形式が/ˊseː/ではなく、/ˊsə/となり、しばしば動詞句末接辞/-ʈɑʔ/を伴う。

(110) ¯kʰu-ϕ ˊn̩i-tsə ˊŋa-ϕ ˊtɑː ˊkɑː ˊⁿdwɔʔ ˆʈə-ɕɔ̃
3-[絶] 1-[与] 1-[絶] さっき どこに [存] 尋ねる-[体験]
彼は私に私がさっきどこにいたのか尋ねてきました。

(111) ˋtɕʰɯʔ-ϕ ¯kʰu-ϕ ˋtɕʰi-ϕ ˊseː ¯ha ¯ʔa-gu-nə
2-[絶] 3-[絶] 何-[絶] 言う 分かる-[疑]-[現認] 注[51]
あなたは彼が何を言ったか分かりましたか？

(112) ˋkʰɤ-kə ˊʔa rĩ ˊʂə ji hɑw-ϕ ˊreʔ ˆsə-ʈɑʔ
3-[能] 今日 11 日-[絶] [判] 言う-[直前過去]
彼は今日が 11 日だと言いました。

[51] この文では TAM 標識も時間を表す語もついていないため、「何を言っているか分かりますか」とも解釈可能である。

略号表

文法機能語で略号を作らないものは直接 [　] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。

[絶] ..... 絶対格
[能] .....能格
[与] .....与格
[属] .....属格
[位] .....位格
[内] .....内格
[具] .....具格
[奪] .....奪格
[比] ..... 比較格
[名] ..... 名詞化標識
[複] .....複数
[双] .....双数
[量] .....量詞
[判] ..... 判断動詞
[存] ..... 存在動詞
[否] ..... 否定辞
[方] ..... 方向接辞
[疑] ..... 疑問接辞
[主] ..... 主題標識

参考文献

鈴木博之 (2005)「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23

—— (2009b)〈川西地区 “九香線” 上的藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第 3 期 17–29

—— (2010)「カムチベット語燕門/斯嘎 [Yanmen/Sakar] 方言の方言特徴」『ニダバ』第 39 号 78-87

—— (2011)〈嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源〉《語言暨語言學》第 12.2 期 477-499

Suzuki, Hiroyuki (2009a) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol. 3, 15–34, National Museum of Ethnology

呉光范 (2009)《迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》雲南人民出版社

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による Sakar 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-22 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007）

徳欽県雲嶺郷のカムチベット語における消滅の危機に瀕している かもしれない歯茎破擦音について
——方言差と年代差と個人差のあいだで——

鈴木 博之　　丹珍曲措 (rTa-mgrin Chos-mtsho)*

キーワード：カムチベット語、雲嶺山脈西部下位方言群、歯茎破擦音、音変化

[要旨] 本稿では、中国雲南省徳欽県雲嶺郷で話されるカムチベット語諸方言（sDerong-nJol 方言群雲嶺山脈西部下位方言群）において観察される歯茎破擦音と歯茎摩擦音のゆれについて、佳碧、八里達、査里頂、査里通、永支の５か村で話される変種に認められる音声現象を簡潔に記述し、そこに認められる記述言語学、歴史言語学上の問題を議論する。

1　はじめに

1.1　雲嶺郷のカムチベット語方言

中国雲南省迪慶藏族自治州徳欽県西部を中心に話されるカムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群雲嶺山脈西部下位方言群に属する各種方言[1]は、音声方面において多様な異なりをもつ方言群である。このうち、本稿で記述する雲嶺 [Lung-gling] 郷の諸方言の下位区分は現段階では不明瞭であるものの、雨崩 [gLegs-bam] 村の方言、永支 [gLang-’gril] 村の方言、および紅坡 [dNgul-phung] 村の方言はそれぞれ独立した下位グループをなす可能性があるという点が判明している。雲嶺郷にある行政村は北から順に斯農 [gSal-nang]、西当 [Shar-steng]、果念 [sGo-mnyam]、九農頂 [lCang-nang-steng]、紅坡、査里通 [Tsha-re-thang] とあるが、本稿では果念行政村の佳碧 [lCags-spel] 自然村および八里達 [Pa-ri-steng] 自然村、査里通行政村の査里頂 [Tsha-re-steng] 自然村、査里通自然村、永支自然村で話される方言を扱う。

本稿で用いる各種方言の言語資料は、著者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者はナンセー・ドマ [gNam-gsal sGrol-ma] さん（女性；佳碧出身）および第２著者、テンドゥ・ドマ [Don-grub sGrol-ma] さん（女性；八里達出身）、ペマ・ツモ [Pad-ma mTsho-mo] さん（女性；査里頂出身）、ケゾン・ラモ [sKal-bzang Lha-mo] さん（女性；査里通出身）、タシ・ドマ [bKra-shis sGrol-ma] さん（女性；永支出身）、ガテ・ドマ [bGegs-mthar sGrol-ma] さん（女性；永支出身）で、調査は主に香格里拉県城で行った。lCagspel 方言の調査は佳碧村でも行った。

---

* ( ) 内は著者名のチベット文語つづりの Wylie 転写である。第２著者はカムチベット語 lCagspel（佳碧）方言の母語話者である。

[1] 方言区分については鈴木 (2009)、Suzuki (2009:17) を参照。最新の見解は Suzuki (2011) を参照。雲嶺山脈西部下位方言群に属する方言は、現段階では徳欽県升平 [’Jol] 鎮、雲嶺 [Lung-gling] 郷、佛山郷、燕門郷および維西傈僳族自治県巴迪 [’Ba’-sdod] 郷に分布する。

1.2　本稿で扱う現象

雲嶺郷のカムチベット語の中には、特定の語の初頭子音について、歯茎破擦音と歯茎摩擦音のゆれが観察される方言が存在し、特に佳碧村の lCagspel 方言と永支村の gYanggril 方言においてそのゆれが顕著に認められる。本稿では、この種の現象を言語学的にどのように位置づけることができるか、方言差異、年代差異、個人差異の角度から記述と分析を行う。

なお、音声表記には正書法的な表記を用いず常に音標文字を用い、IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も断りなく用いる。

2　歯茎破擦音と歯茎摩擦音は弁別的であるか

佳碧村出身のチベット語母語話者の中には、歯茎破擦音と歯茎摩擦音はもしかすると弁別できないのではないか、と実際に考える人がいる。また、lCagspel 方言は本稿で触れる方言の中でもっとも多くの資料と個人変種が収集されている。このため、まず lCagspel 方言の記述を行い、それを踏まえて他の雲嶺郷の方言の事例を加えて考察する。考察に際しては、チベット文語形式（蔵文）がチベット語の古期の発音を表しているものと想定して用いる。

2.1　lCagspel 方言の歯茎破擦音をめぐる記述

lCagspel 方言では、蔵文で歯茎破擦音を含むいくつかの語が歯茎摩擦音として実現される。また、歯茎破擦音で実現される例も少なくない。たとえば、次のようなものがある。

歯茎摩擦音の例			歯茎破擦音の例		
蔵文	lCagspel 方言	語義	蔵文	lCagspel 方言	語義
rtswa	˥ʰsə wa	草	*rtsa ba*	˥ʰtsa wa	根本
gtsang ma	˥ʰsɔ̃ ma	清潔な	*tshong khang*	˯tsʰõ xɔ̃	商店
rtsi	ˋʰsə	数える	*tsha ba*	ˊtsʰaː	熱い
ba rdzi	ˊpa ʱzə	牛飼い	*mtsho*	˥ⁿtsʰɤ	海
tshwa	ˊsʰaː	塩	*bstan ’dzin*	˥ʰtẽ ⁿdzĩ	[人名]

さらに複雑な例として、蔵文 dz に前接字 m, ’ を伴う場合、前鼻音つき歯茎閉鎖音〜歯茎鼻音で実現されるものが認められる。

蔵文	lCagspel 方言	語義
mdzub	ˊndə rɔʔ	指
mdzes	˥ⁿdiː	美しい
’dzam gling	˯m̃ ʱlĩ	世界

逆に、蔵文で歯茎摩擦音を含む語が歯茎破擦音として実現される例も、数は少ないものの、認められる。

蔵文	lCagspel 方言	語義
sa	˯tsʰa	土

「土」のような語については、歯茎摩擦音と歯茎破擦音は交替可能である。

以上に掲げた例を総合してみるならば、lCagspel 方言において蔵文に示される歯茎破擦音が歯茎摩擦音として実現される例が複数認められることから、歯茎破擦音から歯茎摩擦音への音変化が生じていると解釈できるけれども、それは完全に歯茎破擦音が歯茎摩擦音に合流したということを意味するのではなく、少なくとも対立する例が認められる。しかしそれでも、母語話者の中にはこれら両者の区別があいまいになることも多い。

また、lCagspel 方言話者の中でも個人差があり、歯茎摩擦音と歯茎破擦音のどちらを用いるかがそれぞれの話者によって異なる例がある。たとえば、「塩」を [´tsʰaː] と発音するといった具合である。この現象もまた、lCagspel 方言においてこれら両者の発音の不安定さを示している。この現象は、学校教育で漢語を学んだことのない lCagspel 方言母語話者の話す漢語の中にも認められる。土地の漢語（西南官話雲南方言の変種）には、/tsʰ, ts/の音素が認められるが、このうち/ts/がしばしば [s] と発音されるという現象が見られる。

以上の現象を総括してみると、lCagspel 方言における歯茎摩擦音と歯茎破擦音の対立それ自体が疑問視される。しかし現段階では、たとえば「草」「清潔な」といった語は摩擦音でしか実現されないし、「熱い」「海」といった語は破擦音でしか実現されないのであるから、これら両者は音素として対立すると認めることが妥当であろう。

2.2　方言間の対照

先に lCagspel 方言の事例を記述したが、雲嶺郷の複数の方言で lCagspel 方言と酷似する現象を見せるものがある。ここでは関連する語について、方言形式を対照する。

	lCagspel	Pareteng	Tshareteng	Tsharethong	gYanggril	
蔵文	佳碧	八里達	查里頂	查里通	永支	語義
rtswa	˥ʰsə wa	˥ʰtsə wa	˥ʰtsə wa	˥ʰtsə wa	˥ʰsə wa	草
gtsang ma	˥ʰsɔ̃ ma	˥ʰtsə wã	˥ʰtsɔ̃ wã	˥ʰtsɔ̃ ma	˥ʰsɔ̃ ma	清潔な
rtsi	ˋʰsə	ˋʰtsə	˥ʰtsə	˥ʰsə / ˥ʰtsə	ˋʰsə	数える
ba(/nor) rdzi	´pa ʱzə	´pa ʱdzə	´nõ ʱzə	´nõ ʱzə	—	牛飼い
tshwa	´sʰaː	¯tsʰaː	´tsʰa	´tsʰa	´sʰa	塩
rtsa ba	˥ʰtsa wa	˥ʰtsa wa	—	—	—	根本
tshong khang	¯tsʰõ xɔ̃	¯tsʰõ kʰɔ̃	´tsʰõ kʰɔ̃	¯tsʰõ kʰɔ̃	¯tsʰõ kʰɔ̃	商店
tsha ba	´tsʰaː	´tsʰaː	´tsʰaː	´tsʰɑː	´sʰɑː	熱い
mtsho	˥ᵑ̊tsʰɤ	˥ᵑ̊tsʰu	˥ᵑ̊tsʰɤ	ˋᵑ̊tsʰu	—	海
mdzub	´ndə rɔʔ	´ⁿdzə rɔʔ	´ndə rɔʔ	´ⁿdə roʔ	´nə ⁿɖəʔ	指
mdzes	˥ⁿdiː	˥ⁿdzeː	´niː lə	˥ⁿdziː lə	˥ⁿliː lə	美しい
’dzam gling	¯m̃ã ʱlĩ	˥ⁿdzã ʱlĩ	¯m̃ã ʱlĩ	´nã ʱlĩ	´nɔ̃ lĩ	世界

以上に示した例について考えるならば、蔵文との対応という点から考えると、Pareteng 方言の形式がもっとも忠実な対応関係をみせているといえる。ただし、Pareteng 方言の形式は、その他の方言資料が若年層の発音であるのに対し、老年層の発音であるということである。単に地域差という観点からだけでなく、年代差という観点からも差異を考える必要がある。現段階

の調査では年代差を考慮できる十分な資料を収集できていないが、直近の２～３世代の間で音変化の起きている事例が近隣の方言で認められる（鈴木 2011）ため、今後注意が必要である。

しかしながら、lCagspel 方言では若年層と壮年層の発音はいずれも **2.1** で示したような発音とゆれが認められる。gYanggril 方言においてもまた同様に発音にゆれがみられる[2]。それに対して Tshareteng 方言および Tsharethong 方言では、当該の発音にあまりゆれが認められない点で、若年層の発話としてはもっとも安定しているといえ、それを方言特徴として認めることができる。しかし、上例「牛飼い」など蔵文の歯茎破擦音が歯茎摩擦音で実現される例も含まれているのも事実である。

3　歯茎破擦音と歯茎摩擦音の交替を歴史言語学的にどう位置づけるか

蔵文を古期のチベット語の発音を表しているものと理解し、また雲嶺郷以外で用いられる諸方言の事例を考える限り、チベット語には明確な歯茎破擦音と歯茎摩擦音の対立が認められる。そのため、上で記述した雲嶺郷のカムチベット語に見られる事例は同地の方言群にのみ認められる特殊な改新である、と判断することは妥当であるだろう。それでは、この音変化をいかに整理することができるのか、ということが問題になってくる。

以上の原則は蔵文で歯茎破擦音をもっていなくても適用される例外的な語があり、「犬」が当てはまる。「犬」は蔵文 *khyi* であるが、雲南の諸方言では/˩tsʰə/というように歯茎破擦音で発音される。その中で gYanggril 方言では/˥ʰsʰə/となっている。

さて、lCagspel 方言における発音のゆれについて、本稿で言及した語彙の中で考えると、まったくゆれの見られないタイプの語があり、それは蔵文 ts に先行する文字がある場合で、歯茎摩擦音で実現されるものである。そのような語彙を再掲すると、以下のようなものがある。

˥ʰsə wa「草」*rtswa*　　ˋʰsə「数える」*rtsi*

˥ʰsɔ̃ ma「清潔な」*gtsang ma*

つまり、この音変化は古蔵文の sts が蔵文 s になったのと酷似するものであると考えられる[3]。ただし、方言形式においては、先行子音の存在した残滓として、前気音が認められる。この音形式は lCagspel 方言では複数の年齢層の話者において安定して認められるため、すでに完了した音変化としてとらえることができるだろう。

次に、蔵文 dz に先行する文字がある例について、m, ’ 以外の子音字がある場合には、上掲のように歯茎摩擦音で実現され、蔵文 ts の事例と並行する。ところが、m, ’ が先行する場合は前鼻音が生じ、前鼻音は摩擦音に先行しないため、歯茎閉鎖音として実現されるか、場合によっては単独の鼻音になる例も認められる。また、話者によっては「美しい」（蔵文 *mdzes*）を/ˊⁿliː lə/と発音する例も見受けられるが、いずれの事例も/ⁿdz/ > */ⁿz/ > /ⁿd/ > /nd/-/ⁿl/ > /n/[4] といった

[2] ただし上掲の形式を用いる話者は歯茎破擦音をほとんど用いない。

[3] この事例は蔵文の成立過程において９世紀初の「第２次釐定」で行われた（西田 1987:122）。

[4] 雲嶺郷の全てのチベット語方言、および同地域で用いられる漢語方言のいずれも [l] と [n] は混同されず、それぞれ独立の音素として認定される。ただし前鼻音つき [l] の [ⁿl] は [l] と [n] の間のゆれが認められるということになる。

音変化を想定して理解することができると考えられる。

しかしながら、Pareteng 方言や Tsharethong 方言のように、歯茎破擦音の比較的安定した方言が認められることを考えると、以上に示した音変化は最近になって生じたものと理解される。この点から想定できる歯茎摩擦音と歯茎破擦音のゆれを引き起こした原因の仮説としては、蔵文 ts に先行する文字が存在するという特定の条件下において歯茎破擦音が歯茎摩擦音に変化した方言を話す話者が、この変化を経験していない方言を話す世代もしくは方言話者との共存によって、全ての相関する例において歯茎摩擦音と歯茎破擦音の区別が不必要なものと理解されるという一種の類推がはたらいているのではないか、ということである。

4　まとめ

本稿では、雲嶺郷のカムチベット語、特に lCagspel 方言について歯茎摩擦音と歯茎破擦音のゆれという現象を詳しく記述した。このような揺れが見られるのは、歴史的に完了した音変化である「歯茎破擦音の特定の条件における歯茎摩擦音化」という現象に端を発した、音変化上の類推がはたらいているのではないかという仮説を提示した。

現段階では lCagspel 方言において歯茎摩擦音と歯茎破擦音は、ゆれを含まない最小対は認められないけれども、音声学的にはどちらか一方の実現しか許容しない語があることから、なお弁別的であるという判断が妥当である。しかし今後 lCagspel 方言の歯茎破擦音の行方を注視していくと、チベット語方言の中で主流ではない「歯茎破擦音の摩擦音化」という音変化の過程を観察することが可能であるかもしれない。また、現在複数の地点の方言資料を収集済みとはいえ、さらに細かい地点での方言資料や年代差異の資料を収集することで、また新たな発見も可能性も十分あるといえる。

参考文献

鈴木博之 (2005)「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23

—— (2009)〈川西地区 “九香線” 上的藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第 3 期 17–29

—— (2011)〈在音變過程中産生又消失的軟顎化元音—雲南徳欽燕門郷穀扎藏語之例—〉《京都大学言語学研究》第 30 号（印刷中）

西田龍雄 (1987)「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社

Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol. 3, 15–34, National Museum of Ethnology

—— (2011) Development of prepalatal and palatal articulations in Khams Tibetan spoken in bDechen Shangri-La (Yunnan), paper presented at 17th HLS (Kobe)

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

条件節・理由節・時点節の連続性について
— チノ語悠楽方言を例として—*

林　範彦

1　はじめに

日本語の以下の文の解釈は実際には連続的であると考えられる。

(1)　a. 昨日駅で電車に乗ろうとし**たら**、同級生に会った。
　　b. 昨日駅で電車に乗ろうとした**とき**、同級生に会った。

(1) 中にみられる**太字**の形式のもつ機能に注目しよう。「たら」は通常条件節を標示する機能をもち、「とき」は従属節内の事態の成立時点を標示する機能をもつと分析される。しかし、(1a) の「たら」は条件節を標示するというよりも意味的には (1b) のように従属節内の事態成立時点の標示と重なっていると考えられる。

このような日本語における従属節標識の機能的重複 (functional overlapping) の問題についてはすでに多くの日本語学の研究者によって論じられてきた。

中国雲南省で話されるチノ語悠楽方言[1] にも類似の問題を指摘することができる。

---

* 本稿はイエテボリ大学 (University of Gothenburg, Gothenburg, Sweden) で行われた第 14 回ヒマラヤ言語学シンポジウム (Himalayan Languages Symposium, 21-23, August, 2008) での口頭発表を加筆・修正したものである。会議で質問された Scott DeLancey 教授をはじめ、多くの研究者からご意見を頂いた。本稿の草稿については稲垣和也氏からも重要な指摘を頂いた。記して心からの謝意を表したい。

[1] チノ語は中国雲南省景洪市に主に居住するチノ族の話す言語である。2000 年の人口統計によるとチノ族の人口は中国全土では 20,899 人である。そのうち景洪市には 19,250 人が暮らしている。しかし、実際にチノ語を流暢に話せる人口は不明である。チノ族は周辺諸民族に比して母語の保有率は高いと考えられるが (戴 [主編] 2007)、 すでに漢語雲南方言しか話せないチノ族も少なくない。チノ語の話者総人口は多く見積もって 1 万数千人程度にとどまると考えられる。

チノ語は大きく悠楽方言と補遠方言の 2 つに分かれる。話者人口の約 9 割が悠楽方言を話すとされる (蓋 1986)。

以下に、筆者の分析によるチノ語悠楽方言の音素目録を示す (林 2006, 2009)。

チノ語の音素目録は, [子音] /p, ph, t, th, k, kh; ts, tsh, tʃ, tʃh, ʨ, ʨh; m, m̩, n, n̩, ɲ, ɲ̩, ŋ̊, ŋ̩; l, l̩; f, v, s, z, ʃ, r, ç, j, x, ɣ; (w) /, [母音] /i, e, ø, ɛ, œ, a, ə, ɔ, ɤ, o, ɯ, u/ である。声調素は /55, 44, 33, 35, 42/ である。音節構造は頭子音 ＋ 介音 ＋ 主母音 ＋ 末子音/声調で構成される。またチノ語では m, m̩, n, n̩ が成節鼻音 (syllabic nasal) となりうる。

なお、本文中で同じ形態素ながら調値が異なることがある。これらは環境によって声調が音韻論的に交替する場合である。 その場合、本文中で引用する際、声調を表記しないことがある。

更に、チノ語文法の言語類型論的特徴としては以下のとおりである。基本語順は SOV で、形容詞は名詞を後ろから修飾し、関係節は名詞を前から修飾する。チノ語は膠着性の高い言語であり、動詞が述部となる際、動詞語根を中心に多くの接尾辞類・接頭辞類が添加した動詞複合形式 (verbal complex) を構成する場合がある。

以下の (2) の例を見てみよう。

(2) a. *mi*^{55}*ʃɔ*^{55}*n̥*^{44} *mi*^{55}*tshɔ*^{55} *kha*^{35}***-xɔ***^{42}/ ***-ŋɯ***^{33}***-xɔ***^{42}/ ***=la***^{55}/ ***-vu***^{44}/ ****-mjə***^{42}***,***
明日　　太陽　　照る-COND / -COP-COND / =PAPH / -RES / -SEQ
ŋɔ^{42}　　*ji*^{33}*tʃho*^{55} *tshi*^{55}*-me*^{44}*.*
1SG.NOM 水　　洗う-FUT
「もし明日晴れたら、水浴びをするつもりだ。」

b. ***ʨ****ɛɛ*^{33}*xun*^{35}***-mjə***^{42}/ ***-xɔ***^{42}/ ****-ŋɯ***^{55}***-vu***^{55}/ ****=la***^{55}/ ****-mɤ***^{33}***-təu***^{35}***,*** *zɔ*^{55}*ku*^{55} *tʃə*^{33}*+jɔ*^{33}*.*
結婚する-SEQ / -COND / -COP-RES / =PAPH / -TIM　　子ども　産む + よい
「結婚してはじめて、子どもを産んでもよい。」

(2) の従属節は主節の命題が成立する条件を表している。(2a) では *-xɔ*^{42}, *-ŋɯ*^{33}*-xɔ*^{42}, *=la*^{55}, *-vu*^{55} の助詞の生起が可能である。一方で (2b) は同じように条件節であると考えられるにもかかわらず、*=la*^{55} [PAPH] の生起は許されず、(2a) では生起不可能であった *-mjə*^{42} [SEQ] がここでは容認される。

(3) は「時点」を表す従属節の例である。

(3) *mi*^{55}*ʃɔ*^{55}*n̥*^{44} *ŋɔ*^{42}　　*lɔ*^{44}***=la***^{55}***/-xɔ***^{42}***/-vu***^{44}***/-mɤ***^{33}***-təu***^{35}***/*-mjə***^{42}
明日　　1SG.NOM 来る=PAPH / -COND / -RES / -TIM / -SEQ
khɤ^{33}*m̥a*^{55} *zo*^{35}*+ja*^{42}*-nœ*^{44}*.*
3PL.NOM　歩く + しまう-SFP
「私が明日来たときには、彼らはもう行ってしまう。」

(3) の従属節は主節の命題が成立する時点を表している。ここでは *=la*^{55}, *-xɔ*^{42}, *-vu*^{44}, *-mɤ*^{33}*-təu*^{35} といった複数の標識の生起が可能である。

(2) や (3) の例に見られる従属節標識の生起を表面的に取り扱えば、複数の従属節標識が所与の用法において生起しうると考えられる。しかし、そのままでは言語形式と機能の関係性が非常に複雑である。

本稿は筆者の採集したチノ語悠楽方言[2] の従属節標識 *-vu*^{55}, *-xɔ*^{42}, *=la*^{55}, *-mɤ*^{33}*-təu*^{35}, *-mjə*^{42} の含まれるデータをもとに、[3] 条件節・理由節・時点節の連続性について試論を展開するものである。

---

[2] 本稿で取り扱うデータは筆者が中国雲南省景洪市で 2003 年から 2009 年にかけて断続的に行った現地調査に基づいている。主にデータを提供してくださった王阿珍氏 (1980 年生、女性)、玉納氏 (1950 年頃生、女性) に心から感謝申し上げます。なお、2003 年および 2005 年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) の援助を、2004 年および 2007 年, 2008 年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 S)「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読—」（研究代表者 長野泰彦）の援助を、2009 年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 (若手研究 B)「チノ語の記述調査と言語接触・言語類型論から見た東南アジア諸語研究」(研究代表者 林 範彦) の援助を受けている。この場を借りて感謝申し上げます。

[3] 上記以外にも、チノ語悠楽方言には逆接「だが、しかし」 を表す従属節標識 *=ɛ*^{55}*-nœ*^{44} がある。しかし、本稿では議論の都合上扱わない。逆接の従属節標識を含めた考察は別稿に譲ることとする。

2　先行研究

筆者以外のチノ語の研究としては主なものに蓋 (1986) と蒋 (2010) がある。ここではそれぞれについて順次略説しておこう。

蓋 (1986: 74–76) ではチノ語悠楽方言の「偏正聯詞」について記述されている。「偏正聯詞」とは要約すると「主従の関係を見いだせる 2 つの文をつなぐ」機能をもつ。蓋 (1986) では *vu*^{44}*zə*^{44} 「なぜなら ～ から」, *khɔ*^{42}*lo*^{33}*ŋu*^{44} 「それゆえに」, *xɔ*^{44}*lœ*^{33} 「もし ～ なら」, *nœ*^{33}*lœ*^{33}*mɔ*^{44}*kua*^{42} 「たとえ ～ ても」, *ŋə*^{44}*ɛ nœ*^{33}*lœ*^{33} 「しかしながら」, *khɔ*^{42}*lo*^{44}*lo*^{44} 「けっして ～ ない」などが例示されているが、具体的な機能の差違などについてはほとんど記述されていない。

蒋 (2010: 256–273) ではチノ語悠楽方言の複文構造について記述されている。そこでは複文の関係として「並列関係」「承接関係」「逓進関係」「解説関係」「選択関係」「転折関係」「条件関係」「仮説関係」「因果関係」「目的関係」の 10 種を挙げている。各「関係」内では更に内的分類も行なっている。このうち本稿の内容と関連するのは「承接関係」「解説関係」「条件関係」「仮説関係」「因果関係」の 5 種であろう。しかし、蒋 (2010) で記述している下位方言 (パヤー下位方言) が筆者の研究している下位方言 (パカー下位方言) と異なるためか、本稿で取り上げる形式と対応するのは、*mjʌ*^{33} 「· · · のあとで」(承接関係)、 · · · *mjʌ*^{33} · · · *sʌ*^{44} 「· · · してはじめて · · · 」(条件関係)、· · · *vu*^{31}*kɤ*^{33} (可能仮説関係)、· · · *vu*^{31} (因果関係) の 4 種であると考えられる。特に興味深い点としては *mjʌ*^{33} が承接関係と条件関係の両方を、*vu*^{31} が仮説関係と因果関係の両方の標示に用いられる点や、蒋 (2010: 270) に記述されるように *vu*^{31} が「原因」だけでなく「時点」をも標示しうることであろう。これは本稿の内容とも関係するが、蒋 (2010) では各例文に挙げられる形式を列挙する以上の更なる分析を施していない。

本稿の記述と分析は蓋 (1986) と蒋 (2010) の記述する下位方言とは異なるが、上記の研究を補完する位置にあると言えよう。

3　観察と記述 — 典型的用法と周辺的用法 —

本節では、チノ語悠楽方言における *-vu*^{55}, *=la*^{55}, *-xɔ*^{42}, *-mjə*^{42}, *-mɤ*^{33}*-təu*^{35} の各従属節標識のデータをもとに、その典型的用法と周辺的用法について観察と記述を試みる。

3.1　-vu^{55}

まず、*-vu*^{55} の用法について観察する。*-vu*^{55} は典型的には (4) のように、主節の事態が生じる理由を表す。

(4)　a. *tshi*^{55} *tsɔ*^{33}*-mɤ*^{35}　*ŋɯ*^{55}***-vu***^{55}*,*　*a*^{55}*vɯ*^{44}*a*^{55}*va*^{44} *ji*^{55}*thɛ*^{35}*-mɤ*^{55}*.*

薬　食べる-NML COP-RES　ふらふらする　寝る-PAST

「薬を飲んだので、ぐっすり眠った。」

b. *a*^{55}*pu*^{44}*a*^{55}*mɔ*^{44} *a*^{55}*krɔ*^{44} *ŋɯ*^{55}-***vu***^{55}, *zɔ*^{55}*ku*^{55} *a*^{33}*pjo*^{55} *ma*^{55}-*jɔ*^{44}+*tu*^{33}-*mɤ*^{35}.
両親 貧しい COP-RES 子ども 本 NEG-よい + 読む-PAST
「(彼/彼女の) 両親は貧しかったので、(彼/彼女は) 学校に行かなかった。」

-*vu*^{55} は理由の標識として用いられることが最も多いが、以下のように様々な用法を見ることも可能である。例えば、(5) のように主節の条件を表すことができる。

(5) a. *nə*^{42} *khun*^{33}*miŋ*^{33} *le*^{55}-***vu***^{55}, *lao*^{33}*si*^{55} *a*^{55}*fu*^{55} *the*^{35}+*le*^{44}.
2SG.NOM 昆明 行く-RES 先生 前に 伝える + 行く
「昆明に行くなら、前もって先生に言いに行きなさい。」
b. *ŋɔ*^{42} *kai*^{33}*tsi*^{55} *le*^{44}-*nœ*^{44}. *ça*^{55}*lɔ*^{44} *phjen*^{35}*ji*^{33} *ŋɯ*^{55}-***vu***^{55}, *la*^{55}*thə*^{42} *ju*^{33}=*ɛ*^{44}.
1SG.NOM 市場 行く-SFP もの 安い COP-RES 多い 買う=POSS
「私は市場に行く。ものが安かったら、たくさん買ってくるよ。」

このほか、-*vu*^{55} は事態の成立時点を表現できる (6)。

(6) a. *ʃaŋ*^{35}*ʨao*^{44} *phɛ*^{44}-***vu***^{44}, *thəu*^{33}*tɤŋ*^{55} *tai*^{35}-***vu***^{55}. *ŋɔ*^{33}=*a*^{55}=*lœ*^{44} *a*^{33}*pɯ*^{55}*lɯ*^{55}.
ゴムの木 切る-RES ヘッドランプ 着る-RES 1SG.OBL=PART=も 朦朧とする
「私がゴムの樹液を採るとき、ヘッドランプを頭につけるから、私もフラフラする。」
b. *jɔ*^{55}*lɔ*^{33}*ʨɛ*^{33} *kɔ*^{55}-***vu***^{55}, *ji*^{55}*ʃi*^{55} *tø*^{55}-*khœ*^{44}-*mɤ*^{44}. *nə*^{42} *tʃə*^{55}=*ɛ*^{55}
トモク節 過ぎる-RES 昔 たった今-する-PAST 2SG.NOM いる=POSS
tʃhɤ^{33}-*a*^{44}.
似ている-PART
「トモク節が過ぎる頃、あなたもここにいるでしょうね。」

更に、-*vu*^{55} は (7) のように事態の継起を表すことも少なくない。継起を表す場合、主節と従属節の間の意味的な連関は強くない。両者の主語は異なりうる。

(7) a. *lao*^{33}*toŋ*^{55}+*sɔ*^{35}-***vu***^{55}, *mi*^{33}*tha*^{55} *ma*^{33}-*xo*^{55}-*mɤ*^{42}-*a*^{44}-*nœ*^{44}.
農作業する + おわる-RES 雨 NEG-降る-PAST-PFT-SFP
「(私が畑で) 農作業し終えたあと、雨がやんだ。」
b. *ʃao*^{33}*waŋ*^{33} *çi*^{44} *tʃɤ*^{55}-*tɛ*^{44}-***vu***^{55}, *tʃɤ*^{55}-*me*^{55}.
ワンさん これ より-見る-RES より-泣く
「ワンさんがこれを見て、泣いた (= ワンさんがこれを見れば見るほど、泣いた)。」
c. *ji*^{55}*n̥*^{44} *ʃi*^{55}*n̥*^{44} *tjen*^{35}*xua*^{35} *ta*^{33}+*lɯ*^{35}-***vu***^{44}, *a*^{55}*ɲə*^{55} *ʃo*^{33}*ʨi*^{55} *l̥ai*^{35}-*a*^{44}-*nœ*^{44}
昨日 一昨日 電話 かける + 来る-RES 自分 (3) 携帯電話 壊れる-PFT-SFP
m̥^{33}-*mɛ*^{35}.
話す-PAST
「(彼女が) 昨日一昨日に電話をかけてきて、(彼女の) 携帯電話が壊れたと言っていた。」

以上を整理すると、*-vu*^{55} は典型的用法として主節の事態が生じる理由を表すほか、周辺的には条件・事態の成立時点・継起を表す用法が存在することがわかる。[4]

3.2 =la^{55}

次に *=la*^{55} の用法を観察しよう。チノ語悠楽方言では *=la*^{55} は倚辞と考えられ、先行文脈の内容を言い換える、あるいは先行文脈の要点および特徴が後に続く性質を持つ。(8) を見られたい。

(8) a. *çi*^{44}*=**la**^{55} jin*^{33}*nan*^{33}*pɤ*^{33}*jɔ*^{33}*.*
これ=PAPH 雲南白薬
「これは雲南白薬 (薬の名前) である。」

b. *ʃin*^{55}*wen*^{44}*ljen*^{33}*pɔ*^{55}*=**la**^{55} kha*^{55}*-kɔ*^{55} kɔ*^{33}*ʨa*^{55}*si*^{55}*ʨhiŋ*^{33}*tu*^{33}*-mɤ*^{44} faŋ*^{35}*+tu*^{44}*-ɲɔ*^{42}*.*
新聞聯播=PAPH 何-CL 国 物事 出る-REL 放送する+出る-RCF
「新聞聯播[5] ではどこの国の事件でも放送されるだろう。」

c. *çi*^{44} *thi*^{33}*-m̥jɔ*^{55} *n̥*^{33}*-m̥jɔ*^{55}*=**la**^{55} khɔ*^{33}*ji*^{33}*-a*^{44}*.* *a*^{55}*n̥o*^{44}*tai*^{35}*=**la**^{55} mɔ*^{55}*-sɯ*^{55}*jɔ*^{35}*-ɲɔ*^{42}*.*
これ1-CL 2-CL=PAPH 大丈夫である-PART 後代=PAPH NEG-知る-RCF
「(チノ語は) この 1, 2 年くらいは大丈夫だろう。後の世代の人達は (チノ語を) 理解しないだろうよ。」

(8) における *=la*^{55} は名詞 (相当) 句に後接していた。一方で、*=la*^{55} は動詞複合形式にも名詞化を伴うことなく後続でき、(9) のように主節の条件を表現しうる。

(9) a. *pe*^{33}*tø*^{55} *ʃa*^{55}*-ɔ*^{55}*=**la**^{55}, a*^{55}*kəu*^{55} khju*^{55}*+ku*^{55}*=ɛ*^{44}*.*
かばん 担ぐ-PART=PAPH もの 盗む + 取る=POSS
「もしあなたがかばんを担いだら、ものを盗まれるかもしれない。」

---

[4] 本文では、*-vu*^{55} が現れる理由節では主節が過去時である例を主に取り上げた。実際には主節が非過去の例も可能である。

i) *tshi*^{55} *tsɔ*^{35}*-**vu**^{55}, ji*^{33}*-n̥u*^{55}*-nœ*^{44}*.*
薬 食べる-RES 寝る-AUX-SFP
「薬を飲んだので、眠たい。」

ii) *a*^{55}*pu* ^{44} *a*^{55}*mɔ*^{44} *a*^{55}*krɔ*^{44} *ŋɯ*^{55}*-**vu**^{55}, a*^{33}*pjo*^{55} mɔ*^{55}*-tu*^{33}*-nœ*^{44}*.*
父 母 貧しい COP-RES 本 NEG-読む-SFP
「(彼は) 両親が貧しかったので、学校に行かない。」

また本文では、*-vu*^{55} が現れる継起節では主節が過去時である例を主に取り上げた。これも実際には主節が非過去の例も可能である。

iii) *lao*^{33}*toŋ*^{55}*-**vu**^{55} mi*^{33}*tha*^{55} mɔ*^{33}*-xo*^{55}*=ɛ*^{44}*.*
農作業する-RES 雨 NEG-降る=POSS
「農作業した後、雨は降らないだろう。」

[5] 中国中央電視台で毎日午後 7 時より一斉に放送されるテレビニュースの名前。

b. *a*^{55}*kəu*^{55} *mɔ*^{55}*-ku*^{33}*-ɔ*^{33}*=**la**^{55},* *thu*^{55}*pru*^{33}*=ɛ*^{44} *tu*^{35}*+ja*^{44}*-ɔ*^{44}*-ɲɔ*^{42}*.*
もの NEG-取る-PART=PAPH 直接=POSS 出る + 行く-PART-RCF
「(スーパーマーケットで) 何も買わなかったら、そのまま直接 (出口から) 出て行ってもよいんだよ。」

また、(10) のように、 *=la*^{55} は主節の理由を表現しうる。

(10) a. *khɤ*^{42} *ta*^{35}*ʃue*^{33} *tu*^{33}*-tɔ*^{44}*=**la**^{55},* *khɤ*^{42} *jiŋ*^{55}*ji*^{44} *tɛ*^{55}*+sɯ*^{55}*-khju*^{42}*-a*^{44}*.*
3SG.NOM 大学 読む-EXP=PAPH 3SG.NOM 英語 見る + 知る-AUX-PART
「彼/彼女は大学を卒業したので、英語が読める。」
b. *ji*^{55}*n̥*^{44} *khɤ*^{42} *ʃaŋ*^{35}*ʨao*^{44} *phɛ*^{33}*-mɛ*^{35}*=**la**^{55},* *khɤ*^{42} *m̥ɛ*^{55}*-nœ*^{44}*.*
昨日 3SG.NOM ゴムの木 切る-PAST=PAPH 3SG.NOM 疲れている-SFP
「彼/彼女はゴムの樹液を取りに行ったので、疲れている。」

主節の理由を表現する際に、複数の標識が同時に生起する場合がある。(11) のように *=la*^{55} は **3.1** で見た *-vu*^{33} としばしば共起する。このような例は、コピュラ *ŋɯ*^{33} に付加される用法が確認されている。

(11) a. *çi*^{44} *pjen*^{55}*ʨaŋ*^{55} *ŋɯ*^{33}*-vu*^{33}*=**la**^{55} lɔ*^{33}*xɔ*^{35}*-ɲɔ*^{42}*.*
これ 辺境 COP-RES=PAPH 遅れている-RCF
「ここは辺境だから、遅れている。」
b. *a*^{55}*khrɔ*^{55} *a*^{55}*ʃɛ*^{42} *ŋɯ*^{33}*-vu*^{33}*=**la**^{55}.*
川 近い COP-RES=PAPH
「(私の家が涼しいのは、) 川に近いからだ。」

更に *=la*^{55} は (12) のように、従属節の事態の時点を表現することも多い。

(12) *mi*^{55}*ʃɔ*^{55}*n̥*^{44} *nə*^{42} *lɔ*^{33}*=**la**^{55},* *khɤ*^{42} *ʨiŋ*^{33}*xoŋ*^{44}*=a*^{55} *je*^{35}*+ja*^{42}*-nœ*^{44}*.*
明日 2SG.NOM 来る=PAPH 3SG.NOM 景洪 (PLN)=VA 行く + 行く-SFP
「あなたが (ここに) 明日くるときには、彼/彼女は景洪に行ってしまっているだろう。」

加えて、(13) のように、*=la*^{55} が事態の継起関係を表しえる。

(13) *ʃue*^{33}*sɤŋ*^{55}*-m̥a*^{55} *a*^{33}*pjo*^{55} *tu*^{33}*+sɔ*^{35}*=**la**^{55},* *ɲi*^{33}*ko*^{35}*+le*^{35}*-mɛ*^{35}*.*
学生-PL 本 読む + おわる=PAPH 遊ぶ + 行く-PAST
「学生たちが本を読み終わったあと (= 学校が終わったあと)、外に遊びに行った。」

以上を整理すると、*=la*^{55} には非常に多くの用法が見られる。*=la*^{55} は名詞句にも動詞複合形式にも後続できる。名詞句に後続する際は先行名詞の言い換え、および要点・特徴を後に述べさせる性質がある。また、動詞複合形式に後続する際は主節の条件を表すことが多い。しかし、特に動詞複合形式に後続する際には様々な用法が見られ、主節の理由、事態の成立時点、そして継起をも表すことがある。

3.3 -xɔ^{42}

次に -xɔ^{42} の用法を見ていく。-xɔ^{42} は典型的には条件節を標示する。(14) に見るように、コピュラ ŋɯ^{55} と共起する例[6] が多い。

(14) a. jɔ^{55}-a^{55} ŋɯ^{33}-**xɔ**^{42}, ŋɔ^{42} ʨɛ^{42}-na^{42} no^{33}+lɔ^{55}=ɛ^{44}.
よい-PART COP-COND 1SG.NOM とても-早い また + 来る=POSS
「可能であれば、私はとても早く戻ってくるつもりです。」

b. a^{55}pu^{44} ʨe^{33}phɯ^{55} tə^{33} ŋɯ^{33}-**xɔ**^{42}, phø^{55}-a^{44}.
父 酒 飲む COP-COND 吐く-PFT
「お父さんが酒を飲んだら、吐いてしまう。」

一方、-xɔ^{42} は時にコピュラと共起せず、(15) のように、直接動詞複合形式に後接することもある。

(15) a. ja^{55}ȵi^{44}ʨe^{33}phɯ^{55}çi^{55}-pu^{44}-thə^{42} tə^{33}-**xɔ**^{42}, mi^{55}ʃɔ^{55}ȵi^{44}ma^{55}-to^{55}thɔ^{33}-khju^{42}=ɛ^{44}.
今日 酒 これ-くらい-多い 飲む-COND 明日 NEG-起きる-AUX=POSS
「今日酒をこれほどたくさん飲んだら、明日は起きられないだろう。」

b. tshɤ^{55}m̥jo^{55} mɔ^{55}-tə^{35}+le^{44}-**xɔ**^{44}, nɛ^{33}m̥jo^{55} mɔ^{55}-tə^{33}-khju^{55}-xa^{44}.
今年 NEG-切り倒す + 行く-COND 来年 NEG-切り倒す-AUX-PFT
「もし今年 (木を) 切り倒しに行かなかったら、来年は切り倒せなくなっているだろう。」

他方、(16) のように、-xɔ^{42} はしばしば事態が起きる時点を表現しうる。[7]

(16) a. tʃhu^{55}khɛ^{55} ŋɯ^{33}-**xɔ**^{42}, khi^{55} mɔ^{55}-tshu^{55}-a^{55}, ʃɔ^{33}khi^{55} a^{33}pja^{42}.
冬 COP-COND 靴 NEG-着る-PART 足 乾いている
「冬であれば、靴を履かないと、足が乾ききってしまうよ。」

b. mi^{55}ʃɔ^{55}n̥^{44} nə^{42} lɔ^{33}-**xɔ**^{42}, khɤ^{42} ʨiŋ^{33}xoŋ^{44}=a^{55} je^{35}+ja^{42}-nœ^{44}.
明日 2SG.NOM 来る-COND 3SG.NOM 景洪 (PLN)=VA 行く + 行く-SFP
「明日 (ここに) 来るときには、彼/彼女は景洪に行ってしまっているだろう。」

以上を整理すると、-xɔ^{42} は条件を標示する機能を中心に、事態の成立時点を標示することもあるとまとめられる。[8]

---

[6] コピュラと共起する際には ŋɯ^{33}-xɔ^{55} のように、声調交替を起こすことが多い。

[7] (16) は -xɔ^{42} が後続している節は条件節のようにも見える。しかし、ここでは名詞 (「冬」) に後続していたり、「明日ここに来ると/ 来たら/ 来るなら」と読み替えることが難しいことを考え合わせると、条件節ではなく、時点を表していると考えたほうがよいだろう。

[8] 本文では従属節が非過去の例を中心に挙げた。実際には過去の標識が生起する例も存在する。以下に例を挙げる。

3.4 -mjə^{42}

続いて、*-mjə*^{42} の用法を見てみよう。*-mjə*^{42} は、(17) の例に見るように、従属節標識として継起を表す。[9]

(17) a. *mi*^{33}*tha*^{55} *xo*^{42}***-mjə***^{42}*,* *tʃɤ*^{55}*-tshø*^{42}*.*
雨 降る-SEQ より-冷たい
「雨が降って、より冷たくなった。」

b. *khɤ*^{42} *ŋɔ*^{35} *na*^{33}*khɔ*^{42} *ʃɯ*^{55}***-mjə***^{42}*,* *ŋɔ*^{35} *khu*^{33}*+thɔ*^{35}*-mɤ*^{55}*.*
3SG.NOM 1SG.OBL 耳 引っ張る-SEQ 1SG.OBL 呼ぶ + 起きる-PAST
「彼/彼女は私の耳を引っ張って、起こした。」

-mjə^{42} は継起の用法において、(18) のように、文中で数回生起することができる。

(18) a. *ʨe*^{33}*phɯ*^{55} *tə*^{33}*+mo*^{35}***-mjə***^{42}*,* *ta*^{33}***-mjə***^{42}*,* *ʃo*^{33}*ʨi*^{55} *m*^{33}*-phi*^{35}***-mjə***^{42}*,*
酒 飲む + 狂っている-SEQ 打つ-SEQ 携帯電話 CAUS-なくす-SEQ
mɔ^{55}*-ta*^{33}*+le*^{44}*-xa*^{44}*.*
NEG-打つ + 行く-PFT
「(かつて、彼女が) 酔っ払って、(麻雀を) 打って、携帯電話をなくして (以来、麻雀を) 打たなくなった。」

b. *lø*^{33}*=jə*^{55} *no*^{33}*-lɔ*^{55}***-mjə***^{42}*,* *ʃao*^{33}*xoŋ*^{35}*-m̥a*^{55}*=ɛ*^{55} *tso*^{33}*no*^{33}*-lɔ*^{55}***-mjə***^{42}*,*
あれ=よりまた-来る-SEQ シャオホン (PSN)-PL=POSS 家 また-来る-SEQ
va^{33}*tsɔ*^{55}*phu*^{55}*,* *ŋɔ*^{42} *ʨao*^{55}*tao*^{55} *sɯ*^{55}*+sɔ*^{33}***-mjə***^{42}*,* *ji*^{55}*thɛ*^{42}*+ja*^{33}*m̥*^{35}*.*
豚の餌 煮る 1SG.NOM ゴムの樹液を取る三角刀 研ぐ+おわる-SEQ 眠る + 行く 言う
「私があそこから帰ってきて、シャオホンの家から戻ってきて、豚の餌を煮て、ゴムの樹液を取る三角刀を研ぎおえて、それから寝た。」

---

i) *khɤ*^{42} *ji*^{55}*n̥*^{44}*lɔ*^{55}*po*^{44}*tshi*^{55}*+le*^{44}*-mɛ*^{44} *ŋɯ*^{33}***-xɔ***^{42} *ja*^{55}*n̥*^{44}*mɔ*^{55}*-le*^{44}*=ɛ*^{44}*-po*^{42}*.*
3SG.NOM 昨日 茶 摘む + 行く-PAST COP-COND 今日 NEG-行く=POSS-RCF
「彼は昨日茶を摘みに行ったのなら、今日は行かないでしょうね。」

[9] *-mjə*^{42} は継起を表していても、否定接頭辞 *ma-* ～*mɔ-*と共起できないという特徴がある。

i) *khɤ*^{42} *a*^{55}*ko*^{44}*sɔ*^{35}***-mjə***^{42}*/ *-∅ to*^{35}*+ja*^{33}*-mɤ*^{44}*.*
3SG.NOM ドア 閉める-SEQ 出る + 行く-PAST
「彼/彼女はドアを閉めて出ていった。」

ii) *khɤ*^{42} *a*^{55}*ko*^{44}*ma*^{55}*-sɔ*^{35} ****-mjə***^{42}*/ -∅ to*^{35}*+ja*^{33}*-mɤ*^{44}*.*
3SG.NOM ドア NEG-閉める-SEQ 出る + 行く-PAST
「彼/彼女はドアを閉めずに出ていった。」

(i) と (ii) は従属節の部分が肯定であるか、否定であるかの違いがある。(i) のように肯定の場合は *-mjə*^{42} が生起可能であるが、(ii) のように否定の場合は生起できない。

(19)[10] に見るように、*-mjə*^{42} は主節の条件を表すこともある。しかし、これは典型的な用法ではないと考えられる。

(19) a. *khɤ*^{44} *a*^{55}*ke*^{55} *tʃhao*^{35}***-mjə***^{42}*,* *tsɔ*^{55}*+jɔ*^{55}*.*
あれ おかず 揚げる-SEQ 食べる + よい
「あのおかずは揚げれば食べられる。」

b. *khɤ*^{35} *n̥ɔ*^{55}***-mjə***^{42}*,* *zə*^{55} *sɯ*^{55}*jɔ*^{44}*=ɛ*^{44}*.*
3SG.OBL 尋ねる-SEQ やっと 知る=POSS
「(我々が) 彼/彼女に (そのことを) 尋ねたら、やっとわかった。」

以上を整理すると、*-mjə*^{42} は継起を標示するほか、一部の例で条件も標示することがあるとまとめられよう。

3.5 -mɤ^{33}-təu^{35}

最後に、*-mɤ*^{33}*-təu*^{35} について観察する。*-mɤ*^{33}*-təu*^{35} は関係節標識の *-mɤ* と 「とき」を表す名詞 *-təu*^{35} の複合形式であると分析される。[11] 従属節の事態の成立時点を標示する。

(20) a. *ŋɔ*^{42} *tso*^{33} *to*^{33}*+le*^{33}*-(mɤ*^{44}*)* ***-təu***^{35}*,* *tjen*^{35}*xua*^{35} *m̥ɯ*^{33}*+lɯ*^{33}*-mɤ*^{35}*.*
1SG.NOM 家 出る + 行く-(REL)-TIM 電話 鳴る + 来る-PAST
「私が家から出てきたとき、電話が鳴った。」

b. *ŋɔ*^{42} *tʃoŋ*^{55}*ʃuɛ*^{44} *tu*^{33}*-mɤ*^{33}***-təu***^{35}*,* *si*^{55}*mao*^{44} *thi*^{33}*la*^{55} *le*^{33}*-tɔ*^{44}*.*
1SG.NOM 中学校 読む-REL-TIM 思茅 (PLN) 一度 行く-EXP
「中学校にいたころ、思茅に一度行ったことがある。」

(21)[12] のように、*-təu*^{35} は名詞句に後接しうる。

(21) *pao*^{55}*tʃə*^{55} *ŋa*^{55}*vu*^{55} *noŋ*^{33}*ʃao*^{35} ***-təu***^{44} *thoŋ*^{33}*ʃo*^{35} *ŋɯ*^{33}*-mɛ*^{35}*.*
パオチャ (PSN) 1PL 農業学校 -TIM 級友 COP-PAST
「パオチャが農業学校にいたころ、(彼は) 級友であった。」

-mɤ^{33}*-təu*^{35} は上述の通り、基本的に従属節の事態の成立時点を標示し、他の用法への拡張は現時点では観察できない。

---

[10] (19) に掲げる例はいずれも前提として「揚げる以外の方法はない」「誰に尋ねてもわからない」ということが含まれると考えられる。

[11] (20) のように、時点を表す場合 *-mɤ*^{33} は随意的に生起すると考えられる。この *-mɤ*^{33} は関係節標識 *-mɤ* であると考えられ、一般に主名詞を修飾する際には義務的に生起するため、その生起状況の差違は注意を要する。ただし、本稿では *-mɤ*^{33}*-təu*^{35} と表記を統一しておく。

[12] この例はパカー下位方言に近いルトゥ下位方言話者の自然発話から引用した。

3.6　小結 — チノ語悠楽方言における従属節標識の用法 —

上述したチノ語悠楽方言における従属節標識の用法を、典型的なものと周辺的なものに分類して整理すると以下の表 1 のようになる。

表 1　チノ語悠楽方言の従属節標識の用法

従属節標識	典型的な用法	周辺的な用法
-vu^{55}	理由	条件, 時点, 継起
=la^{55}	言い換え	理由, 条件, 継起, 時点
-xɔ^{42}	条件	時点
-mjə^{42}	継起	条件
-mɤ^{33}*-təu*^{35}	時点	——

表 1 に見るように、*-mɤ*^{33}*-təu*^{35} を除いた他の従属節標識は典型的な用法のほかに周辺的な用法を有することがわかる。そして典型的用法・周辺的用法全体を見れば、用法間の機能的重複も見いだせる。この点について次節で分析を試みたい。

4　分析 — 意味的連続性 —

本節では、従属節標識が交換可能である例を中心に分析し、チノ語悠楽方言において「条件」「理由」「時点」の意味がいかなる形で連続的であるのかを論じていきたい。

4.1　条件

まずは「条件」を表す標識について考える。(22) に見るように、主節に対する条件節は主に *-xɔ*^{42}, *-vu*^{55} および *=la*^{55} で標示される。主節・従属節両方の事態が未来に成立するのであれば、上記 3 つの従属節標識のいずれも容認可能である。

(22)　a. *mi*^{55}*ʃɔ*^{55}*n̥*^{44} *mi*^{33}*tha*^{55} *xo*^{33} ***ŋɯ***^{33}***-xɔ***^{42}/***-vu***^{33}***=la***^{55}, *ŋɔ*^{42} *mɔ*^{55}*-le*^{44}*=ɛ*^{44}.
明日　雨　降る COP-COND / -RES=PAPH　1SG.NOM NEG-行く=POSS

b. *mi*^{55}*ʃɔ*^{55}*n̥*^{44} *mi*^{33}*tha*^{55} *xo*^{33}*+lɯ*^{33}***-vu***^{55}, *ŋɔ*^{42} *mɔ*^{55}*-le*^{44}*=ɛ*^{44}.
明日　雨　降る + 来る-RES　1SG.NOM NEG-行く=POSS
「もし明日雨が降れば、私は行かない。」

更に、主節・従属節間に論理的関係が存在するなら、(23) に見るように、*-xɔ*^{42} 同様、*-vu*^{55} あるいは *=la*^{55} によって従属節が標示されうる。ただし注意すべきは、この場合従属節が主節の十分条件であらねばならない。

(23) a. *khɤ*^{42} *tʃoŋ*^{55}*kɔ*^{44}*+ tshə*^{33}*zɔ*^{55}***ŋɯ***^{33}***-xɔ***^{42}***/ ŋɯ***^{55}***-vu***^{55}***/ ŋɯ***^{33}***-vu***$^{33}***=la***^{55}*,* *khɤ*^{42}
3SG.NOM 中国 + 人々 COP-COND / COP-RES / COP-RES=PAPH 3SG.NOM
a^{55}*xɔ*^{44}*m̥i*^{44}*pja*^{33}*-khju*^{55}*=ɛ*^{44}*.*
漢語 話す-AUX=POSS
「彼/彼女が漢族なら、漢語を話せるだろう。」

b. *ja*^{55}*n̥*^{44} *vu*^{33}*xao*^{35} ***ŋɯ***^{33}***-xɔ***^{42}***/ ŋɯ***^{55}***-vu***^{55}***/ =la***^{55}*,* *mi*^{55}*ʃɔ*^{55}*n̥*^{44} *lu*^{33}*xao*^{35} *ŋɯ*^{33}*-nœ*^{44}*.*
今日 5 日 COP-COND / COP-RES / =PAPH 明日 6 日 COP-SFP
「今日が (今月の)5 日なら、明日は 6 日だ。」

従属節が主節の必要条件であれば、(24)[13] に見るように、*-xɔ*^{42} 同様、*-mjə*^{42} が従属節標識として生起しうる。このとき、*=la*^{55} は生起できない。

(24) a. ***ʨ****ɛ*^{33}*xun*^{35}***-mjə***^{42}***/ -xɔ***^{42}***/ *(ŋɯ***^{55}***)-vu***^{55}***/ *=la***^{55}***/ *-mɤ***^{33}***-təu***^{35}*,* *zɔ*^{55}*ku*^{55} *tʃə*^{33}*+jɔ*^{33}*.*
結婚する-SEQ / -COND / -COP-RES / =PAPH / -TIM 子ども 産む + よい
「結婚してはじめて、子どもを産むことができる。」(= 2b)

b. *ji*^{33}*jen*^{42} *le*^{55}***-mjə***^{42}***/ -xɔ***^{42}***/ *(ŋɯ***^{55}***)-vu***^{55}***/ *=la***^{55}***/ *-mɤ***^{33}***-təu***^{35}*,* *ja*^{55}*+mɤ*^{55}*-khju*^{42}*.*
病院 行く-SEQ / -COND / -COP-RES / =PAPH / -TIM 治す + よい-AUX
「病院に行ってはじめて、(あなたの病気は) 治りうる。」

他方、(25) のように、 反事実条件文である場合、*ŋɯ*^{33}*-xɔ*^{42} あるいは *ŋɯ*^{33}*-xɔ*^{55}*=la*^{55} が容認される。他の従属節標識は用いられない。

(25) a. *ŋɔ*^{42} *nə*^{35} ***ŋɯ***$^{33}***-xɔ***$^{42}***/ ŋɯ***$^{33}***-xɔ***$^{55}***=la***$^{55}***/ *ŋɯ***$^{55}***-vu***$^{55}***/ *ŋɯ***$^{33}***-vu***$^{33}***=la***$^{55}***,***
1SG.NOM 2SG.OBL COP-COND / COP-COND=PAPH / COP-RES / COP-RES=PAPH
ŋɔ^{42} *khɤ*^{33}*-lo*^{33} *mɔ*^{55}*-khœ*^{33}*-ʨhɛ*^{42}*.*
1SG.NOM あれ-ようにNEG-する-AUX
「もし私があなたなら、そのようにはしないだろう。」

b. *ŋɔ*^{42} *ŋa*^{33}*zɔ*^{55}***ŋɯ***$^{33}***-xɔ***$^{42}***/ ŋɯ***$^{33}***-xɔ***$^{55}***=la***$^{55}***/ *ŋɯ***$^{55}***-vu***$^{55}***/ *ŋɯ***$^{33}***-vu***$^{33}***=la***$^{55}***,***
1SG.NOM 鳥 COP-COND / COP-COND=PAPH / COP-RES / COP-RES=PAPH
pɤ^{33}*ʨiŋ*^{55}*prɛ*^{35}*+le*^{55}*=ɛ*^{44}*.*
北京 飛ぶ + 行く=POSS
「もし私が鳥ならば、北京まで飛んでいくのに。」

---

[13] 以下の例に見るように、*-mjə*^{42} のみが容認されうる例もわずかながら存在する。

i) *khɤ*^{44}*a*^{55}*ke*^{55}*tʃhao*^{35}***-mjə***^{42}***/*-xɔ***^{42}***/*=la***^{55}***/*-vu***^{55} *tsɔ*^{55}*+jɔ*^{55}*.* (= 19a)
あれ おかず 揚げる-SEQ / -COND / =PAPH / -RES 食べる + よい
「あのおかずは揚げれば、食べられる。」(= あのおかずは揚げてはじめて食べられる)

このような例は今後も検討が必要である。

以上から、条件のタイプにより従属節標識の分布は表 2 のようにまとめられる。*-xɔ*^{42} (もしくは *-xɔ*^{42} を含む形式) はいかなる条件節でも生起可能である。

表 2　「条件」を表す従属節標識の機能的重複

必要条件	論理関係 (十分条件)	その他
//////////////////////		
-mjə^{42}		
	//////////////////////////////	
	-vu^{55}, *=la*^{55}	
//		
	-xɔ^{42}	

4.2　理由

次に「理由」を表す標識について分析する。上述したように、主節に対する理由節は *-vu*^{55} または *=la*^{55} によって標示されうる。従属節が明らかに主節の理由と解釈される [14] のであれば、(26) のようにいずれの標識でも容認される。

(26)　a. *khɤ*^{42}　*ta*^{35}*ʃue*^{33} *tu*^{33}*-tɔ*^{44}***-vu***^{55} / ***-vu***^{55}***=la***^{55} / ***=la***^{55}***,***
3SG.NOM 大学　読む-EXP-RES / -RES=PAPH / =PAPH
khɤ^{42}　*jiŋ*^{55}*ji*^{44} *tɛ*^{55}*+sɯ*^{55}*-khju*^{42}*-a*^{44}*.*
3SG.NOM 英語　見る + 知る-AUX-PART
「彼/彼女は大学を卒業したので、英語を読むことができる。」

b. *ji*^{55}*n̥*^{44} *khɤ*^{42}　*ʃaŋ*^{35}*ʨao*^{44} *phɛ*^{33}*-mɛ*^{35} ***ŋɯ***^{55}***-vu***^{55} / ***ŋɯ***^{55}***-vu***^{55}***=la***^{55} / ***=la***^{55}***,***
昨日　3SG.NOM ゴムの木　切る-PAST-COP-RES / -COP-RES=PAPH / =PAPH
khɤ^{42}　*m̥ɛ*^{55}*-nœ*^{44}*.*
3SG.NOM 疲れた-SFP
「彼/彼女は昨日ゴムの樹液を採ったので、疲れている。」

他方、(27) のように、*=la*^{55} は単独で用いられないことがある。

[14] この理由の明確性はチノ語話者の共有知識に依存する部分が大きい。例えば、(26a) では「大学生は学校の教科として英語をかならず修得する」という知識が共有されていなければならない (あるいは、話者自身がそのことを確信していなければならない)。

(27) a. *khɤ*^{42} *a*^{55}*xɔ*^{44} ***ŋɯ***^{55}***-vu***^{55} / ***ŋɯ***^{33}***-vu***^{33}***=la***^{55} / ***ŋɯ***^{33}***=la***^{55} / ***=la***^{55}***,***

3SG.NOM 漢族 COP-RES / COP-RES=PAPH / COP=PAPH / =PAPH

khɤ^{42} *a*^{55}*xɔ*^{44}*m̥i*^{55} *pja*^{33}*-khju*^{42}*.*

3SG.NOM 漢語 話す-AUX

「彼/彼女は漢族なので、漢語を話すことができる。」

b. *pa*^{55}*kha*^{42} *a*^{33}*xɤ*^{55} ***ŋɯ***^{55}***-vu***^{55} / ***ŋɯ***^{33}***-vu***^{33}***=la***^{55} / ***ŋɯ***^{33}***=la***^{55} / ***=la***^{55}***,***

パカー (PLN) 遠い COP-RES / COP-RES=PAPH / COP=PAPH / =PAPH

tʃhə^{44} *tɤ*^{33}*ɲi*^{55}*+le*^{44}*-jɔ*^{42}*.*

車 座る + 行く-OBLIG

「パカーは (ここから) 遠いので、(私たちは) 車で行かなければならない。」

c. *khɤ*^{35} *zɔ*^{55}*ku*^{55} *n̥*^{55}*-lai*^{35} *tʃə*^{55}***-vu***^{55}*(=**la**^{55})/ ***=la***^{55} / ***-xɔ***^{42}***,***

3SG.OBL 子ども 2-CL.OBL 生きている-RES(=PAPH) / =PAPH / -COND

khɤ^{42} *lao*^{33}*toŋ*^{55}*-jɔ*^{42}*.*

3SG.NOM 働く-OBLIG

「彼/彼女は子どもが 2 人いるので、働かなければならない。」

(27) で *=la*^{55} が容認されない理由は厳密な研究を要する。ただし、現時点では主節と従属節の意味的な関係 (ここでは「節間関係」と略称する) が明らかかいなかに関与しているのではないかと考えられる。もし節間関係が従属節標識を用いなくても「理由」であると明確に解釈されるなら、*=la*^{55} を用いることができる。しかし一方で、従属節が理由を表すことを明示するためには、*-vu*^{55} あるいは *-vu*^{55}*=la*^{55} がより好ましいであろう。

表 3 に「理由」を表す従属節標識の分布を整理する。

表 3 「理由」を表す従属節標識の機能的重複

節間関係が明確	節間関係が不明確
//////////////////////	
=la^{55}	
//	
-vu^{55}, *-vu*^{55}*=la*^{55}	

4.3 時点

続いて「時点」を表す標識について分析する。従属節および主節がともに未来に起こると考えられるならば、(28) に見るように、*-mjə*^{42} 以外の従属節標識が生起しうる。[15]

[15] 個人的な習慣が表現される場合、たとえ従属節・主節ともに未来に起こらなくても、*(ŋɯ*^{33}*)-xɔ*^{42} が用いられうる。

(28) a. *mi*^{55}*ʃɔ*^{55}*n̥*^{44} *nə*^{42} *lɔ*^{33}***-mɤ***^{33}***-təu***^{35}/ ***-xɔ***^{42}/ ***=la***^{55}/ ***-vu***^{44}/ ***-mjə***^{42},
明日 2SG.NOM 来る-TIM / -COND / =PAPH / -RES / -SEQ
khɤ^{42} *ʨiŋ*^{33}*xoŋ*^{44}*=a*^{55} *je*^{35}*+ja*^{42}*-nœ*^{44}.
3SG.NOM 景洪=VA 行く + 行く-SFP
「あなたが明日来るころには、彼/彼女はおそらく景洪に行ってしまっているだろう。」

b. *nɛ*^{33}*m̥jɔ*^{55} *khɤ*^{42} *lɔ*^{44}***-mɤ***^{33}***-təu***^{35}/ ***-xɔ***^{42}/ ***=la***^{55}/ ***-vu***^{44}/ ***-mjə***^{42},
来年 3SG.NOM 来る-TIM / -COND / =PAPH / -RES / -SEQ
ŋɔ^{42} *tshu*^{55}*tʃoŋ*^{55} *tu*^{33}*-kɔ*^{35}*-nœ*^{44}.
1SG.NOM 中学校 読む-PROG-SFP
「彼/彼女が来年来るころには、私は中学校に行っているだろう。」

もし従属節の事態が過去に起こったものであるなら、*-vu*^{55} および *-vu*^{33}*=la*^{55} は (29), (30) のように*-mɤ*^{33}*-təu*^{35} とともに容認されうる。[16]

(29) a. *ji*^{55}*ʃi*^{55} *pa*^{55}*kha*^{42} *tʃə*^{33}***-mɤ***^{33}***-təu***^{35}/ ***-vu***^{33}***=la***^{55}/ ***-xɔ***^{42}/ ***=la***^{55}/ ***-mjə***^{42},
昔 パカー (PLN) いる-TIM / -RES=PAPH / -COND / =PAPH / -SEQ
n̥i^{55}*-tʃhə*^{55}*-tʃhə*^{55} *lɔ*^{55}*po*^{44} *tshi*^{55}*-nœ*^{44}.
日-ごと-ごと.RDP 茶葉 摘む-SFP

b. *ji*^{55}*ʃi*^{55} *pa*^{55}*kha*^{42} *tʃə*^{55}***-vu***^{55}, *n̥i*^{55}*-tʃhə*^{55}*-tʃhə*^{55} *lɔ*^{55}*po*^{44} *tshi*^{55}*-nœ*^{44}.
昔 パカー (PLN) いる-RES 日-ごと-ごと.RDP 茶葉 摘む-SFP
「昔、私がパカー村にいたとき、毎日茶葉を摘んでいた。」

(30) a. *ji*^{55}*n̥*^{44} *ŋɔ*^{42} *tso*^{33} *tʃə*^{33}***-mɤ***^{33}***-təu***^{35}/ ***-vu***^{33}***=la***^{55}/ ***-xɔ***^{42}/ ***=la***^{55}/ ***-mjə***^{42},
昨日 1SG.NOM 家 いる-TIM / -RES=PAPH / -COND / =PAPH /-SEQ
khɤ^{42} *tjen*^{35}*xua*^{35} *ta*^{33}*+la*^{33}*-mɤ*^{35}.
3SG.NOM 電話 かける + 来る-PAST

---

i) *a*^{55}*xua*^{44}*-m̥a*^{55} *thi*^{55}*m̥a*^{55}*m̥a*^{55} *tə*^{33}*+tsəu*^{35}*-a*^{55} ***ŋɯ***^{33}***-xɔ***^{42},
アホア (PLN)-PL たくさん.RDP 飲む + 一緒に-PART COP-COND
phi^{33}*ʨu*^{33}*thi*^{55}*lə*^{44}*-tə*^{33}*-a*^{44}.
ビール 少しずっと-飲む-PART
「アホアと彼の友達がビールを飲むときは、(彼女も) 少し飲む。」

「条件」表現のように見えるが、筆者の協力者によるとこの例は「時点」表現の一種であると考えるようである。

[16] 主節・従属節ともに過去に起こっていたとしても、以下の例のように、*=la*^{55} は容認されることもある。この点はさらなる分析を要する。

i) *a*^{55}*san*^{44} *tjen*^{35}*xua*^{35}*ta*^{33}*+la*^{33}***-mɤ***^{33}***-təu***^{35}/ ***-mɤ***^{33}***-təu***^{35}***=la***^{55}/ ***=la***^{55}/ ***-vu***^{55}/ ***-xɔ***^{42}/ ***-mjə***^{42},
アサン (PSN) 電話 電話 (v.) +来る-TIM / -TIM=PAPH / =PAPH / -RES / -COND / -SEQ
khɤ^{42} *mɔ*^{33}*-n*^{55}*-tɔ*^{55}*-a*^{55}.
3SG.NOM NEG-いる-EXP-PART
「アサンが彼/彼女に電話をかけた時、彼/彼女は (ここに) いなかった。」

b. *ji*^{55}*n̥*^{44} *ŋɔ*^{42} *tso*^{33} *tʃə*^{55}-***vu***^{55}, *khɤ*^{42} *tjen*^{35}*xua*^{35} *ta*^{33}+*la*^{33}-*mɤ*^{35}.
昨日 1SG.NOM 家 いる-RES 3SG.NOM 電話 かける + 来る-PAST
「私が昨日家にいたとき、彼/彼女は私に電話をかけてきた。」

たとえ、従属節の事態が過去に生じたものであっても、-*mɤ*^{33}-*təu*^{35} のみが容認されうる例も存在する。従属節標識が時点 (「～ したとき」) ではなく、時間の幅 (「～ の間」) を表示するものであれば、-*mɤ*^{33}-*təu*^{35} は (31) に見るように、時間の幅を標示する唯一の候補となる。

(31) a. *a*^{55}*pu*^{55} *mɔ*^{33}-*lɔ*^{55}-*sɯ*^{33}-***mɤ***^{33}-***təu***^{35}/ *-***xɔ***^{42}/ *=***la***^{55}/ *-***vu***^{55}/ *-***mjə***^{42},
父 NEG-来る-まだ-TIM / -COND / =PAPH / -RES / -SEQ
khɤ^{42} *ji*^{55}-*tɔ*^{44}-*sɯ*^{44}-*a*^{44}.
3SG.NOM 寝る-EXP-まだ-PFT
「父が帰ってくるまで (= 父がまだ来ない間)、彼/彼女は寝ていた。」

b. *a*^{55}*mɔ*^{44} *xə*^{55}*tshø*^{55} *phɔ*^{33}+*le*^{33}-***mɤ***^{33}-***təu***^{35}/ *-***xɔ***^{42}/ *=***la***^{55}/ *-***vu***^{55}/ *-***mjə***^{42},
母 野菜 買う + 行く-TIM / -COND / =PAPH / -RES / -SEQ
zɔ^{55}*ku*^{55}-*m̥a*^{55} *n̥i*^{33}*ko*^{55}-*kɔ*^{55}.
子ども-PL 遊ぶ-PROG
「母が野菜を買いに行っている間、子供たちは遊んでいた。」

c. *ji*^{55}*n̥*^{44} *ŋɔ*^{42} *a*^{55}*kɛ*^{55} *tshi*^{33}-***mɤ***^{33}-***təu***^{35}/ *-***xɔ***^{42}/ *=***la***^{55}/ *-***vu***^{55}/ *-***mjə***^{42},
昨日 1SG.NOM 服 洗う-TIM / -COND / =PAPH / -RES / -SEQ
mi^{33}*tha*^{55} *xo*^{33}-*mɤ*^{35}.
雨 降る-PAST
「私が昨日服を洗っている間、雨が降った。」

表 4 に「時点」を表す従属節標識の分布を整理する。「時点」を表すあらゆる場面で生起できるのは -*mɤ*^{33}-*təu*^{35} である。このほか、過去 (あるいは「叙実法」と呼び変えられるかもしれない) および未来 (あるいは「叙想法」と呼び変えられるかもしれない) の時点の場合は、-*vu*^{55} が、未来の時点のときは -*xɔ*^{42}, =*la*^{55} も生起が可能である。

表 4 「時点」を表す従属節標識の機能的重複

過去 (叙実法)	未来 (叙想法)	その他
	//////////////////////	
	-*xɔ*^{42}, =*la*^{55}	
//		
	-*vu*^{55}	
//		
	-*mɤ*^{33}-*təu*^{35}	

4.4　継起

最後に「継起」を表す標識の分布について考察を加えよう。従属節が継起の意味をもち、動詞複合形式に *sɔ*^{35} 「終わる」が含まれているときには、(32) に見るように、*-vu*^{55} , *=la*^{55} および *-mjə*^{42} が従属節標識として生起しうる。[17]

(32) a. *ŋɔ*^{42}　*xə*^{55}*mɛ*^{55} *tʃha*^{55}*+sɔ*^{35}***-vu***^{55}*,*　*lə*^{55}*-fe*^{55}*+nu*^{33}*+lɔ*^{33}*-nœ*^{44}*.*
1SG.NOM 米　煮る + おわる-RES　ずっと-走る + 戻る + 来る-SFP
「私が米を煮終わったあと、(彼女が) 走って戻ってきた。」

b. *khɤ*^{42}　*ji*^{55}*n̥*^{44} *a*^{55}*mɛ*^{55} *tsɔ*^{55}*+sɔ*^{35}***-mjə***^{42}*/* ***-vu***^{55}*,*　*xə*^{55}*tshø*^{55} *phɔ*^{33}*+le*^{33}*-mɛ*^{35}*.*
3SG.NOM 昨日　食事　食べる + おわる-SEQ / -RES　野菜　買う + 行く-PAST
「昨日、彼/彼女は食事を食べ終わったあと、野菜を買いに行った。」

c. *ʃue*^{33}*sɤŋ*^{55}*-m̥a*^{55} *a*^{33}*pjo*^{55}*tu*^{33}*+sɔ*^{35}***-mjə***^{42}*/* ***-vu***^{55}*/* ***-vu***^{55}***=la***^{55}*/* ***=la***^{55}*/ *-mɤ*^{33}***-təu***^{35}*/ *-xɔ*^{42}*,*
学生-PL　本　読む + おわる-SEQ / -RES / -RES=PAPH / =PAPH / -TIM / -COND
n̥i^{33}*ko*^{35}*+le*^{35}*-mɛ*^{35}*.*
遊ぶ + 行く-PAST
「学生たちは学校が終わった後 (= 本を読み終わった後)、あそびに出かけた。」(= 13)

d. *ʃɔ*^{33}*phɔ*^{55}*n̥*^{44}*ŋɔ*^{42}　*lɔ*^{55}*po*^{44}*tshi*^{55}*+sɔ*^{35}***-mjə***^{42}*/* ***-vu***^{55}*/* ***-vu***^{55}***=la***^{55}*/* ***=la***^{55}*/ *-mɤ*^{33}***-təu***^{35}*,*
明後日　1SG.NOM 茶葉　摘む + おわる-SEQ / -RES / -RES=PAPH / =PAPH / -TIM
khɤ^{35}　*tso*^{33}*le*^{33}*-me*^{35}*.*
3SG.OBL 家　行く-FUT
「明後日、私が茶葉を積み終わったら、彼の家に行くつもりだ。」

さらに、動詞複合形式が動詞 *sɔ*^{35} 「終わる」を含んでいなかったら、*-mjə*^{42} のみが容認される。それは従属節と主節の継起関係を *-mjə*^{42} が明示できるからである。

---

[17] しかし、たとえ *sɔ*^{35} 「終わる」が動詞複合形式に現れていても、以下の (i) のように、*-mjə*^{42} のみが容認可能となる例もある。(32) と (i) の違いについては今後の検討課題としたい。

i) a. *ji*^{55}*n̥*^{44}*ŋɔ*^{42}　*tshi*^{55}*+sɔ*^{35}***-mjə***^{42}*/ *-xɔ*^{42}*/ *-vu*^{55}*/ *-vu*^{55}***=la***^{55}*/ *=la*^{55}*/ *-mɤ*^{33}***-təu***^{35}*,*
昨日　1SG.NOM 洗う + おわる-SEQ / -COND / -RES / -RES=PAPH / =PAPH / -TIM
a^{55}*mɛ*^{55}*tsɔ*^{33}*-mɛ*^{35}*.*
食事　食べる-PAST
「昨日、私は体を洗ったあと、食事を食べた。」

b. *ja*^{55}*n̥ø*^{44}*ʃaŋ*^{55}*ʨao*^{44}*phɛ*^{33}*+sɔ*^{35}***-mjə***^{42}*/ *-xɔ*^{42}*/ *-vu*^{55}*/ *-vu*^{55}***=la***^{55}*/ *=la*^{55}*/ *-mɤ*^{33}***-təu***^{35}*,*
今朝　ゴムの木　切る + おわる-SEQ / -COND / -RES / -RES=PAPH / =PAPH / -TIM
no^{33}*+pho*^{33}*+lɔ*^{33}*-mɤ*^{35}*.*
また + 戻る + 来る-PAST
「今朝、私はゴムの樹液を採ったあと、戻ってきた。」

(33) a. *nə*^{42} *a*^{55}*mɛ*^{55}*tsɔ*^{35}-***mjə***^{42} / *-***vu***^{55} / *-***xɔ***^{42} / *=***la***^{55} / *-***mɤ***^{33}-***təu***^{35}, *le*^{35}*=ɛ*^{55}*-tu*^{42}.

2SG.NOM 食事 食べる-SEQ / -RES / -COND / =PAPH / -TIM 行く=POSS-HORT

「食事をしてから出ていきなさい。」

b. *ji*^{33}*m̥jɔ*^{55} *khɤ*^{42} *ʨiŋ*^{33}*xoŋ*^{44} *je*^{35}*+ja*^{42}-***mjə***^{42} / *-***vu***^{55} / *-***xɔ***^{42} / *=***la***^{55} / *-***mɤ***^{33}-***təu***^{35},

昨年 3SG.NOM 景洪 行く + 行く-SEQ / -RES / -COND / =PAPH / -TIM

ʨɛ^{33}*xun*^{35}*-mɛ*^{35}.

結婚する-PAST

「去年、彼/彼女が景洪に行って、結婚した。」

まとめると、表 5 のようになる。節間関係が明らかに継起であると解釈されうる[18] ならば、*-vu*^{55} あるいは *=la*^{55} が用いられる。さもなければ、主節の事態が従属節の事態よりも後に生じることを明示するために *-mjə*^{42} が用いられなければならない。

表 5 「継起」を表す従属節標識の機能的重複

節間関係が明確	その他
-*vu*^{55}, =*la*^{55}	
-*mjə*^{42}	

4.5 小結 — 意味的連続性 —

ここで本節の内容を整理したい。*-vu*^{55}, *-xɔ*^{42}, *-mɤ*^{33}*-təu*^{35}, *-mjə*^{42} の各従属節標識は相互に交換可能な例を持っている。しかし、各用法から翻って考察を加えると、様々な条件によって、生起可能な場合と不可能な場合とに分けることができることも判明した。また同時に *=la*^{55} は他の従属節標識の後にも生起することができ、基本的に節間関係の変更に影響を与えないと考えられる。その点から *=la*^{55} は他の従属節標識とは別のレベルの機能を持った標識とみなす必要があろうかと思われる。

3 節と本節の内容をふまえて 5 つの従属節標識の機能を整理すると表 6 にまとめられる。

各従属節標識の機能的重複を考慮に入れると、チノ語悠楽方言では「理由」「時点」「条件」「継起」の節の順序で意味的に連続していると推論できよう。[19]

---

[18] **4.2** でも用いた「節間関係の明確性」に関しては言語データ内部での明示的な証明が難しい。現時点では意味論・語用論的見地からの解釈にとどまっている。今後はより明示的な手法による分析を進めていきたい。

[19] もちろん、本節で試論を述べたように、「条件節」「時点節」内部では競合する従属節標識の分布条件が異なる。表 6 ではその点を捨象している。「条件節」「時点節」などの内的な分布条件を含めた上での意味的連続性については今後発展的に取り扱わなければならない。

表 6　チノ語悠楽方言における従属節標識の意味的連続性

従属節標識	(言い換え)	理由	時点	条件	継起
-*vu*^{55}		////////////:	:::::::::::::::::::::::::::::::::::::::		
-*xɔ*^{42}			::::::::	//////////////	
-*mɤ*^{33}-*təu*^{35}			//////		
-*mjə*^{42}				:::::::::::::::::::	//////////////
(=*la*^{55}	////////////////////:	:::			)

(‘/////’ は典型的な用法を、‘:::::’ はある条件に限定された周辺的な用法を示している)

5　おわりに

チノ語悠楽方言の従属節標識および従属節の意味的連続性に関する本稿の主張は以下の (34) のようにまとめられよう。

(34) a. 各従属節標識が典型的な用法を有する。しかし、他の従属節標識と意味的なオーバーラップを見せる、周辺的な用法も併せもつ。

b. 主節と従属節の間の意味的な関係は、理由か条件、条件か時点[20] などのように捉えられる。

c. =*la*^{55} は他の従属節標識にはない独自の特徴をもつ。すなわち、他の従属節標識に後接することができ、基本的に主節と従属節の論理関係を保持する機能がある (節間関係の変更に関与しない)。

d. 従属節標識の機能と分布から考えれば、「理由節」「時点節」「条件節」の順序で連続していると推定できる。[21]

以上は現時点の採集データをもとにした試論であり、今後に残された問題は多い。

Sweetser (1990) は発話は、content domain, epistemic domain, speech act domain の 3 つの domain (領域) と関連付けられていると主張している。チノ語悠楽方言においても、典型的な用法と周辺的な用法は Sweetser (1990) の提示する domain の観点から分析できる可能性がある。例えば、-*mjə*^{42} が継起の意味を表すときには、それを含む発話は content domain に関連付けら

[20] 条件表現と時点表現が同じ従属節標識で標示される言語も多い。日本語の「と」も条件と時点の両方を表しうる。タイ語では典型的には事態の成立時点を表す *phɔɔ* と *mûa* が条件を表すことも多いようである (田中 2006)。坪本 (1993) は日本語におけるこの問題を Sweetser (1990) の主張する認知領域の観点から分析している。

[21] =*la*^{55} がもっぱら持っている先行要素の言い換え機能や「継起節」との関連性については今後の分析が待たれるところである。また Dixon (2009) が節連結に関する類型論的な整理を行なっている。それによると、「継起節」「時点節」「条件節」は同じ「時間を表すタイプ」としてまとめられ、「理由節」はこれらとは異なる「因果関係を表すタイプ」に含めている。将来的にはこのような類型論的な分析との関連性についてもさらなる検討が必要である。

れるが、他方、条件の意味を表すときには epistemic domain に関連付けられうる。今回の議論では、認知的解釈や語用論上の問題 (特に節間関係の明示性などの問題) も「意味的連続性」という単線的尺度の上にプロットして記述したため、本来は多層的に論じる必要がある可能性もある。

チノ語悠楽方言の条件表現は様々な観点から詳しく検討されなければならない。漢語普通話では、従属節の主語の生起によって従属節が理由を表すのか、条件を表すのかが決定されたり (大河内 1967)、従属節の条件表現の類型が述語のアスペクチュアリティ、あるいは名詞句の定性の影響を受けたりする (下地 2006)。今後はチノ語悠楽方言の条件表現もこれらの現象とも関連させながら研究を進めていく必要があろう。

略号一覧

文頭の * は非文であることを示す。また '-' は接辞類・助詞類の境界を、'=' は倚辞の境界を、'+' は語根の境界を表す。

AUX ..... 助動詞
CAUS ..... 使役
CL ..... 類別詞
COND ..... 条件
COP ..... コピュラ
EXP ..... 経験
FUT ..... 未来
HORT ..... 勧告
NEG ..... 否定
NML ..... 名詞化標識
NOM ..... 主格
OBL ..... 斜格
OBLIG ..... 義務・許可
PAPH ..... 置換
PART ..... 助詞
PAST ..... 過去
PFT ..... 完了
PL ..... 複数
PLN ..... 地名
POSS ..... 所有
PROG ..... 進行相
PSN ..... 人名
RCF ..... 確認
RDP ..... 重複
REL ..... 関係節標識
RES ..... 理由
SEQ ..... 継起
SFP ..... 文終止助詞
SG ..... 単数
TIM ..... 時間節
VA ..... =va

参考文献

戴慶厦 (Dai Qingxia)(主編). 2007. ≪基諾族語言使用現状及其演變≫ 北京: 商務印書館.

Dixon, R. M. W. 2009. The semantics of clause linking in typological perspective. In: R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.), *The Semantics of Clause Linking: A Cross-Linguistic Typology.* pp. 1–55. Oxford: Oxford University Press.

蓋興之 (Gai Xingzhi). 1986. ≪基諾語簡誌≫ 北京: 民族出版社.

林範彦. 2006. 「チノ語悠楽方言」中山俊秀・江畑冬生 (編) 『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—』pp. 243–270. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

———. 2009. 『チノ語文法 (悠楽方言) の記述研究』(神戸市外国語大学研究叢書 第 43 冊) 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.

蒋光友 (Jiang Guangyou). 2010. ≪基諾語参考語法≫ 北京: 中国社会科學出版社.

大河内康憲. 1967. 「複句における分句の連接関係」『中国語学』 176. (大河内康憲. 1997.『中国語の諸相』 pp. 86–106. 所収)

下地早智子. 2006. 「中国語の条件表現」益岡隆志 (編), 『条件表現の対照』pp. 83–98. 東京: くろしお出版.

Sweetser, Eve E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure.* Cambridge: Cambridge University Press.

田中寛. 2006. 「タイ語の条件表現をめぐって」益岡隆志 (編), 『条件表現の対照』pp. 99–125. 東京: くろしお出版.

坪本篤朗. 1993. 「条件と時の連続性」益岡隆志 (編), 『日本語の条件表現』pp. 99–130. 東京: くろしお出版.

編集後記

出版に至るまで，メンバーの皆様には，様々なかたちで御協力いただきました。毎号のことながら，心より感謝しています。今号は大西正幸博士の還暦記念号となりました。今号に掲載された論文は，大西博士がこれまでなさってきた記述研究に敬意を表して書かれたものです。

だれしも自分が属している研究所，研究会，研究室には特別な想いをいだいていると思います。総合地球環境学研究所はしばしば「地球研」と呼ばれています。長田プロの言語記述研究会も，メンバーに「記述研」と呼ばれ親しまれてきました。どこかの「～研究室」なども親しみをこめて「～研」と呼ばれていることでしょう。地球研での記述研は今年度でいったん終わりになりますが，どこかの～研でもさらに記述研がつづくことを願っています。

(2012 年 3 月，稲垣和也記)

地球研言語記述論集 4
大西正幸博士還暦記念号

稲垣和也（編）

言語記述研究会

総合地球環境学研究所プロジェクト H-03
「環境変化とインダス文明」
（プロジェクトリーダー：長田俊樹）

2012 年 3 月 30 日発行

発行：総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト
京都市北区上賀茂本山 457 番地 4
http://www.chikyu.ac.jp/indus/kijutsuken/

印刷・製本：中西印刷株式会社
京都市上京区下立売通小川東入ル西大路 146 番地
ISBN 978-4-902325-73-7